

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲ

第4・13次、第20次調査

1990

福井県立朝倉氏遺跡資料館



遺構北半 (北から)



赤 絵



建物 SB 750 (西から)



出土遺物

序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業は、昭和43年(1968)の義景館の発掘以来、20数年の長きに亘って継続されてきました。平地部の主要な遺構の発掘も順調に進捗し、収蔵庫に収納された発掘遺物も膨大な量になります。発掘調査の概要は、各年度の概報で報告していますが、誠に遺憾ながら詳細な報告書の刊行は遅れがちであります。この度ようやく平成元年(1989)の記念すべき年度に、一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲを刊行することができました。

朝倉氏遺跡中央の東側山麓には、義景館を中心に一族の屋敷や寺院が藪を並べていました。第4・13次調査地は、中の御殿跡と通称され、義景の実母光徳院の屋敷跡と伝えられるものです。遺存状況は必ずしもよくありませんでしたが、立地や屋敷の構はよく分り、内部の大まかな建物や庭園の配置も知ることができたのではないのでしょうか。

第20次調査地は、下城戸内側の東側の高台にあり、軍事的にも重要な位置にある屋敷跡です。この地区には佐々生光林坊や魚住出雲守などを配していたことが、江戸時代の古絵図からも推察されます。この屋敷も遺存状況がよくありませんでしたが、あまり例がない雑木の掘立柱建物跡などが検出されました。井戸跡は中の御殿跡と同じように発掘されていません。沢水や山麓の湧水を利用していたのでしょうか。一乗谷における屋敷の有様的一端をご理解いただければ幸いです。

なお、事業の実施にあたり、懇切なるご指導とご支援をいただきました文化庁をはじめ関係各位の皆様、ならびに終始かわらぬ暖かいご支援をいただきました城戸ノ内を初めとする地元の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

平成2年3月

福井県立朝倉氏遺跡資料館
館長 藤原武二

目 次

口 絵	3
序	7
目 次	9
図版・表目次	10
I、調査事業概要	
1、調査目的	3
2、調査経過	3
3、調査方法等	4
4、調査組織	5
5、本報告書について	8
II、第4・13次調査	
1、調査概要	11
2、遺 構	15
3、遺 物	23
4、小 結	39
5、「中の御殿」と朝倉氏の妻妾について	45
III、第20次調査	
1、調査概要	53
2、遺 構	56
3、遺 物	61
4、小 結	77
5、魚住出雲守と魚住氏について	85

図 版 目 次

口 絵 (カラー)

- 1、第4・13次調査
- 2、第20次調査

図 面

第4・13次調査		第30図	第4・13次調査遺物 (13)
第1図	土層図 (1)	31	第4・13次調査遺物 (14)
2	土層図 (2)	32	第4・13次調査遺物 (15)
3	石垣立面図 (1)	33	第4・13次調査遺物 (16)
4	石垣立面図 (2)	34	第4・13次調査遺物 (17)
5	石垣立面図 (3)	35	第4・13次調査遺物 (18)
6	石垣立面図 (4)	36	第4・13次調査遺物 (19)
7	遺構平面詳細図 (1)	第20次調査	
8	遺構平面詳細図 (2)	第37図	土層図
9	遺構平面詳細図 (3)	38	遺構平面詳細図 (1)
10	遺構平面詳細図 (4)	39	遺構平面詳細図 (2)
11	遺構平面詳細図 (5)	40	遺構平面詳細図 (3)
12	遺構平面詳細図 (6)	41	遺構平面詳細図 (4)
13	遺構平面詳細図 (7)	42	遺構平面詳細図 (5)
14	遺構平面詳細図 (8)	43	遺構平面詳細図 (6)
15	遺構平面詳細図 (9)	44	遺構平面詳細図 (7)
16	遺構平面詳細図 (10)	45	遺構平面詳細図 (8)
17	遺構平面詳細図 (11)	46	第20次調査遺物 (1)
18	第4・13次調査遺物 (1)	47	第20次調査遺物 (2)
19	第4・13次調査遺物 (2)	48	第20次調査遺物 (3)
20	第4・13次調査遺物 (3)	49	第20次調査遺物 (4)
21	第4・13次調査遺物 (4)	50	第20次調査遺物 (5)
22	第4・13次調査遺物 (5)	51	第20次調査遺物 (6)
23	第4・13次調査遺物 (6)	52	第20次調査遺物 (7)
24	第4・13次調査遺物 (7)	53	第20次調査遺物 (8)
25	第4・13次調査遺物 (8)	54	第20次調査遺物 (9)
26	第4・13次調査遺物 (9)	55	第20次調査遺物 (10)
27	第4・13次調査遺物 (10)	56	第20次調査遺物 (11)
28	第4・13次調査遺物 (11)	57	第20次調査遺物 (12)
29	第4・13次調査遺物 (12)	58	第20次調査遺物 (13)

- 第59図 第20次調査遺物 (14)
 60 第20次調査遺物 (15)
 61 第20次調査遺物 (16)
 62 第20次調査遺物 (17)

- 第63図 第20次調査遺物 (18)
 64 第20次調査遺物 (19)
 65 第20次調査遺物 (20)

写 真 (モノクロ)

第4・13次調査

- PL. 1 調査区全景
 2 土塁 SA201
 3 土塁 SA202
 4 石 垣
 5 門 S I367・築地 SA216
 6 庭園 SG212
 7 建 物
 8 建物・溝 (1)
 9 溝 (2)
 10 溝 (3)
 11 土塁 SA201関連遺構
 12 諸遺構
 13 深掘トレンチ, SA202・201下段出土
 の遺物
 14 SA201下段, SD204出土の遺物
 15 SD370出土の遺物
 16 SD370, SG212出土の遺物
 17 SG212出土の遺物
 18 SD206・207, SB203, SA201トレンチ出
 土の遺物
 19 SA201, SA201崩土出土の遺物
 20 SA201崩土出土の遺物
 21 SD372・375出土の遺物
 22 SD218出土の遺物
 23 SD366出土の遺物 (1)
 24 SD366出土の遺物 (2)
 25 SD366出土の遺物 (3)
 26 整地層出土の遺物 (1)
 27 整地層出土の遺物 (2)
 28 整地層出土の遺物 (3)
 29 表土出土の遺物 (1)
 30 表土出土の遺物 (2)
 31 第4・13次調査出土の石製品

第20次調査

- PL. 32 調査区全景 (1)
 33 調査区全景 (2)
 34 調査区中景
 35 掘立柱建物 SB750
 36 礎石建物
 37 中央部遺構群
 38 屋敷中央部
 39 石積施設・溝
 40 柱痕・木樋・駒頭
 41 青色礫混り土層出土遺物
 42 褐色土層出土遺物 (1)
 43 褐色土層出土遺物 (2)
 44 茶褐色土層出土遺物
 45 黄色土・青色土層出土遺物
 46 赤褐色土・灰褐色土層出土遺物
 47 柱根ピット・柱穴出土遺物
 48 炭層及び遺構面出土遺物 (1)
 49 炭層及び遺構面出土遺物 (2)
 50 炭層及び遺構面出土遺物 (3)
 51 灰層・灰色土層出土遺物
 52 SD754出土遺物
 53 SD765, SF770他出土遺物
 54 流土他遺物
 55 盛土, 排土中遺物

挿 図

第4・13次調査

- 挿図1. 第4・13次調査区周辺地形図
2. 調査前状況
 3. 調査グリッド設定図
 4. 土塁SA202上段石垣立面図
 5. 石垣SV368北端部立面図
 6. SV368 (R ライントレンチ)
 7. 門SI367西半石垣立面図
 8. SB208遺構平面図
 9. SF213詳細図
 10. SX214立面図
 11. 信楽焼壺実測図
 12. 白磁碗
 13. 地鎮具 (土師質小壺・蓋・銅銭)
 14. 屋敷推定概念図
 15. 越前焼のグリッド別破片分布図
 16. 越前焼播鉢のグリッド別破片分布図
 17. 中国製陶磁器のグリッド別破片分布図
 18. 土師質皿のグリッド別破片分布図

第20次調査

- 挿図19. 第20次調査区周辺地形図
20. グリッド設定図
 21. 土層概略図
 22. SB751模式図
 23. SB750模式図
 24. 青色礫混り土層遺物分布図
 25. 褐色土層遺物分布図
 26. 茶褐色土層遺物分布図
 27. 黄色土層遺物分布図
 28. 青色土・赤褐色土層遺物分布図
 29. 灰褐色土・暗褐色土層遺物分布図
 30. 柱根ピット柱穴及び遺物分布図
 31. 炭層及び灰層遺物分布図
 32. 第20次調査区出土木製品 (1)
 33. 第20次調査区出土木製品 (2)
 34. 遺構変遷略図
 35. 全体遺物分布図
 36. 越前焼甕分布図
 37. 播鉢分布図
 38. 土師質土器 (灯明皿) 分布図
 39. 越前焼甕接合分布図
 40. 播鉢接合分布図
 41. 灯明皿接合分布図

表

第4・13次調査

- 表1. 第4・13次調査区出土遺物一覧
2. 陶磁器の生産地別比率
 3. 陶磁器の生産地別器種構成

第20次調査

- 表4. I期の遺構一覧
5. II期の遺構一覧
 6. III期の遺構一覧
 7. 第20次調査区出土遺物一覧
 8. 第20次調査区出土銅銭一覧

付 図

- 付図1. 一乗谷朝倉氏遺跡地形図
2. 第4・13次調査遺構全測図
 3. 第20次調査遺構全測図

I、調査事業概要

I、調査事業概要

1、調査目的

戦国大名朝倉氏の築いた山城・城戸・居館・武家屋敷・寺院・町屋などが一体となり、町として良好に遺存する一乗谷朝倉氏遺跡は、我国の歴史を知る上で欠くことの出来ないものとして、研究者はもとより一般の人々まで広く知られている。

この良好に遺存する遺跡を国民共有の文化遺産として保護するため、昭和46年、278haの広大な区域を特別史跡として指定し、平地部を中心に約24haが公有化された。

遺跡保護の究極の目標は、単に遺構を物理的に保存することに止まらず、これを究明し、その成果を広く一般の人々の知的向上に資することにある。このため、遺構と人々が、その環境の中であって、遺構と対話し、遺構をして自らを語らせることを目的とする「史跡公園」化を目指す計画をスタートさせた。これは、昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」と、これを受け昭和49年3月に立案された「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画」に基き事業は進められている。発掘調査は、この事業の一つの柱をなすものである。

2、調査経過

本遺跡が朝倉氏5代の居城跡であって、山城・城戸・居館跡などの遺構がよく残存することは古くより知られていた。昭和5年7月8日には、朝倉館跡と湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の3庭園1.4haが国の史跡と名勝に、西山光照寺跡1.6haが史跡に指定され、初めて遺跡の保護策が講じられた。戦後に至り、管理団体である足羽町は、朝倉館跡唐門の修理（昭和38年）、英林塚（初代孝景墓）の覆屋建設（昭和40年）の事業を実施すると共に、昭和42年には、史跡の保存と活用を計るため、朝倉氏遺跡整備事業委員会を設け、環境整備事業第1次3カ年計画を立案、事業に着手した。また、同年12月11日には、山城跡・上下城戸跡などが追加指定され、その指定面積は6.8haと拡大した。

一方、昭和44年には、当遺跡を含む一乗谷地区の農業構造改善事業が計画され、この事業を実施する中で、多くの遺構や多量の遺物が露呈し、指定区域外とはいえ、遺跡は破壊の危機に直面した。文化財関係者は、この事業の中止を求め、これに遺跡の中心となる城戸ノ内住民が同意し、昭和46年7月29日には、278haという広大な区域が国の特別史跡として指定され、平地部を中心に約24haが公有化され、遺跡の保護が計られることとなった。

こうした経過と、これまでの管理団体であった足羽町が昭和46年に福井市に合併するという背景もあって、これまで管理団体（足羽町）が実施してきた発掘調査・環境整備事業を福井県が引き継ぐこととなった。昭和47年4月には、この事業の実施機関として、福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所が開設され、先に述べた基本構想・基本計画に基き事業が進められている。

これまでに実施した事業の概要は次の通りである。

○ 第1次5カ年計画（S. 42～46）

内容 当初は3ヶ年計画として、湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の3庭園の修復と、朝倉館跡の発掘調査を計画。これを延長した。基本図（1/1,000）の作成を合せて実施・調査面積6,780㎡。

○ 第2次5カ年計画（S. 47～51）

内容 第1次～20次調査。調査面積18,989㎡。朝倉館跡の調査および武家屋敷跡・寺院跡などの調査を通じ、遺跡の全体像を明らかにすることを主眼とする。

○ 第3次5カ年計画（S. 52～56）

内容 第21次～40次調査。調査面積29,310㎡。第2次5カ年計画で判明した武家屋敷を中心とする平井地区と町屋・寺院を中心とする赤渕・奥間野地区の面的調査を主眼とする。

○ 第4次5カ年計画（S. 57～61）

内容 第41次～56次調査。調査面積16,513㎡。赤渕・奥間野地区を中心とする面的調査の拡大を通して町割の解明を主眼とする。

○ 第5次5カ年計画（S. 62～66）

内容 上城戸などの要所の調査を通じて遺跡の全容の解明を主眼とする。これまでに第57～63次調査を実施。

3、調査方法等

調査は、国庫補助事業であって、昭和46年以後は福井県の直営事業として実施している。調査は、主として福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和47年4月1日～同56年8月19日）、これが改組された福井県立朝倉氏遺跡資料館（昭和56年8月20日～）が当たっている。

本報告書に係る調査年度の発掘調査経費及び調査面積、また、本報告書の印刷製本費は以下の通りである。

○ 昭和47年度	発掘調査経費	10,000千円
	発掘調査面積	2,740㎡ (第4次1,340㎡, 第5次1,400㎡)
○ 昭和49年度	発掘調査経費	17,000千円
	発掘調査面積	3,640㎡ (第11次1,240㎡, 第13次2,250㎡, その他150㎡)
○ 昭和51年度	発掘調査経費	20,000千円
	発掘調査面積	5,096㎡ (第18次2,500㎡, 第20次2,200㎡, その他396㎡)
○ 平成元年度	報告書印刷製本費	2,008,500円

4、調査組織

調査は、前述したように、計画に従って実施されており、その年次も多年に及ぶ。そのため、これまでに多数の人々が関係するが、ここでは、発掘調査時及び本報告書作成時の組織を記す。

○昭和47年度（第4次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員	青園謙三郎	福井テレビ常務取締役
	石川成志	城戸ノ内区長
	大久保道舟	福井県文化財専門委員長
	黒板昌夫	国土館大学教授
	田治六郎	大阪市公園協会常務理事
	戸塚文子	評論家
	松下圭一	法政大学教授
	水上勉	作家
専門委員	伊藤滋	東京大学助教授
	井上鋭夫	金沢大学教授
	岸谷孝一	東京大学助教授
	木原啓吉	朝日新聞編集委員
	近藤公夫	奈良女子大学助教授
	重松明久	福井大学教授
	田畑貞寿	東洋大学講師
	坪井清足	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長

朝倉氏遺跡調査研究所

所長	河原純之	（考古）
文化財調査員	水藤真	（文献）
	仁科章	（考古）
	水野和雄	（考古）
	小野正敏	（考古）

調査補助員 梶幸夫

○昭和49年度（第13次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員	青園謙三郎	福井テレビ社長
	石田昇	城戸ノ内区長
	大久保道舟	福井県文化財専門委員長
	黒板昌夫	国土館大学教授
	田治六郎	大阪公園協会理事長
	戸塚文子	評論家

	松下圭一	法政大学教授
	水上勉	作家
専門委員	伊藤滋	東京大学助教授
	井上鋭夫	金沢大学教授（時和49年1月25日死去）
	岸谷孝一	東京大学助教授
	木原啓吉	朝日新聞編集委員
	近藤公夫	奈良女子大学助教授
	重松明久	福井大学教授
	田畑貞寿	千葉大学助教授
	坪井清足	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長

朝倉氏遺跡調査研究所

所長	河原純之	（考古）
次長	藤原武二	（造園）
文化財調査員	水藤真	（文献）
	水野和雄	（考古）
	小野正敏	（考古）
	岩田隆	（考古）
	吉岡泰英	（建築史）
調査補助員	南洋一郎	
事務補助員	吉越強	

○昭和51年度（第20次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員	青園謙三郎	福井テレビ社長
	梅田豊一	城戸ノ内区長
	大久保道舟	福井県文化財専門委員長
	黒板昌夫	国士館大学教授
	田治六郎	大阪公園協会理事長
	戸塚文子	評論家
	松下圭一	法政大学教授
	水上勉	作家
専門委員	伊藤滋	東京大学助教授
	岸谷孝一	東京大学助教授
	木原啓吉	朝日新聞編集委員
	近藤公夫	奈良女子大学助教授
	鈴木嘉吉	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長
	重松明久	福井大学教授
	田畑貞寿	千葉大学助教授

朝倉氏遺跡調査研究所

所長	河原純之	(考古)
次長	藤原武二	(造園)
文化財調査員	水藤真	(文献)
	水野和雄	(考古)
	小野正敏	(考古)
	岩田隆	(考古)
	吉岡泰英	(建築史)
事務補助員	吉越強	

○平成元年度（本報告書作成）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

委員	青園謙三郎	福井テレビ副会長
	石井進	東京大学教授
	石田昇	朝倉氏遺跡保存協会会長
	木原啓吉	千葉大学教授
	小林健太郎	滋賀大学教授
	近藤公夫	奈良女子大学教授
	重松明久	中津女子短期大学学長（平成元年4月4日死去）
	田畑貞寿	千葉大学教授
	玉置伸悟	福井大学教授
	坪井清足	大阪文化財センター理事長
	平井聖	東京工業大学教授
	藤田武信	城戸ノ内区長

朝倉氏遺跡資料館

館長	藤原武二	(造園)
次長	高橋悟	(事務)
主任文化財調査員	水野和雄	(考古)
主査	岩田隆	(考古)
	吉岡泰英	(建築史)
	南洋一郎	(考古)
	佐藤圭	(文献)
文化財調査員	月輪泰	(考古)
嘱託	中谷賢	(事務)
	舟沢茂樹	(学芸)

また、発掘調査、整理は多くの作業員の協力による。その名を以下に記す。

(発掘) 石田カズキ, 石田はまを, 石田ミヨ子, 石田艶枝, 伊與ふじ子, 梅田みさを, 奥田恵美子, 奥田末子, 奥田まつえ, 奥田ユリ, 小林澄子, 小林ヒサヲ, 田中和子, 田中トシヲ, 谷口惣次郎, 戸田起世子, 福岡敏子, 福岡まつ子, 福岡遊蔵, 福岡義信, 藤田武志, 前田しなえ,

三崎チエ子，山口堅，山口さだを，山下喜美子，吉川サダ子
(整理) 朝倉八重子，石田隆代，梅田由里，田中直美，辻岡幸子，長谷川和子，藤田恵美子

5、本報告書について

執筆 本報告書の執筆は，館長藤原武二の指導の下，それぞれ次の者が分担し，編集は吉岡が当たった。

I-1・2・3・4・5 吉岡泰英，II-1・2 吉岡，II-3 月輪泰，II-4 吉岡・月輪，II-5 佐藤圭，III-1
・2 岩田隆，III-3 南洋一郎，III-4 岩田・南，III-5 佐藤

図面の作成・資料の整理は主として執筆分担者が当たった。なお，遺構実測原図の作成はその時の調査担当者が当たっている。また，遺物実測図作成・整理に際しては，石田隆代・田中直美・辻岡幸子・長谷川和子・藤田恵美子の協力を得た。

各章の内容 本報告書は第4・13次調査（通称中の御殿跡）と第20次調査（字出雲谷）の報告であって，Iは調査事業概要，IIは第4・13次調査，IIIは第20次調査について述べる。II，IIIは1．調査の概要，2．遺構，3．遺物，4．小結，5．附論の構成で，附論では，この調査に関係する文献資料の検討を内容とする。

記号 本報告書で遺構番号に付した記号は，次の通りである。

S A 堀・柵，S B 建物，S D 溝・濠，S E 井戸，S F 石積施設，S G 庭園，S I 門，
S K 土壇，S S 道路，S V 石列・石垣，S Z 暗渠，S X その他

図面 遺構実測図に示す座標系は「第VI系」である。遺構実測図は遺方測量によるものであり，地形図は昭和44年度にパシフィック航業株式会社に委託して得た基本図（1/1,000）による。また，石垣立面図の一部はアジア航測株式会社作成の写真測量図（1/50）による。

II、第 4・13 次 調 査

II、第4・13次調査

1、調査概要

調査の対象となった屋敷跡は、山城の築かれた一乗谷東山稜の裾部に位置し、朝倉氏第5代義景が居住したことが判明している朝倉館に隣接する。古くより「中の御殿跡」と呼ばれるこの屋敷は、山裾部の段丘上の高台にあって、同様の屋敷が朝倉館を中心に南北にみられ、この中の御殿跡の南の郭は「諏訪館跡」、北は「湯殿跡」および「南陽寺跡」と通称されている。これらの屋敷にはいずれも庭園が現存し、いずれも国の名勝に指定されている。また、これらの各屋敷は、朝倉氏一族に深い関係を持つものであって、この朝倉館を中心とする一乗谷川東岸の地区は、「一乗谷」の中心であったことが知られる。この調査は、1967年以来継続して来た朝倉館跡の調査に引き続き、その朝倉館の主である5代義景の母が居住したと伝えられるこの「中の御殿跡」を調査することにより、一族の居館の構造を解明することを目的として計画された。

調査区の設定にあたっては、屋敷の全容を知るため区画全体を調査対象とすることとし、その範囲は地形等から判断した。すなわち、屋敷の北境界は空濠であって、この空濠は、朝倉館南濠がそのまま東の山裾へ延長されたものであって、これにより湯殿跡と区分される。西は急斜面になっており、明白である。下の新御殿と呼ばれる屋敷とは約12mの高低差がみられる。南と東の境界は、土塁状の高まりと



挿図1. 第4・13次調査区周辺地形図

考えられ、南辺に沿っては山道が存在し、また東の高まりの外（東）には空濠状の窪地がみられる。これらにより、東西55m、南北80m、約3,590㎡を調査区とした。調査グリッド設定の方位は朝倉館跡の調査グリッドに準じた。また、調査は排土等を考慮し2回に分けて実施することとし、南半部1,340㎡を第4次調査として、1972年5月22日から同年10月31日にかけて実施し、北半部2,250㎡を第13次調査として、1974年8月11日から冬期間の中断をはさみ、翌年5月15日まで実施した。

調査区の地形は、南北に貫流する一乗谷川の形成する谷間にあって、その東の山稜の裾部に位置し、この山稜から発する沢が押し出す小扇状地形を呈し、本流である一乗谷川現水面とは約15mの高低差を持つ。前述したように、屋敷は人為的に盛土および掘削されたと推定される高まりや窪地で区画されている。南の土塁状の高まりは、裾幅約10mであって東へ10～15度の勾配で登り、60m程の長さを持つ。東で北へ折れる。この東辺の高まりと屋敷内平坦部の高低差は約8mであり、また、幅3m程の空濠状の窪地が外（東）に平行する。付近一帯はもと耕作地であったが荒地化しており、一部には杉等が植林されていた。

第4次調査は、まず、屋敷の境界を確認することから始めた。樹木の抜根から始め、耕作土等の表土を除去し、遺構の検出へと進めた。南・東の土塁と推定される高まりの調査を優先し、南の山道に沿って南に面を持つ石垣を検出し、これが土塁裾に組み込まれたものであることを確認した。次いで、この土塁の規模・形状を把握し、今後の調査の目度とするため南北の横断トレンチを設定した。東土塁及び濠についても同様のトレンチを設定した。これらの調査により、屋敷規模がほぼ判明した。また、土層観察結果により遺構検出面もより具体化し、これに基づいて調査を進めた。その結果、南土塁の西部には門を設けていたこと、また、これに沿って道路が存在したこと等が明確になった。屋敷内の調査では、土塁裾を中心に溝等が良好に残るものの、多くは後世の削平を受けており、遺構の詳細については明らかにすることは出来なかった。しかし、南部の中央東寄で園池を持つ庭園跡が検出され、これに面する建物群の存在も明らかとなった。

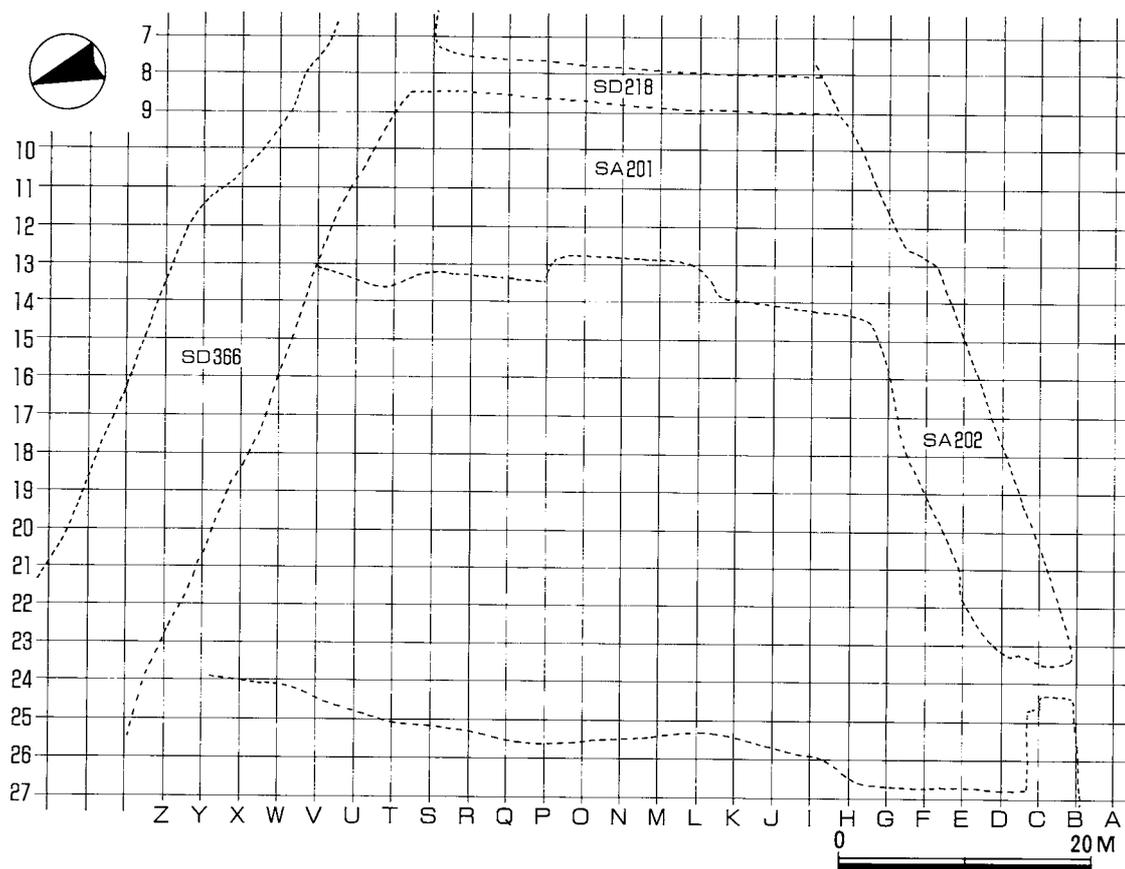
第13次調査は、先の第4次調査を引き継ぐものであり、すでに屋敷内の多くの遺構が削平されていることは予想されたものの、北の境界となる空濠の規模・構造の解明を通じ、これを介して接する湯殿跡との関係等が明らかに出来るのではないかと期待された。調査の結果、この空濠の北側にはすでに知ら



挿図2. 調査前状況

れていた通り石垣が良好に残存するが、南側には当初から石垣は築れていなかったものと判断された。また、この2つの屋敷を結ぶ橋等の存在を裏付ける遺構は検出されなかった。しかし、西の屋敷端から5～6m内で南北に延びる石垣が検出され、当初はこれが屋敷の西境界であって、後に現状のように拡張されたものであることが判明した。

このように調査の結果は、後世の削平部も多く、遺構の残存状況は必ずしも良好といえるものではない。しかし、屋敷の規模、そして全体の構成等を知ることが出来、また、屋敷の拡張という大規模な改造も明らかとなった。



挿図3. 調査グリッド設定図

調査日誌抄

第4次調査(1972年5月22日～10月31日)

- 5・22 調査開始。ベルコン搬入。
- 5・23 除草・抜根(～26)。
- 5・27 平坦部表土取。
- 5・31 グリッド設定・地区杭打。
- 6・1 引き続き抜根及び表土取。
- 6・3 土塁除草。
- 6・5 土塁抜根。
- 6・9 土塁表土取。土塁から遺構検出開始。
- 6・10 南土塁石垣S A 202一部検出。南土塁に断ち割りトレンチ設定。
- 6・14 南土塁S A 202 南面石垣検出。遺存度良好。
- 6・16 土塁への登り石段S X 214 検出。
- 6・19 東土塁S A 201に断ち割りトレンチ設定。
- 6・20 東土塁は2段構成であることが判明。
- 6・21 南土塁S A 202石垣写真撮影。
- 6・22 東土塁S A 201断ち割りトレンチを東空濠S D 218まで延長。
- 6・24 東土塁S A 201及び空濠S D 218概要判明。柵列S A 217 検出。
- 6・26 屋敷内平坦部の遺構検出開始。S D 204 検出。
- 6・29 S D 207 検出。この溝脇より銅銭4枚入土師質小壺出土。礎石建物S B 210 検出。
- 6・30 S D 215 検出。E J 20区で青磁・白磁・染付片がまとまって出土。
- 7・3 礎石建物S B 211 検出。
- 7・8 小土塁S A 216 検出。
- 7・24 石積施設S F 213 検出。
- 7・26 庭園S G 212 園池検出。
- 7・27 南土塁斜面のピット群S X 221 検出。
- 7・28 門建物S B 203 検出。2本柱による棟門形式であることが判明。
- 7・29 東土塁裾の溝S D 204は当初北へ直進していたことが判明。
- 8・3 前出門建物S B 203の西掘立柱穴より銅銭3枚出土。
- 8・7 園池より北へ延びる溝S D 206 検出。
- 8・8 遺構清掃。
- 8・9 遺構写真撮影。
- 9・10 実測用遣方設定。

- 9・11 実測開始(～10月18日)。
- 10・21 補足調査(土塁S A 201・202断ち割りトレンチ他)。
- 10・31 現場作業終了。

第13次調査(1974年8月11日～1975年5月15日)

- 8・11 調査開始。グリッド設定。地区杭打。
- 8・12 抜根及び表土取。
- 8・14 東土塁S A 201より遺構検出開始。
- 8・22 屋敷内平坦部の遺構検出を開始。石積施設S F 369 検出。
- 9・3 土塁裾の溝S D 204・370掘り下げ。S D 375等の遺構検出。
- 9・4 S D 372 検出。
- 10・26 現状変更申請に伴う緊急調査(第14次調査)のため中断(～28日)。
- 11・1 北空濠S D 366の調査を開始。
- 11・25 旧屋敷西境界石垣S V 368 検出。
- 11・30 礎石建物S B 208の全容判明。

⋮
(冬期間作業中断)
⋮

1975年

- 4・1 空濠S D 366を中心に作業再開。
- 4・9 実測用遣方設定。
- 4・10 遺構実測図作成作業開始。平行して調査継続。
- 5・2 確認調査。
- 5・15 現場調査終了。

2、遺 構（第1図～第17図，PL. 1～PL. 12）

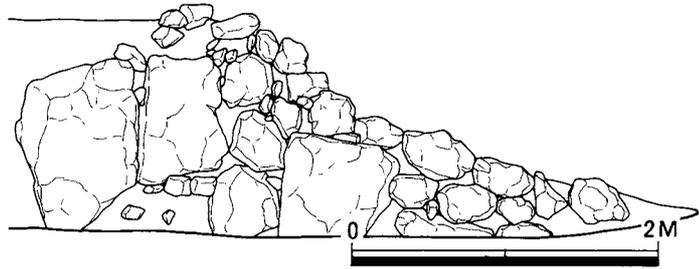
検出した主な遺構は、土塁3，石垣1，濠2，門およびその建物1，庭園1，溝12，建物4，石積施設2等である。ここでは、これらの各遺構について解説を加える。各遺構の前後関係等については明白なものもあるが土層図（第1・2図）に示したように、全体に遺構検出面が浅く、また削平部も多いため、層位的検討が不可能な点も多い。しかし、東土塁 SA 201 は次に詳述するように2時期に分けて考えられることが明らかであり、また、屋敷の区画についても当初は石垣 SV 368 までであったものを、西へ拡張している。この外、建物 SB 208 の下層に溝 SD 206 が存在する。このように、全体から考え、前後2時期に大別して考えることが可能と思われる。そこで、検出した遺構群の内、先行することが明白なものを前期、他は後期と分類することとした。そのため、後期の遺構の中には一部前期から継続するものも含まれている可能性が考えられる。また、遺構の記述に用いた方位は、湯殿庭園側を北、門側を南とする大まかなものであって、平面図に示した第VI系座標に基く方位と20°以上のずれがある。また、長さの単位としての尺は、矩尺の1尺 = 0.303mで換算した。

SS 222 屋敷の南を東西に走る道路。土塁 SA 202 の南面石垣と、その南に平行して一部残る石垣との間が道路であって幅は約3mである。SA 202 に面する所は約10°の勾配で東へ登る。西は約20°と急な坂道となって降る。前・後期を通して存続したと考えられる。山道として利用されていた。(PL. 3)

SA 201 屋敷の東を区画する南北方向土塁。上下2段に分かれる。空濠 SD 366 から南土塁 SA 202 との交点までの下段の南北長は44mである。上段は、東辺で36mである。幅は、下段裾で約15m、下段天端で約9m、上段裾で約6m、上段天端で約4mを計る。高さは、下段が約6m、上段が約2m、合せて8mとなる。基本的には下段は地山削り出し、上段は前期の小規模なものが地山削り出し、後期のものが盛土による造成である。そのため、上段の盛土部の土留のため、北端面と西辺の裾部に石垣を積んでいる。北端面の石垣は、径0.5～0.7m程の自然石を用いた立派なもので、空濠に面することもあって、下段の地山面から積み上げており、高さ1.5m程が現存する（第3図）。この石垣は、その端部を固めるため隅部はそれぞれ南へ延長されている。中でも屋敷内に面する西面の北端部の石垣は良好に遺存する。高さは2.5m程を計り、これが上段西面裾の石垣へと継がる。この石垣は、径0.3～0.4m程の自然石を1～2段に組むもので、まさに裾部のみの簡易なものである（第4図）。この上段部の断ち割り調査を行いその土層の観察を行った（第2図）。その結果、上段部は、当初、裾幅3.6m、高さ1.8m程の小規模な、地山削り出しによる造成であった。この時は、下段天端の上段西内面の平坦部は幅5.4mとかなり広いものであった。その後、前述した規模に上段部は改められた。この上段西内面の平坦部は、北半部で北へ傾斜して降っており、ここに屋敷内からの登り口が設けられていたものと思われる。また、この平坦面南半部では掘立柱列 SA 217 が検出されている。小規模な上段部を持つのが前期、これを改変したのが後期であって、この土塁は基本的には前・後期を通じて存続する。（PL. 2）

SA 202 屋敷の南を区画する東西方向土塁。西半に門 SI 367 を開く。門の西は約8m、東は門から空濠までが45mである。門を境にして約20°内に折れている。高さは、門の西で2.1～2.7m、東では道路に対しては2.1m程で変化はないが、東へ約10°の勾配で登るため、屋敷内面からは東へ高くなり、SA 201 との取り付き部で8mとなる。幅は、門の西で4.2m、門の東で4.5mであるが、高さの増加につれ幅も

拡がり， SA 201 との取り付け部では 7 m となる。道路に面した南面には径 0.5~1.0 m 程の比較的大振りな自然石を 2 段程度積んだ石垣を設けている（第 4・5 図）。また，門の西では内（北）面にも石垣を設ける（挿図 7）。また，東の SA 201 との取り付け部



挿図 4 土塁 SA 202 上段石垣立面図 (1/50)

部近くは SA 201 同様 2 段構成となっており，この上段内（北）面にも一部に石垣を積む。SA 201 同様，土塁上への登り口が存在し， SX 214 がこれに当る。断ち割り調査による土層観察によれば，道路を基準に考えれば盛土造成であるが，屋敷内からみれば地山削り出し部も存在する（第 1 図）。SA 201 にみられたような明確な改造の痕跡は認められないが， SA 201 との取り付け部で南面の石垣が少し内へずれており，これが SA 201 の改造時に対応する可能性も考えられる。また，門近くの石垣の石には割り楔の跡がみられ，自然石を割って用いていることも知られ，こうした工法は遺跡内においても比較的に新しいものにみられるものである。前・後期を通して存続したと考えられる。（PL， 3）

SV 368 当初の屋敷西の境界となる南北方向石垣。現状の西の境界である急斜面の肩部から 5~6 m 内側の下層で検出された。径 0.2~0.3 m の自然石を積み上げている。北端の空濠 SD 366 との交点では，高さ 6 m を検出しており，さらに下へ延びている。勾配は 50°~55° とややゆるやかで，石の積み方も他



挿図 5 石垣 SV 368 北端部立面図 (1/50)

の石垣とは異り、乱雑である。

この北端部検出の石垣の延長線上に設けたRライン・Oラインの2ヶ所のトレンチでもその存在を確認している。この石垣の東は地山面が遺構検出面まで認められるが、西は埋土となっている(第1図)。また、この石垣の上層には西の埋土部へも遺構が広がる。



挿図6 SV368 (Rライントレンチ)

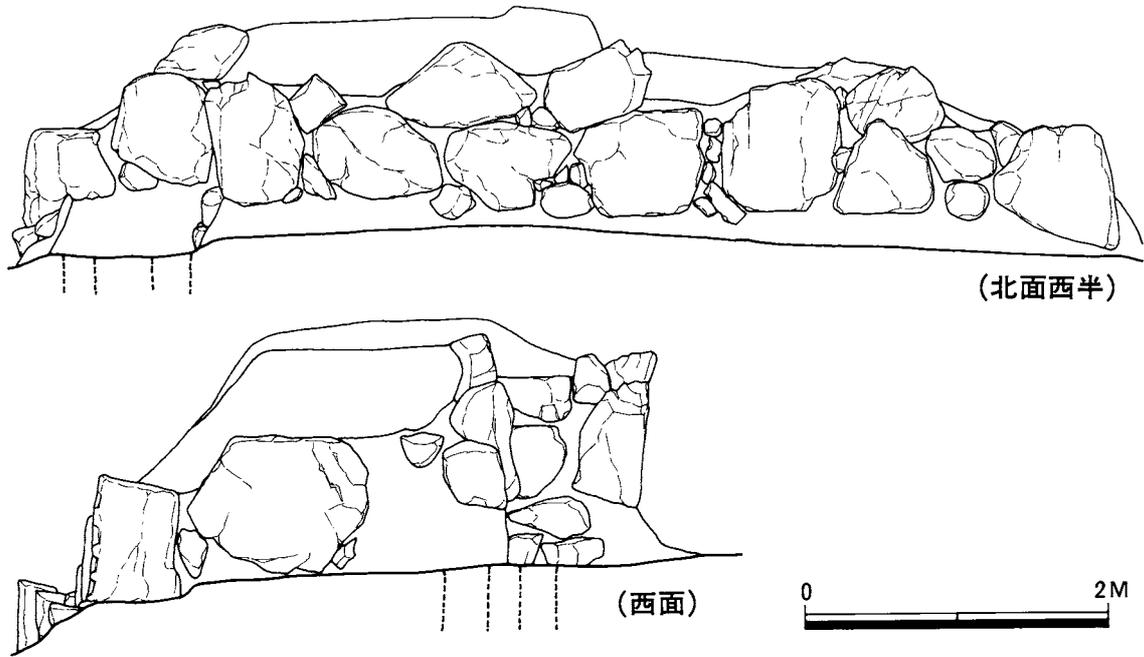
こうした点から、この石垣は

まず、西斜面の土留として設けられ、後に西へ屋敷を拡張する際にそのまま埋められたものと判断される。明確な前期の遺構である。(PL. 4)

SD 366 この屋敷と北の湯殿跡を分ける東西方向空濠。西は朝倉館外濠 SD 110 と繋がる。東はそのまま延びて湯殿庭園の背景となる観音山を取りまくように大きく北へまわり込み、そして、朝倉館北濠 SD 108 が空濠となって南へまわり込むものと繋がる。すなわち、朝倉館の周囲を廻る濠の一部である。上幅は約12m、底幅は4～6m、深さは4.5m程である。この南側の中の御殿側は石垣を設けない素掘りと考えられ、崩れ部も多く、肩線については明確でない。これに対し、北側の湯殿側には上部に石垣を積む(第6図)。石垣は、自然石を楔を用いて割り、その割り面をみせて積むものである。東西長は、32.5mで、中央部の12mは2段構成となる。下段の高さは1.7m、上段の高さは1.5～2.0mである。なお、この上段石垣の上部は一部整備により修復されている。このように2段構成としたのは、この下段を設けた位置が湯殿跡庭園の園池の排水溝位置にも当り、このため地山を削り込んだためこの側壁を固めるために設けられたのではなかろうか。また、一部には、両屋敷間を繋ぐ橋の橋台部と考える説もあるが、少し幅が広すぎるように思われる。この石垣はほぼ垂直である。濠底は地山面を削り込んでおり、中程やや東よりで落差1m程の段差を設ける。ここでは大きな地山の石を割っている。自然の湧水等がかなりみられるため、底が削られるのを防ぐため、勾配を緩やかにしたものと考えられる。ちなみに、底の勾配は2%程である。前・後期を通して存続したと考えられる。(PL. 4)

SD 218 土塁 SA 201の東辺に沿って設けられた南北方向空濠。地山を掘り込んで造られている。上幅約4m、底幅1.5m、深さ2.1m、長さ約30mである。北は空濠 SD 366に落ち込み、南は道路 SS 222までである。Kラインのトレンチと空濠 SD 366との取り付け部の調査のみで、他は未調査である。土層図(第2図)をみると、底0.3m程は砂層、この上部に厚さ0.15m程の黄色粘土層がみられ、ここまでは遺物は少ない。この上部の2層に多量の土師質土器片がみられる。空濠 SD 366との取り付け部は、1.2m程の段差がみられる。時期は明確でないが、土塁 SA 201の上段部が拡幅整備された時に掘られ、この土を上段土塁の盛土に用いたと考えられる。すなわち、後期の遺構の可能性が高い。

S I 367・SB 203 南面土塁 SA 202の西半部に開かれた東西方向道路 SS 222に面する門とその建物。東面石垣は崩れているが西半部石垣は良好に遺存している。門幅は明確でないが3m程と考えられる。また、内側でその幅を拡げており、良好に残る西半では約1.0mである。門建物 SB 203の掘立柱穴の配置から考え、左右対称で東面も同様の構造と考えられる。門建物 SB 203は掘立柱穴が6個検出



挿図7 門S I367西半石垣立面図(1/50)

されている。中央の2個が径0.3m、深さ0.8mであって、他の両脇の4個が径0.2~0.25m、深さ0.45mである。中央の2個の間隔は1.9m程である。この軸線から0.45m内側、外方へ0.7mの所に2個が、さらに0.6m外方に他の2個がみられる。東端の柱穴は若干ずれがみられる。こうした点から、主柱を2本とする棟門形式の門であって、他の4本は脇の控柱と考えてよいものと思われる。これまでに検出している武家屋敷の門が主柱間を8尺(2.4m)ないし7尺(2.1m)とするのに対し規模が小さい。柱の形状については明確でないが、角柱のように見受けられる。また、西の主柱穴底から3枚の銅銭が出土した。地鎮のため埋納されたと考えられる。検出した遺構が前期から継続したものか、後期に改造を受けたものかは明らかでない。(PL. 5)

SA 216 門S I 367を入った正面に位置する東西方向の小土塁。東西長8.4m、南北幅2.4m、高さ0.5mの規模を持ち、門建物SB 203の主柱筋から南辺までは27.5mである。この小土塁の周囲の一部には径0.3~0.5m程の石がみられ、内部の高まりはほとんどバラス土である。こうした点から、周囲に1~2段の石垣を組んでいたものと考えられる。西端は屋敷の西端とほぼ一致する。この小土塁の東に位置する建物SB 211の南北方向礎石列との間は約3mである。これらを合せ考えると、この小土塁は、屋敷内を区切るものであって、塀の基底部と判断される。そして、この小土塁SA 216と建物SB 211の間に塀中門を推定することも可能であろう。前期の西境界SV 368の推定線を越えて西へ延びていることから後期の遺構と考えられる。(PL. 5)

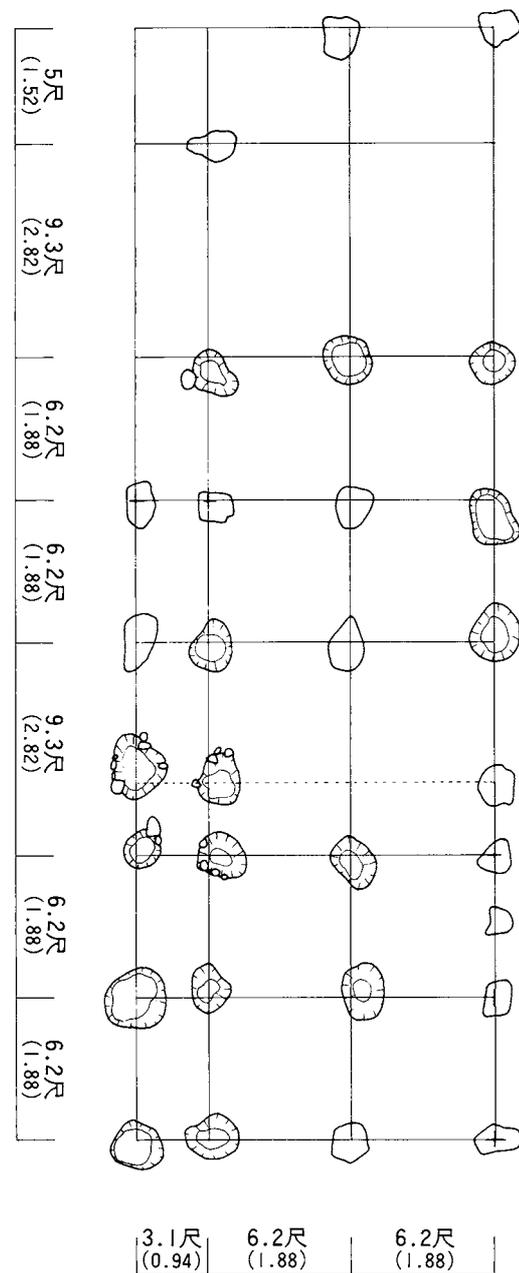
SA 217 東土塁SA 201の下段天端、上段内側(西)で検出された南北方向の掘立柱列。3穴が並ぶ。穴の径は0.6m程であって大きい。北の2個には、その外方に径1.2~1.8m程の掘り方と思われる2重の落ち込みがみられる。その検出面から、前期の遺構と考えられるが不明な点もある。間隔は、南から3.0m、3.5mである。当初の上段土塁裾との間は約3mである。遺構の性格は明らかでないが、3個であること、規模が大きいこと等から、塀とか柵といったものではなく、たとえば、上段土塁との間に差し掛けられた構造物の脚部といったような遺構ではなかろうか。(PL. 11)

SG 212 屋敷南半やや東寄で検出された庭園。後世の削平により園池の汀線や石組の不明な点もある

が、東西14m、南北3～5m、深さ0.3m程の浅くて比較的大きな池を中心とした庭園で、北東部を中心に径1.0～1.5m程の大きな自然石が配されている。北東端に溝SD 206が、西北端に溝SD 215が繋る。この2つの溝との接合部の底の高さをみると0.05m西のSD 215側が低い。また、池底はこれよりさらに0.15m低い。基本的には、東の溝SD 206から水を引き、西の溝SD 215から排水する池で、水深は0.2m弱の浅い池と考えられる。なお、この2つの溝は基本的には前期の遺構であって、後期には廃棄されていたと考えられており、とすれば、この庭園も後期には大きく改変されていたこととなる。石組は基本的に後期まで存続している。池の汀線が中程で閉じる可能性も考えられており、これがあるいは後期の改変に伴うもので、園池の規模を約1/2に縮小し、東北部の石組を中心とする庭園となったことも考えられる。(PL. 6)

SB 208 屋敷の東端で検出された礎石建物。南北14.67m、東西4.70mの南北に長い建物である。礎石は径0.3～0.6m程の自然石を用いている。一部は礎石が抜き去られているが、その跡が良く判明し、ほぼ全体が明らかとなっている。また、残存する14個の礎石の内7個の礎石天端には「+」・「-」の陰刻線がみられ、これが柱位置を示すものと考えられる。これらから基準柱間寸法を推定すると、1間を6.2尺(1.88m)とするものと考えられる。これを基準に平面計画を考えると、東西2間、南北7間の建物を基本とし、この西に半間の縁もしくは廊とする庇と、北に5尺(1.52m)の広縁を付したのと考えられる。西の半間幅の庇はそのまま南へ延長され、庭園に面する建物SB 210の庇と繋る。また、この建物の主体部である2間×7間の身舎の礎石配置をみると、2間×2間の四間とその北の2間×1.5間の三間を1単位とし、これを2つ並べたように見受けられる。なお、この建物下層には溝SD 206が存在し、これを廃してこの建物は造られており、明確に後期の遺構であることが判明する。(PL. 8)

SB 210 屋敷中央やや東南寄で検出された礎石建物。庭園SG 212に面してL字状に11個の礎石が検出されている。これらの礎石は、径0.6m程の自然石を用いており他の建物に比しやや大振りである。礎石は1m弱の間隔で2列に並んでおり、先述した建物SB 208の線と一致しており、やはり1間を6.2尺(1.88m)として計画されたものと考えられる。残存する礎石は東と南の庇の一部と考



挿図8 SB208遺構平面図

えられ、建物の主体となる身舎部は不明である。この建物の位置、礎石の大きさ等から考え、屋敷の中心となる建物と考えられる。SB 208 と一体の計画であって、同様に後期の遺構と考えて良いものと思われる。(PL. 7)

SB 211 屋敷中央やや西南寄で検出された礎石建物。南北に1列7個の礎石を主体とし、この東の若干の礎石群からなる。礎石は径0.5m程の自然石を用いる。7個の礎石は南5個が約1.5m間隔で並び、その北は1.9m程の間隔である。やはり基本的には1間を6.2尺(1.88m)とするものと考えられ、南の4間も、6.2尺3間(5.64m)を4つ割(1.41m)したと考えることも出来よう。門SI 367を入れてまじり目に入る建物であるが、平面等は不明である。後期の遺構と考えられる。(PL. 7)

SA 219 屋敷南部、庭園SG 212の園池の南辺に沿う掘立柱列。柱根が残る。掘方は0.7mのほぼ方形で、中に径0.2~0.3m程の柱穴がみられる。深さは、検出面から約0.6mである。柱の形状は明確でない。間隔は、東から1.8, 1.95, 2.0, 1.8mである。西へもう1間延びていたと考えられる。1間を6.2尺(1.88m)とするものではなかろうか。不明な点もあるが前期の遺構ではなかろうか。

SD 204・205 東・南土塁SA 201・202の裾に沿って配されたL字状の石組溝。東土塁SA 201に沿う南北方向部は、当初SD 205・370と北へ直進し、濠SD 366へ流れていたものと思われる。しかし、この土塁の一部が崩壊し、これに従って中程を東へ湾曲させたものと考えられる。溝の内法幅は、0.3m程、深さは0.25mであって側石は径0.4~0.8m程の大振り自然石を用いている。なお、改造部の東へ湾曲する部分は土塁裾側には側石を配さない。SD 205は改造前の溝で前期の遺構。SD 204は改造後の溝である。溝底レベルから考え、後期には東土塁中程を境にして南は、濠ではなく、南へ向って流れていた可能性が高い。ただ、勾配は0.2%程で非常に緩く、水平に近い。(PL. 9)

SD 206 庭園SG 212の東北端から北へ延びる南北方向の溝。側石は大半が失われているが一部に径0.3m程の小振りの石がみられ、石組溝であったものと思われる。前期の溝で、後に廃棄されている。庭園SG 212の園池との接合部から約6mの所で東西方向の溝SD 207と繋がる。この溝を介して土塁裾の湧水を庭園の池へ引き入れていたものと思われる。溝底はほぼ水平に近いが、中程がやや高いようである。また、南端から約3m北の大きな庭石の脇では、地山の石を溝状に削平して水が流れるようにしている。(PL. 9)

SD 370 東土塁SA 201の裾で検出された南北方向の石組溝。南端は石積施設SF 369となる。北は濠SD 366に注ぐ。内法幅0.3m深さ0.2~0.25mの規模を持つ。側石の径は0.3~0.5mである。当初は、前述したようにSD 205を介してSD 204と繋がる東土塁裾の溝であった。しかし、土塁の一部が崩壊し、これに合せてSD 204を東へ湾曲させ、石積施設SF 369を設けて現状となった。溝SD 204と繋がる南5mは勾配が約1%と緩い。前期において溝SD 206と合流した、この北の約13mもほぼ同様の勾配であるが、その北の6mはやや勾配を強め、約4%となる。そのため、濠SD 366へ注ぐ北端部では石を3段に積み、深さも0.7m程となる。(PL. 9)

SD 207・209 屋敷の東半中程で検出された東西方向の溝。共に南北方向の溝SD 205とSD 206の間にあって約5mの長さである。なお、この2つの溝SD 207とSD 209の間は約2.5mである。南の溝SD 207は若干の側石が残り、その径は0.2m程と小振りである。内法幅は0.2m、深さは0.25~0.3m、勾配は1%弱と緩い。北の溝SD 209は残存状況が悪く不明な点も多いが、ほぼ同様の規模と考えられる。溝底は0.2m程北のSD 209が高く、南のSD 207の廃棄後SD 209が設けられたのではなかろうか。とすれば、SD 207は前期、SD 209は後期の遺構で、SD 209により、一部残された庭園の園池へ石積

施設 SF 369 の湧水を引いた可能性も考えられる。また、前述したように、SD 207 は SD 206 を通して、東土壘裾の湧水を庭園の園池へ引く役割を持つものと考えられる。(PL. 10)

SD 215 屋敷中程やや西南部で検出された石組溝。庭園 SG 212 の園池の西北端から始り、約 6 m 西北に進み、西へ折れて屋敷西端まで延びていたと考えられる。かなり破壊されている。比較的残存状況の良い東半の園池側は、側石の径は 0.15~0.3m と小振りで、内法幅も 0.1m、深さも 0.1m と小規模である。これに対し、西半は、側石の径は 0.3m 程で少し大きく、内法幅も 0.2m 程となる。東半は後に廃棄され、その上に建物 SB 211 が造られており、前期の遺構であることは明白である。西半は後期にも存続した可能性も考えられる。(PL. 5)

SD 372 屋敷東半中程やや北寄で検出された南北方向の石組溝。内法幅 0.3m、深さ 0.25m の規模を持ち、南から北へ流れ、勾配は約 2% である。側石は径 0.3m 程の自然石を用いる。建物 SB 208 の西辺に沿うようで、その間は約 1 m である。この建物 SB 208 の雨落し溝と考えられる。建物礎石天端から約 0.1 m 下って溝側石天端となる。後期の遺構である。(PL. 9)

SD 373 屋敷北西端近くで検出された南北方向の石組溝。北端は東西方向溝 SD 374 と繋がる。内法幅 0.3m、深さ 0.2m で南から北へ流れる。勾配は約 2% である。側石は径 0.3~0.5m 程の自然石を用いる。検出長は約 12m であるが、中程を除き側石が抜き去られている。西に平行する SD 375・376 との間は 6~8 m 程であって、この間に一部礎石と思われる石が残ることから、建物の雨落し溝と考えられる。後期の遺構である。(PL. 8)

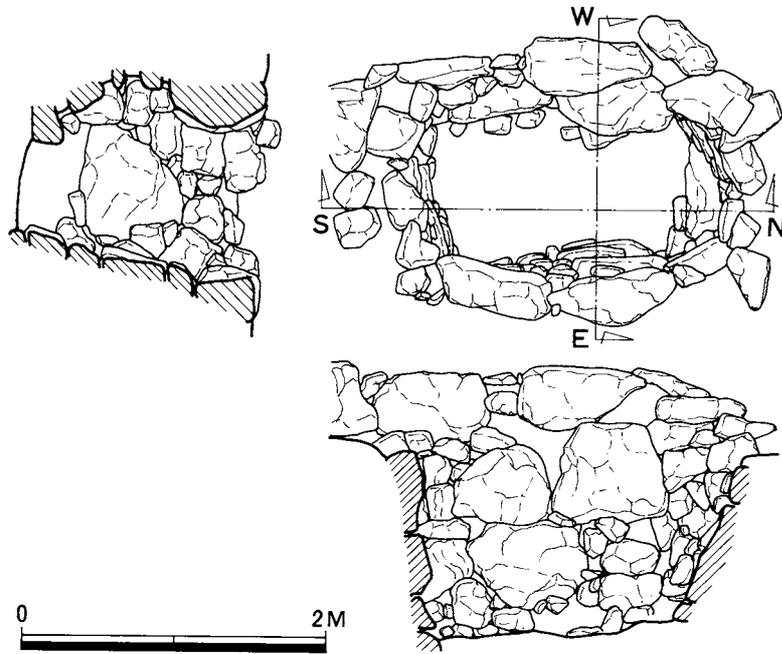
SD 374 屋敷北西端近くで検出された東西方向の石組溝。検出長は約 9 m。当初内法幅 0.3m であったものを後に南側石を 0.15m 程南へずらし幅を拡げている。深さは 0.25m 程であるが当初は少し浅く 0.2m 程と推定される。東から西へ流れ、勾配は約 5% とやや急である。北の側石が良く残り、径 0.4~0.6m の自然石を用いる。これに対し、南の側石の残存状況は悪く、また側石の径も 0.3m 程と少し小さい。屋敷を西へ拡大後に設けられたもので、前期の西境界 SV 368 の上層に位置し、このラインを越え西へ延びている。後期の遺構である。

SD 375・376 屋敷西北端で検出された南北方向の石組溝。南から北へ流れ、南端から約 7 m 北へ進んだ後東へ折れ 1 m 進み、再び北へ約 6 m 進み、東西方向溝 SD 374 に合流する。北半を SD 375、南半を SD 376 とする。SD 375 は内法幅 0.25m、深さ 0.2m、勾配は約 4% である。側石は径 0.3m 程のやや小振りの自然石を用いる。SD 376 は内法幅 0.3m、深さ 0.2m、勾配は約 2% である。側石は北半部が少し大きく、径 0.6m 程の自然石を用いる。前期の屋敷の西境界 SV 368 の西に位置し、屋敷拡大後に上層に造られたもので、後期の遺構である。なお、北の SD 375 の延長線上に溝側石の一部と考えられる石がみられ、南半の SD 376 は後の改造の可能性が高い。また、前述したように、この溝の東部には建物礎石と考えられる石もみられ、この 2 つの溝は、こうした建物の雨落し溝と考えられる。(PL. 8)

SF 369 東土壘 SA 201 裾近くで検出された石積施設。東西 0.7m、南北 1 m、深さ 0.6m 程の規模を持つ。前期において土壘 SA 201 の裾を南北に流れていた溝 SD 205 を壊して設けられ、この石積施設以南の溝は廃され、以北は SD 370 として残る。この溝 SD 370 が取り付け、この溝により排水されたものと考えられる。石は 1~2 段積むが比較的浅い。土壘裾の湧水を溜める施設と考えられる。また、前述したようにすぐ南の東西方向の溝 SD 209 によって庭園 SG 212 へ水を供給した可能性も考えられている。(PL. 9)

SF 213 南土壘 SA 202 裾で検出された石積施設。東西 1.8m、南北 1 m、深さ 1.7m の規模を持つ。径

0.6m程の比較的大振りの自然石と径0.3 m程の自然石を用いて積み上げ、上部へ少し拡がる。底部は東西1.6m、南北0.6mである。他の石積施設に比べ深い。また、地山面を掘り下げている。湧水を溜め、井戸的な機能を持っていたものと考えられる。この遺構の東に溝SD 204 が存在する。後期の遺構と考えられる。(PL. 10・12)



SX 214 南土壘 SA 202

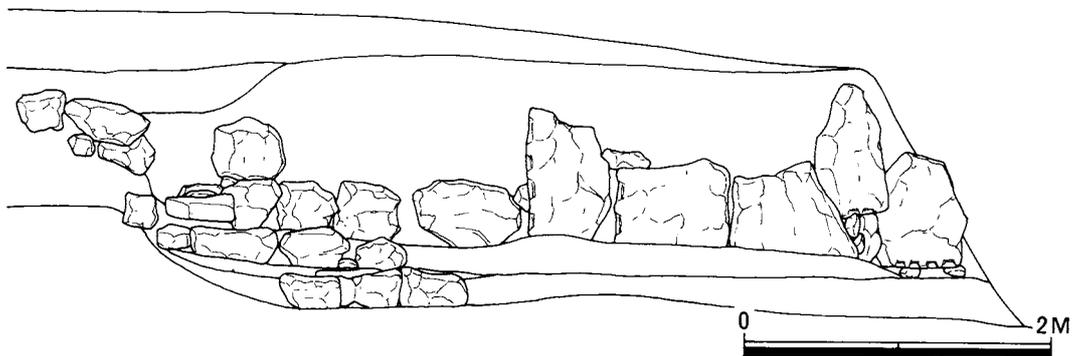
挿図9 SF213詳細図 (1/50)

裾、門SI 367を入れて右手で検出された階段状遺構。かなり壊されているが幅3m程であって3段に径0.3~0.5m程の自然石を並べている。1段の高さ(跳上)は0.25~0.3m、1段の幅(踏面)は0.8~1mである。土壘SA 202への登り口と考えられる。後期の遺構であるが、前期にも存在したのかどうかは明確でない。(PL. 12)

SX 220 庭園SG 212の園池内の集石遺構。園池内の中島の部分的残欠の可能性も考えられるが不明な点が多い。前期の遺構と考えられる。

SX 221 南土壘SA 202裾の斜面に残る穴列。形状は不揃いであるが6個検出されている。その間隔は、西から1.0m, 1.0m, 1.2m, 3.0m, 3.0mである。性格等は不明である。後期の遺構と考えられるが、不明な点が多い。(PL. 12)

SX 377 屋敷中程の集石遺構。中には地山の石が露頭したものも含まれる。後世に石を集めた可能性も考えられる。時期・性格等は明確でない。



挿図10 SX214 立面図 (1/50)

3、遺 物 (第18図～第36図, PL.13～PL.31)

ここで取り扱うのは、「中の御殿」と通称される屋敷地と、その東と北に掘られた空濠から出土した遺物群である。中の御殿は、5代目当主義景の母親、光徳院(二位の尼)の居住した屋敷という伝承が残る地である。調査の結果検出された遺構・遺物に、このことを裏付けできる確実な資料を得ることはできなかったが、陶磁器類の中には伝世品と思える優品の破片も出土している。

遺物は、総数31,282点を数える。内訳は表1に示したとおりである。数量は破片数をカウントしたものであり、実数としての個体数との間に多少の差異が生じることを考慮しなければならないが、遺物量の示す大体の傾向を知ることができる。概観すると、陶磁器類が最も多く、約98%と大部分を占めている。なかでも土師質土器(皿)が特に多く、全体の88.8%を占めるが、この傾向は隣接する朝倉館にも共通している。その他、金属・石製品が出土しているが、木製品は1点も出土していない。

以下、これらの遺物について、出土遺構、出土層別に記すことにする。なお、調査地は、全体に遺構の検出面が浅く、削平された部分もあるので、層的に全体の遺構の前後関係を明らかにすることには困難があり、ここでは、基本的には遺構の項で述べた前後2時期を一応念頭において、関連するそれぞれの遺構の順に、そこから出土した遺物について記述したい。

本項における遺物の分類については、越前焼大甕・播鉢は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』(1983)⁽¹⁾、土師質皿は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書I』、染付は「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』(小野正敏1982)における分類をそれぞれ基本とした。

器	種	破片数		器	種	破片数		器	種	破片数								
			%				%				%							
日本製陶器	越前	甕	712	中国製陶器	青磁	碗	51	金属	銭	25	石製品	錢	25					
		壺	260			皿	85		釘	25		小刀	1					
		鉢	105			鉢・盤	14		壺	1		釜	1					
		檜鉢	322			瓶	8		釜	1		鉄	1					
		その他	6			香炉	4		鉄	1		鉄	1					
		小計	1,405	7	その他	7	小計	169	0.54	鉄	1	鉄	1					
	土師質	皿	27,770	白磁	碗	12	計	66	0.21	鉄	1	計	66	0.21				
		土釜	10		皿	550		鉄		1								
		土鈴	3		坏	32		鉄		1								
		その他	2		その他	4		鉄		1								
		小計	27,785	88.8	小計	598	1.91											
	瀬戸・美濃	鉄釉	碗	124	磁器	染付	碗	116	石製品	バンドコ	159	その他	炭	8				
			皿	5			皿	116		盤	40		サザエ	1				
			壺	33			坏	5		硯	13		種子	1				
			鉢	7			鉢	4		白	3		その他	7				
		その他	6	その他			4	いろり		2	計		17	0.05				
			小計	175		0.56	小計	245		0.78	石		2					
		灰釉	碗	9		赤絵	碗	2		計	606		1.94	石	2	計	17	0.05
			皿	17			合子	2			砥			1				
			卸皿	2			小計	4			0.01			石	1			
鉢			9	計			1,016	3.25			風炉			1				
	壺	3	朝鮮製陶磁器	壺	22	計	606	1.94	火鉢	18	計	31,282	97.8					
その他	3	碗		2	その他		367											
	小計	43	0.14	小計	24	0.08												
瓦質	風炉	2	須恵器	壺	22	計	24	0.08	炭	8	計	31,282	97.8					
	瓦燈	1		碗	2		計		24	0.08		サザエ		1				
	その他	2		小計	24				0.08			種子		1				
	小計	5	0.02	土師器	3	0.01		その他	7									
信備	壺	40	0.13	近世陶磁器	壺	22	計	24	0.08	計	17	0.05						
	鉢	2	0.01		碗	2		計			24		0.08					
	小計	29,455	94.16	陶磁器類の計	30,593	97.8	合計		31,282									

表1. 第4・13次調査区出土遺物一覧

SA202 トレンチ出土遺物 (PL. 13, 第18図)

屋敷地の南を区切る土塁 SA 202 を断ち切るトレンチから出土した遺物である。

越前焼 越前焼は鉢と播鉢が出土した。(1)は、口縁断面が丸く、口縁からやや下がって沈線が巡るⅢ群 a の播鉢である。

中国製陶磁器 青磁の碗と盤が出土した。(2)は盤である。底径約 9.4 cm を計る。内面には蓮弁文風に約 0.8 cm 幅の弱い条線が巡る。

金属 銅銭(3)が 1 枚出土した。径約 2.2 cm, 重さ約 1.842 g を計る。酸化が著しく、銭名は不明である。

その他 土師質皿と、鉄釉碗も出土している。

SA 202 出土遺物 (PL. 13, 第18図)

SA 202 上面炭層から出土した遺物である。

越前焼 播鉢が 3 点出土した。(4・5)は、Ⅲ群 a の播鉢である。(6)は、やや退化した高台を貼り付ける播鉢である。Ⅰ群と考えられる。外面は粗い縦方向の篋削り痕が見られる。

土師質土器 土師質皿が出土している。(7)は、粘土円盤から皿状に手づくねで成形し、口縁部を親指と人差指ではさんでナデを施した C 類の皿である。(8)は、粘土円盤から皿状に手づくねで成形し、見込から、外面胴部下位にかけてナデを施した皿で、腰部の屈曲は弱い。朝倉氏遺跡で出土する A～D 類には類例が無く、越前焼播鉢(6)に符合する時期の遺物と考えられる⁽²⁾。

中国製陶磁器 (9)は、線描蓮弁文の青磁碗である。(10)は、高台がいわゆる「桜高台」の白磁皿である。胎土はやや軟質で、白濁した釉がかかるが、高台内は釉を拭き取る。

SA 201 下段出土遺物 (PL. 13・14, 第18・19図)

屋敷地の東(山側)を区切る土塁 SA 201 の下段上面、木炭層及び SA 217 出土の遺物である。

越前焼 甕、鉢、播鉢が出土した。(11)は、口径約 30 cm を計るⅣ群の播鉢である。口縁は内傾して切られ、口縁から 1 cm 下がった部位に沈線が巡り、播目も密に引かれている。(12)もⅣ群の播鉢である。口径約 38 cm を計る。(11・12)は、Ⅳ群のなかでも新しいタイプである。ちなみに表土直下から出土している。(13)も、底部に播目が施されたⅣ群の播鉢である。

土師質土器 皿が出土した。全て C・D 類である。(14・15)は C₃ 類の皿で、径約 9 cm を計る。(16・17)は D_i 類の皿で、径約 11 cm 内外を計る。このほか、口縁にタールの付着した灯明皿も出土している。破片のため、数量等を明示できないが、灯明皿として使用された皿には C 類が多いようである。

瀬戸・美濃焼 (18)は、径約 31.5 cm を計る灰釉鉢である。口縁は外側に折れ、上面に蓋受状の段をもつ。外面にロクロ痕を残す。釉は胴部まで施され、腰部以下は露胎である。底部には粘土玉を貼り付けた 3 足が付くタイプである。掘立柱穴のうち北端の柱穴より出土した。

中国製陶磁器 青磁は碗、皿、壺が出土した。(19)は、体部がやや開き気味に立ち上がる碗である。線描による蓮弁は、四本で蓮弁 1 単位を描いている。(20・21)は、線描蓮弁文の碗である。(22)は、蓮弁が無く、口縁外側に篋描の界線を巡らせる碗である。(23)は、見込に草花文の押印された碗である。釉は全体に施されるが、高台内は輪状に拭き取られる。(24)も碗の底部であるが、見込及び高台内は輪状に釉が拭き取られている。(25)は壺である。ロクロ痕の残る内面底部にも釉がかかる。

白磁は皿が出土した。(26)は、口径約 7.5 cm を計る小形の皿である。白濁した釉が施されるが、外面の腰部以下は露胎である。また見込も輪状に拭き取られている。

染付は碗(27)が出土した。高台径約 5.7 cm を計り、見込の広い B 群の碗である。見込は界線のなかにね

じ花を描き、外面は腰部に三重の界線、胴部に唐草文を配する。貫入の多い釉薬を全面に施すが、高台畳付は篋削りされる。

(28)は、赤絵碗である(口絵参照)。底径約4.8cmを計る。高台は厚く、内削りは浅い。見込には、赤による二重界線の中に、赤と緑で菊枝が描かれる。外面は胴部と腰部の境目あたりに赤による二重界線を引き、その下位に渦文が4単位描かれる。釉薬は、やや緑かかり、貫入が多い。高台畳付以内は露胎である。⁽³⁾

朝鮮製陶磁器 (29)は瓶の底部である。底径約17.5cmを計る。堅く焼き締まった胎土はチョコレート色を呈し、外面には、わずかに緑がかった灰色の釉が薄くかかる。器壁は薄く、約0.5cm程度を計る。広い底部から体部が大きく膨らみ、細くくびれた頸部からラッパ状に口縁が開く、いわゆる舟徳利形の瓶と考えられる。

金属 銅銭が8枚出土した。いずれも渡来銭で、(30)の開元通宝は裏面に「昌」のつく会昌銭(845年初鑄)である。(31・32)は皇宋通宝、(33)は元豊通宝、(34)は元祐通宝、(36)は洪武通宝である。(35)は大観通宝であるが、裏面にもう1枚が付着してる。付着銭の銭種は不明である。

(37)は用途不明の銅製金具である。帯状の銅板に2カ所穴をあけ、そこに円柱状の足のつくM字形の銅板をそれぞれ1枚差し込み、足を打ち潰して固定し、銅板を円筒状に曲げ、下位で端部を合わせ、約0.4cm幅の銅板で挟み込んで接合している。

(38)は、平根形式の鉄鏃である。身は先端が広がり、柄に向かって閉じる逆三角形を呈すが、刃部分はわずかに内湾する。

(39)は鉄製壺金である。厚さ約0.6cmの鉄板を折り合わせ、軸受け部を作る。

SD204出土遺物 (PL. 14, 第19図)

屋敷地東辺中央の石積施設S F 369から南流し、南辺の石積施設S F 213付近に至る溝S D 204から出土した遺物である。遺物の量は他の溝と比較して少ない。

土師質土器 皿が53片(約200g)出土した。(40)は、粘土円板から手づくねで皿形に成形したB類の皿である。灯明皿として使用しており、1部にタール状の付着物がある。

このほかバンドコが出土している。

SD 370出土遺物 (PL. 15・16, 第20・21図)

屋敷地の東辺を北流する溝である。石積施設S F 369を起点に、北空濠S D 366に至るが途中溝S D 205・206が流入する。

越前焼 壺や鉢、播鉢が出土した。(41)は、広い底部から直立気味に胴が立ち上がる壺である。底径約12cmを計り、器高は21cm前後と推測できる。粘土紐の巻き上げで、胴部から底部にかけて篋削りによる整形痕が残る。胎土は砂粒が若干混じるものの緻密で、焼成も良好である。肩部に自然釉が斑点状にかかる。(42)は、底径約13.6cmを計る播鉢である。播目は8条1単位で引かれ、見込にも播目がつく。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成も良好である。底部脇に篋による沈線が巡る。

土師質土器 皿が5,520片(約33kg)と大量に出土した。その大部分は、S D 206と合流する付近から北の空濠S D 366にかけての間に集中していた。(43)は、口縁の直立するいわゆる丸皿(G類)である。(44)は、丸皿の口縁を2カ所内側に押し曲げたいわゆる耳皿である。丸皿と耳皿は少なく、各々2片が出土しただけである。(45・46)は、手づくねでつくるB群の皿である。ともに径約8cmを計る。灯芯痕は無いが、同器形のなかには灯芯痕を残すものも認められた。(47~49)はC類の皿である。C類は、口径によって6cm(2寸)を基準とするC₁類、7.5cm(2寸5分)を基準とするC₂類、9cm(3寸)を基準

とするC₃類に大別できるが、図示した3点はいずれもC₃類である。広く平坦な見込をもつD類は、口径約10.5cm前後のもの(50・51)と、約12cm前後のもの(52~54)が出土した。完形品が少ないため、個体数は明確でないが、タール痕の残るものは全体的に少ないようである。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は碗と小皿、瓶が出土した。(55~58)は、口径約12cm内外の碗である。いずれも口縁の屈曲がみられる。(56~58)は腰部にサビ釉が施されている。(59・60)は、口径約8cmを計る小振りの碗である。口縁は屈曲を持ち、腰部にはサビ釉が施されている。(61)は、口径約5.6cmを計る小皿である。体部は、底部からやや内湾気味に立ち上がる。鉄釉は外面、口縁下約1cmまでかけられ、腰部にはサビ釉が施される。高台脇を篋削りし、削り高台としている。(62)は、徳利形の瓶である。口縁はラッパ状に開くと思える。外面の鉄釉は、二次的な火を受け、かせた感じである。ロクロ目を残す内面にはサビ釉が施されている。

中国製陶磁器 青磁は碗が出土した。(63)は、底部が厚く、腰が張り、薄い体部(約0.4cm厚)の立ち上がる碗である。釉はくすんだ緑色を呈し、高台までかかるが、畳付から内側は、これを拭き取る。見込には篋描きによる界線の中に、花央に「大」字のある5弁の印花がある。青磁では、この他香炉が出土している。

白磁は、碗、皿、坏がある。(64)は口径約14cmを計る碗である。器壁は薄く約0.3cmを計り、口縁はゆるく外反する。(65)は口縁が端反りのC群の皿である。高台内は砂が付着するいわゆる「砂高台」である。胎土は灰色を呈する。釉薬も灰白色に発色し、全体に施されるが、畳付は篋削りされる。

(66)は、腰部が張り、口縁の外反する坏である。白色を呈する釉薬は全体に施された後、高台畳付を篋削りし、見込も輪状に拭き取る。見込の拭き取り部分に重ね焼きによる高台痕が認められる。

石製品 笏谷石(火山礫凝灰岩)のバンドコが出土した。(67)は、平面楕円形のバンドコの蓋である。表面は丁寧に磨かれる。裏面にはノミによる加工痕がみえるが、比較的丁寧に作りである。(68)は、平面D字形のバンドコの身である。底部には、左右両側に約2cm幅の脚を削り出す。内面底部にはノミによる加工痕が明瞭に残る。

その他 (69)は貝殻片である。サザエと思える。

SG 212出土遺物(PL. 16・17, 第21・22図)

屋敷地の南東部分に造られた庭園の池から出土した遺物群である。

越前焼 (70)は、口縁の幅約3.9cmと、最も肥厚したIV群の甕である。(71)は、器高約41cmを計るやや小振りの中甕である。外傾気味に立ち上がる口縁は、水平に切られ外面に弱い沈線 内側に浅い段がつく。卵形をした胴は、胴部上位に最大径をもつ。粘土紐で巻き上げ成形され、口縁部から肩部にかけてナデ調整し、胴部には叩き痕、腰部下位には篋削り痕がみられる。(72)も小振りの中甕である。胴部中程に最大径をもつタイプである。(73)は、火桶である。口径約20.2cmを計る。薄く造られた口縁は、ほぼ水平に切られる。灰色を呈する胎土は、砂粒を多少含む。(74)は、口縁の内湾する鉢である。口縁はやや内傾して切られ、外面に1条の沈線が巡る。口径は約29.3cmを計る。(75)も口縁の内湾する鉢である。口縁は深く内傾して切られ、外面に2条の浅い沈線が巡る。(76)は、底部脇に低い高台を貼り付けた播鉢である。I群の播鉢と考えられる。外面腰部は縦方向に篋削りした後横方向にナデている。播目は稀薄である。播鉢は、この1点出土した。

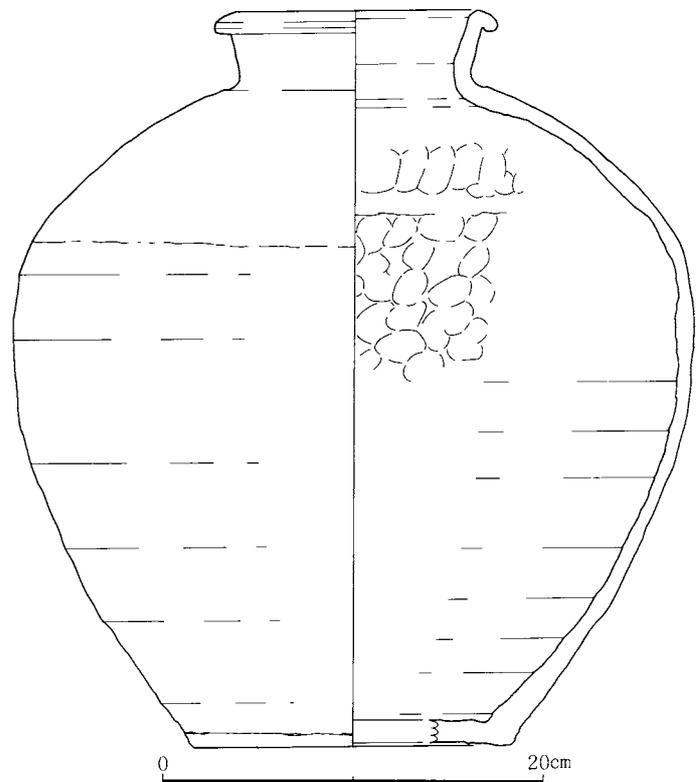
土師質土器 皿が出土した。タールの付着する破片は少なく、100片出土したうちわずかに5片のみである。(77)は、口径約10.5cmを計るD類の皿である。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は碗(78)が出土した。内湾気味に開く口縁は厚目につくられている。鉄釉にはむらがあり、ところどころ下地釉がみえる。

灰釉は鉢(79)が出土した。径約13.6cmを計る底部には、粘土玉を貼り付けた脚がつく。胎土は砂粒を多少含む。灰釉では、このほか菊皿風の小皿も出土した。

(80)は、いわゆる祖母懐の茶壺である。頸部は内傾して立ち上がり、玉造りの口縁がつく。つよく張った肩には、粘土紐による四耳が貼り付けられる。内面は、底部から肩部までロクロ目を残す。胎土は精製されて細かく、焼成も良く、露胎部は淡茶色を呈する。釉は刷毛で塗り付けられ、刷毛目が残る。祖母懐の壺は、いわゆる呂宋壺の影響を受けて作られたもので、一乗谷でも第40次調査で出土した「祖母懐」の篋描銘をもつ例など、いくつか出土例がある。

国産陶器 信楽焼の壺が、1個体分出土した(挿図-11)。肩が張り、胴部中央からやや上がったところに最大径(35.8cm)のある卵形をした体部をもつ。頸部は外反気味に立ち上がり、口縁は外に折り曲げ、玉縁状につくる。胎土は、長石を含み、灰白色を呈する。肩には自然釉がかかる。粘土紐の巻き上げ成形で、内面には指頭痕がみられる。高さ約39cm、口径約15cm、底径約17cmを計る。



挿図11 信楽焼壺実測図

中国製陶磁器 青磁は碗、皿、花生等が出土した。(81)は、高台径約4.8cmの底部から大きく口縁の開く碗である。口径約14.8cmを計る。釉薬は全体に施され、体部外面には蓮弁文が線描きされる。蓮弁は、部分的に葉脈も描かれる。(82)は菊皿である。見込が広く、体部は内湾して立ち上がる。釉は全体に施されるが、高台畳付は篋削りされる。(83)も(82)と同タイプの皿である。

細かい気泡の目立つ釉薬は内面全体と高台まで施されるが、畳付は露胎である。また高台内は白磁釉が施されている。

(84)は、管状の耳をもつ尊形の花生の口縁片である。破片のため全体像は不明瞭であるが、口径は約19cm前後と考える。管耳の付く部分には、竹節状の凸帯を貼り付ける。管耳は長さ約3.4cm、径約1.5cmを計る。頸部には退化した蓮弁文を削り出す。釉はややくすんだ緑色を呈し、貫入がみられる。また二次的に炎を受けた部分には沸痕が目立つ。14世紀、龍泉窯の製品と考える。

染付は、碗と皿がある。(85)は、広く開いた胴をもち、見込が高台内に凹む、C群のいわゆる蓮子碗^{レンジャー}である。(86)は、胴部内面を弱く篋削り菊皿風にした皿である。見込には二重界線の中に雲形を描く。青味を帯た釉が施される。

金属 釘(87)が1点出土した。

石製品 笏谷石の製品が出土した。(88)は、平面長方形を呈する盤である。底部には4隅に脚を削り出し、器高は約11cmを計る。口縁は直線的に外方に開き、短辺で約30cmを計り、底部では約21cmを計る。全体によく磨かれ、外面底部にノミ等による加工痕がわずかに見られるだけである。(89)は、平面楕円形の盤である。底部は4脚を削り出し、器高は約11cmを計る。口縁は上に向かって開き、長径約47.5cm、短径約33cmを計る。全体に丁寧に磨かれノミ痕は残されない。(90)は、平面楕円形を呈するバンドコの蓋である。

SD 206出土遺物 (PL. 18, 第23図)

溝SD 207からSG 212に流入する南の部分と、北流しSD 370に流入する北の部分からなるSD 206の、北の部分から出土した遺物群である。

越前焼 甕・壺・播鉢が少量出土した。(91)は、口縁の断面が三角形を呈し、口縁下の近い部位に沈線を巡らすIV群⁽⁴⁾bの播鉢である。

土師質土器 皿が1,058片(約3,260g)出土した。(92)は、手づくねでつくるB類の皿である。(93)は、底部に突きコブのあるいわゆるヘソ皿でA類に属する。(94・95)は、口径約9cm前後を計るC₃類の皿である。(96~99)はD類の皿である。灯明皿として使用されたものには、タールが1カ所に付着するもの(95)、口縁部全体にベツトリ付着するもの(96)等があり、破片数で灯明皿の量的割合を云々することはできないが、タール痕を残す破片は概略少ないようである。

瀬戸・美濃焼 鉄釉碗が出土した。(100)は、口径約8.6cmを計る小振りの碗である。口縁部の屈曲がみられる。露胎となる腰部にはサビ釉が施される。

中国製陶磁器 (102)は、白磁皿の底部である。厚さ0.7cmを計るやや厚手の底部で、高台内には染付釉で「大明年造」を書く。(103)は、染付の杯である。口縁下に界線を巡らせ、馬を描く。腰部に丸味をもち、底部はいわゆる碁笥底となるタイプである。

金属 釘(104・105)が出土した。(104)は、頭部を平たく潰している。

石製品 笏谷石製のバンドコが出土した。(106)は、平面D字形を呈すバンドコの身である。底部側面に脚がつく。内部底面は、粗いノミ痕が残る。

その他 炭化した木片(107)が出土した。

SD 207出土遺物 (PL. 18, 第23図)

SD 204から分岐し、SD 206に流入する溝SD 207から出土した遺物である。

土師質土器 皿が73片(約320g)出土した。(108)は、D類の皿である。粘土円板から皿形に成形し、見込から口縁外面にかけてナデ、一周したところで逆方向にナデ抜く。

瀬戸・美濃焼 鉄釉の碗(109)が出土した。いわゆる天目茶碗であるが、口縁部の屈曲は弱い。外面胴部下半はロクロ目を残す。下地にはサビ釉が施されている。

SB 203出土遺物 (PL. 18, 第23図)

屋敷の南面土壘に設けられた門SB 203出土の遺物である。

金属 掘立柱の主柱2本のうち、西の主柱穴の底部、河原石の礎板上で、銅銭が3枚まとまって出土した。(110)は周通元宝である。径約2.4cm、方孔の1辺約0.6cm、重さ2.883gを計る。裏面左上に月文がつく。(111)唐国通宝である。径約2.4cm、方孔の1辺約0.55cm、重さ約2.982gを計る。(112)は至大通宝である。径約2.35cm、方孔の1辺約0.55cm、重さ約2.774gを計る。3点とも手ずれの少ない良質な銭貨である。出土状況や銭種から地鎮具と考えられる。⁽⁵⁾

SA 201トレンチ出土遺物 (PL. 18, 第23図)

東面土壘上段に入れたトレンチから出土した遺物である。

越前焼 (113)は鉢である。口縁は薄く、やや内傾して切られる。外面口縁直下は、強くナデてくびれをつくり出す。

石製品 笏谷石製の炉壇石(114)が出土した。内外面とも丁寧に削る。

その他 巻貝片(115)が出土した。サザエと思える。

SA 201出土遺物 (PL. 19, 第24図)

越前焼 甕、播鉢が少量出土した。(116)は、口縁帯が退化し、口縁内側のやや下がったところに凹線が巡るII群の甕である。

土師質土器 皿が2,234片(10.5kg)出土した。概観すると、D類の皿が最も多く、次いでC類、B類の皿となる。灯芯痕やタールの付着するものは少ない。(117)は手づくねでつくるB類の皿である。(118~120)は、径9cm前後を計るC₃類の皿である。D類の皿は、径9cm前後の(122・123)、12cm前後の(124~126)、約17cmを測る(127)などがあり、9~12cm前後に納まるD₁類の皿が多く見受けられる。タールの付着する灯明皿にはC₃類もあるが、大半は(123・124)などD₁類の皿で占められる。(128)は径約26cmを計る大皿である。粘土円板から手づくねで皿形につくり、全体をナデた後、内面胴部中程から外面口縁脇にかけて一周ナデている。丁寧に作りである。胎土は砂粒をわずかに含むものの緻密で、焼き上がりの結果、肌色を呈し、黒斑が見られる。このサイズの皿はこの1点が出土した。

瀬戸・美濃焼 (129)は灰釉の碗である。外面胴部に、型押しにより蓮弁文を施す。灰緑色を呈する貫入の多い釉は、全体に施されるが、見込や外面腰部以下にはむらがある。胎土は灰白色で、ボソボソした感じのモグサ土である。(130)は壺である。胎土は緻密で焼成も良く、ロクロ目の残る表面にはくすんだ灰緑色の釉がかかる。内面は露胎で、強いロクロ目が残る。

中国製陶磁器 (131)は青磁碗である。胎土は灰白色を程し、くすんだ灰緑色の釉が施される。外面には線描蓮弁文が施される。

SA 201崩土出土遺物 (PL. 19・20, 第24・25図)

SD 204・205・370上を覆う、SA 201の崩土から出土した遺物群である。

越前焼 (132)は、高さ約48cmを計る中甕である。肩はなで肩で、胴部中程より上がったところに最大径をもつ。外反して立ち上がる口縁は、水平に切られ、内側に凹線、外側に浅い段が巡る。肩に「甲」の篋記号を記す。口縁から肩の部分と、胴の一部に自然釉がかかる。(133)は、高さ約40.5cmを計る中甕である。断面三角形の厚く短い口縁をもち、張りのある肩に最大径(約46.5cm)をもつ。内外面は口縁から肩にかけナデ調整され、腰部は篋削りする。(134)は、高さ約33cmを計る中甕である。口縁は立ち上がりが短く、断面三角形を呈する。大きく張った肩に最大径がある。口縁部から肩にかけての内面と、外面全体はナデ調整され、外面の叩や篋削り痕がわずかに見られる。(133)を縦方向に縮めた感じである。(135)も、断面三角形の短い口縁をもつ中甕である。口縁外側に稜のつく例である。

(136)は、肩の張る体部から頸部が一旦外反し、更に口縁の直立する壺である。口縁端部は内傾して切られる。この口縁の形態は珍しく、これまでの調査で出土した例は他に見られない。肩には粘土紐による縦方向の耳が2カ所に貼り付けられる。(137)は、直線的に閉じる肩が頸部でくびれ、口縁がラッパ状に外反する蕪型壺である。口縁端部は丸く作る。この壺の形態も珍しく、出土例は少ない。(138)は張りのある肩から、頸部が直立する壺である。口縁はわずかに肥厚し、断面三角形を呈する。

(139)は、口縁の内湾する鉢である。口縁端部は内傾して切られる。(140)は、口径約43.2cm、高さ約15cmを計る大振りの播鉢である。口縁は内傾して切れ、口縁直下に沈線が巡る。播目は密に引かれ、見込にも播目がある。Ⅳ群 a である。見込脇から胴にかけ摩耗が著しく、よく使い込まれている。(141)も、Ⅳ群 a の播鉢である。外面口縁下は強くナデている。

土師質土器 皿が845片(約3,500g)出土した。C類とD類が多い。(142~144)は、B類の皿である。手づくねで皿形につくるが、(144)は、底部中央を残し、その周りを指頭で押し凹めている。(145)はC類、(146)はD類の皿である。タール痕は、B・C・D類それぞれに認められる。

瀬戸・美濃焼 (147)は、口径約9cmを計る小振りの鉄釉碗である。口縁に屈曲が見られる。腰部以下は露胎である。(148)は、口径約11.5cmを計る碗である。口縁の屈曲は弱い。腰部には、サビ釉が厚く施される。胎土は、径0.2cm程度の砂粒を多少含む。(149)は壺の底部である。胎土は灰白色を呈するモグサ土で、内外面ともサビ釉が施される。内面にはロクロ目を残す。(150)は径約6.4cmを計る、茸形を呈する蓋である。表面中央は凹み、篋状の工具で一周削る。頂部には、粘土紐を張り付け、つまみを作る。中央凹み部を除く表面と高台状の突出部底面に鉄釉が施される。水滴あるいは小壺の蓋であろう。

(151)は灰釉の皿である。内面に23弁の花弁を削り出し、菊皿風につくる。やや灰色がかかった貫入の多い釉がかかる。高台内には輪土^{トチン}鎮痕が残る。胎土はボソボソしたモグサ土である。

中国製陶磁器 (152)は青磁皿である。見込に吉祥字の押印がある。高台内は、輪状に釉を拭き取り、重ね焼きの痕跡を残す。(153)は合子である。蓋受部は、釉を拭き取る。内傾して切られた口縁の内側に蓮花の装飾がつく。

(154)は白磁の碗である。器壁は薄く、口縁がわずかに外反する。白磁ではこの他、口縁が端反りのC群の皿も出土した。

(155)は、口縁が折縁風に外反する染付の稜花皿である。外面体部は、篋削りにより蓮弁風の文様を巡らす。釉は青味をおびる。口縁内面には、界線の上に輪と三本線を連結した文様、見込には二重界線の中に草花文を描き、口縁外面には界線の上に雲文を描く。高台畳付は篋削りされ露胎となる。

金属 キセル(156)が出土した。

石製品 (157)は、平面楕円形を呈するバンドコの身である。他の例と同じで、内面にはノミによる粗い調整痕を残し、外面は丁寧に磨く。平滑な底面は長径約25.8cm、短径約20.3cmを計る。二次的に火を受けたようで、全体が赤味をおびている。

SD 372出土遺物 (PL・21, 第26図)

礎石建物SB 208に並行する南北方向の溝から出土した遺物である。

越前焼 (158)は、口縁が内傾して切れ、口縁直下に沈線の巡るⅣ群の播鉢である。砂粒を多少含む胎土は、焼成もあまく、軟質に焼き上がる。

土師質土器 (159)は丸皿である。胎土は緻密で、肌色を呈す。(160)はB類の皿である。成形の段階で布を使用しており、内面に布目が残る。(161)もB類の皿である。皿状に成形した後、内面を「フ」字状にナデ調整している。

(162)は土鈴である。頭部の紐穴は、図上右から左に片側穿孔されている。

瀬戸・美濃焼 (163)は鉄釉の鉢である。平坦な底部から、胴が直立する。破片のため図示できなかったが、内側に向って肥厚する口縁がつく。釉は、二次的に火を受けさせた感じで、灰緑色を呈する。

石製品 笏谷石製のバンドコが出土した。(164)は平面D字形を呈するバンドコの蓋である。(165)

は、同じくD字形を呈するバンドコの身である。全体を丁寧に磨くが、内面底部は粗いノミ痕をのこす。前面の窓は5窓と思える。底部は両側に短い脚を削り出す。

SD 375出土遺物 (PL. 21, 第26図)

屋敷地の西北端を南から北へ流れる溝SD 375から出土した遺物である。

土師質土器 C・D類の皿が出土した。(166)は、D₁類の皿である。見込脇から口縁外側にかけて1周ナデ調整し、逆方向にナデ抜く。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は、碗と壺が出土した。(167・168)は、口縁の屈曲が見られる碗である。腰部にサビ釉が施される。(169)も、口縁に屈曲のある碗である。腰部は露胎である。(170)は壺の底部である。外面はサビ釉が施され、腰部を鉄釉が流下する。内面にも鉄釉が施される。外面底部には、重ね焼きに用いたピン痕が残る。

(171)は灰釉の茶入れである。貫入のある灰釉が、外面は腰部まで、ロクロ目の残る内面は全面に施される。外面腰部以下は露胎である。

国内産陶磁器 (172)は須恵質陶器である。全体にロクロ目を残し、内湾する口縁は、径約6.5cmを計る。胎土は緻密で、灰色を呈する。

中国製陶磁器 (173)は青磁の香炉である。高台は削り高台で、底面はほぼ水平に篔削りされ、高台脇3カ所に脚を貼り付ける。釉薬は内外面に施されるが、高台脇にはムラがみられ、底部は露胎である。

染付は、碗が出土した。(174)は、口縁が広く開くいわゆる蓮子碗C群である。口縁内外面に二重界線を巡らせ、外面胴部には唐草文を描く。(175)もC群の碗である。口縁内面に界線、外側に波濤文帯を巡らせ、外面胴部にはアラベスクを描く。(176)は、口縁を薄く引き出す碗である。内面に文様はなく、外面は、口縁下に二重界線を巡らせ、胴に草花文を描く。一乗谷出土のものに類例は少なく、新しい時期の混入かも知れない。

石製品 (177)は長方硯である。角は、わずかに面取りされる。

SD 218出土遺物 (PL. 22, 第27図)

越前焼 甕・鉢・播鉢等が出土した。(178)は、推定口径約44cmを計る甕である。頸部は外傾して立ち上がり、口縁は水平に切る。口縁内側は浅い段が削り出され、外面には細い沈線を巡らす。(179)は火桶である。胴はわずかに外傾して、直線的に立ち上がり、口縁は水平に切られる。外面胴部上位に粘土紐を貼り付けた、タガ風の凸帯が巡る。(180)は、広い底部から、内湾気味に胴の立ち上がる鉢である。

(181)は播鉢形の鉢である。口縁はほぼ水平に切られ、内側には弱い沈線が巡る。沈線直下に播目をつける櫛で、半円弧状の文様を刻む。内外面とも横ナデ調整され、腰部には横方向の篔削り痕を残す。(182~184)は、IV群の播鉢である。内傾して切られた口縁直下に段がつく。9~10条1単位の播目は、口縁下まで引き上げられ、見込にも引かれる。(185)は、胴の短い浅い播鉢である。口径約23.5cmを計る。播目は、口縁に直交するものや斜めのものがあり、一定していない。内面には黄褐色の釉がかかる。

土師質土器 皿が1037片(約1,700g)出土した。(186~189)はB類の皿である。口径は7.5~8cm前後に納まる。(186)は、平坦な底部から口縁をわずかにもち上げた、平たい皿である。胎土は肌色を呈し、内外面に赤斑がみられる。(190・191)はC類の皿である。口径は9cm前後に納まる。いずれも皿形に成形した後、見込中央から口縁外側にかけてナデ調整し、1周したところでそのままナデ抜く。(190)は口縁の断面を四角につくる例である。(192~197)はD類の皿である。口径が9cm前後の(192・193), 11cm前後の(194~196), 12cmを計る(197)など、法量によって細分できそうであるが、ここではD₁類と

してまとめて考える。全体ではD類が最も多く、次いでC類、残りがB類である。灯明皿に使用されたものは少なく、タールの付着した破片は、C・D類合わせて7片しか出土していない。

この他、図示しなかったが、径約16cmを計る土釜の鏝が出土している。

中国製陶磁器 (198・199)は青磁碗の口縁と底部片である。いずれも厚い底部から腰が張り口縁が直立気味に立ち上がる碗である。(200)は青磁の稜花皿である。厚手で、口縁が体部中程から外反するタイプである。胎土は灰色を呈し、くすんだ灰緑色の釉が施される。

(201)は白磁の皿である。軟質で黄褐色を呈する胎土に、白濁した釉薬が施される。釉には細かい貫入がみられる。B群である。

(202)は底部が高台内に凹む、いわゆる蓮子碗である。外面は、胴部に唐草文、腰部に簡略化した蓮弁帯、高台に二重界線を巡らす。内面見込には、二重界線の中に花卉文を描く。高台畳付は篋で削り露胎とする。(203・204)は、いわゆる饅頭心の碗である。口縁内外面に界線を巡らせ、外面胴部には線描で輪郭をとり、中を塗りつぶした花卉文を描く。(205)は、口縁が端反りのB₁群の皿である。外面胴部に唐草文を描き、内面口縁下と見込に界線を巡らす。

金属 銅銭が3枚出土した。(206)は、皇宋通宝である。径約2.4cm、重さ約2.477gを計る。方孔は1辺約0.7cmを計るが、歪んでいる。(207)は咸平元宝である。(208)は「平元」が読める。(209・210)は釘である。(211)は鉾滓である。

SD 366出土遺物 (PL. 23~25, 第28~30図)

越前焼 鉢、播鉢が多量出土した。(213)は、口縁を内傾して切る播鉢形の鉢である。器形はIV群の播鉢と共通する。(213)に比べ胴部の立ち上がりが強く、内面口縁下に浅い凹線が巡る(214)や、口縁がやや内湾し、口縁外側を強くナデる(215)、同じく口縁が内湾し、口縁の断面が四角を呈する(216)等も出土した。

播鉢は、全てIV群である。(217)は、径約22cm、高さ約7.7cmを計る小形の播鉢である。口縁は内傾して切られ、断面三角形を呈し、内側に浅い段がつく。IV群bである。(218)は、口径約32cmを計る。口縁は内傾して切られ、内側に段を付け、外側は強く横ナデし、くびれをつくるIV群aである。(219・220)は、口径約33.8cm、高さ約11.2cmを計る。(218)と同じ手法でつくられるIV群aである。(223)は、口径約42cm、高さ約15.1cmを計り、(224)は、口径約43.5cm、高さ約17.4cmを計る、ともに大形の播鉢である。(221)も含めて大形の播鉢は、IV群aのなかでも、口縁外側にくびれはつかないようである。甕や壺も出土したが、全体がわかる資料はなかった。(212)は、肩部下位に凸帯を巡らす、無頸壺である。肩部は凸帯まで自然釉が厚くかかる。

土師質土器 皿が8,431片(約48kg)と大量に出土した。SD 370からの流れ込み付近に集中している。D類が最も多く、C類がこれに次ぐ。(225・226)は、口縁が直立する丸皿である。胎土は精選され、ともに肌色を呈するいわゆる白カワラケである。(227)は、わずかではあるが底部を指頭で押しあげるヘソ皿である。胎土は砂粒を多少含み、肌色を呈する。(228)は、手づくねで成形し、ナデ調整を施すが、その際底部脇を強くナデて高台を作り出している。このタイプの皿は一乗谷の調査ではほとんど類例を見ない。(229~233)は、B類の皿である。タールの付着するものは極めて少ない。(232)は、(114)同様手づくね成形する際、外底部中央を残して押しえたため、その部分が出ペソ風になったものである。(234~238)はC類の皿である。口径9cm前後のC₃類が多い。約33%の割合でタールの付着した灯明皿片も見られる。タールは、1カ所につくもの口縁全体にベトリ付着するもの様々である。(239~250)

はD類の皿である。口径9cm前後から12cm前後のD₁類が主体である。灯明皿片は約36%みられ、大半は径12cm前後の皿に集中する。タールは、口縁全体につくものが多い。

(251)は土釜である。口径約9.3cmを計る。口縁内面と外面鏝にかけてナデ調整する。煤は、底部から鏝の下面にかけて付着する例が多いが、この資料には全く見られない。

(252)は高坏である。脚付根の破損面は、磨かれたように摩耗しており、転用の可能性がある。

瀬戸・美濃焼 鉄釉碗は、(253~255)など口縁の屈曲の強いものや、(256~258)など口縁の屈曲が弱く、やや厚手のもの、(259・260)など口径10cm以下の小振りの碗が出土した。胎土はボソボソしたモグサ土で、下地にサビ釉が施される。サビ釉の厚薄は一定でない。茶褐色或は黒褐色を呈する鉄釉が施されているが、(260)は、緑を帯びた茶色を呈する。(261)は鉄釉皿である。底部は内側を削って高台とし、高台脇は削らずそのまま体部が内湾して立ち上がる。胎土はモグサ土で、釉薬は全体に施され、高台内に輪土鎖痕が付着する。(262)は小形の皿である。高台は削り高台で、口縁はやや内湾する。釉薬は内面と外面体部中程まで施され、篋削りされた腰部以下はサビ釉が薄く施される。(263)は香炉である。体部は直立し、口縁はほぼ水平に切られ外側に肥厚する。釉は外面と、内面口縁下まで施される。(264)は壺である。胎土は緻密で堅く焼き締まり、灰色を呈する。釉薬は外面のみ施され、ロクロ目の残る内面は露胎である。(265)は、灰色がかかった黄緑色の釉が内外面に施されたいわゆる黄瀬戸の鉢である。

(266)は灰釉碗である。胎土はモグサ土で、淡い灰緑色を呈する釉は貫入が多い。体部には青磁の線描蓮弁文を模した蓮弁文が型押しされる。(267)は、底部を基筒底風につくる小形の皿である。胎土はモグサ土である。貫入の多い灰緑色の釉が全体に施される。見込には印花を押す。高台内には輪土鎖痕を残す。(268・269)は卸皿である。胎土は緻密で堅く焼き締まり、灰色を呈する。底部は回転糸切痕を残す。(269)は、播目をつける際斜めに削り込み、一定方向に鋭角の稜をもたせる。

瓦質土器 (270)は風炉の肩部破片である。頸部を欠くが、その剥離面は丁寧な磨かれる。

中国製陶磁器 (271)は青磁碗である。体部に線描蓮弁文を巡らす。(272)は青磁の稜花皿である。器壁は厚く、腰部で一旦屈曲した体部は口縁にかけて大きく外反する。灰色を呈する胎土にくすんだ緑色を呈する釉が施される。(273)は青磁の菊皿である。内湾気味に立ち上がる口縁は端部を篋で抉り、花弁をつくる。灰緑色を呈する釉は内外面に施され、高台内には二重界線を描くが、無釉のため黒褐色に発色している。(274)は青磁の盤である。底部に脚が付き、腰部を巡る弱い凸帯には粘土玉を貼り付け鋌を模した突起が配される。

(275・276)は、口縁が端反りの白磁皿C群である。(277)は白磁坏である。腰がなく体部は高台から直接朝顔状に開く。

染付は、碗・皿等が出土した。(280・282~284)は、体部が大きく開き、見込が高台内に凹むC群の蓮子碗である。(280)は、口縁外側に波濤文帯を巡らす。(282・283)は、外面胴部に唐草文、腰部に簡略化した蓮弁文、見込は二重界線の中に花卉文を描く。(281)は、いわゆる饅頭心の碗である。口縁内外面に二重界線を巡らせ、外面胴部には人物文を描く。(285・286)は、底部が基筒底の皿C群である。外面胴部には芭蕉文、内面見込は捻花文を描く。畳付は釉が拭き取られ、その脇に砂目跡が残る。

(287~289)は、腰部が丸く、口縁が端反りのB₁群の皿である。外面胴部に唐草文、見込に十字花文を描く(287・288)、外面胴部に唐草文、内面胴部に花樹文を描く(289)などがある。(290・291)は、腰部が丸く張り口が端反りの坏である。鉢は、外面だけに文様を描く(292)、内外面とも文様を描く(293)

が出土した。

整地層出土遺物（PL. 26～28, 第31～33図）

越前焼（294・295）は中甕である。（294）は、頸部が外傾して立ち上がり、口縁はほぼ水平に切られる。口縁内面は段をつくらず屈曲をもたせ、外面には弱い沈線が巡る。（295）は、頸部がほぼ直立し、口縁をほぼ水平に切る。口縁内外面には弱い凹線がつく。肩は張りをもたずなだらかである。

（296）は、頸部がやや外反し、口縁を外側に折り曲げて玉縁状につくる壺である。（297）は、肩部に横方向の耳を貼付ける小壺である。遺存部分では確認できないが、口縁に片口がつくタイプである。

（298～300）は、なだらかな肩に外反した頸部のつく小形の壺である。

（301・302）は、口縁が内湾し、口縁端部を内傾して切る鉢である。口径は、ともに約32cmを計る。

（302）の内面には、煤状の付着物がみられる。（303・304）は、いわゆる播鉢形をした鉢である。器形や大きさにより用途が違うのか、（303）は内面腰部の摩耗が顕著である。

播鉢は、多数出土したが、大部分がⅣ群であった。（305）は、口縁の断面が丸く、口縁からやや下がったところに凹線のつくⅢ群aで、口径約40cmを計る。（306）は、口縁の断面が四角のⅢ群bである。

（307）は、口径約25cmと小形で、見込にも播目のつくⅣ群bの播鉢である。（308・309）はⅣ群aである。（309）は、口径約34cm、高さ12cmを計り、焼成も良好である。よく使い込まれ、見込周縁から、体部中程にかけて摩耗が著しい。

（312）は火桶である。口縁は水平に切られ、体部はわずかに外傾して直線的に立ち上がる。焼成は良好で胎土は灰黒色、表面は暗褐色を呈する。

土師質土器 皿が多数出土した。破片数ではD類が最も多く、C類がこれに次ぐ。B類は少ない。（313）はB類の皿である。（314・315）は、口径約9cm前後を計るC₃類である。（316・317）は、それぞれ口径約13cm、14cmを計るD₂類の皿である。D類では口径約12cm内外の皿が最も多い。整地層に含まれるもののなかで、南門西側土塁裾から出土した一群を見ると、タールの付着した破片が全体の約半数を数え、他の箇所 비해灯明皿の占める比率が高くなっている。

瀬戸・美濃焼（318～325）は、口縁部にくびれをもつ鉄釉碗である。露胎となる外面腰部以下には、サビ釉が施されるが、それぞれ濃淡がある。口径は約10.5cm、12cm前後に集中する。（324）は、口径約8.3cmを計る小形の碗である。（326）は、腰部に最大径をもつ徳利形の壺である。茶褐色を呈する釉薬は、ロクロ目を残す内面と、外面腰部まで施される。腰部以下は露胎である。（328）は同器形の壺の底部である。（326）に比べて器壁が厚い。底部はほぼ水平に調整する。（327）は鉄釉壺である。胎土は肌色を呈するモグサ土である。釉薬はロクロ目を残す内面と、外面腰部以上に施される。露胎となる底部には回転糸切り痕が残る。

（329）は、体部が大きく開き、口縁が弱いくびれをもって外反する灰釉碗である。くすんだ薄緑色の釉は、細い貫入がみられ、ロクロ目の残る外面胴部まで施される。（330）は、体部がやや内湾して立ち上がり、口縁がそのまま丸くおさまる灰釉皿である。腰部はわずかに屈曲し、弱い稜をつくる。（331・332）は、灰釉の鉢である。口縁は外側に折れ、上面に蓋受状の段をもつ。外面には、ロクロ目を残す。

（331）は、内面は口縁下、外面は胴部まで、貫入の多い釉薬が厚く施される。（332）は、内面から外面口縁下にかけて、釉薬を薄く刷毛塗りしている。（333・334）は灰釉の香炉である。（333）は、口径約11cmを計る口縁部の破片である。直立する体部から口縁が肥厚し、端部は内傾して切られる。（334）は底径約8.5cmを計る底部破片である。底部周縁に脚を貼り付ける。3足と見える。体部は、水平な底部

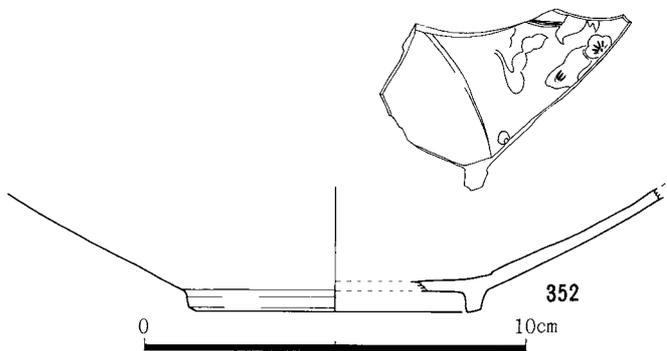
から直立する。

瓦質土器 (335)は、瓦燈の台の部分である。粘土紐を貼り付けた口縁と高台は、剥落している。内面は粗くナデ調整され、外面は横方向の丁寧な篋磨きを施す。内面中央に灯明皿を乗せる受け皿、口縁部には上方に延びる目隠し板が付くと思える。

国内産陶器 (336)は口縁の内湾する鉢である。胎土は、緻密でチョコレート色を呈す。焼成も良好で堅く焼き締まり、表面は黒褐色或は赤褐色を呈す。内面は平滑にナデ調整されるが、外面は強いロクロ目を意識的に残し、意匠化している。(337)は(336)と同じ胎土で焼かれた水指である。焼成は良好で堅く焼き締まり、全体にチョコレート色を呈する。内面は、ナデ調整するが、わずかにロクロ目が残る。外面には約1.2cm幅の凹線を重ね、稜と凹線の連続する意匠をつくり出している。これら2点の産地は不明確であるが、備前系と思える。

中国製陶磁器 青磁は、碗・皿・鉢・植木鉢等が出土した。(338)は、厚手の底部から内湾気味に体部が開く碗である。高台畳付は水平に切られ、断面は逆台形を呈する。高台内には粗い篋ぐり痕を残す。胴部には方向の一定しない粗略な線描蓮弁を施す。(339)は、口径約13cmを計り、外面体部に線描蓮弁文を施す碗で、一乗谷では最も多いタイプである。(340)は、口縁を玉縁状につくる碗である。内面胴部に花文様の陽刻が施される。口径約16cmを計る。(341)は、小さな高台から体部が大きく開く碗の口縁部破片である。青白色の釉が施された器壁は約0.35cmと薄く、口縁端部は薄く引かれ、鋭角に尖る。

(342)は、径約5.2cmの小さな高台から体部が大きく開く鉢である。外面には鑄蓮弁文を施す。全体に施釉され、高台畳付のみこれを拭き取る。(343)は、内外面に篋描きによる花文を施す鉢の胴部破片である。青味を帯びた緑色の釉は、粗い貫入がみられる。(344)は、口縁が折縁の盤である。(345)は、厚手の皿で、平坦な底部、大きく張った腰部、外反する口縁をもつ。高台は割高台風につくる。見込中央に小さな印花がつく。(346)は菊皿である。釉は全体に施されるが、高台畳付は露胎とし、高台内は白磁釉が施される。高台脇に砂が付着するいわゆる砂高台である。(347)は、底部が碁笥底で、口縁を輪花状につくる皿である。青味がかかった緑色の釉は畳付だけ削り取る。(348・349)は、薄手で口縁が外反して開く皿である。それぞれ口径約12cm, 13cmを計る。(350)は小形の菊皿である。一旦丸い皿を作った後、篋で約1cm幅の輪花を削り込んでいる。淡い灰緑色を呈し、細かい貫入の入る釉は全面に施されるが、高台付近にはムラが見られる。(351)は、植木鉢である。口径約14.6cm, 高さ約10.7cmを計る。体部に2条の凸帯を巡らせ、その間に算木文状の凸帯を配する。底には径約2cmの穴が開き、内底部に鯉の印刻がある。緑色で粗い貫入の入る釉は、内外面の底部を残して厚く施される。香炉風に脚がつくと考えられる。



挿図12 白磁碗(352)

白磁は碗と皿が出土した。(352)は、径約7.6cmを測る高台から、直線的に体部が開く碗である。見込脇に段をもつ。内面胴部には型押しによる花草文がつく。胎土は緻密で、淡い灰白色を呈する。釉は二次的に火を受け、本来白色であったものがかせて乳白色を呈する。口縁は、いわゆる口禿となるタイプであろう。(353)は、腰部が稜をもって

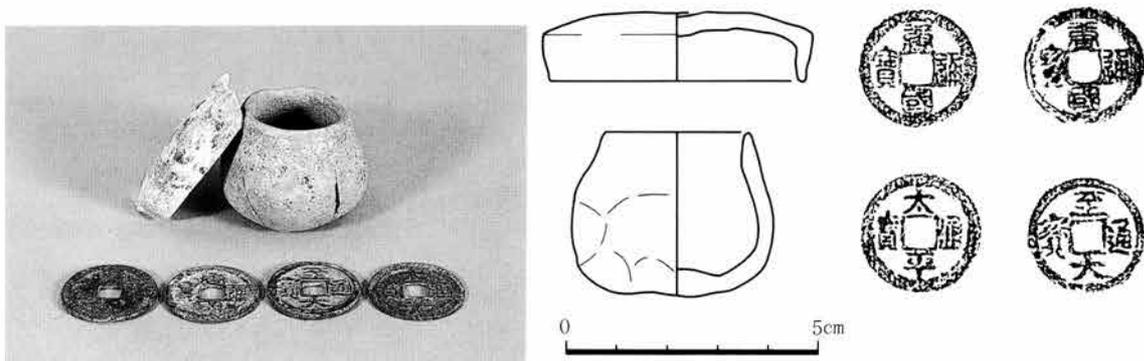
屈曲し、口縁が外反する皿である。内面胴部に縦方向の隆線がつく。破片であるため図示できなかったが口縁は輪花となる。やや灰色がかった白色の釉は、全面に施され、高台畳付は篋で削り取る。高台脇に砂粒の付着がみられる砂高台である。(354~356)は、口縁が端反りの皿C群である。(356)は高台径約12cmを計る大振りの皿である。(357)はB群の皿である。B群は、胎土が軟質で不透明な釉を施す例が多いが、この資料は磁質の胎土に青味のある透明な釉を施している。(358~360)は菊皿D群である。D群の皿には、高台内に二重界線と文字を描く例(358・359)が多いが、(360)はこれを描かない例である。(361~363)は坏である。(362・363)は、腰部に張りがあり、口縁がわずかに外反し、見込は釉を輪状に拭き取る。

染付は碗・皿等が出土した。(364・365・367~370)は、広く開いた胴と、高台内に凹む見込をもつ蓮子碗、C群である。(366)は、饅頭心の碗E群である。口縁内側に四方擗文、外側に界線、外面胴部に暗花文をもつ。(371~373)は底部が碁笥底の皿、C群である。外面に波濤文帯と芭蕉葉文、見込に花文・捻花を描く(371・372)。(374・375)は口縁が端反りの皿、B群である。外面胴部には唐草文、見込に花草等を描く。(376)は高台が幅広の皿である。(377)は鉢の胴部破片である。

金属 (378~380)は銅銭である。順に景德元宝、聖宋元宝、熙寧元宝である。錆びて大変もろくなっている。(381)は、鉛製の鉄砲玉である。不整形の球で、最大径約1.3cm、重さ約9.365gを計る。中の御殿ではこの1点が出土したのみである。(382・383)は鉄製の釘である。

石製品 (384・385)は石硯である。ともに長方硯で、(384)は、両側に脚を削り出す底部から上に向かって開く体部をもつ。4隅は面取りされ、対応する内面も面取りされている。(386)は笏谷石製のバンドコの蓋である。3カ所に孔を穿ち、表面には孔を花央に見たてた花文と枝葉がノミによって刻まれる。表面は丁寧に磨き、裏面にわずかなノミ痕を残す。使用時の熱、或は火災など熱を受け、赤味を帯びている。

地鎮具 SD 207の北側、バラスによる整地層から出土した地鎮具である。土師質小壺と、蓋として用いた丸皿、中に納められた銅銭4枚である。手づくねでキンチャク形につくられた小壺は、口径約2.8cm、最大径約4cm、高さ約3.3cmを計る。丸皿は、手づくねでつくり、口縁が直立する皿である。径約5.3cm、高さ約1.4cmを計る。銅銭は唐国通宝2枚、太平通宝1枚、至大通宝1枚で、上から唐国・至大・唐国・太平の順で入っていた。いずれも手ずれなどによる摩耗の少ない良質の銭貨である。一乗谷では、第62次調査までに26,898枚の銅銭が出土している。そのうち太平通宝は203枚と比較的多数出土するが、唐国通宝は17枚、至大通宝は15枚と量が少なく、流通銭のなかでも珍しいと言って差仕えない銭種を選び、「太平」など銭名にも注目し、そのなかでも良質なものを選び出したもの⁽⁷⁾と思える。



挿図13 地鎮具(土師質小壺・蓋、銅銭)

表土出土遺物（P L、29～31、第34～36図）

越前焼（387）は、口縁が肥厚化したⅣ群の大甕である。口縁内側に凹線、外側に稜をもつ。（388）は、内傾する頸から口縁を外に折り、玉縁状につくる壺である。口径約14cmを計る。外面はナデ調整され、内面も口縁から肩部上位にかけて丁寧にナデ調整する。（389）は、なだらかな肩から短い口縁が直立する小形の壺である。口径約13.5cmを計る。内外面ともナデ調整する。水平に切られた口縁から胴にかけて自然釉がかかる。（390）は、高さ23cm前後の小形の壺である。肩はなだらかで、胴部中央付近に最大径をもつ。頸部は外傾し、口縁もやや外傾して切られる。外面は、口縁から肩部にかけてナデ調整され、胴以下は篋削りされる。内面は、口縁から肩部上位は丁寧に、それ以下は粗くナデ調整される。底部に近い程器壁が厚く、座りの良い安定した器形を呈する。肩には「T」字が篋で刻まれる。（391・392）は、頸が外傾して立つ小壺の口縁部破片である。（393）は小壺の胴部破片である。肩部に「本」字が篋で刻まれる。内面には鉄錆が付着する。「お歯黒壺」であろう。（394・395）も小壺である。（396・397）は、胴が内湾し口縁が内傾して切られる鉢である。肩部の最大径約17cmを計る。外底部を除きナデ調整される。（398）は、体部が大きく開く「播鉢形」の鉢である。焼成は良く、堅く焼き締まり、表面は暗褐色を呈する。（399）はⅣ群の播鉢である。焼成はあまく、脆弱である。（400）は口縁が内湾し、口縁からやや下がった部位に沈線をもつ播鉢である。

土師質土器 皿が2,795片（約14.8kg）出土した。D類が最も多く、C類がこれに次ぐ。B類は少ないが、朝倉館や他の地区に比べ、高い比率で含まれる。（401～404）はB類の皿である。手づくねで成形しただけで、口縁は波を打つ。灯明皿として使用したものもある（401・402）。（405）はC類である。見込から口縁外側にかけて、時計まわりに1周ナデ調整し、そのまま正方向にナデ抜く。灯明皿に使用したものもある。（406～409）はD類の皿である。口径は、10cm前後～12cm前後（D₁類）に集中する。灯明皿もD₁類にのみ認められる。図示しなかったが、この他土釜片も出土している。

瀬戸・美濃焼 鉄釉碗は、口縁の屈曲の弱い（410）、屈曲の強い（411）、口径約7.2cmを計る小形の（412）などがある。それぞれ露胎となる腰部にはサビ釉が施される。（413）は、口径約16cmを計る鉄釉の皿である。大きく開いた体部は、胴部でゆるく内湾し、口縁はわずかに外反して丸く作る。（414）は、鉄釉の壺である。底部は回転糸切りした後、篋削りで調整される。（415）も壺である。肩に最大径があり、約17.5cmを計る。頸はほぼ直立するようである。胴部内外面にロクロ目を残す。釉は内外面胴部中程まで施される。香炉かも知れない。

（416）は灰釉の鉢である。口縁が外側に折れ、上面に蓋受け状の段がつく。（417）は鳥餌皿である。外面底部を除いて、貫入の多い淡い灰緑色の釉が施される。底部は篋削りする。（418）は茶入である。外面底部には回転糸切痕を残す。腰部以下は露胎となる。（419）は立方体形の水滴である。

中国製陶磁器 青磁は碗や盤が出土した。体部がやや開き気味の（420）、大きく張った腰部から口縁が内湾して立ち上がる（421）、外面胴部に線描蓮弁を施す（422）などがある。（423）は口縁が折縁で、端部が直立する盤である。内面胴部に鎬文をもつ。

白磁は皿、坏が出土した。（424）は、いわゆる口禿の小皿である。軟質で白色を呈する胎土に、貫入の入る白濁した釉が施され、外反する口縁はこれを拭きとる。（425）は軟質の胎土に白濁したクリーム色の釉が施されるB群の皿である。（426）は、黒灰色の胎土に白濁した白色の釉がかかる皿である。腰部に張りが見られる。（427～430）は、口縁が端反りの皿C群である。（427）は、口径約9.1cmの小皿である。（431）は菊皿である。釉は全体に施されるが、高台畳付は篋で切る。高台内には二重界線の中に

「天下太平」を染付釉で書く。(432)は、腰がなく、ラッパ状に口縁が開く坏である。底部は中グリし、畳付は施釉後篋で切る。(433)は、腰のあまり張らない坏である。畳付は施釉後篋で切る。高台内には染付釉で文字が書かれる。(434)は紅皿である。

染付は碗、皿等が出土した。(435～437・440)は、体部が開き、見込が高台内に凹む蓮子碗、C群である。(438・439・441～443)は、底部が饅頭心の碗、E群である。(441・442)は底部の盛り上がりの少ない例である。(444・445)は、底部が基筈底の皿、C群である。見込は、界線内に文字を描く。(446～448)は、口縁が端反りの皿、B₁群である。外面胴部に唐草文を配し、見込には十字花文を描く(446)。(449)は、口縁が端反りの坏である。(450)は、鉢の腰部である。(451)は蓋である。かえり部より内側は篋ぐり痕を残す。釉は上面頂部から笠端部にかけて施され、頂部付近と笠端部に界線が巡る。

(452)は赤絵の合子である(口絵参照)。胴は内湾して立ち上がり、口縁は施釉後内側に削り込み段をつけ蓋受をつくる。胴上位に二重界線を巡らせ、胴全体に唐草文を描く。

朝鮮製陶磁器 (453)は、腰部に弱い屈曲をもち、見込が漏斗状に深くなる碗である。胎土は緻密で黒灰色を呈し、暗緑色の釉が全体に施される。見込周縁と高台畳付に砂目跡が残る。

金属 (457)は、鉄製の釘である。(459)は、鉄鍋の口縁部破片である。直線的に立ち上がる口縁は内側に肥厚し、段をつくる。

石製品 (460～462)は硯である。全て側面の直立する長方硯で、(460)は、脚を削り出すI B aタイプ⁽⁸⁾である。この他笏谷石製の遺物が多量出土した。細片が多く、復元可能なもののみ図示した。(463)は、底部に3足のつく平面円形の盤である。胴は直立し、口縁は外側に水平に折れ、鐔状につくる。内外面とも丁寧に磨く。(464)は、4足をもつ平面楕円形の盤である。外面は丁寧に磨くが、内面は粗いノミ痕が残る。(465)は方形の盤である。底部に1カ所、表裏両面から穿孔された水抜き穴をもつ。(466)は茶臼である。(467)は平面隅丸方形の水桶である。長径約62.5cm、短径約46.5cm、高さ約32cmを計る。短辺の側面下位に1カ所、外側から穿孔された水抜き穴をもつ。(468)は、「へ」字状に屈曲する板状の石製品である。表面は丁寧に調整し、裏面は粗いノミ痕が残る。用途は不明であるが、石瓦或は石龕の可能性もある。

注

- (1) 同書、33頁第36次調査「越前焼大甕・播鉢の分類」による。
- (2) 類例に杣山城下、阿久和出土の皿(小野正敏・吉岡泰英『史跡杣山城II』1978、15頁、図-5参照)がある。
- (3) 小野正敏「一乗谷及び豊原寺出土の元様式の染付」『貿易陶磁研究』No.3(1983)参照
- (4) 越前焼播鉢のうちIV群の分類は、小野正敏「平等岳ノ谷窯跡群の調査概要」『東日本における中世窯業の基礎的研究』1989に従った。
- (5) 水野和雄「中世城郭都市一乗谷における地鎮の諸例」『古代研究28・29』1984 元興寺文化財研究所、月輪泰「朝倉氏遺跡出土の銅銭について」『朝倉氏遺跡資料館紀要1989』参照
- (6) 朝倉館出土遺物に、同器形の口縁部破片がある。(『朝倉氏遺跡発掘調査報告書I』1979、99頁参照)
- (7) 前掲、注5
- (8) 硯の分類は、水野和雄「日本石硯考 - 出土品を中心として -」『考古学雑誌』70-4(1985)に従った。

4、小 結

a、遺 構

前項において、検出遺構を個別的に若干の検討を加えながら素描した。その遺構は、あまり残存状況が良くないものの、基本的には、屋敷を西へ拡大する以前と以後に大きく2分されることを示し、これに基づき各遺構を前・後の2時期に大別した。ここでは、これらの遺構が相互にどういった関係を持ち、屋敷全体がどのように考えられるのかを若干の考察を加えて検討し、まとめとしたい。

年 代

まず、この屋敷の年代観についてふれておこう。一乗谷朝倉氏遺跡は、応仁の乱を経て越前の支配者となった一乗谷朝倉氏初代孝景が、文明3年(1471)この地をその支配の拠点としたことに始まり、以下、2代氏景、3代貞景、4代孝景と続き、5代義景が織田信長との戦いに敗れて滅亡する天正元年(1573)に終ると考えられている。このことは、これまでの調査の結果においても支持されているといっている。では、今回の第4・13次調査の対象となった屋敷の遺構群は、この約100年間のどの時期あてはめて考えるのが問題となる。後期の遺構群を滅亡時(天正元年)とすることは谷内の状況から考え矛盾しない。しかし、屋敷の開創、すなわち前期の遺構が何時始まり、何時後期への改造が行われたのかを示す資料は現在の所知られていない。これらについては出土遺物等の詳細な検討を待つが、基本的には、一般的なこの谷の遺構年代観、すなわち、天正元年(1573)を下限とする16世紀の遺構と考えるにとどまらざるを得ない。

構 成

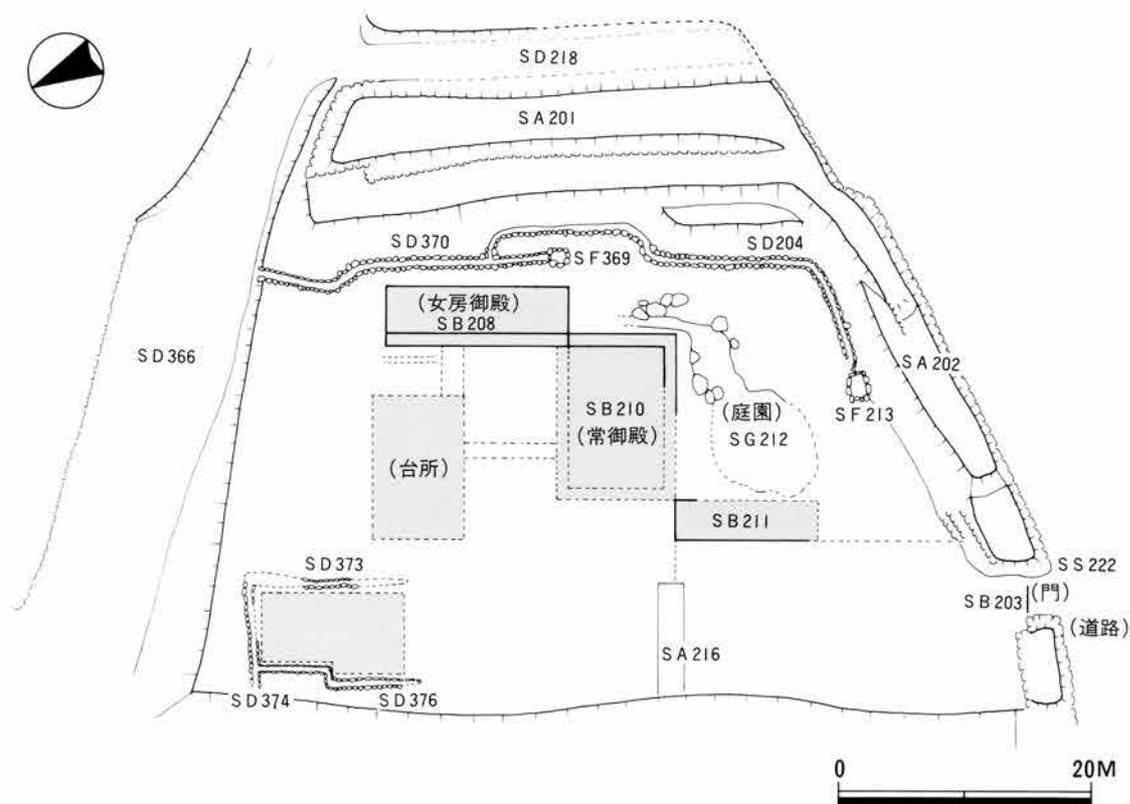
屋敷は、南の道路SS 222に対して門SI 367を構え、この道路に面する南辺と東辺に土塁SA 202・201を廻し、東の土塁の外と北に空濠SD 218・366を配し、西は急斜面で下段の屋敷と別けられている。これらの屋敷を区画する諸遺構で構まれた屋敷内の平坦部の面積は、約1,870㎡である。屋敷の唯一の門の面する道路SS 222の幅は約3mであって、谷内の他の同規模の屋敷が面する道路幅が約8mもしくは4.5mであるのと異なる。すなわち、幹線道路に面する屋敷とはいえない。また、門SI 367についてみると、これまでに知られているこうした諸屋敷の門は、間口を10尺(3m)とし、ここに設けられる門建物の間口も8尺(2.4m)で、柱を4本とする薬医門形式が多いのに対し、間口も少し狭いようで、また門建物SB 203は掘立柱2本による間口1間(1.9m)程の小規模な棟門形式の建物である。このように規模・形式共に簡易である。

次に、屋敷内の遺構について、後期を中心にその配置をみてみよう。門を入れて正面にあるのが小土塁SA 216である。これは、すでに述べたようにその位置から考え、目隠し塀と考えて良いと思われる。門を入れて右手に位置するのが建物SB 211である。この東側には庭園SG 212が存在し、これが屋敷内の南半の中心となる。この庭園の北に屋敷内ではその礎石規模が最大である建物SB 210がみられる。これらの建物礎石は残存状況が悪く、平面等は明らかでないが、その位置等から考え、屋敷内の表向の主となる建物と考えられよう。大胆に想像をまじえて推定するならば、SB 210は常御殿あるいは会所といった機能を持つ建物、SB 211はその位置から一般的には主殿あるいは遠侍といった建物も考えられるが、前期においては庭園園池との間が約2間と狭いことから、庭園を取りまく廊状の建物であった

可能性が高いものと思われる。これに対し、SB 210の北に位置する建物SB 208は前述した通りその平面の基本が良く知られる。南北7間、東西2間を基本とするこの建物は、東西2間、南北2間の四間と、東西2間、南北1間半の三間を1セットとし、これが2つ連続する。規模こそ小さいものの近世における長局との共通点の多い建物であって、その位置等から考え、こうした女房衆の居住建物と考えることも可能ではなかろうか。また、これらの庭園SG 212を取りまくSB 208・210・211の建物配置は、寝殿造りにおける庭と(東)対・寝殿・中門廊の配置に相通じるものがある点も指摘出来よう。これに対し、屋敷の中心部から西北隅にかけてはほとんど遺構が残存しない。しかし、何らかの建物を想定すべきものと思われ、その位置から、台所等の屋敷内における日常生活を支える機能を有する建物が考えられよう。すなわち、前述した庭園を中心とする諸建物は表向、すなわち「晴」の空間を構成するのに対し、ここは内向、すなわち「裏」の空間を構成したものと推定される。

まとめ

屋敷の存在する所は、5代義景の居住したことの明白な朝倉館を取り囲む濠を隔てるものの、広く考えれば、その外郭内ともいえる位置であって、また、館内中心部より高い屋敷である。こうした点から考え、朝倉氏当主に深い関わりを持つ屋敷と考えると良いものと思われる。また、屋敷内においても広い園池を持つ庭園が存在し、これに面して建物が配されている。こうした点を合せ考えると、この屋敷の主として、5代義景の母の伝承は無視することは出来ないものと思われる。この件については別稿で検討が加えられているのでこれ以上はふれない。調査による検出された遺構を通して考えられるのは、屋敷規模に比し、その門構えが簡易であって、その位置、全体の境界遺構の割には、屋敷としての独立性が比較的弱い点が指摘出来、朝倉館との関連がきわめて強いといえるのではなかろうか。



挿図14. 屋敷推定概念図

b、遺物

前項では、第4・13次調査で出土した個々の遺物について、出土遺構や出土層ごとに分けて述べた。ここでは、主に陶磁器類について、その分布状況や構成についての概要を記してまとめにかえたい。

陶磁器の分布について

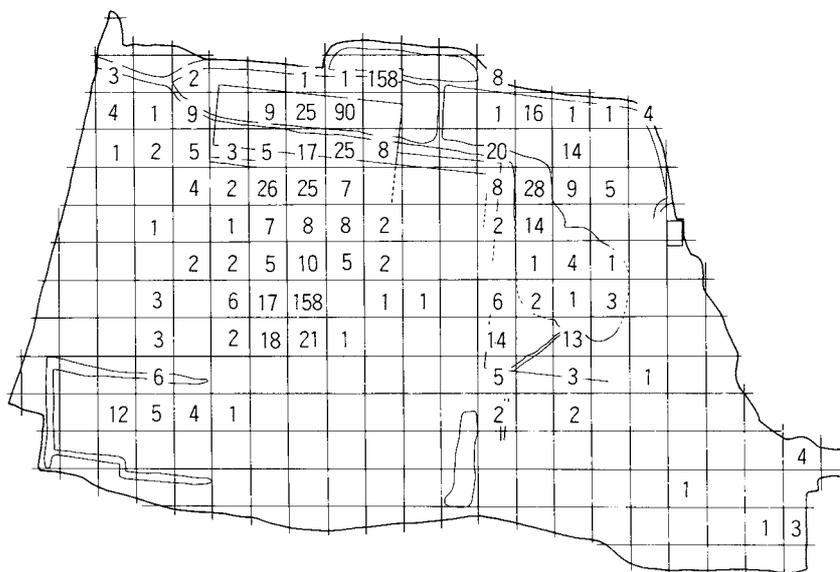
まず、屋敷内の平地部における遺物の出土分布を観察する。なお、全体に表土から遺構面までが浅く、削平された部分も多いので、表土、整地層、遺構（溝・池等）を問わず、調査グリッド毎に、そこから出土した遺物破片数をカウントし、これを観察した。

挿図15は、越前焼（甕・壺・鉢・播鉢）の分布図である。全体的な傾向として、屋敷地の南半、庭園 S G 212 付近で出土した一群と、北半、礎石建物 S B 208 から中程の集石遺構 S X 377 付近にかけて出土した一群に分かれる。これら2群の間には、分布密度の希薄な部分があり、南辺、西辺、北辺も希薄である。また、これら2群を比較すると、北半の出土量が多く、南半の約4倍の値を示す。これを播鉢だけで見た場合（挿図16）、南半にはほとんど見られず、大部分が北半で出土しており、また S X 377 付近に集中する。S X 377 付近に集中する傾向は、甕・壺・鉢等にも共通して見られる。

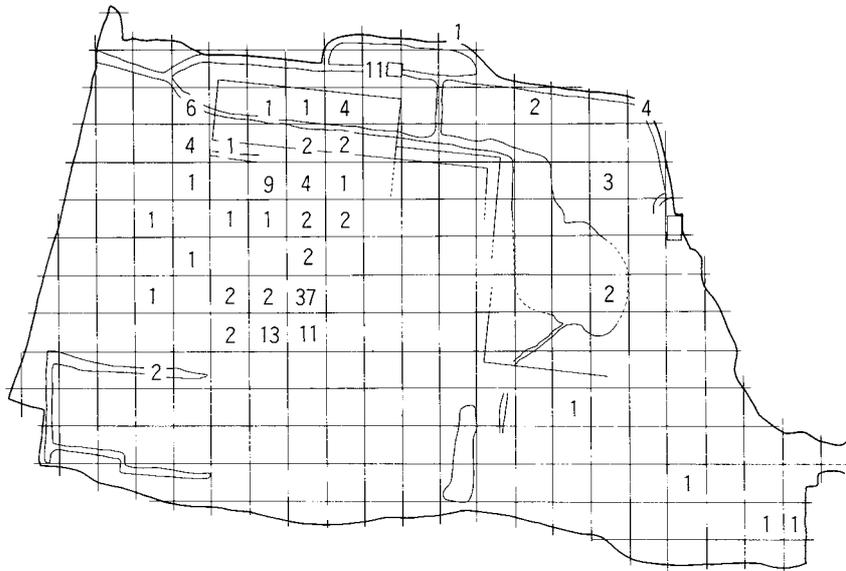
挿図17は、中国製陶磁器（青磁・白磁・染付）の碗・皿の分布図である。分布範囲は、越前焼とほぼ同様の傾向を示す。数量では、南半での出土量が多く、北半の約6倍の値を示し、大半は S G 212 西半から S B 211 にかけての範囲に集中し、越前焼とは異なる傾向を示している。

挿図18は、土師質皿の分布図である。出土量が最も多く、分布範囲も他の陶磁器類に比して広いが、全体の傾向としては、越前焼に類似するといえよう。ただし、屋敷地東辺の密度が越前焼に比べて高く、数量をみると溝 S D 370、206 の合流する付近に集中している。また分布図には示さなかったが、屋敷の北の空濠 S D 366 から大量の破片が出土しており、破片数は、屋敷地内の12,011点に対し、5,520点を数える。

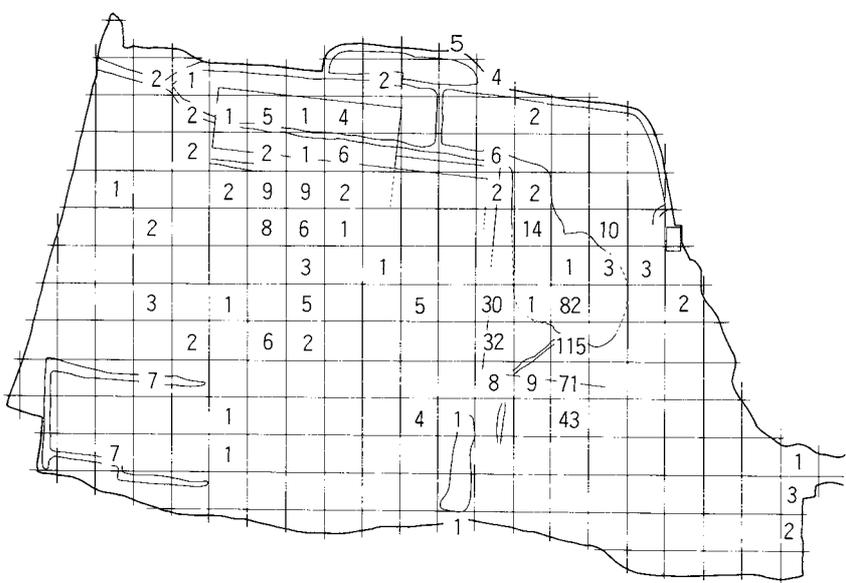
以上、陶磁器類の分布状況の観察から、いくつかの指摘ができる。まず、遺物の分布範囲を観察すると、越前焼をはじめとする国内産の製品も、青磁等の中国製品も、細かい分布は異なるものの、全体と



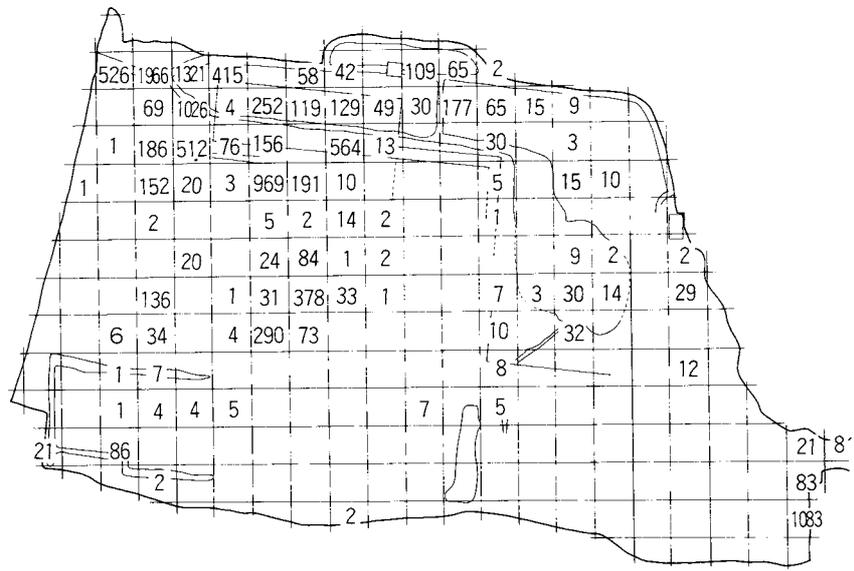
挿図15 越前焼のグリッド別破片分布図



挿図16
越前焼播鉢のグリッド別破片分布図



挿図17
中国製陶磁器のグリッド別破片分布図



挿図18
土師質皿のグリッド別破片分布図

しては同様の分布状況を示し、屋敷地において遺物の集中する区画が大きくは2つあることがわかる。一つは屋敷地の北半、S B208 から S X377にかけての区画であり、もう一つは、南半、S G 212 から S B 211 にかけての区画である。

更に、この2区画で出土する遺物には、北半では越前焼等が多く、南半では中国製品が多いという傾向も見られた。このうち越前焼は北半でも S X 377 付近に集中する傾向が認められ、特に播鉢において顕著である。こうした傾向は調査時に、他所に比して多量の灰が検出されていることと合わせ考えて、遺構の項で触れた、S X 377 付近が、位置的に台所等の日常生活を支える機能を有する建物が想定される場所であるという指摘を裏付けるものといえよう。

一方、中国製陶磁器は、南半でも S G 212 西辺から S B 211 にかけて集中する傾向が認められる。内容は青磁碗5、同皿52、白磁碗2、同皿308、染付碗26、同皿27片である。他の器種も若干数含まれるが、大部分は皿を主体とする飲食器で占められている。なお、S G 212 をはじめ S B 210・211等は、屋敷内の晴れの部分を構成することが推測されているが、遺物の分布状況から、直にこれを裏付けることは困難といえよう。

次に土師質皿についてみてみよう。全体量が多いため、廃棄後整地土に混って移動することは、他の調査例から明らかであるが、当調査地における特徴は、屋敷地東辺北部の溝に集中する点と、北の空濠 S D 366 から多量出土した点であろう。朝倉館の場合も北の外濠から多量の土師質皿が集中的に出土しており、出土状況の細かい検討から、外濠のその部分に人為的な投棄がなされたためと考えられた。中の御殿の場合、S D 366 における出土状況を見ると、屋敷の廃水溝 S D 370 の流れ出る付近から下方(西)にかけて、ちょうど流れ落ちた状態で分布しており、S D 370 において、S D 206 との合流点付近から S D 366 への出口にかけての部分に集中することを考え合わせると、これらの土師質皿は、屋敷の東辺北部に人為的に廃棄され、S D 370 等を通して S D 366 に流れ込んだとするのが妥当と思える。また、この事と前述の台所的建物の存在とを考え合わせると、屋敷地の北半を「藪」の場としていたことが窺える。

陶磁器の構成について

中の御殿から出土した遺物は、前掲した表1に示した通りであり、一つの独立した屋敷として必要な品々が認められる。これを近世を除く陶磁器だけに限って、その構成比を概観すると(表2)、土師質土器が最も多く約91.1%を占め、次いで越前焼約4.6%、中国製陶磁器約3.3%、瀬戸・美濃焼約0.7%となり、残りを瓦質土器等国産陶器類、朝鮮製陶器等が占めている。また土師質土器を除いた構成比をみると、越前焼が約51.7%、中国製陶磁器が37.4%、瀬戸・美濃焼等となる。一乗谷の他の調査地における傾向は、大きくは2つあり、武家屋敷・寺院・町屋においては、概略土師質皿は50~60%、越前焼は30%前後、中国製陶磁器は6~8%、瀬戸・美濃焼は1~4%と、ほぼ共通しており、当主の館である朝倉館においては、土師質皿が約95%、越前焼が約3%、中国製陶磁器が約1.5%、瀬戸・美濃焼約0.4%となっている。土師質皿が極端に多く90%以上の値を示す点などは中の御殿の遺物の構成比は、武家屋敷・町屋地区とは異なり、朝倉館のそれに類似していると言ってよいであろう。

		中の御殿	
(地 元)	土師質土器	—	91.1%
	越前焼	51.7%	4.6 (95.7)
(日 本)	瀬戸・美濃焼	8.0	0.7
	瓦質土器・他	2.0	0.2 (0.9)
(外 国)	中国製陶磁	37.4	3.3
	朝鮮製陶磁	0.9	0.1 (3.4)
総破片数		2,716点	30,501点
発掘面積 (破片数/㎡)		3,590㎡ (8.49)	
地区の性格		当主一族の屋敷	

※左欄は、土師質を除いた構成比

表2 陶磁器の生産地別比率

次に生産地ごとに、機能分担も含めてみてみよう。越前焼は、貯蔵や調理等主に台所での機能を分担している。甕は50.7%と最も多いが、大甕は3個体が認められるだけで、大半が(71・72)等の中甕である。次に多いのが播鉢で、22.9%を占めるが、各屋敷における必要量が一定しているためか、他の調査地にみられる10~20%の値と大差はない。

土師質土器では、前述のように皿が最も多い。皿の機能には飲食器としての坏・皿と、燈火具としての灯明皿がある。口縁全周の3分の1以上残る破片を観察すると、タールの付着する灯明皿は、B類で約11%、C類で約31%、D類で約43%で、全体では約34%であった。タールは口縁の一部にしか付着しないものもあるため、ここに示した数字は、灯明皿の占める最低限の割合といえよう。皿の他には煮炊に用いた土釜が出土しているが、他の調査地同様にいずれも(251)程度の小振りの釜であった。

瀬戸・美濃焼は、基本的に中国製陶磁器類の模倣であり、鉄釉・灰釉の碗・皿が主体である。鉄釉碗は特に多く、陶磁器類の碗の中で最も多い。いわゆる天目茶碗で、喫茶に用いたものであろう。喫茶に関連するものとして、祖母懐の茶壺(80)も出土している。灰釉は皿の方が多く、皿全体に占める割合は、鉄釉に次いで少ない。つまり食器としての灰釉皿の比重は軽く、他の土師質皿、中国陶磁器の皿が主体であったと考えられる。

瓦質土器は出土量が極めて少ない。風炉や火鉢、香炉、瓦燈等、火気に関する製品が主体であるが、当調査地では、石製品のバンドコや火鉢、青磁や鉄釉・灰釉の香炉がこれを補っている。

信楽焼の壺は、おそらく宇治から消費地への茶の販売に用いられたもので、量は少ないが各調査地に必ず出土する。調査でもほぼ1個体が出土した。

中国製陶磁器は、青磁・白磁・染付が主体で、珍しいものとして赤絵が極少量混じっている。出土量は、他の調査地では、ほぼ2:2:1の割合で出土する傾向があるが、当調査地では青磁が少なく2:7:3の割合である。ともに碗・皿が主体であるが、青磁にはこの他瓶・香炉等がある。量的には青磁・白磁とも皿が多く、染付では碗・皿がほぼ同数となる。このうち青磁碗は、前述した瀬戸・美濃焼の天目茶碗とともに喫茶に用いられたと推測され、食膳に供されたのは染付碗であったと考えられる。その場合、皿に対する碗の割合が極端に少ないことになるが、食器の汁椀・飯椀には、これまでの調査成果から、主に木製の漆塗の椀が用いられたことが窺え、中の御殿でもおそらく同様であったとするのが妥当と思える。このほか、中国製陶磁器類を概観すると、大半が15世紀末~16世紀代に比定できるものであるが、これに混じって古手の製品も若干出土している。例えば、元代と思える青磁の尊形瓶(84)や、宋代と思える白磁碗(352)、元末・明初と思える赤絵碗(28)がこれに当たる。これらは何等かの経緯で伝世したものであろうし、当時、これらを貴重品として保持していたことが窺える。

越前焼(%)		瀬戸・美濃焼		青磁		白磁		染付	
甕	50.7	鉄釉碗	56.9	碗	30.2	碗	2.0	碗	47.3
壺	18.5	皿	2.3	皿	50.3	皿	92.0	皿	47.3
鉢	7.5	他	21.1	鉢・盤	8.3	坏	5.3	坏	2.1
播鉢	22.9	灰釉碗	4.1	他	11.2	他	0.7	他	3.3
他	0.4	皿	7.8						
		他	7.8						

表3 陶磁器の生産地別器種構成

5、「中の御殿」と朝倉氏の妻妾について

第4・13次調査地の「中の御殿」については古くから注目されており、『越前国古城跡并館屋敷蹟』には「中屋形跡」と記され、また安波賀春日神社所蔵「一乗谷絵図」にも図中に「中ノ御殿跡」と記されている。これらが本報告の「中の御殿」に相当することはすでに報告Iで指摘されているとおりである。「中の御殿」の沿革については詳らかではないが、山田秋甫によれば朝倉義景の母武田氏、すなわち孝景（大岫）の妻光徳院の居館と伝えられるという⁽¹⁾。また18世紀に書かれた『越藩拾遺録』にも「又義景ノ母公広徳院屋布、寺ノ際ニアリ」と記されており、寺すなわち松雲院の際に義景の母の屋敷があったとされている。しかし同時代の文献や出土資料からは当調査地の居住者の氏名を知ることは出来ない。ただ山田秋甫が指摘したように、当調査地の「中の御殿」が南陽寺や湯殿跡、諏訪館とならんで義景時代のはなやかな生活の舞台だったことは頷けることであろうし、また朝倉館近傍の屋敷に朝倉氏の当主の妻妾などが居住したであろうことも想像に難くないであろう。そこで本稿では文献の所見から朝倉氏五代の当主の妻妾や親族について調べ、簡単に整理して叙述することとした。

①孝景（英林）

孝景（英林）には8人の男子があったとされ（『朝倉宗滴話記』）、その名は氏景（子春）・景明（宗孝）・三輪孫四郎・元景（宗建）・教景（宗勝）・時景（性波）・景儀（宗悦）・教景（宗滴）である。女子については詳らかでない。長男は氏景で、宝徳元年（1449）4月5日朝倉将景の女を母として生まれた。将景は孝景の父家景（固山）の弟で孝景は同族のイトコを妻とした。彼女は享徳2年（1453）12月19日に早世し、将景も長祿の乱の渦中長祿3年（1459）8月11日の合戦に討死した⁽²⁾。

氏景の弟の景明・三輪孫四郎・元景のそれぞれの母については未詳であるが、三輪孫四郎は系図に「無家督」「早世」などと記されており孝景の近臣三輪氏の女を母としたものと思われる。また元景はその弟教景（宗勝）が「本腹」であるがために上座に着けられて父に愛されたのを嫉み、文明16年（1484）7月13日相撲の場に教景を殺して出奔したという⁽³⁾。このことから元景が妾腹の子であることが窺えよう。

この教景（宗勝）と末子教景（宗滴）兄弟の母が孝景の正妻とされた逸見氏の養女である。彼女については月舟寿桂による七々法会の法語に詳しいのでその一部を引用しよう⁽⁴⁾。

桂室永昌大姉、洛東人、其先家于若州、其族出于温科而養于逸見氏、且職中饋于朝倉英林居士之室、朝倉逸見講婚姻礼、水清玉潤、猶若衛玠樂広、共惟、桂室大姉、好義倔強、修身謹嚴、雖処閨閣之中、克佐家国之政、士卒聞風立懦、嬪妾伏地畏威、酌末利酒則唯護戒文、寧愧地上大士、架新羅箭則堪論聖諦、宜呼女中丈夫、（後略）

この記載によれば彼女は法名を桂室永昌といい、洛東の人であるが、温科氏の出身で若狭逸見氏に養なわれて朝倉孝景に嫁したという。「閨閣の中に処すといへども、克く家国の政を佐け、士卒風を聞いて立に懦ぎ、嬪妾地に伏して威を畏る」といわれるように、よく孝景の家政を取り仕切ったようである。彼女は永正15年（1518）3月延暦寺根本中堂供養結縁のため近江坂本に至り、ついで上洛し、親類の縁により中御門宣胤の亭に泊った。この時の宣胤の日記には次のように記されている。（引用にあたり細字注を本文と一行に改めた。）

八日、雨、越前朝倉太郎左衛門尉教景母号上殿、女房三人、下女一人、侍五人、中間十人来、寄宿余方中

納言方二百疋、余方百疋、此教景母元母与先考一品ノ母堂慈妙花恩院堯經法印女姉妹也、仍為余親類也、中堂供養為結縁、自去月在坂本云々（後略）

この記事によれば彼女の「元母」と宣胤の祖母が姉妹という。「元母」とは明らかでないが、彼女が逸見氏に養なわれる以前の実母のことを指したものと考えられよう。彼女はその実母を通じて京都の公家の中御門家と親類関係を保っていたようである。彼女は『朝倉始末記』には「五位ノ尼公」と呼ばれており、晩年出家したものと思われる。また前掲史料に「上殿」と号したといわれる点にも注意される。永正17年（1520）4月2日病没した。

最後に時景、景儀兄弟は系図によれば一腹で織田家の家督を継いだとされている。「劔神社文書」の年未詳10月25日付朝倉景儀書状によれば、朝倉時景は織田庄の下地の没収、宛行を行なっており、その後その権限が景儀に移っている⁽⁶⁾。時景の跡を景儀が引き継いでおり、こうしたこと背景として彼ら兄弟は母方の親類関係により織田庄と関係を持っていたのではないかと推測される。

以上孝景の男子について述べた。孝景は最初一族の朝倉将景の女を妻として氏景を設けた。この妻は早く亡くなり長禄の乱で妻方の一族も潰滅し、その後孝景は若狭の逸見氏と婚姻関係を結びその養女を妻とした。彼女は長生きをし、朝倉氏一族に重んじられた。孝景はその他に三輪氏や越前織田氏などの女を妾としていたらしい。

②氏景（子春）

「日下部氏朝倉系図略」によれば、氏景には貞景（天沢）・景宗・香輪賀民部丞室の二男一女があったとされるが、景宗・香輪賀民部丞室の母については不明である。⁽⁷⁾

『壬生本朝倉系図』によれば、貞景の母の法名は瑞溪妙祥といい、「尾張織田孫左衛門尉息女也」といわれ、文明5年（1473）2月5日に貞景を生み、延徳2年（1490）8月22日没した。文明初年ころ、ともにもと斯波氏の被官である朝倉氏と織田氏との縁組がなされたことがわかる。

③貞景（天沢）

『壬生本朝倉系図』によれば、貞景には六男四女あったという。その男子の名は孝景（大岫）・景高（宗傑）・景郡（宗悟）・景紀（伊冊）・波多野道郷・景延（宗捷）である。

貞景は延徳3年（1491）4月20日に美濃の持是院（齋藤）妙純の女を妻に迎えた。その記事が『大乘院寺社雑事記』の同5月4日条に載っているのでも史料を引用する。

持是院之女十三歳朝倉所ニ遣之、騎馬五騎・走衆三十人、輿悉皆十丁、中間・小者以下太刀以下悉以金也、凡希有次第、長持・唐櫃以下数十合、自朝倉方引物、騎馬衆太刀一振・五十貫宛、走衆三十人各五貫文宛、中間以下輿舁等不及勘定、去月五日延引廿日也、朝倉方入目二万貫計云々、（後略）

時に貞景は19歳、持是院妙純の女は13歳といわれ、内外の情勢を見越した政略的な婚姻とも思われる。この女の母すなわち持是院妙純の妻については同じく『大乘院寺社雑事記』延徳4年6月30日条に「持是院女房ハ山名垣屋之族ニ野間入道之女子也、甘露寺按察大納言子ニ成、舎弟禪僧在之、中御門ニ細々在之、仍母方ヲハ号垣屋也」と説明されており、山名氏の被官垣屋一族の出で甘露寺親長の養女になったといわれている。一方甘露寺親長の日記によると、彼女は「北向」と呼ばれており、親長の妻「南向」の親類であったとされている⁽⁸⁾。この関係から甘露寺親長は彼女を養女とし持是院妙純に嫁したものと考えられる。

孝景（大岫）は明応2年（1493）11月22日に生れているので、この持是院妙純の女を母としたものとするのが妥当であろう。孝景の母は永正15年（1518）4月に上洛した際には甘露寺元長の亭の中元

長の女の摂取院方に泊っており、そのことは孝景の母の甘露寺家に対する親しさを表現しているものと考えられる⁽⁹⁾。また景紀の母は祥山禎公とみられており⁽¹⁰⁾、彼女は永正15年（1518）10月14日に没した。

景高・景郡・景延のそれぞれの母は不明である。

道郷は系図に「波多野次郎兵衛」と記され、後に波多野家の家督を嗣いだ。『朝倉盛衰記』下、朝倉家士座列并素姓之事によれば、波多野道郷は朝倉景弘（後述）に次いで2番目の座列に置かれている。彼も妾腹で母方について家を嗣いだものと考えられる。

貞景の女子については、『壬生本朝倉系図』によれば天性寺殿白照心桂大姉・南陽寺長老・土岐女中・藏谷女中の四女とされるが、白照心桂は他の系図にみえる朝倉与三左衛門尹景室に相当するものと判断される。彼女は『壬生本朝倉系図』に「北殿也」と注が付けられている。また南陽寺長老とは月舟寿桂について得度した良玉侍者のことである⁽¹¹⁾。彼女らの母親については未詳である。

④孝景（大岫）

『日下部氏朝倉系図略』によれば孝景には三子あったとされ、それは義景・景弘・大野三河守室である。義景は天文2年（1533）9月24日生まれで、母は武田元信の女（光徳院）である。『天文十二年記』によれば、天文12年（1543）4月に孝景の妻（光徳院）の母が一乗谷に住しており、彼女は「西殿」と呼ばれている。この日記によれば記主の清原枝賢は同年4月26日に清原宣賢の供をして孝景の新造亭において孝景・義景父子に見参しており、翌27日には西殿に見参している。このことからみて孝景の妻（光徳院）の母は孝景の亭とは別の屋敷、すなわち西殿に居住していたものと考えられる。この西殿については『朝倉宗滴話記』に次のような一節がある。

尋常の落髪は主にをくれ、或は勤気の身に候か、又は随意の覚悟に候か、此等の外にはなきものにて候、一向発心出家の儀は不及沙汰候、先年性安寺殿御落髪之時、御相伴に落髪仕候へかすと、内々意見之族候つれども、存の旨候て相抱候、然者御西殿不慮の御進退に付て、彼御命のため頭を用に立候間、満足之由被仰候事、

この一文は朝倉教景（宗滴）の落髪出家に対する考え方を記したものであるが、事実を知るうえでも重要であろう。教景は「性安寺殿」すなわち孝景（大岫）が落髪した時はそれに相伴せず、「御西殿」が危篤の時に頭をまるめて孝景に褒められたというのである。孝景が入道したのは天文初年と推定されるので、西殿はその頃から孝景が没した天文17年（1548）以前の間には一時危篤状態となり、ついで没したものと考えられる。

さて義景の母武田氏（光徳院）は天文6年（1537）に足利義晴室近衛氏から御服を給わったり、同17年（1548）2月内侍所臨時神楽の費用を申し沙汰したりして⁽¹²⁾、中央の公家・武家に強い結びつきを持っていたことが知られる。彼女は永禄11年（1568）以前には出家しており、また生前から院号を称して「光徳院殿様」と呼ばれた⁽¹⁴⁾。

また『宗養発句付句』によれば永禄3年（1560）に「上殿」という人物が連歌会を興行している⁽¹⁵⁾。そして「真珠庵文書」の永禄12年（1569）11月12日付の越前国二上国衙米収納算用并如意庵渡分注文にも「上殿御分」という得分の記載がある⁽¹⁶⁾。この「上殿」も光徳院を指すものとされている⁽¹⁷⁾。

天正元年（1573）8月朝倉氏が滅亡すると、光徳院と義景の妻少将と子愛王は捕えられ、連行される途中、「今庄ノ近辺帰ルノ里ノ堂」で刺し殺されて堂もろともに焼かれたという（『朝倉始末記』）。

景弘・大野三河守室のそれぞれの母については未詳である。

⑤義景

義景の妻妾については『朝倉始末記』巻第六に義景北方之事という一節が設けられているのでまずその記事の概要を紹介する。⁽¹⁸⁾

義景ははじめ細川晴元の女を「北ノ御方」としたが、彼女は女子一人を生んで早世したという。その後義景は近衛殿の息女を妻に迎えたが、彼女には子が出来ない。その一方で義景は光徳院に仕えていた女房の「小宰相ノ局」に目を付けて近臣の福岡吉清の所に内々に置いた。彼女は鞍谷氏の出で女子2人と息男阿君を生んだ。そこで義景の寵愛が次第に小宰相の局に移り、近衛殿の息女は退けられたという。そして双方の下女が互いに妬みあい、近衛殿の息女が小宰相の局を呪咀したとしてついに義景は近衛殿の息女を京都に送り返す。そしてその居所の地を3尺掘って新しい土を運び入れ、新殿を建てて局を移築し「御三間」と称して寵愛したという。ところがこの小宰相の局もその翌年3月下旬に亡くなってしまい、誰一の男子阿君も永禄11年(1568)6月25日毒殺される。継嗣が絶えてしまったため義景の近臣はこれを憂慮して方々に美人を探し義景の御覧に入れたという。その結果義景は斎藤兵部少輔の女少将に心を寄せ、諏訪の谷に新屋形を建てて彼女を置いたという。彼女はやがて元亀元年(1570)に男子を生んだ。これが愛王である。彼女の権勢は一挙に上り、多くの女房を召し使い、御前の評定や国中の公事沙汰までもこの女房衆の仲介するところとなり、また彼女の口入があれば恩賞、訴訟も自在だったという。

以上のように『朝倉始末記』は叙述している。内容の検討も必要であり、また若干補足すべき新資料もあるので以下考察を加えたい。

まず近衛殿の女については、年代的にみても近衛種家の女と推定される。⁽¹⁹⁾近衛家は早くから朝倉氏と特別の関係が認められる公家で注意を要する。一乗谷そのものも近衛家領宇坂庄内に所在し、貞治5年(1366)11月6日朝倉高景(徳岩)は宇坂庄地頭職を宛行われている。⁽²⁰⁾そして戦国期を通じて近衛家と朝倉氏とは良好な関係が続いていた。『朝倉始末記』では近衛殿の息女が京都に追い返された翌年に小宰相の局が亡くなり、その後に犬追物や曲水の宴などを催して義景の愁傷を慰めたという設定になっている。犬追物は永禄4年(1561)4月、曲水の宴は同5年8月に行なわれている。ところがこの曲水宴には近衛種家の弟である大覚寺義俊も参加している。このことからみると義景が近衛殿の女を離別したのはそれ以降と考えるのが自然であろう。したがって前述の『朝倉始末記』の時期設定には検討の余地があるといつてよい。

次に小宰相の局は「鞍谷氏ノ類葉」といわれ、鞍谷御所(武生市池泉町)を根拠地とする一族の出自とされている。この一族は足利義満の孫嗣俊の子孫と伝えられ、格式を誇った。⁽²¹⁾

また少将の父斎藤兵部少輔については美濃から人質として一乗谷に来た人物といわれ、永禄4年4月の犬追物にも出仕している。⁽²²⁾

さて義景の妻妾については朝倉館外濠の発掘調査によって新資料が得られた。この第9次調査は朝倉館の主要な排水口である北側暗渠の出口の下濠を対象として部分的に実施されたものであるが、濠の遺構と濠内に堆積していた7層の土層が確認された。⁽²³⁾そしてこの土層の上から数えて3番目の層の中の遺物の中には、「少将」もしくは「少しやう」と書かれた付札木簡が8枚、そして表に「御形 御番部屋」裏に「永禄十年正月十三日 三番衆」と書かれた木簡が1枚あり、これらはいずれも暗渠の出口の下附近から出土したものである。これらの新資料は、出土状況からみて朝倉館の中で生活した人物の様子を示す最も確実な同時代史料といえる。

まず「御形」とは貴人の妻の敬称であるが、年代からみて朝倉義景の妻と考えられる。その意味としては「まだ家のとりさばきを任されていない若い嫁」に相当するもの⁽²⁴⁾と考えるのが妥当であろう。永禄10年（1567）正月13日付の木簡から義景にはすでに若妻が居り、彼女は朝倉館の中に部屋を与えられて同居することもあり、そこには番衆という形で武士が配置されていたことが知られるのである。当時義景の母光徳院が居り、この若妻の立場は「御形」というにふさわしい。そしてこの若妻とは、義景の最後の妻である少将と考えられ、まさに同じ場所・土層から出土した8枚の付札木簡の主の「少将」に外ならないものと考えられる。この8枚の木簡の出土によって彼女の正式な女房名が「少将」であることが確定したのである⁽²⁵⁾。そしてこれらの木簡によれば少将は当時未だ義景の家政をとりさばく地位にはついておらず、義景の母である光徳院が強い発言力を持っていたであろうことが窺える。また『朝倉始末記』で叙述されている阿君の死後に近臣が義景の室を探したという設定も検討を要すべきことであることがわかる。出土新資料によれば阿君の生きているうちから義景は少将を朝倉館に住ませていることが確認されるのである。

結局『朝倉始末記』の記事は一見義景の妻妾についてうまく説明しているように語られているが、その実は事柄の前後関係などに誤りが多いことが知られる⁽²⁶⁾。

以上義景の妻妾についてまとめると、義景は最初に細川晴元の女を妻とし、彼女が亡くなると近衛積家の女を妻に迎え、一方では鞍谷氏の一族の女小宰相の局を妾とした。小宰相の局が阿君を生んだ後、永禄5年（1562）以降に近衛氏は離縁されて京都へ返されその後小宰相の局も没した。そして義景は同10年までには少将を妻とした。この間光徳院は義景の家の内部に隠然たる影響力を保っていた。

以上孝景（英林）から義景に至る五代の当主の妻妾とその子について整理した。史料的な制約と問題の性格上その全貌はつかみ難いであろうが、彼女達の居所などについても若干これを窺うべき材料もみつけられた。最後にこのことについてまとめてむすびとしたい。

朝倉氏の当主の妻妾やその母・子の居住した屋敷のなかには「西殿」「北殿」「上殿」などがあった。まず西殿とは天文12年当時孝景（大岫）の妻武田氏（光徳院）の母が住んでいた屋敷の名で、かつ彼女もその名で呼ばれている。当時の孝景の亭の位置は現在の朝倉館跡と考えられているので、朝倉館の西に「西殿」があったものと考えられる。また孝景（大岫）の姉妹である白照心桂が「北殿」と呼ばれているのも朝倉館の位置に対しての名称であろう。次に「上殿」とは孝景（英林）の妻桂室永昌の晩年の呼称で、彼女の没後孝景（大岫）の妻光徳院の呼称にもなった。上殿とは一般的な呼称の如くであるが、一乗谷には「上殿」という字名が今に残っており、永禄11年（1518）の朝倉亭御成の辻固の地点「上殿ノ橋ノ通」にもみえて戦国時代からの屋敷地の称であることがわかる。

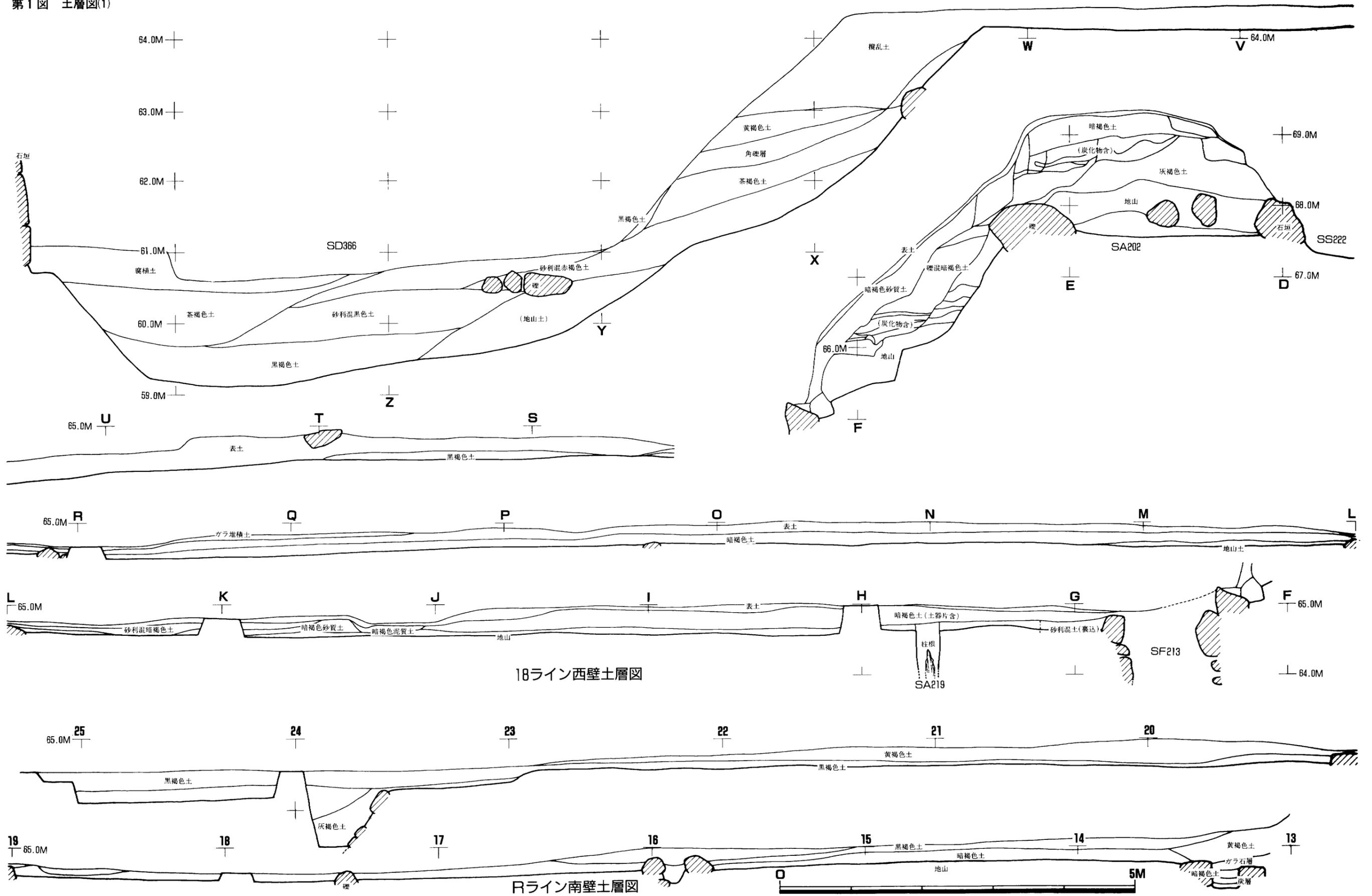
こうした妻妾の居住形態の具体的な様子については明らかでない点もあるが、義景は妻近衛氏の旧宅や小宰相の局の新宅、そして少将の諏訪館などに対してかなり大規模な造成を行なっていることが知られ、また少将が諏訪館に住しかつ朝倉館にも居室があったように自宅を持ちつつ当主にも近侍するというケースも考えられよう。

孝景（大岫）の妻光徳院は孝景の没後も義景の家中に対して強い影響力を持っていたことが知られるので、本宅の上殿の他に朝倉館の近傍の地に屋敷を持っていた蓋然性はきわめて高いものと思われる。したがって『越藩拾遺録』や山田秋甫が述べているように朝倉館の近くに光徳院の住居があったとする説もあながち伝説として片付けることは出来ないのである。

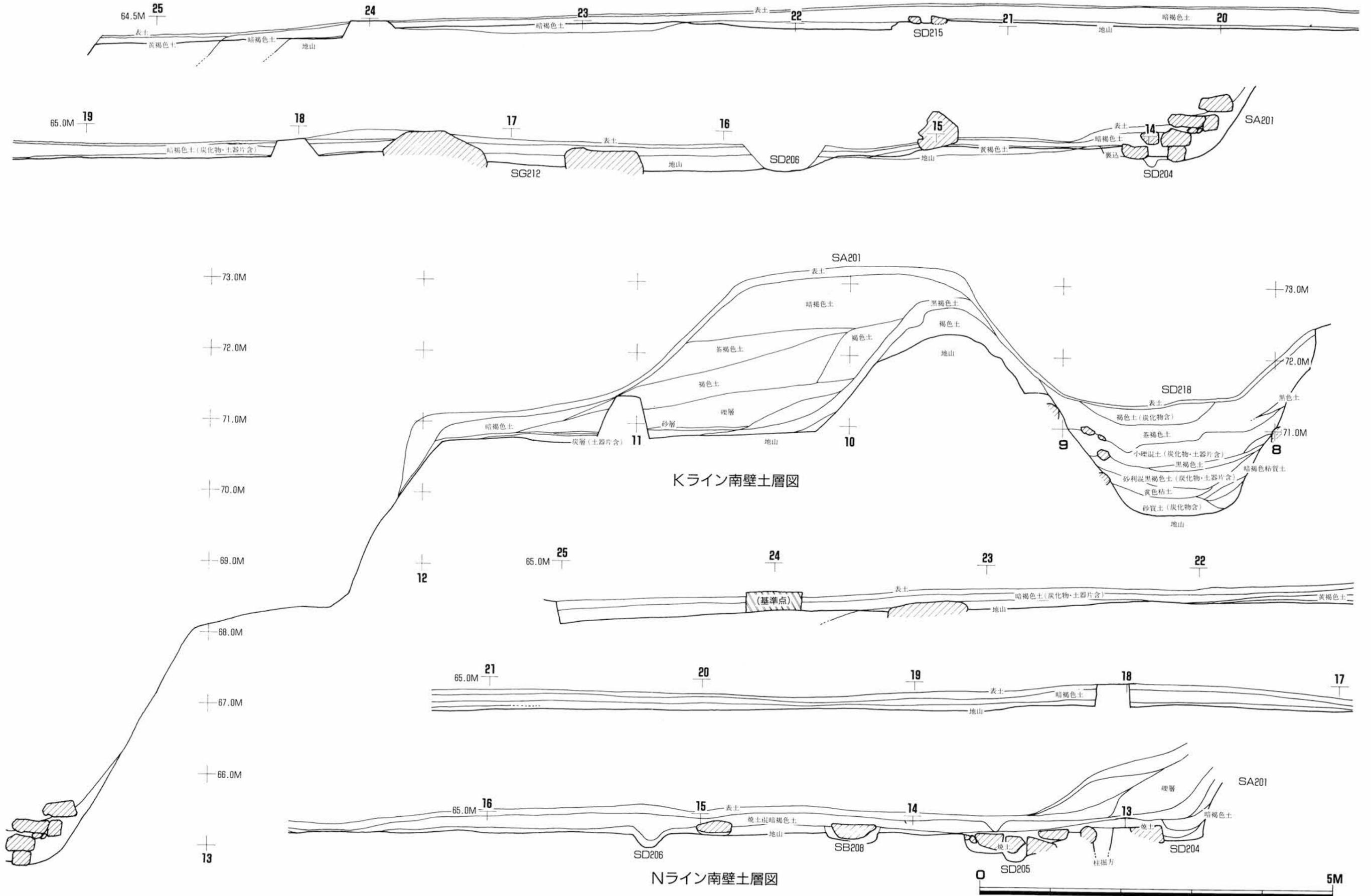
注

- (1) 山田秋甫『朝倉義景』169ページ, 1936年刊
- (2) 『大乘院寺社雑事記』長祿3年8月18日条
- (3) 『大乘院寺社雑事記』文明16年8月8日条, 『壬生本朝倉系図』, 『朝倉始末記』巻第1
- (4) 『月舟和尚語録』桂室永昌大姉断七諱忌座
- (5) 『宣胤卿記』永正15年4月8日条
- (6) 「劔神社文書」『福井県史資料編5中・近世三』755ページ
- (7) 『福井市史資料編2古代・中世』986ページ
- (8) 『親長卿記』文明15年9月17日条
- (9) 『宣胤卿記』永正15年4月14日条, 同5月2日条
- (10) 米原正義『戦国武士と文芸の研究』255ページ
- (11) 「南陽寺の歴史について」『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡平成元年度発掘調査整備事業概要21』
- (12) 天文元年10月晦日孝景が在俗していたことが知られ, 同2年8月14日には入道していたことが知られる。「越知神社文書」天文元年10月晦日付孝景書状『福井県史資料編5中・近世三』289ページ。同2年8月14日付「朝倉弾正左衛門入道」宛御内書『後鑑』所収御内書引付。
- (13) 『後鑑』天文6年9月30日条, 『言継卿記』天文17年2月28日条
- (14) 「片岡五郎兵衛家文書」元亀3年12月24日付朝倉氏奉行人連署奉書『福井県史資料編3中・近世三』484ページ。また『朝倉始末記』巻第五によれば, 足利義昭は永祿11年3月8日に彼女を「二位ノ尼」に叙したという。
- (15) 「宗養発句付句」『福井市史資料編2古代・中世』629ページ。
- (16) 同上653ページ。
- (17) 米原氏前掲書308ページ。松原信之「大徳寺塔頭庵領と朝倉景隆」『福井県史研究』第2号, 1985年。
- (18) 「朝倉始末記」『福井市史資料編2古代・中世』896ページ。「越州軍記」『蓮如一向一揆』379ページ。
- (19) 久保日参「朝倉義景第二夫人近衛氏に就て」『若越郷土研究』19ノ4, 1974年
- (20) 佐藤圭「越前国足羽郡の中世荘園について」『福井県立博物館紀要』第3号, 1989年
- (21) 『越前国古城跡并館屋敷蹟』
- (22) 『朝倉盛衰記』下, 朝倉家士座列并素姓之事, 六十六, 「朝倉始末記」巻第四, 義景於三里浜見犬追物, 附糸崎観音御参詣事, 『福井市史資料編2古代・中世』872ページ。
- (23) 報告I, 41~42ページ。
- (24) 『日葡辞書』Vocata, 1603年
- (25) これまで『越州軍記』や『朝倉始末記』の諸本は彼女の名を「小将」「小少将」「少将」などと記してその表記が一定しなかった。
- (26) 『朝倉始末記』の叙述には資料の不足を修辭の技巧で補ったところが多く, その史料的な利用については十分な注意を要する。
- (27) 吉岡泰英「朝倉館の建築的考察」『朝倉氏遺跡資料館紀要1983』

第1図 土層図(1)



第2図 土層図(2)

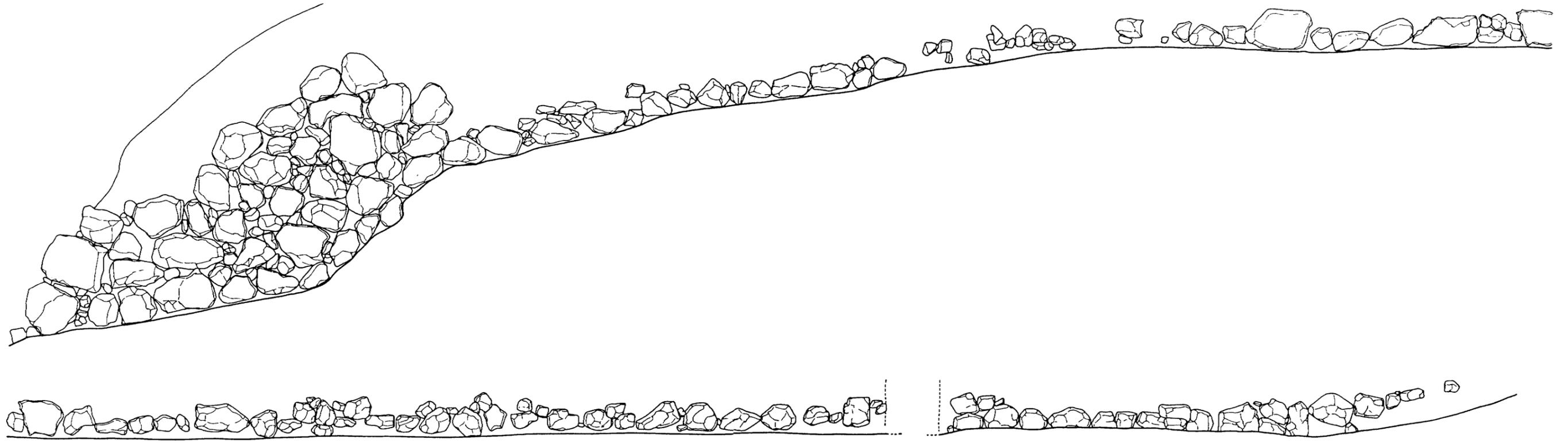


第3図 石垣立面図(1)

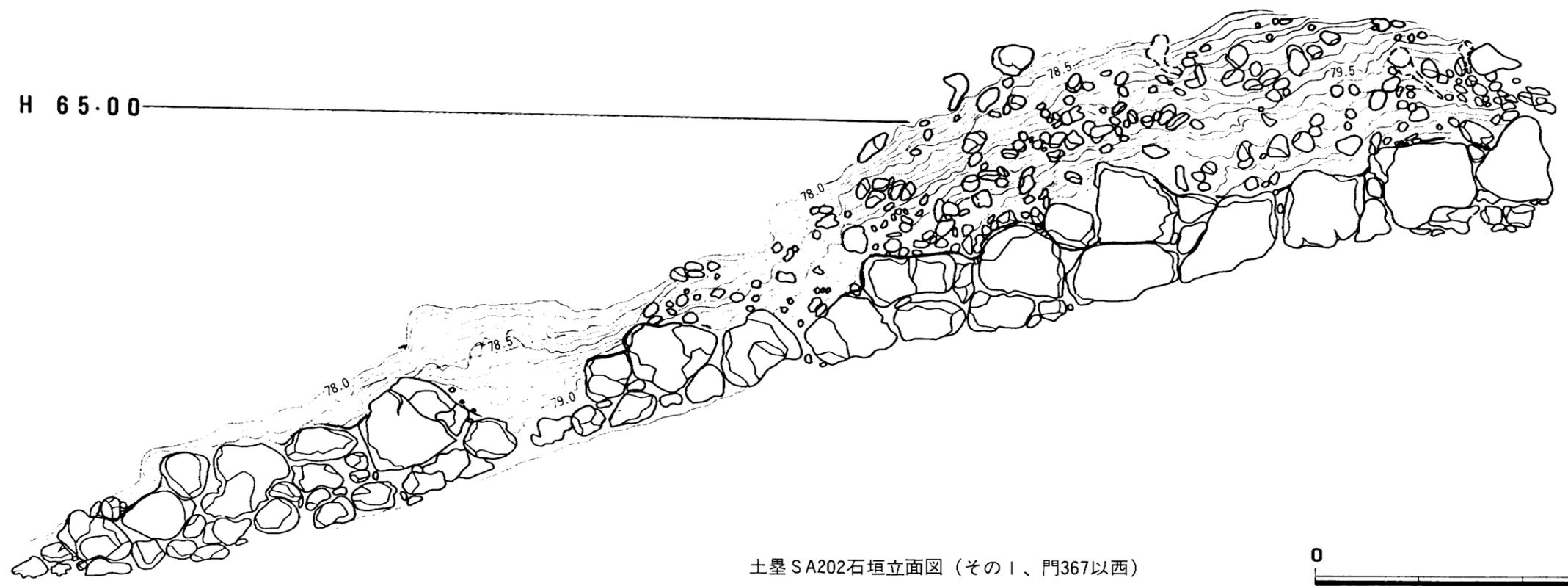


土塁 SA201 石垣立面図 (その1、北端面)

第4図 石垣立面図(2)



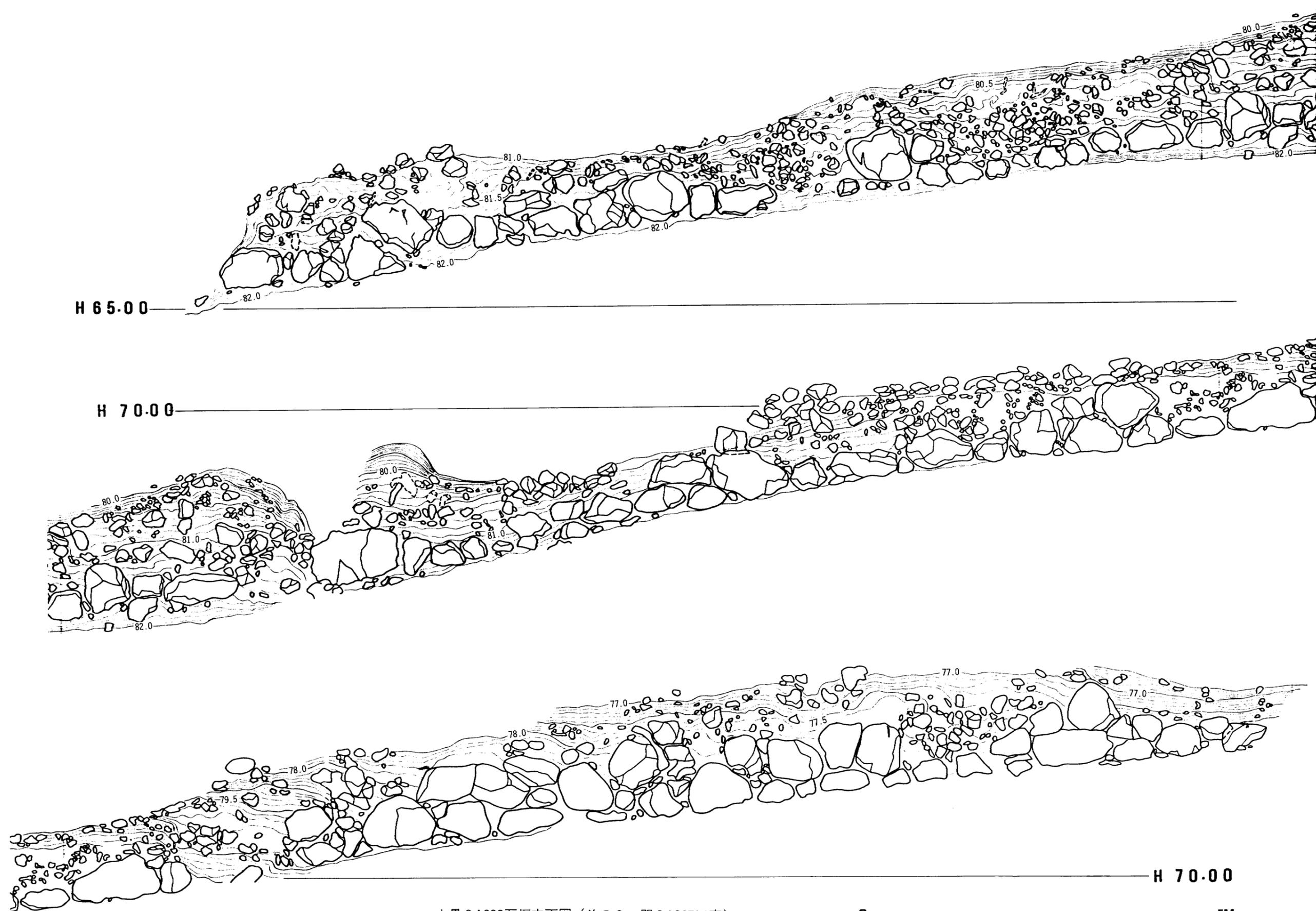
土塁 SA201 石垣立面図 (その2、西面)



土塁 SA202 石垣立面図 (その1、門367以西)



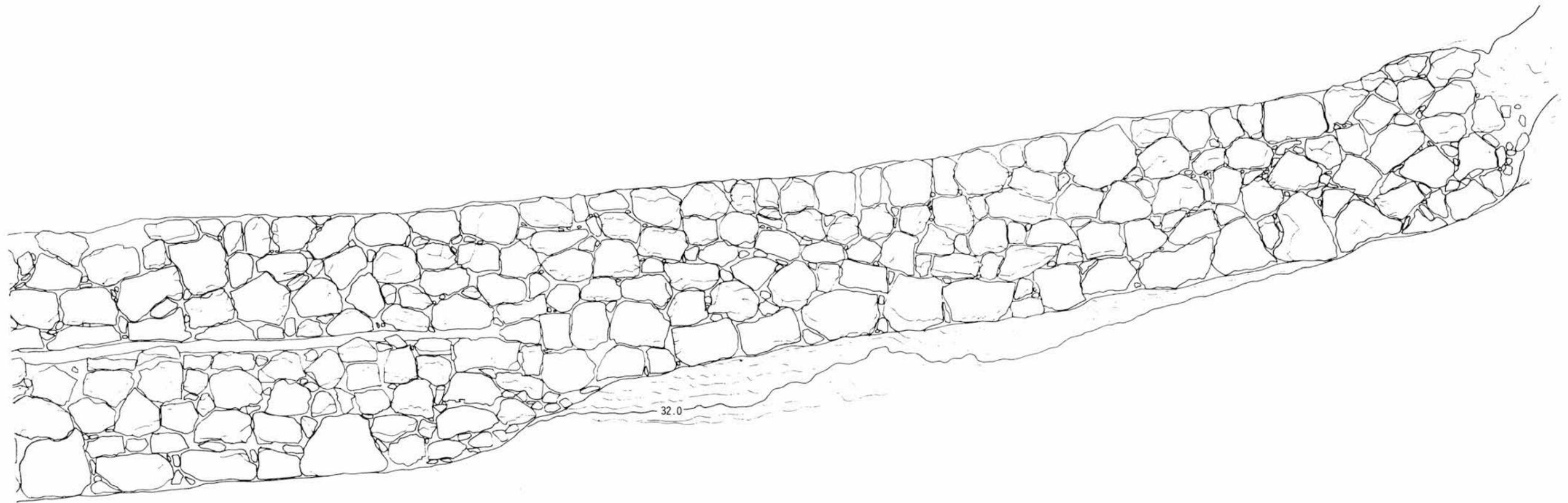
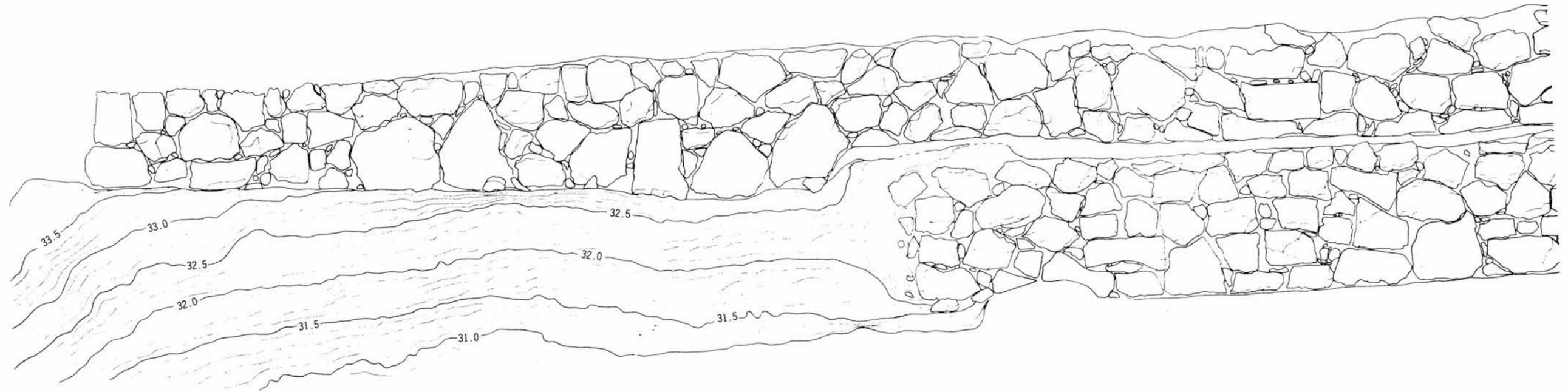
第5図 石垣立面図(3)



土塁 SA202石垣立面図 (その2、門S1367以東)



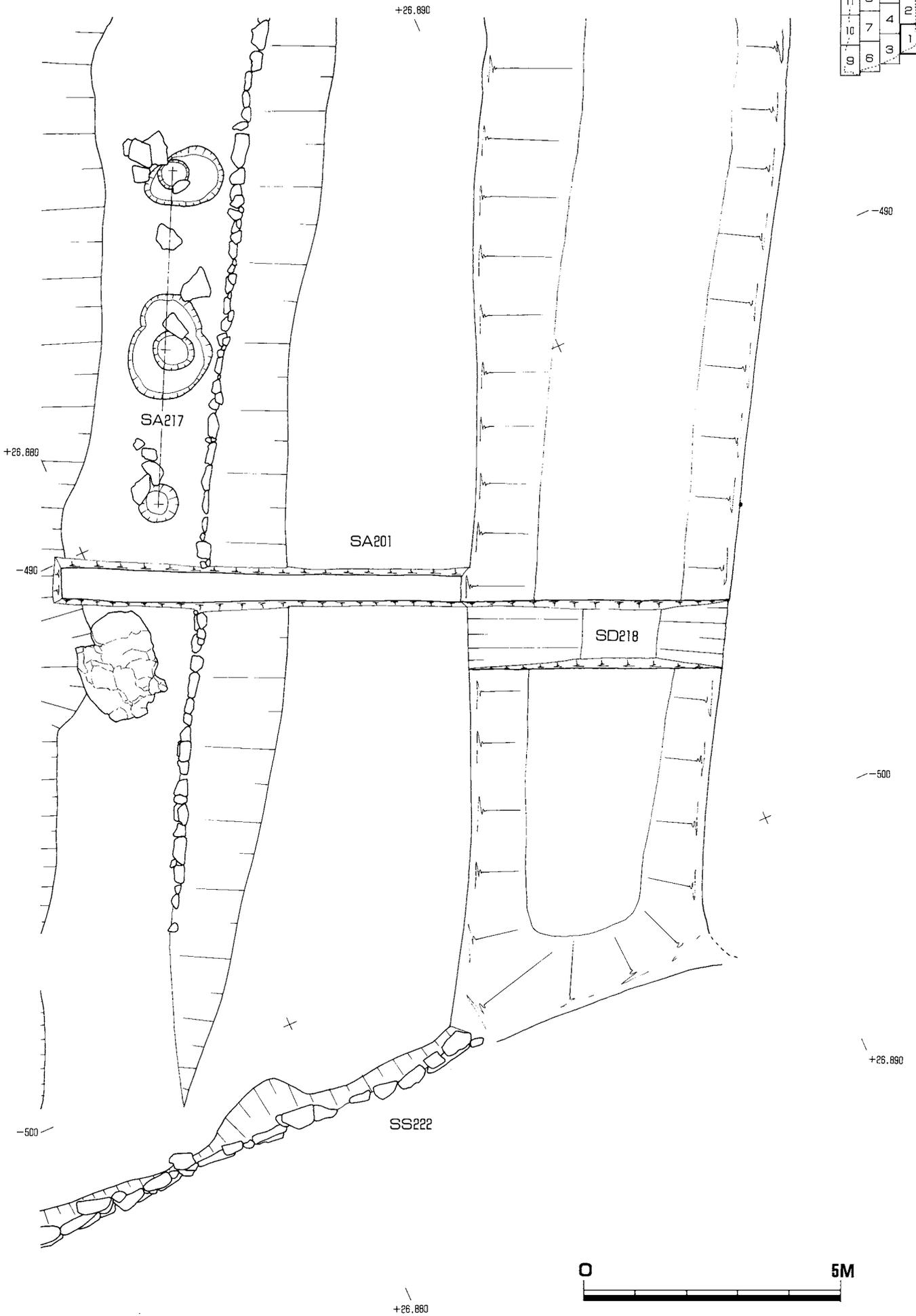
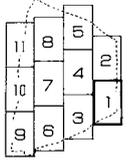
第6图 石垣立面图(4)



空濠 SD366石垣立面图 (北面)

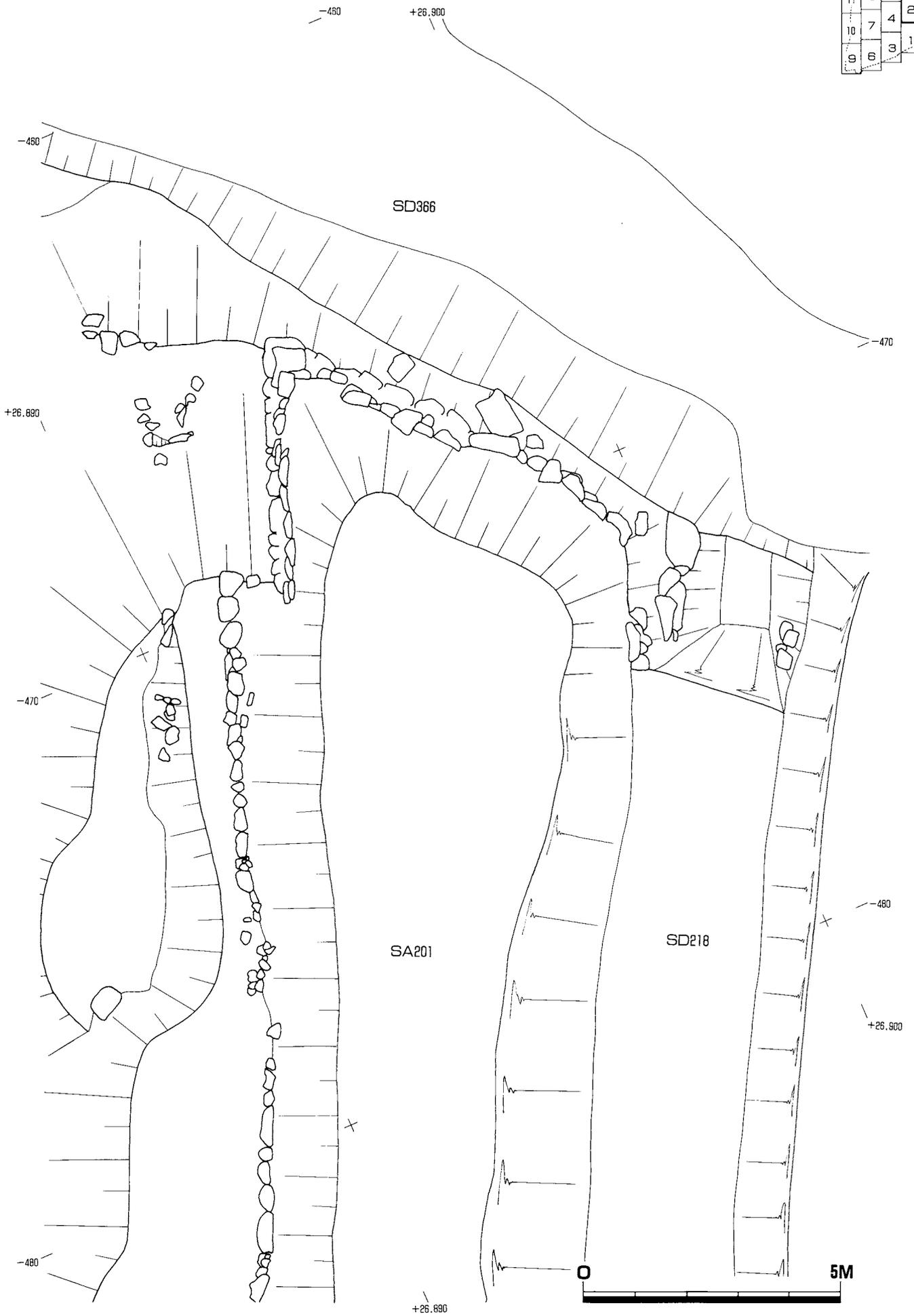


第7図 遺構平面詳細図(1)

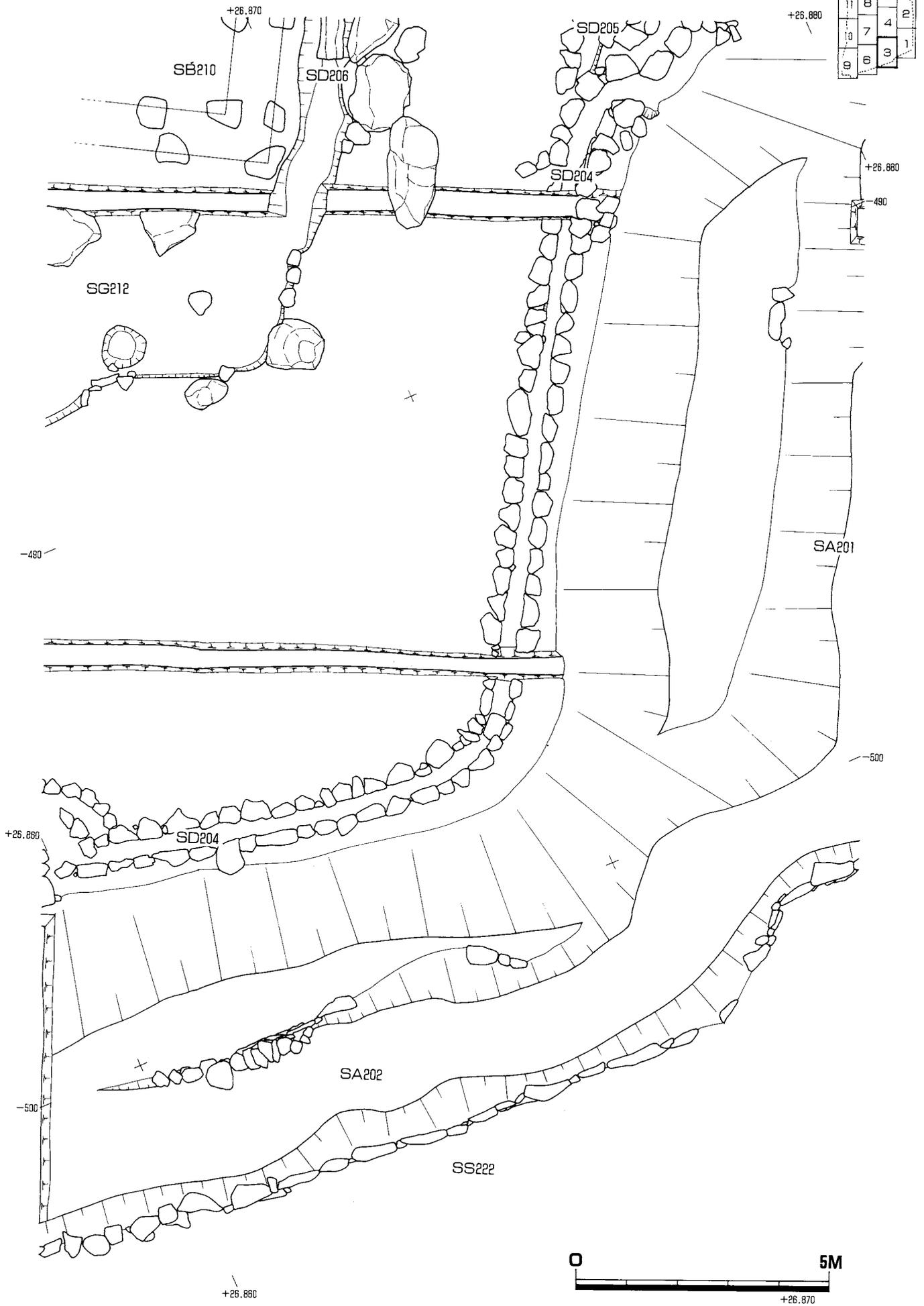


第 8 図 遺構平面詳細図(2)

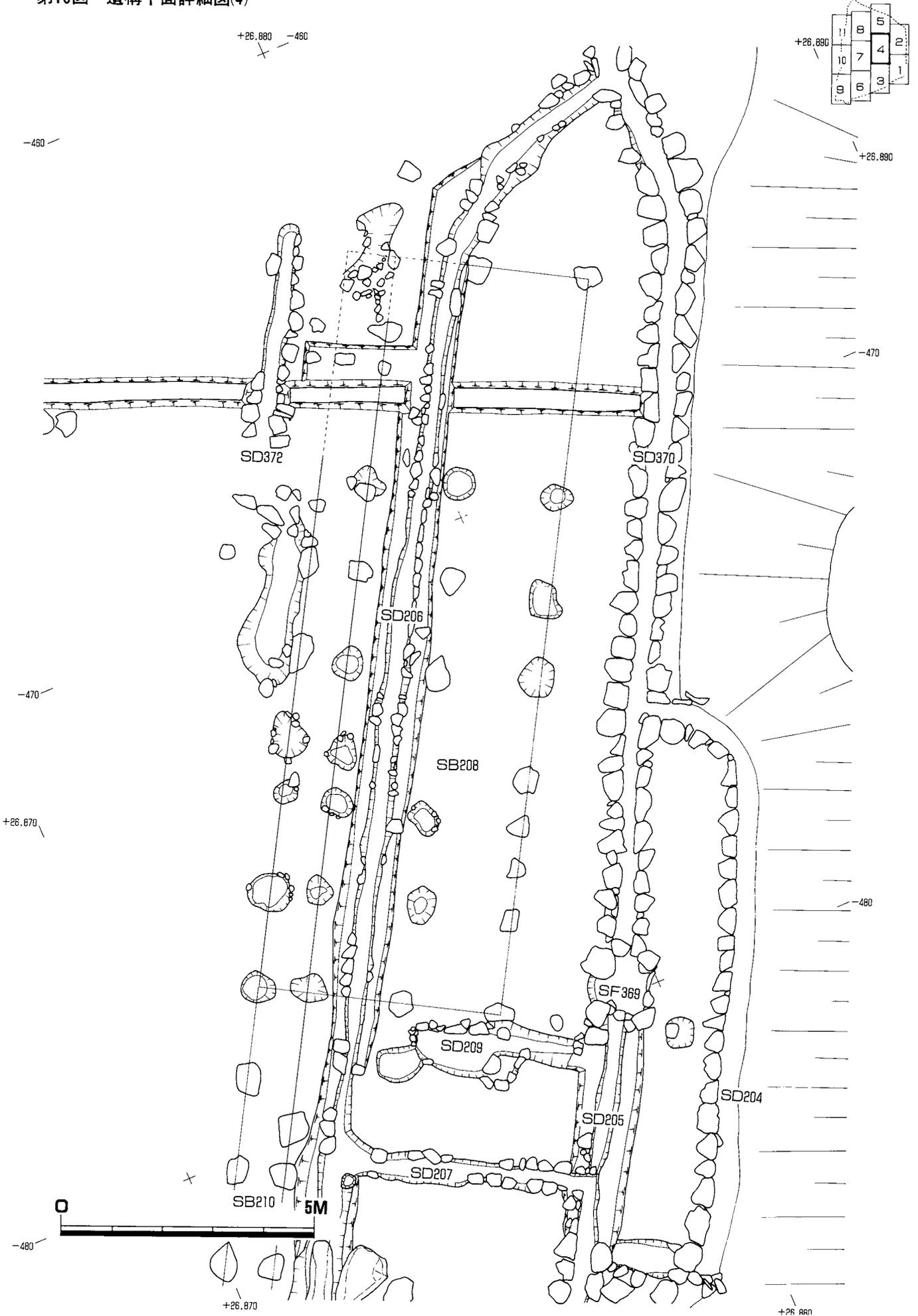
11	8	5
10	7	4
9	6	3
		2
		1



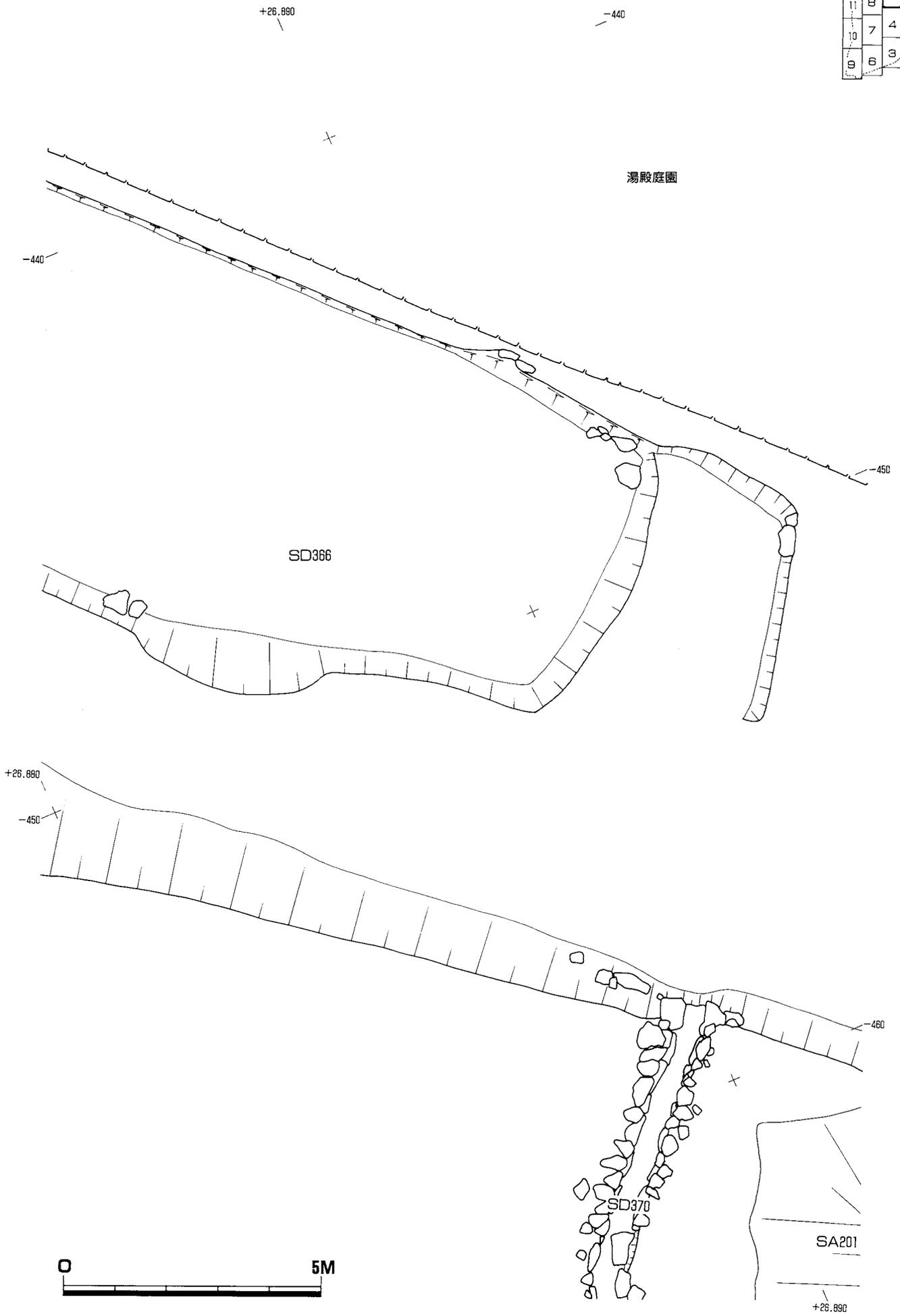
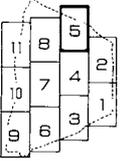
第9図 遺構平面詳細図(3)



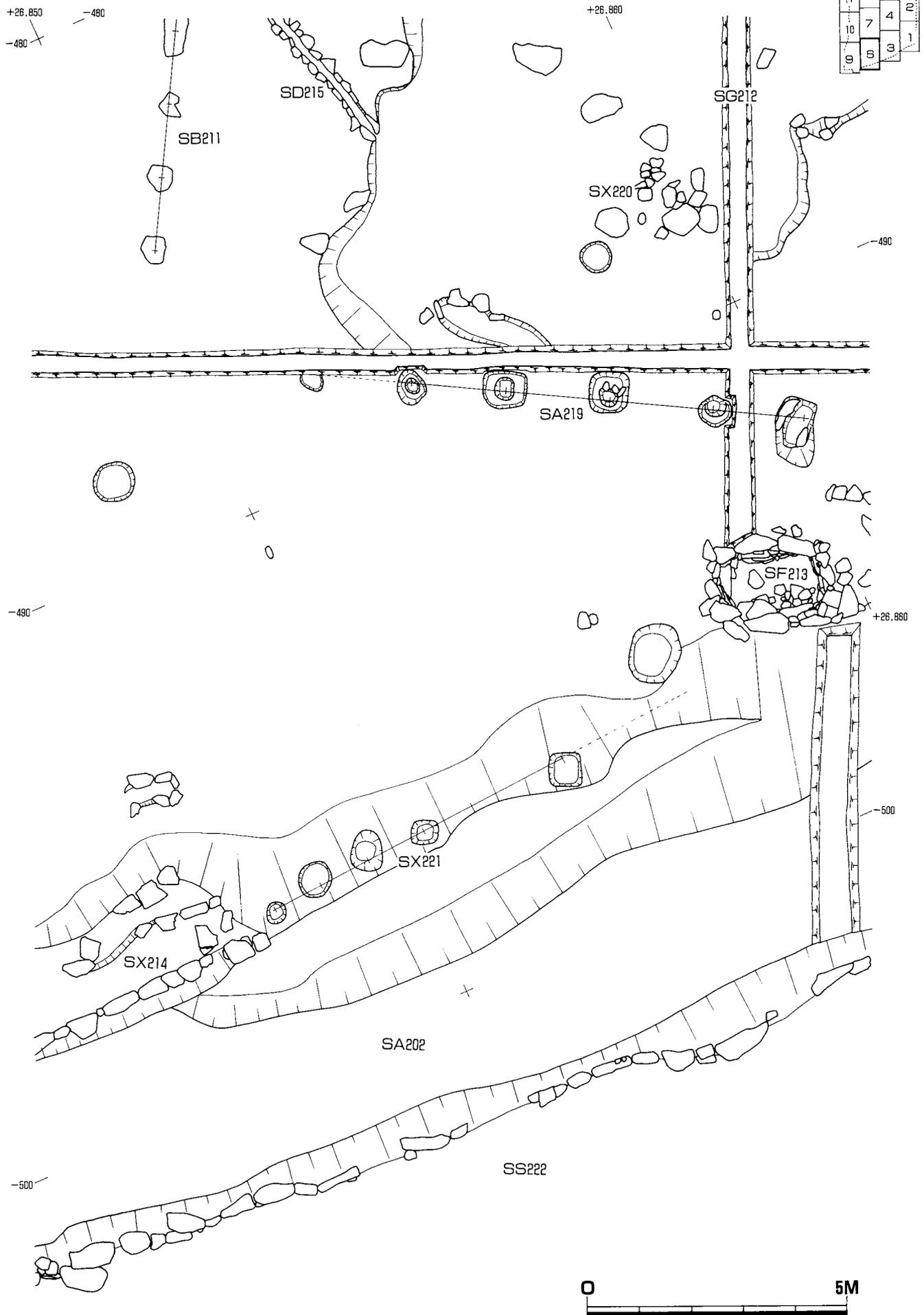
第10図 遺構平面詳細図(4)



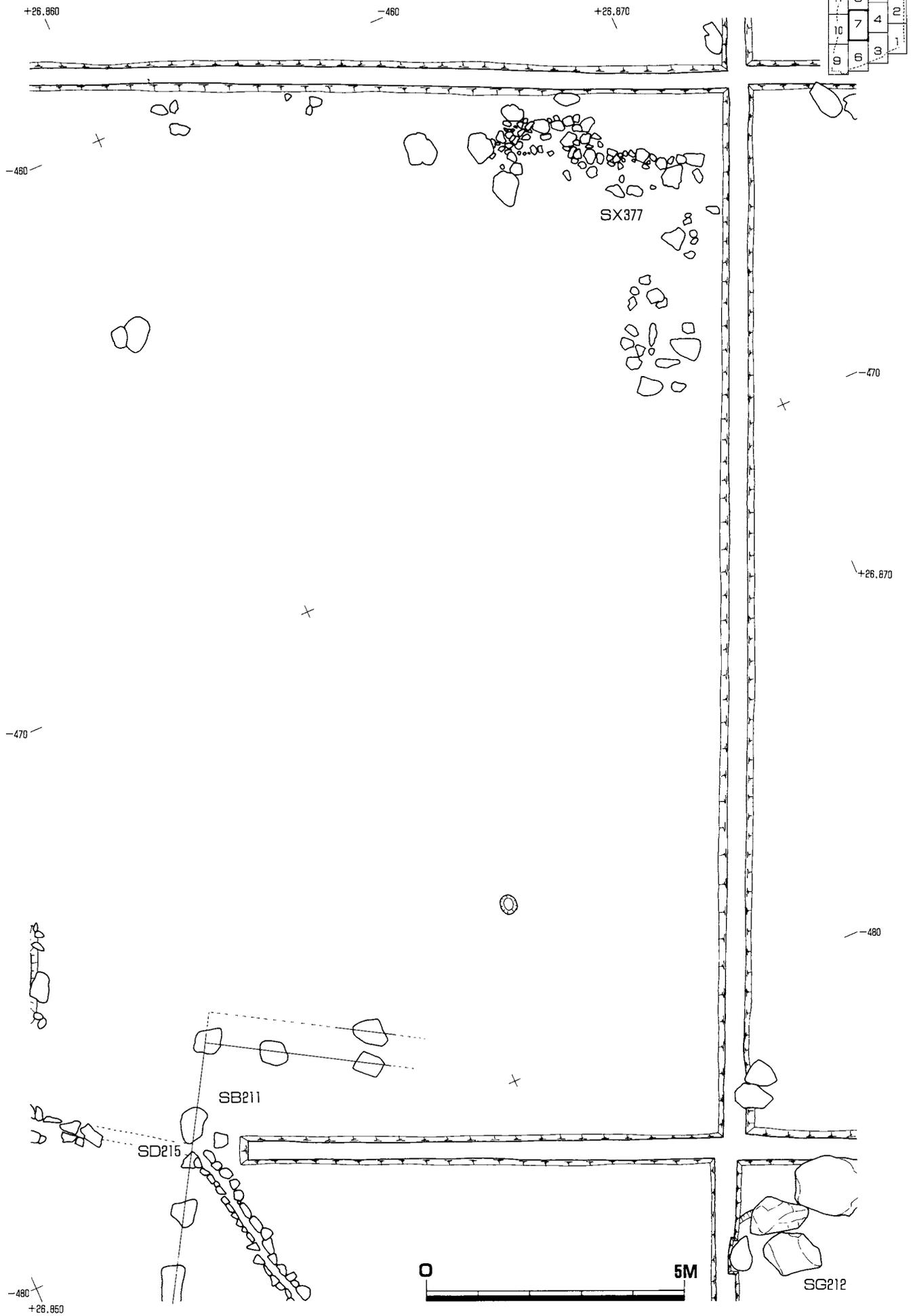
第11図 遺構平面詳細図(5)



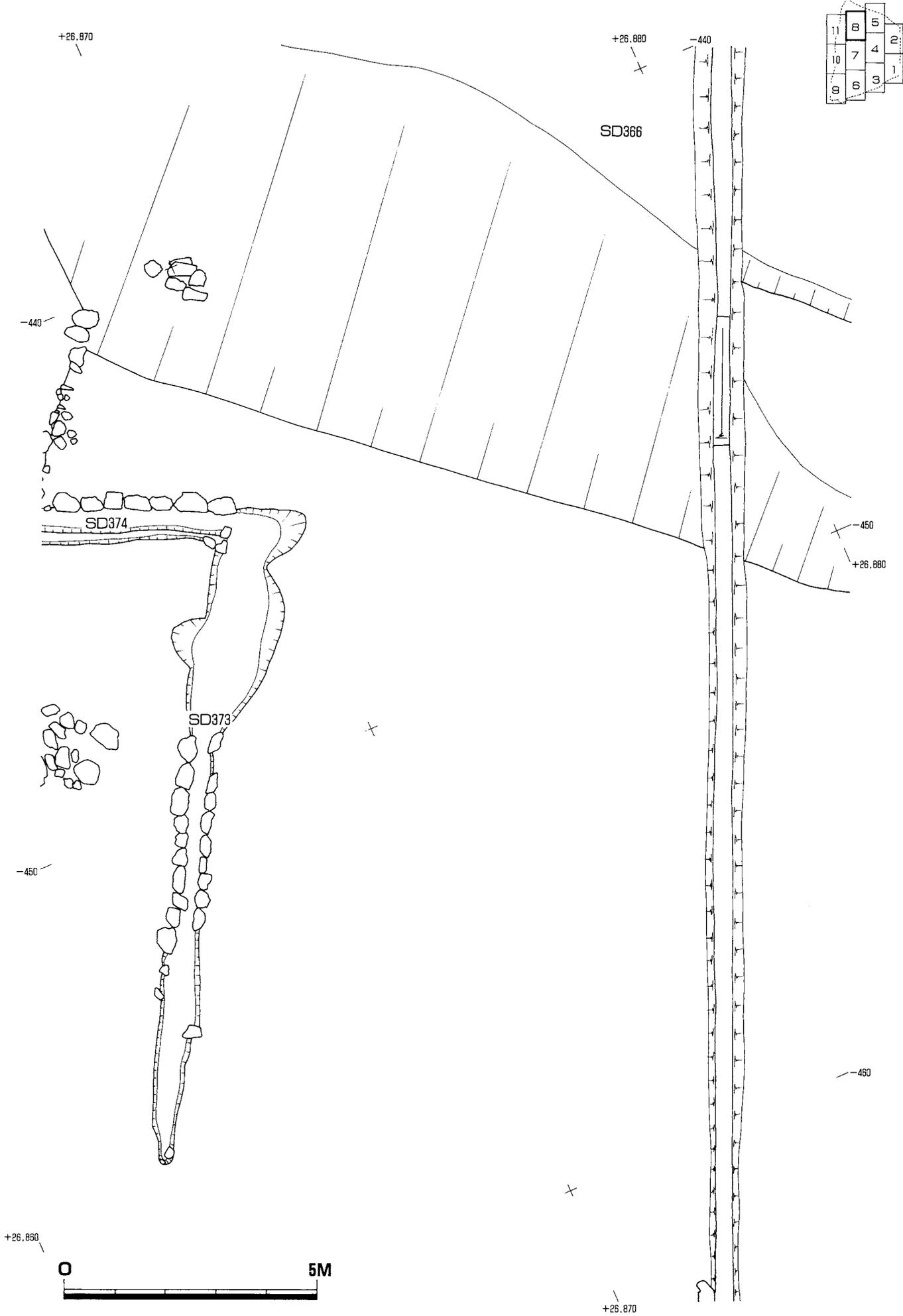
第12図 遺構平面詳細図(6)



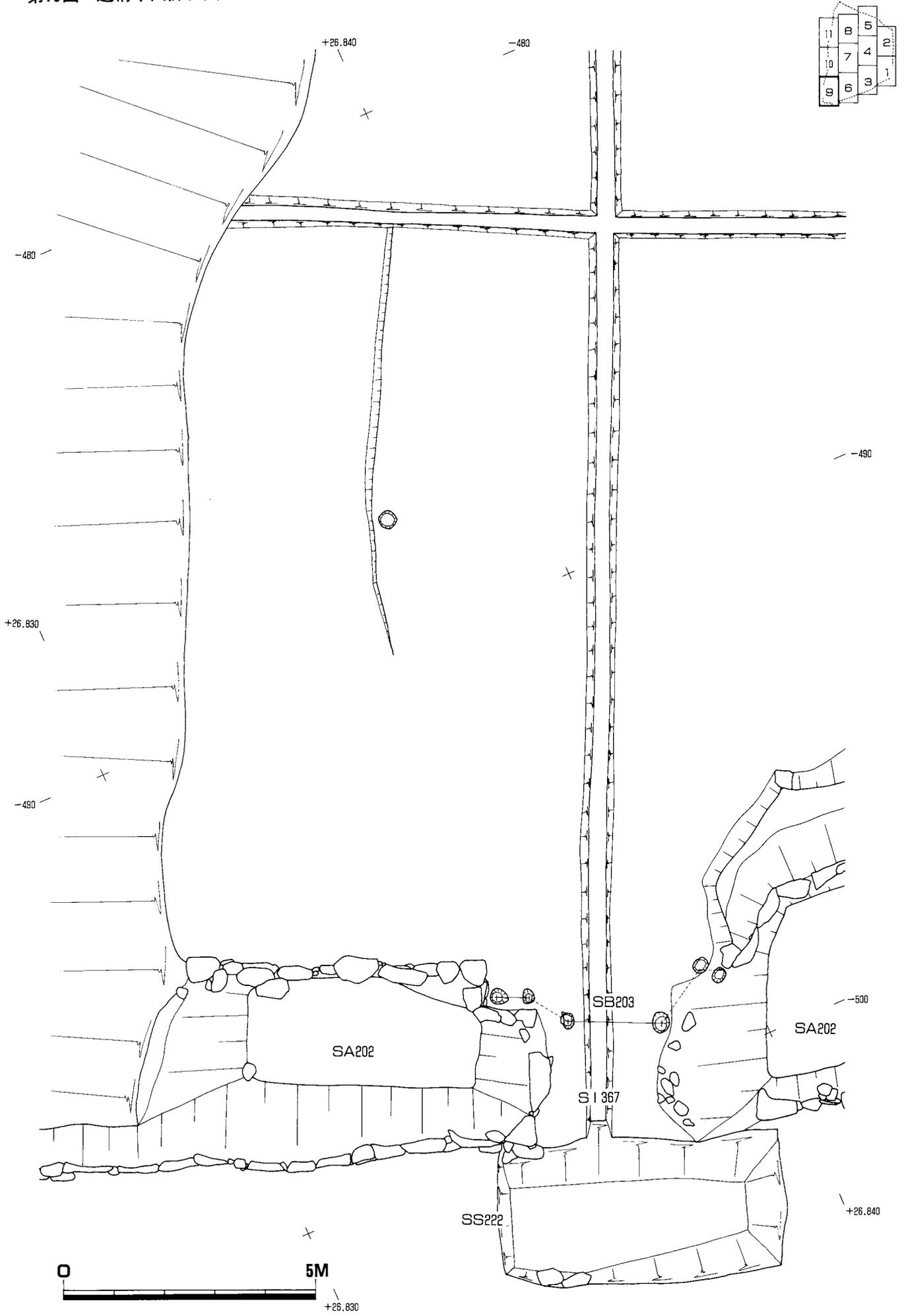
第13図 遺構平面詳細図(7)



第14図 遺構平面詳細図(8)

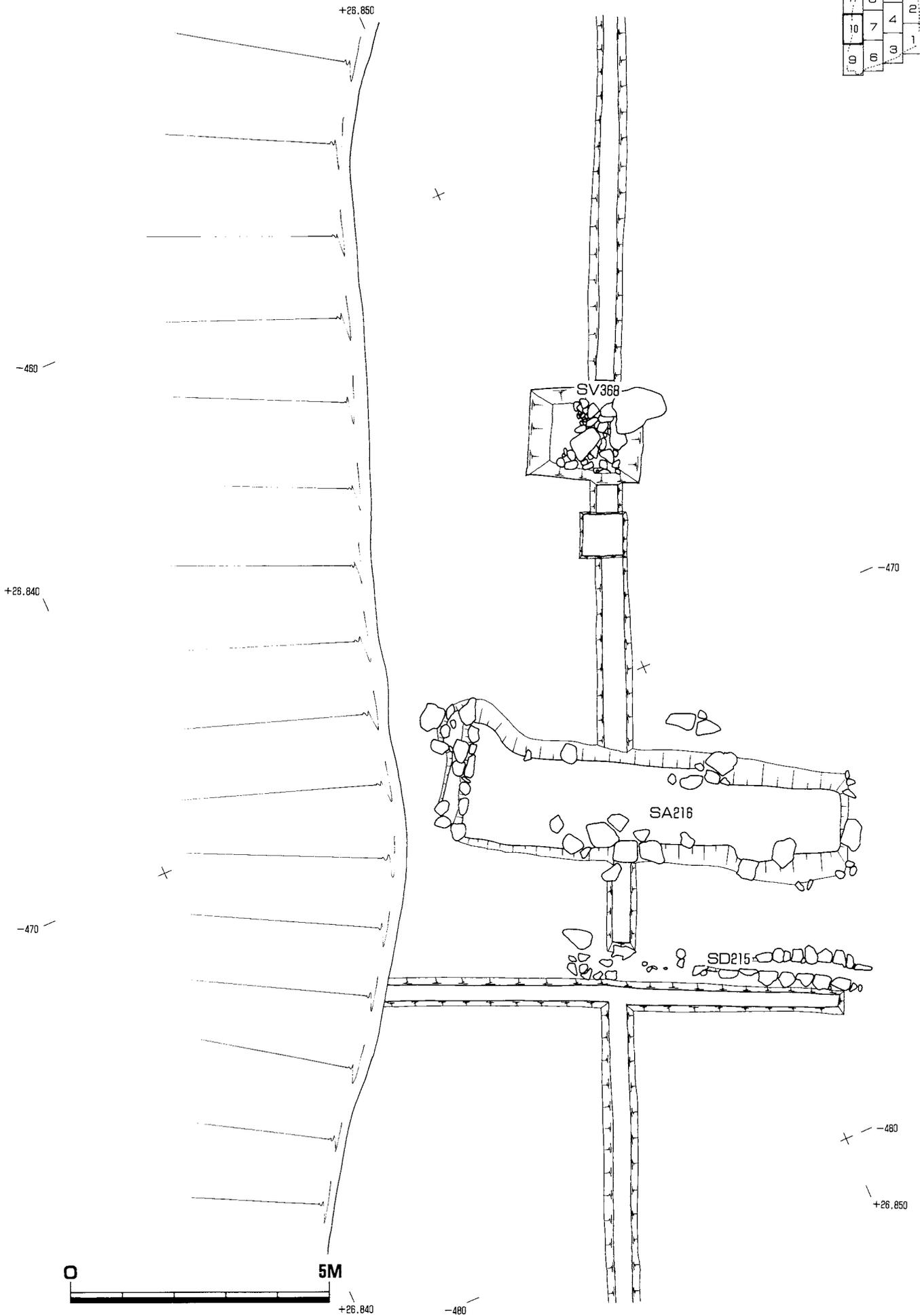


第15図 遺構平面詳細図(9)

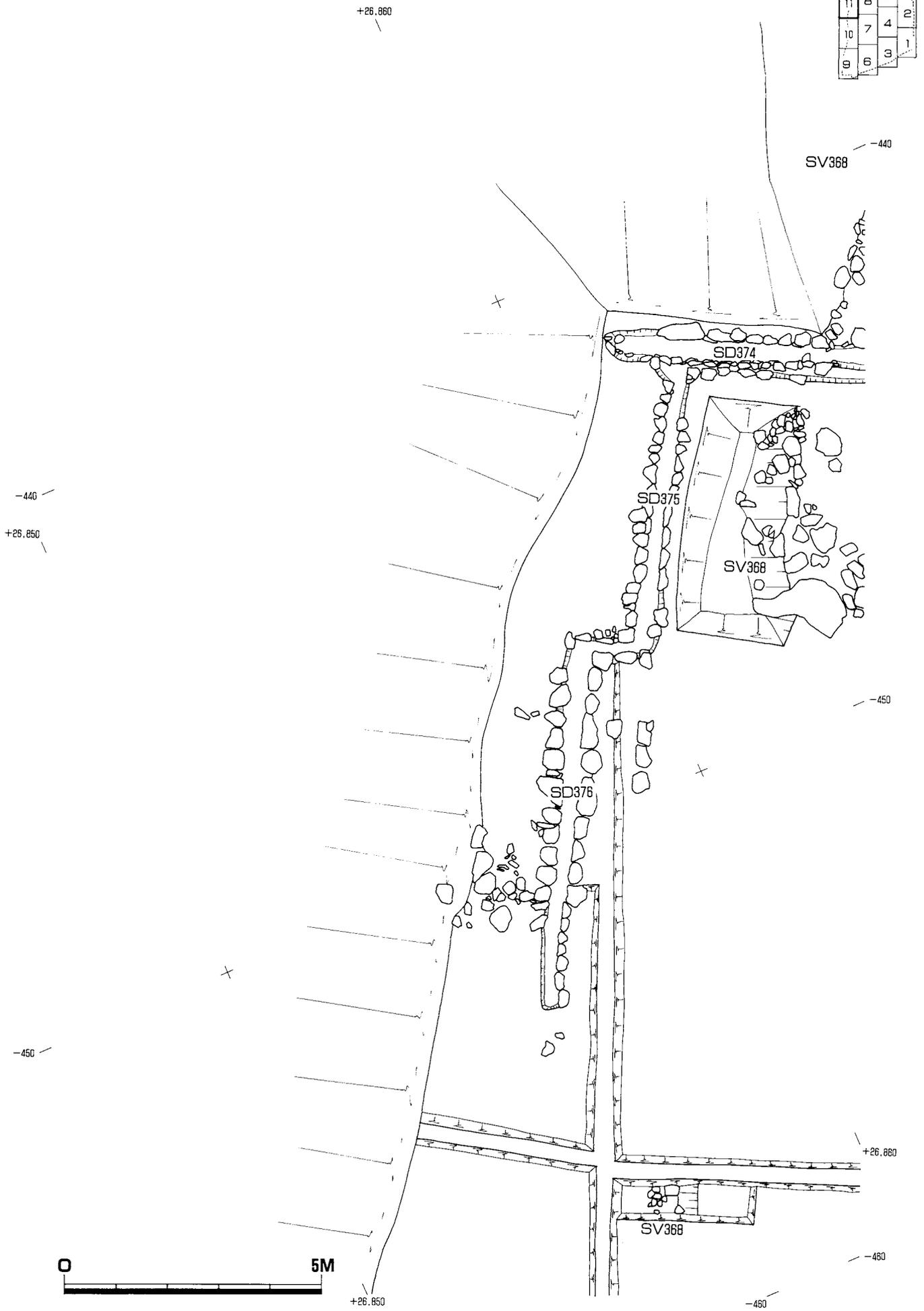


第16図 遺構平面詳細図(10)

11	8	5
10	7	4
9	6	3
		2
		1



第17図 遺構平面詳細図(1)



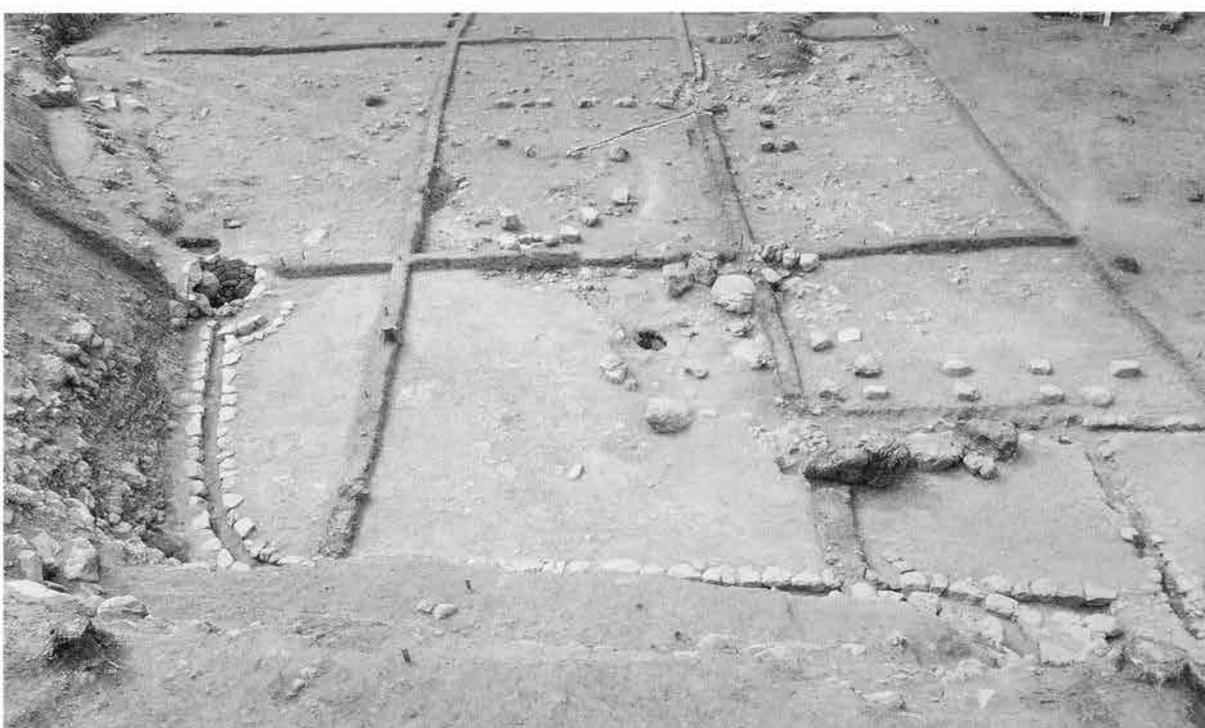
調査区全景



第4次調査区
(北から)



第13次調査区
(南から)



第4次調査区
主要部
(東から)

土塁 SA201



全景
(北西から)



北半部
(西から)



南半部
(西から)

土塁 SA202



南面石垣
東半部
(南西から)



同上
西半部
(南東から)

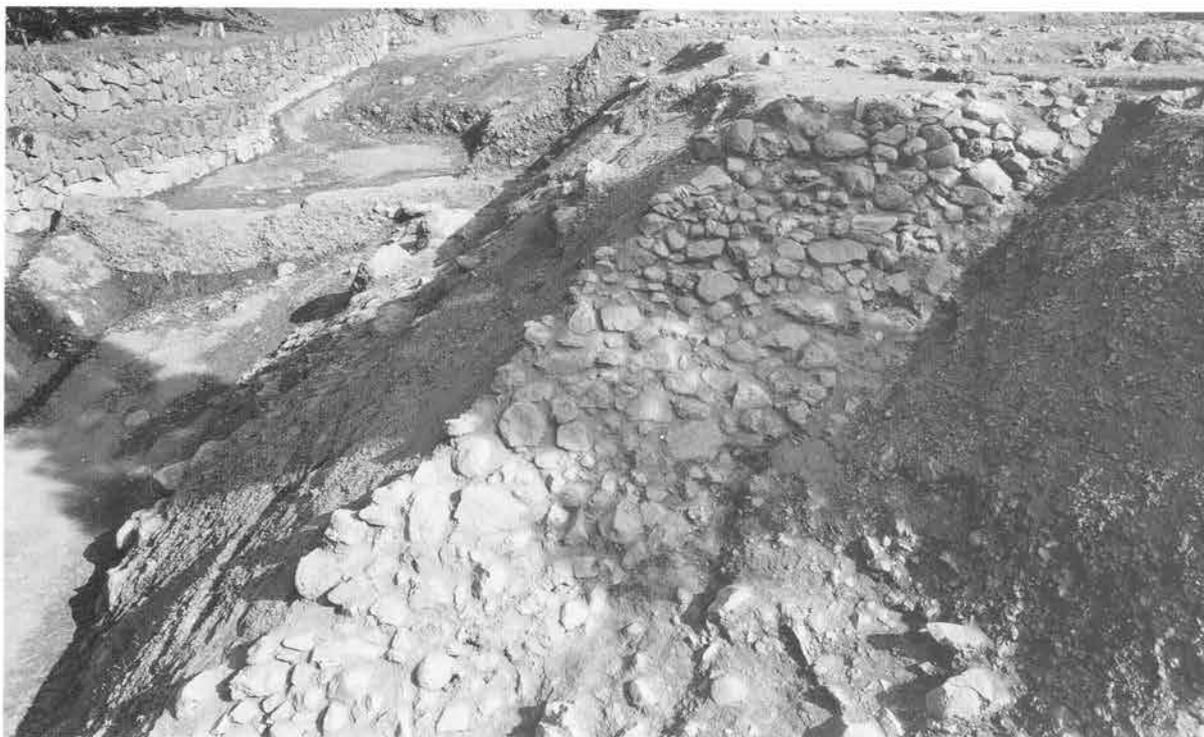


全景
(北から)

石垣



土塁 SA201
北端面
(北から)



石垣 SV368
(西から)



濠 SD366
北面石垣
(南から)

門S 1367・
築地SA216



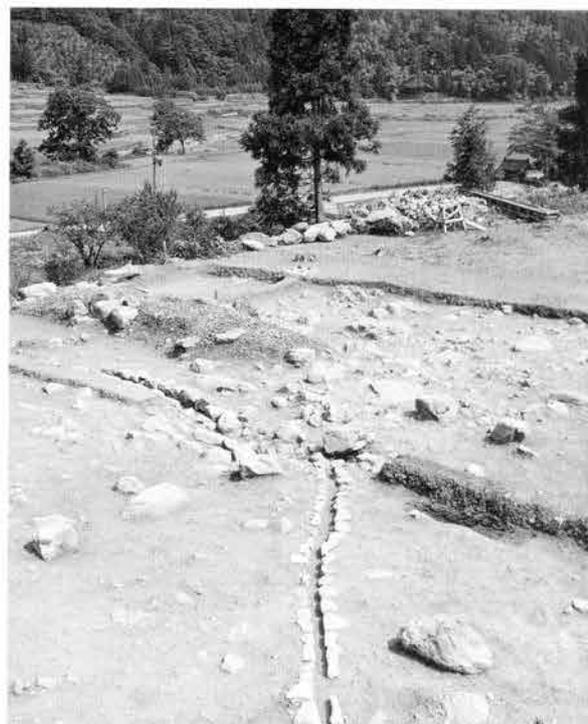
門S 1367・
SB203
(北から)



SA216
(南から)



◀ SA216
(東から)
▶ SA216
及SD215
(東南から)



庭園 SG212



(東北から)



(西南から)

建 物



SB210
(南から)



同上
(東から)



◀ 同上
(北から)
▶ SB211
(北から)



建物・溝(1)



SB208
(南から)



溝 (2)



SD206・370
・372
(北から)



◀ SD204・205
(北から)
▶ SD370
及SF369
(南から)



溝 (3)



◀ SD204
及 SF213
(西から)
▶ SD215
(西から)



SD204~207
(東から)

土 壘
S A201関連遺構



SA201下段
上部平坦部
(南から)



◀登り口
(西から)
▶SA217
(北から)



諸遺構



S X214
(北から)

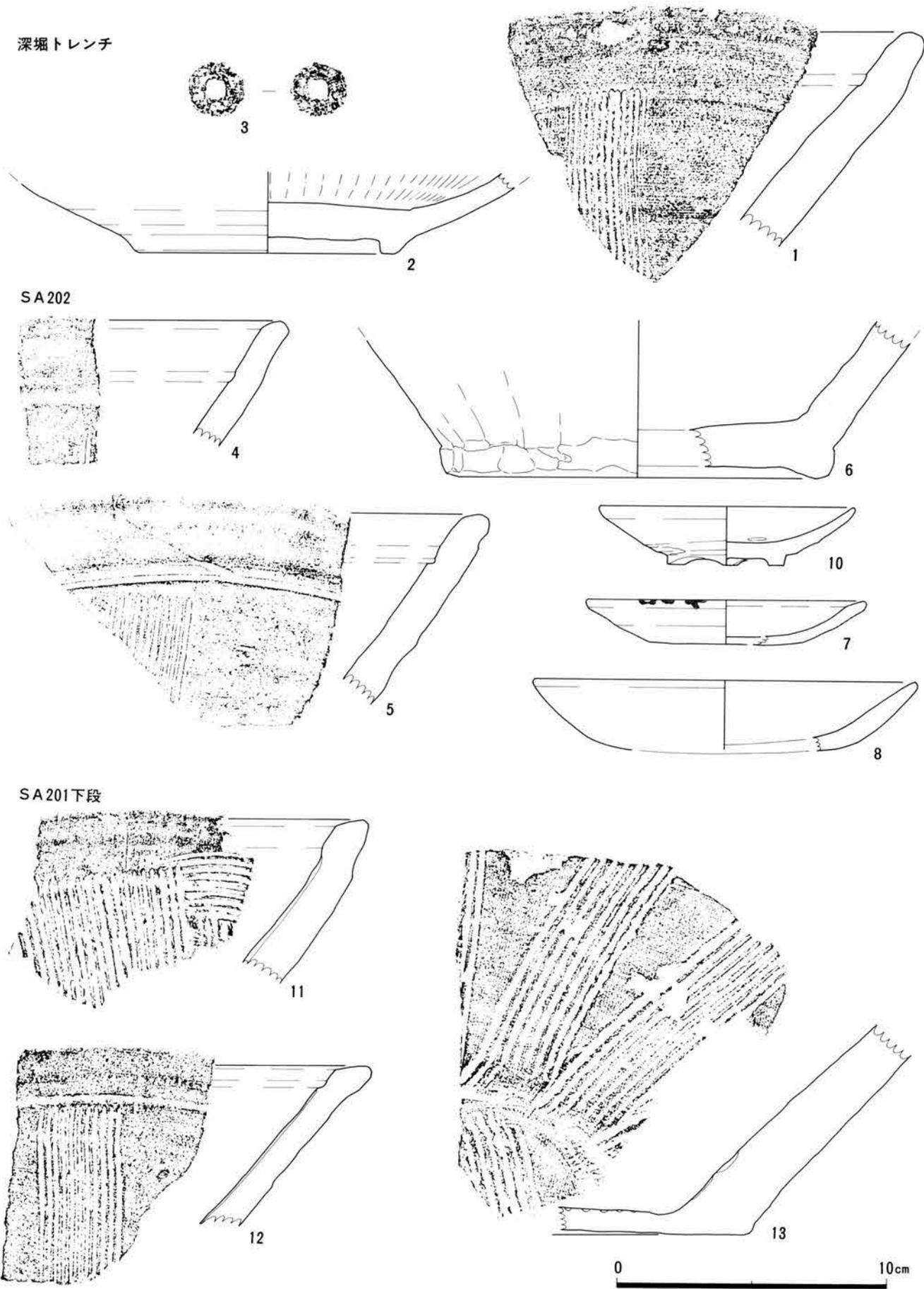


S X221
(北から)

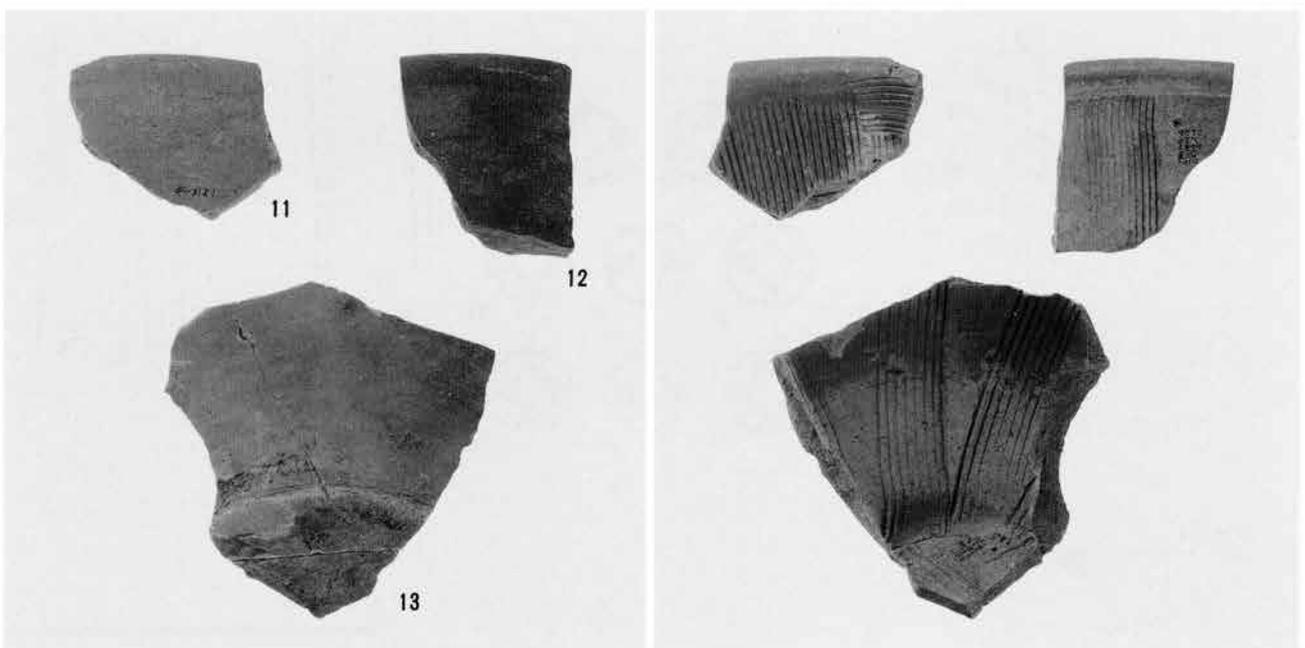
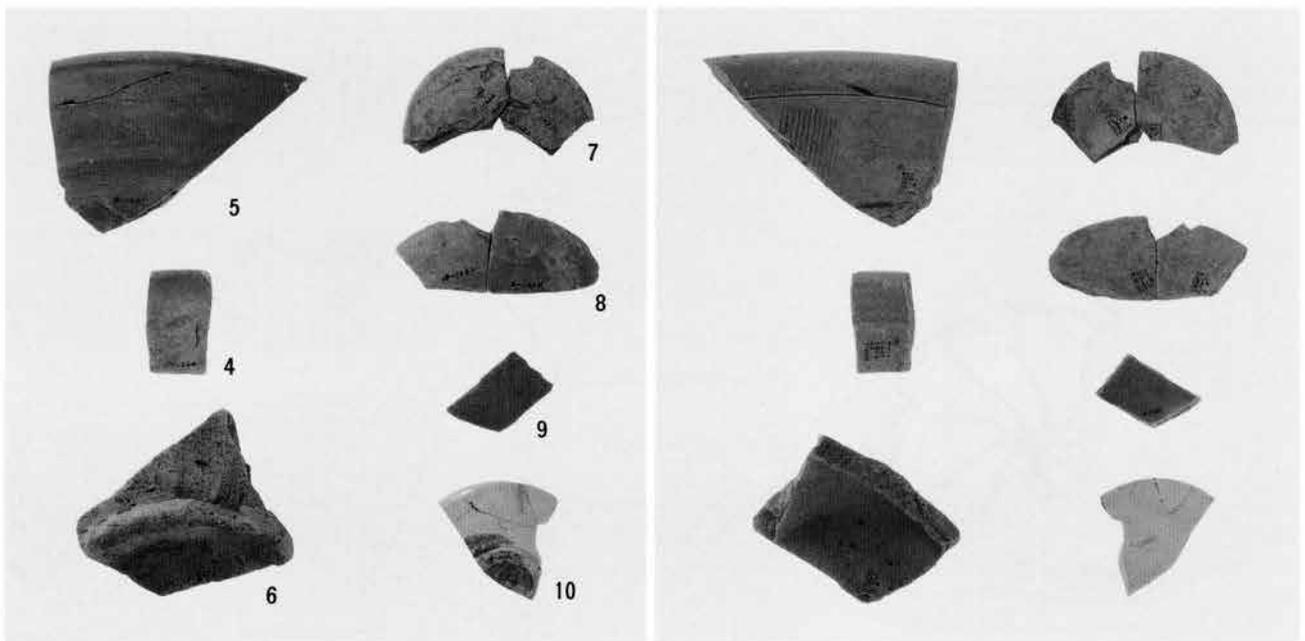
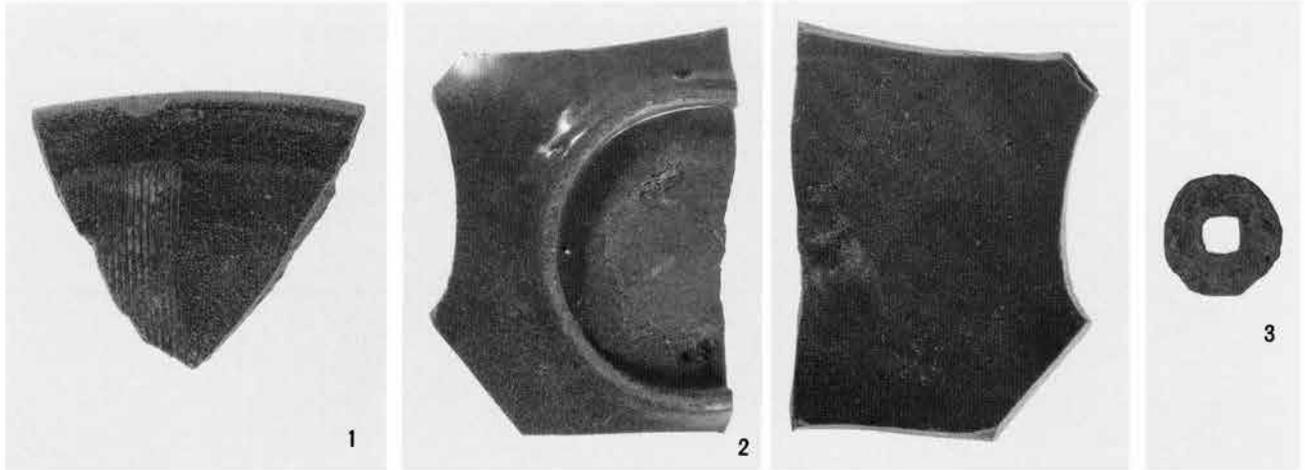


SF213
(北から)

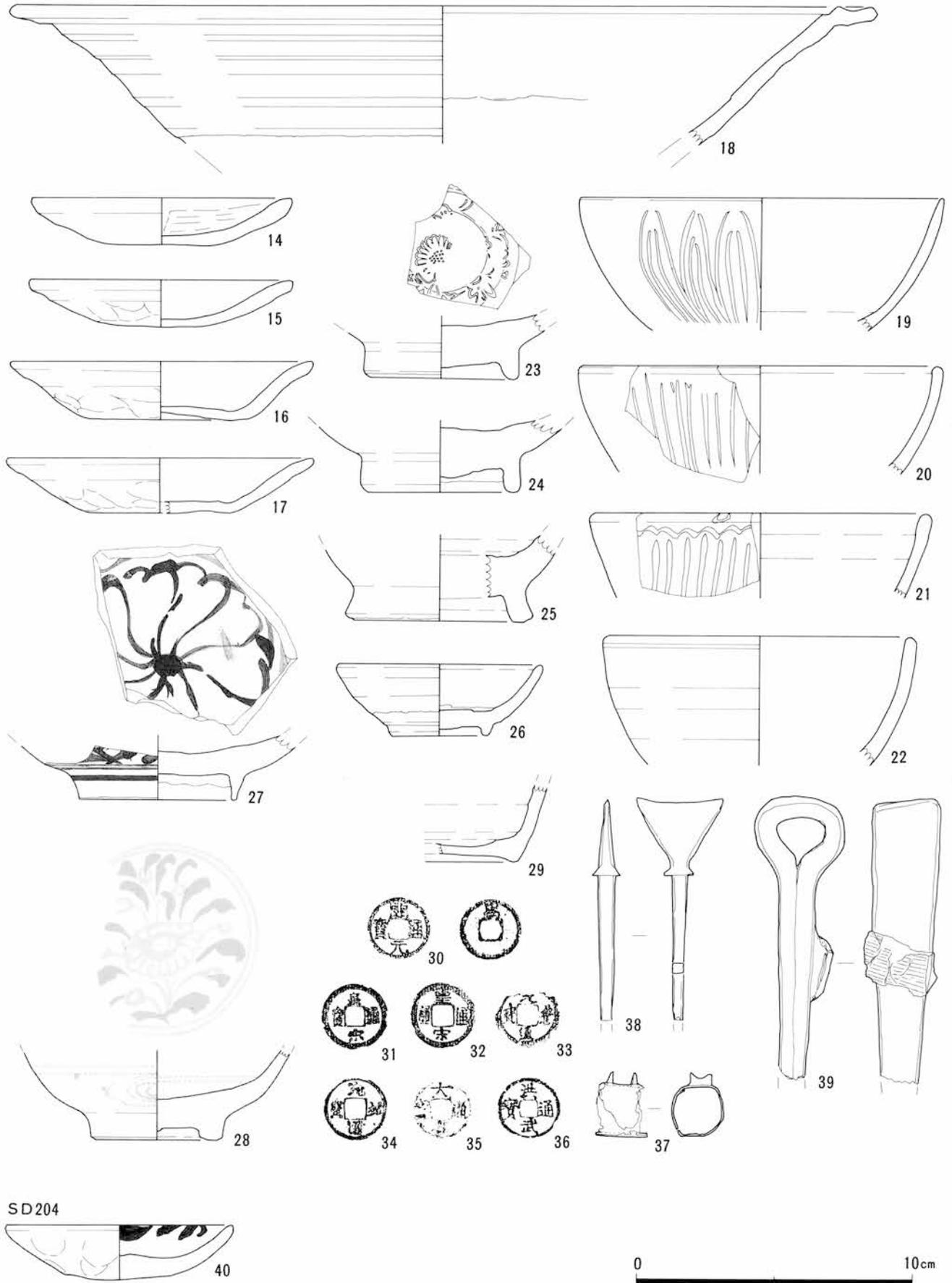
第18図 第4・13次調査遺物(1)



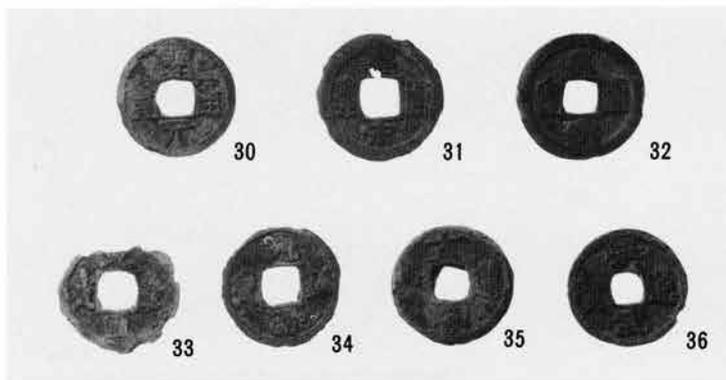
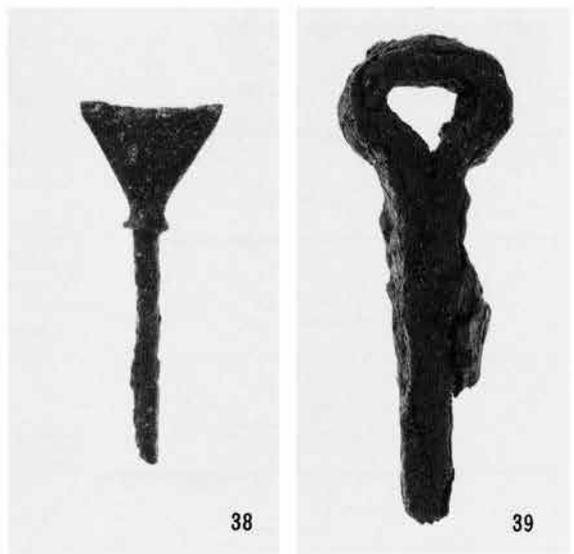
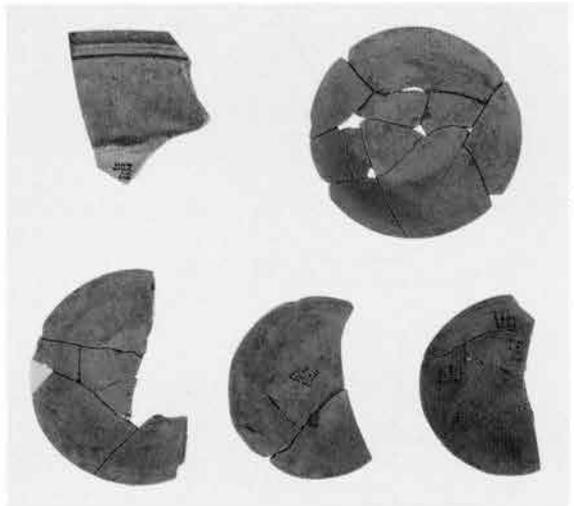
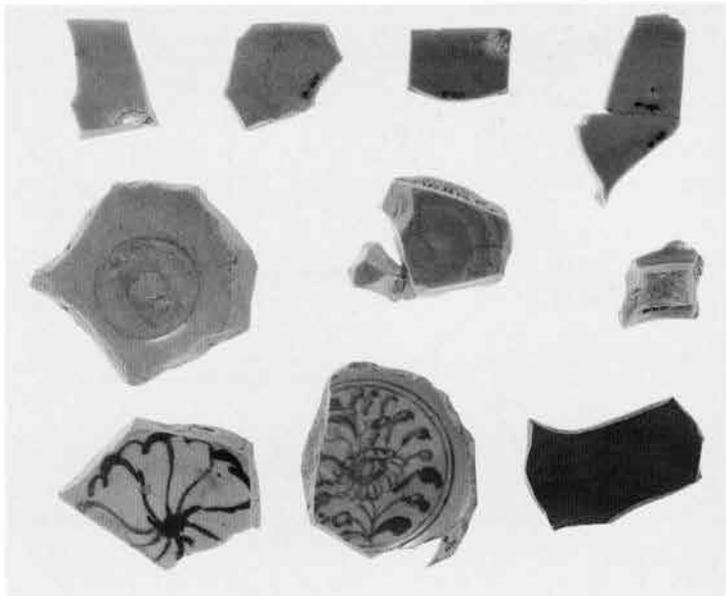
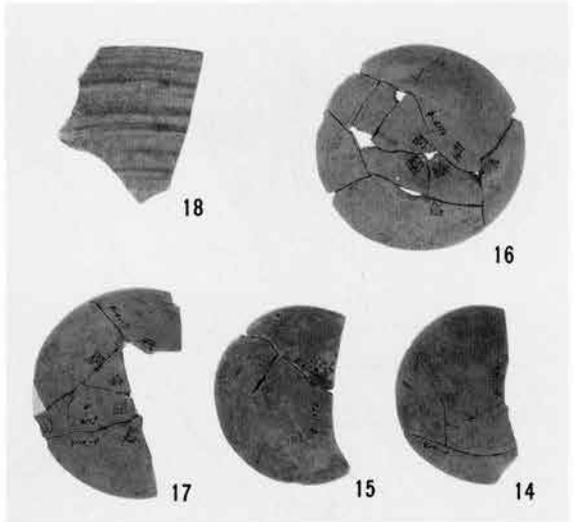
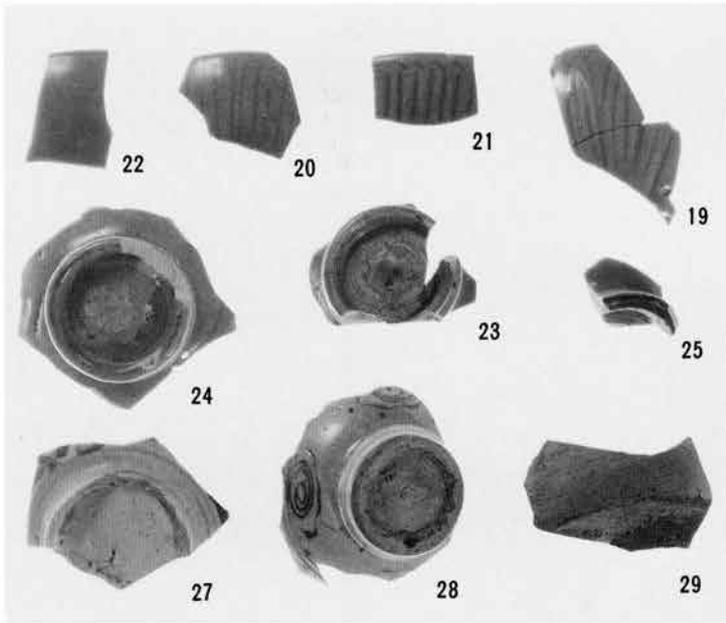
越前焼播鉢 1 青磁盤 2 金属銅銭 3 越前焼播鉢 4～6 土師質皿 7・8 白磁皿 10
越前焼播鉢 11～13



深掘トレンチ越前焼播鉢1 青磁盤2 金属銅銭3 SA202越前焼播鉢4～6
 土師質皿7・8 青磁碗9 白磁皿10 SA201下段越前焼播鉢11～13

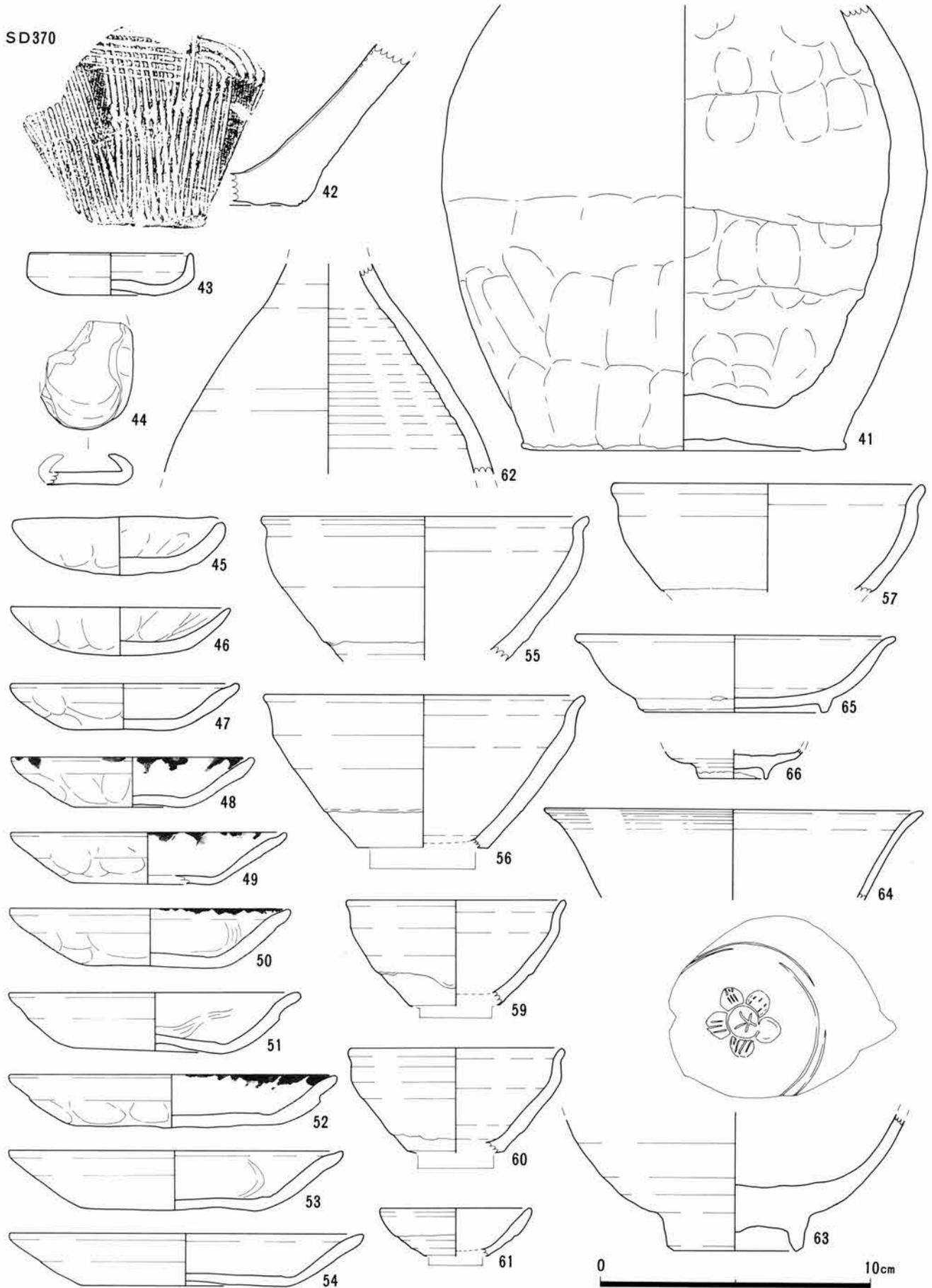


土師質皿14~17 灰釉鉢18 青磁碗19~24 壺25 白磁皿26 染付碗27 赤絵碗28 朝鮮瓶29
 金属銅銭30~36 銅製金具37 鉄鎌38 台金39 土師質皿40



SA201下段 土師質皿14~17 灰釉鉢18 青磁碗19~24 壺25 白磁皿26 染付碗27 赤絵碗28 朝鮮瓶29
 金属銅銭30~36 銅製金具37 鉄鏃38 台金39 SD204土師質皿40

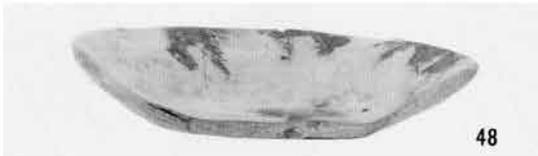
第20図 第4・13次調査遺物(3)



越前焼壺41 掃鉢42 土師質皿43~54 鉄釉碗55~57・59・60 小皿61 瓶62 青磁碗63
白磁碗64 皿65 坏66



41



48



49



50



51



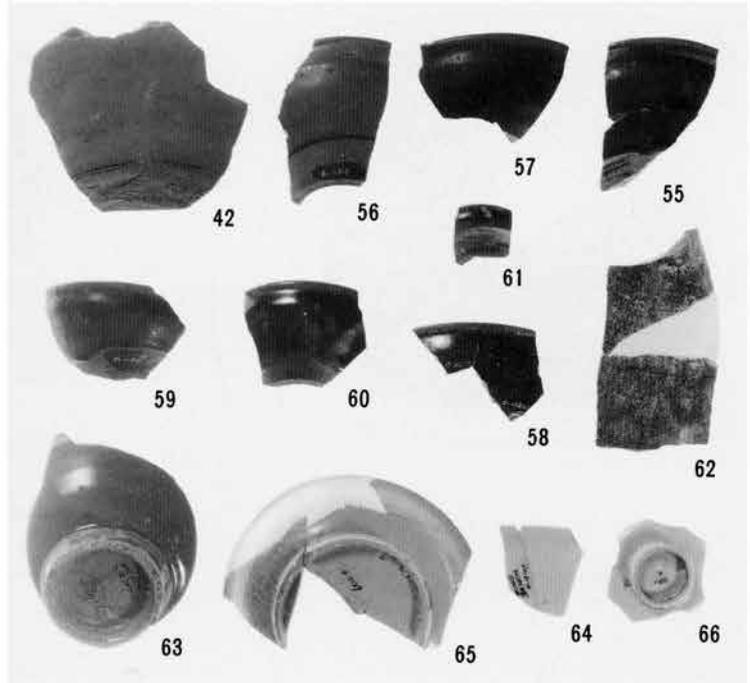
52



53



54



42

56

57

55

61

59

60

58

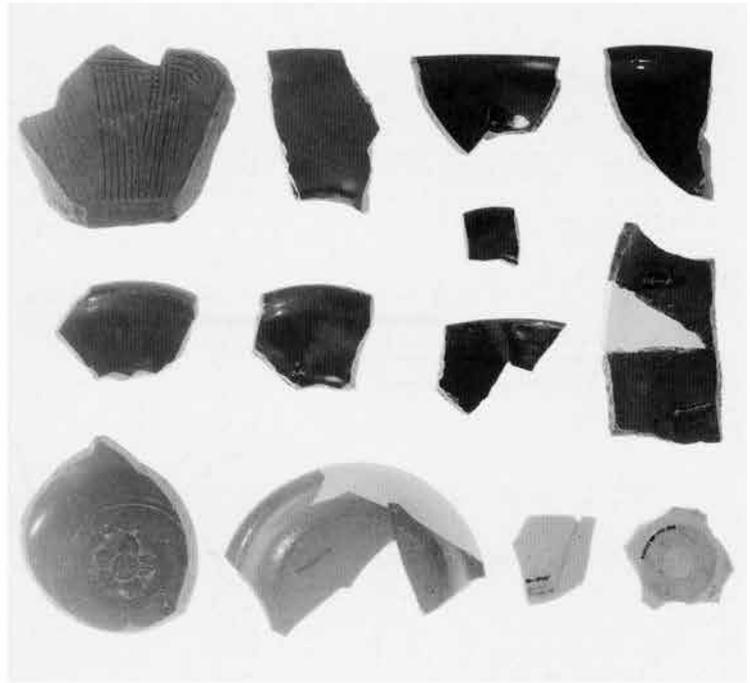
62

63

65

64

66



43



44



45



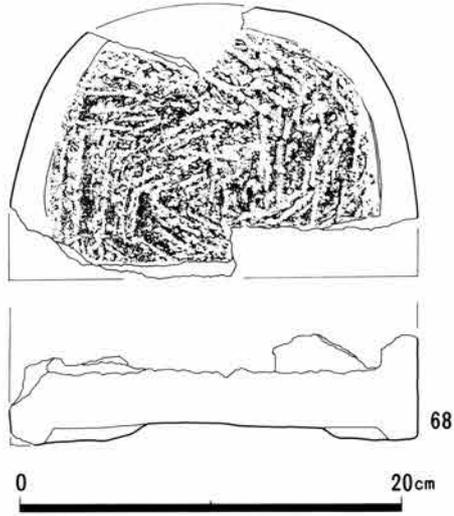
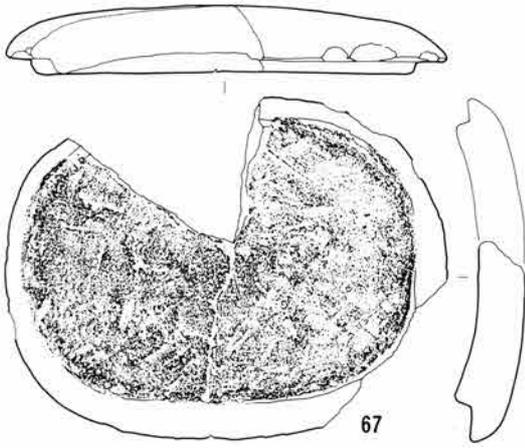
69



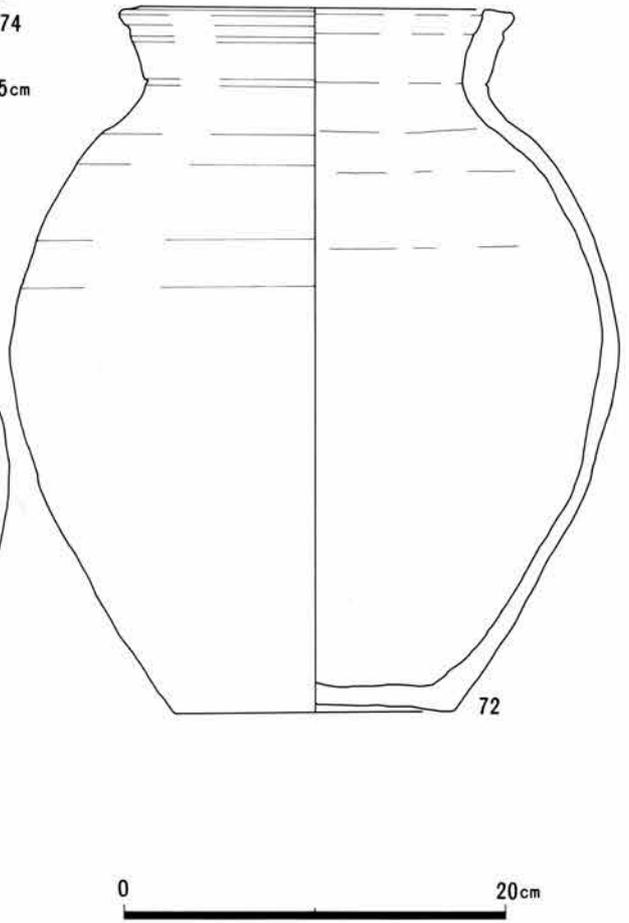
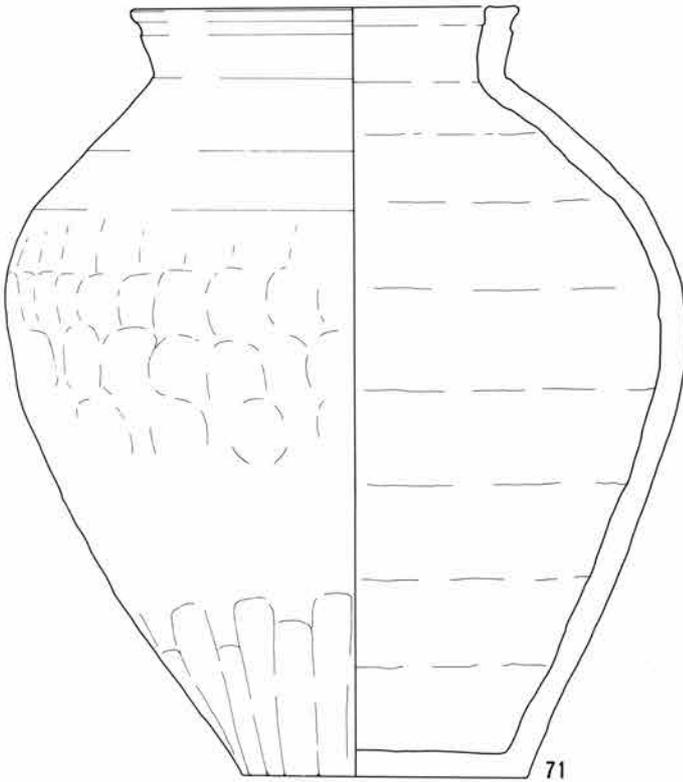
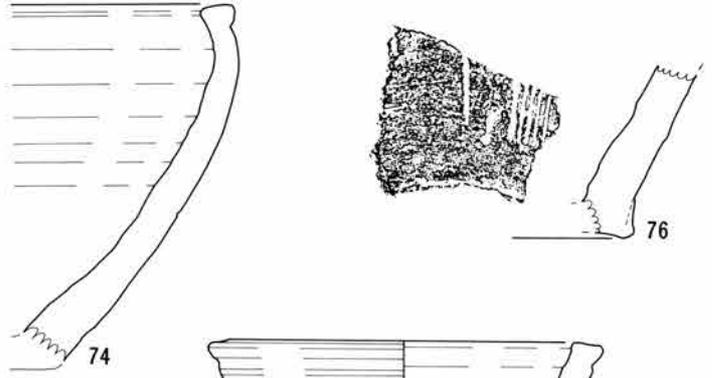
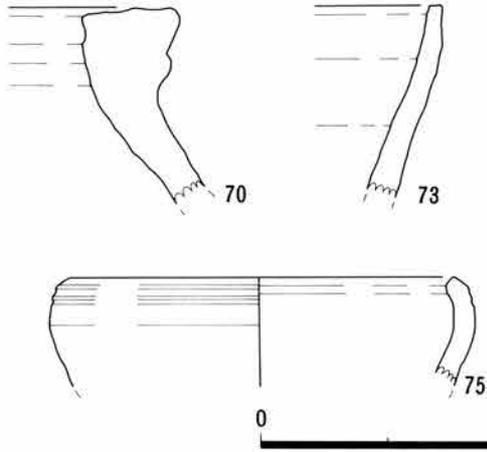
47

[SD370]越前焼壺41 播鉢42 土師質皿43~45・47~54 鉄釉碗55~60 小皿61
瓶62 青磁碗63 白磁碗64 皿65 坏66 貝片69

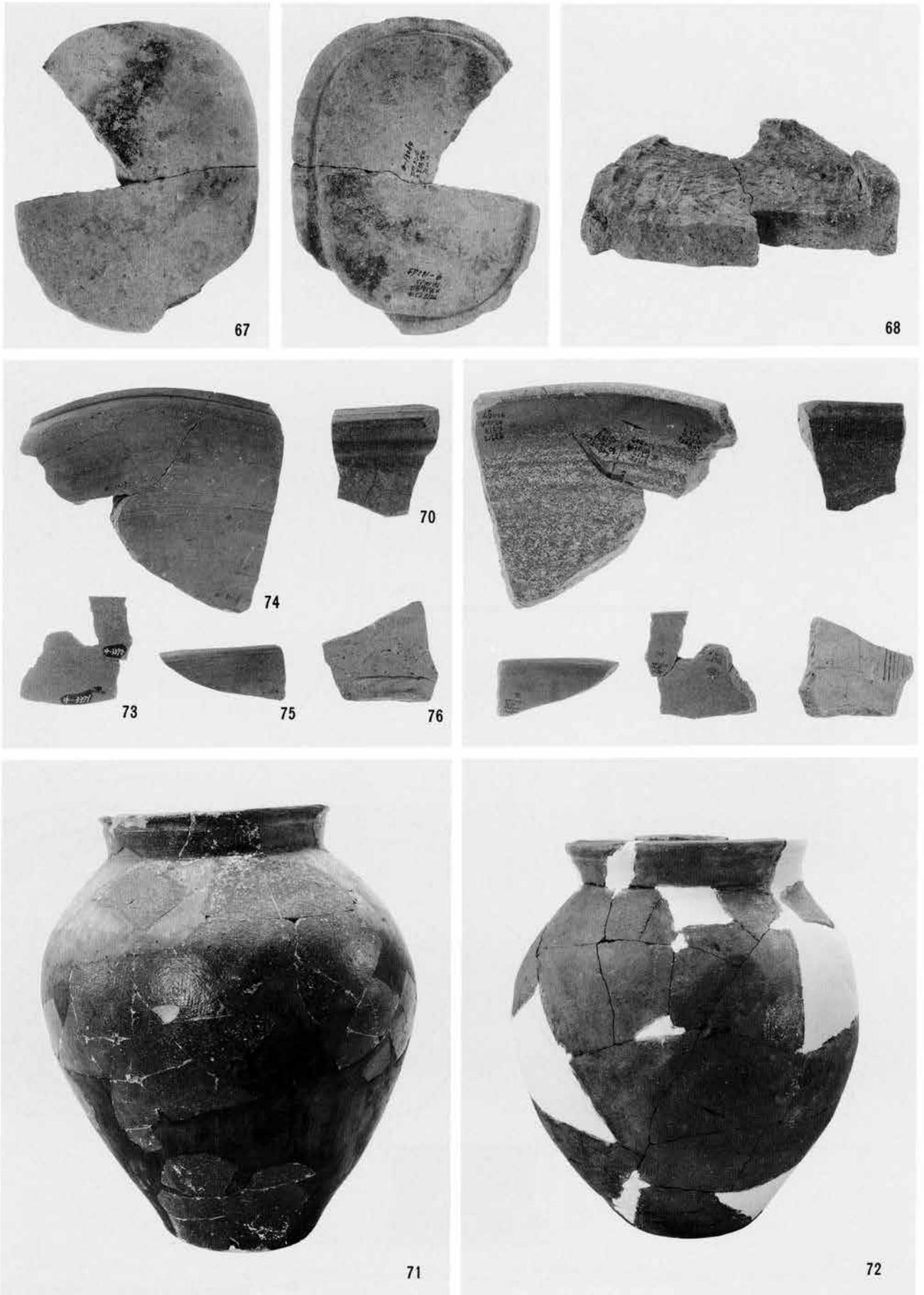
第21図 第4・13次調査遺物(4)



SG212

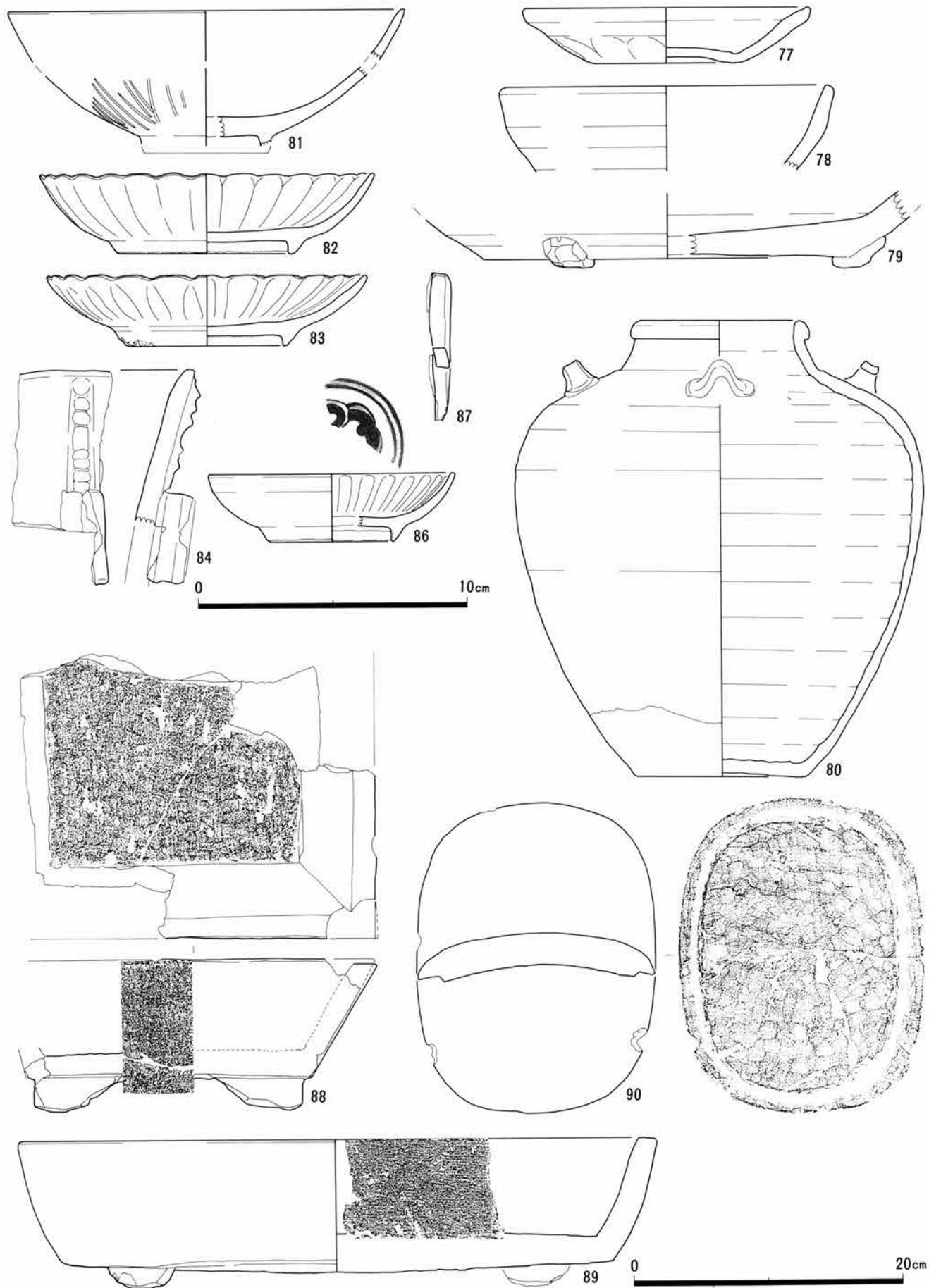


石製品バンドコ(蓋)67 同(身)68 越前焼甕70~72 火桶73 鉢74・75 播鉢76

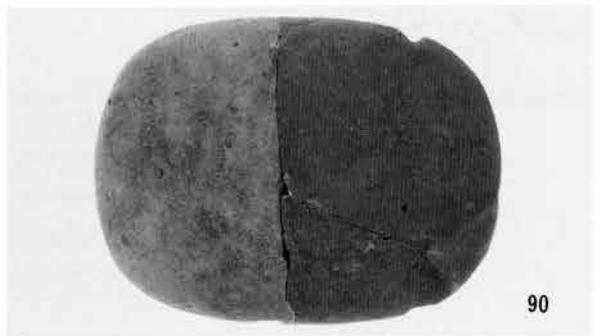
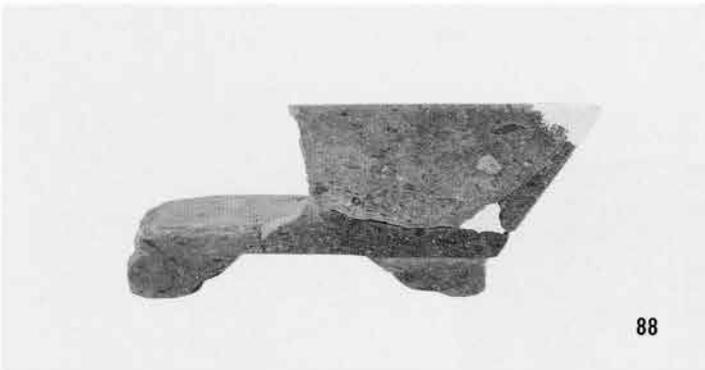
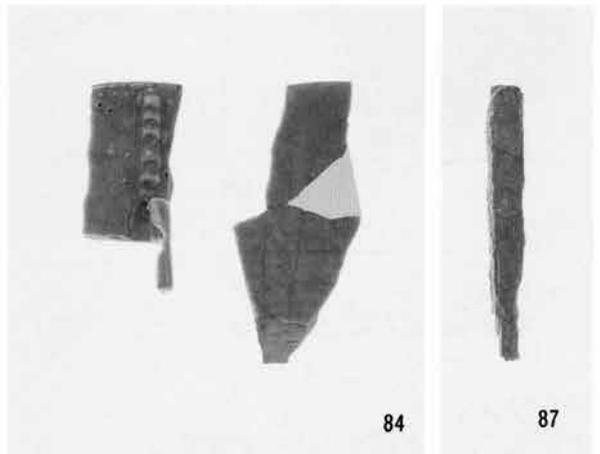
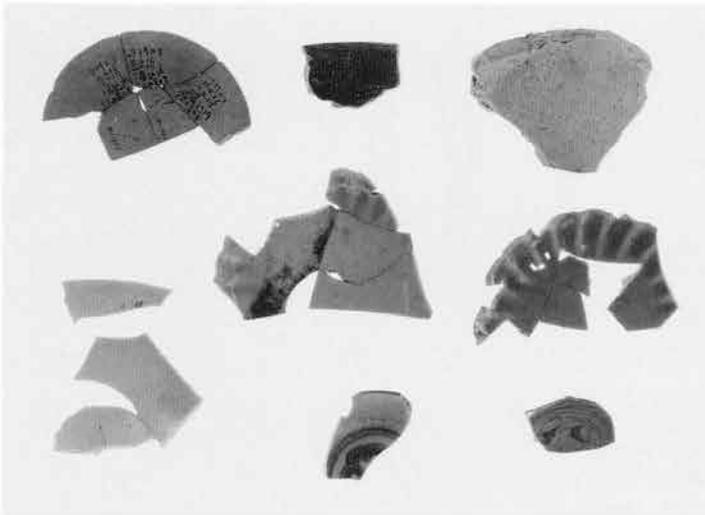
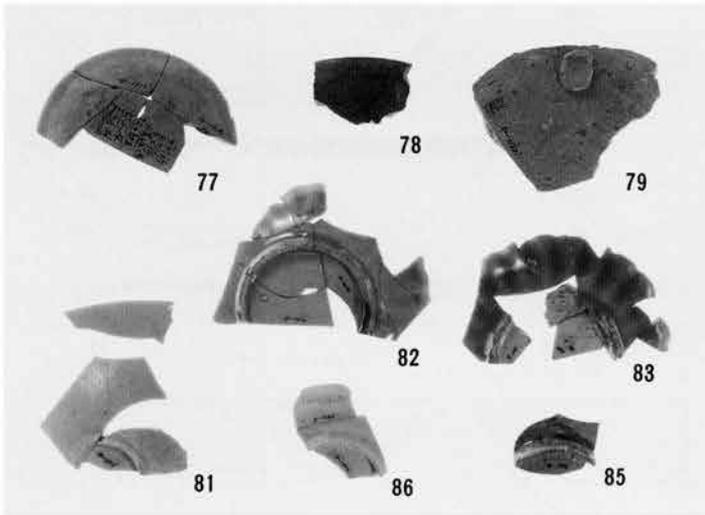


SD370石製品バンドコ(蓋)67 同(身)68 SG212越前焼甕70~72
火桶73 鉢74・75 播鉢76

第22図 第4・13次調査遺物(5)



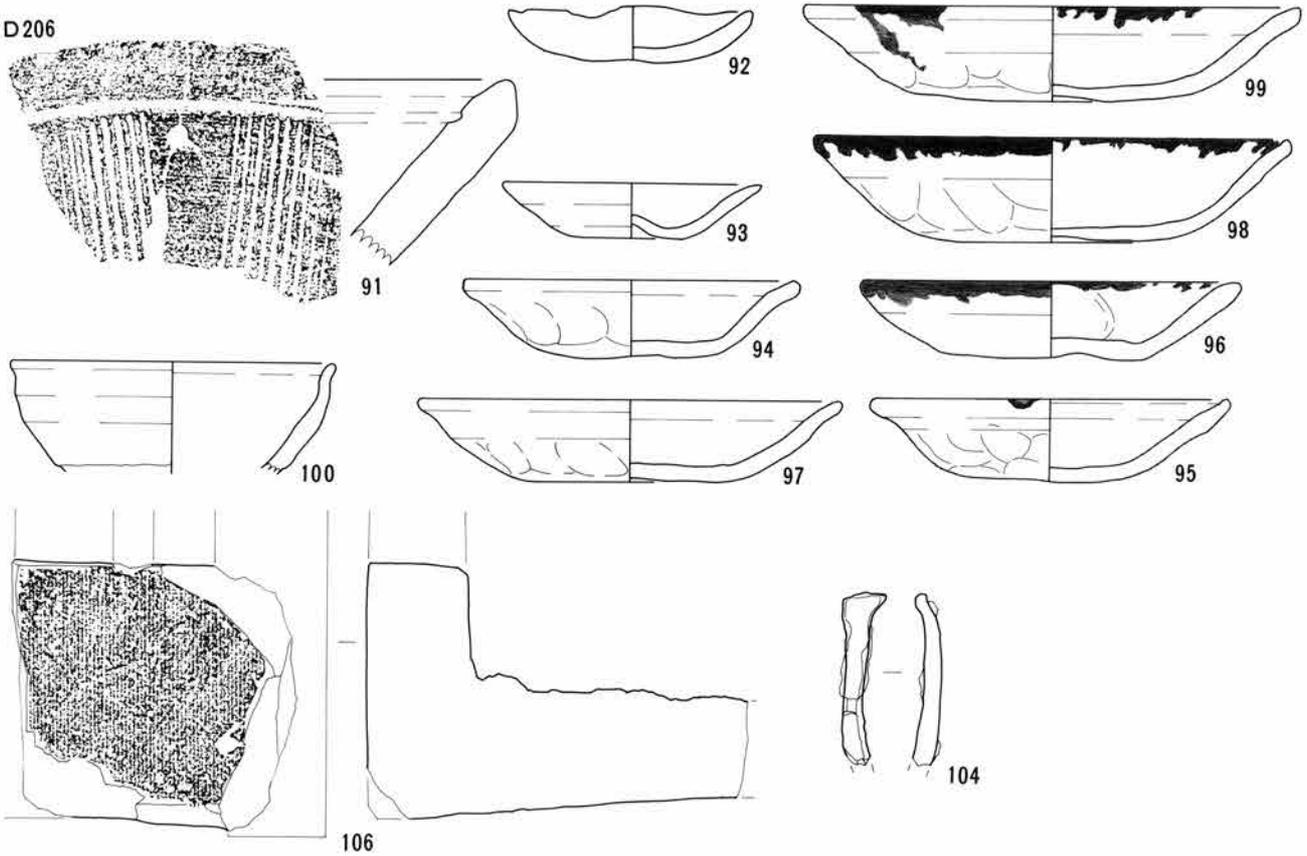
土師質皿77 鉄釉碗78 灰釉鉢79 瀬戸四耳壺80 青磁碗81 皿82・83 花生84
 染付皿86 金属釘87 石製品盤88・89 バンドコ(蓋)90



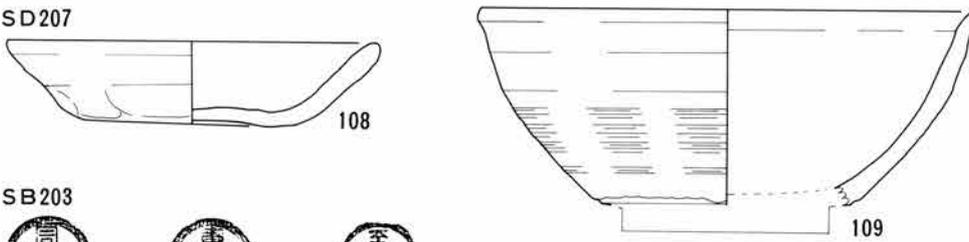
SG212土師質皿77 鉄釉碗78 灰釉鉢79 瀬戸四耳壺80 青磁碗81 皿82・83
花生84 染付碗85 皿86 金属釘87 石製品盤88・89 バンドコ(蓋)90

第23図 第4・13次調査遺物(6)

SD206



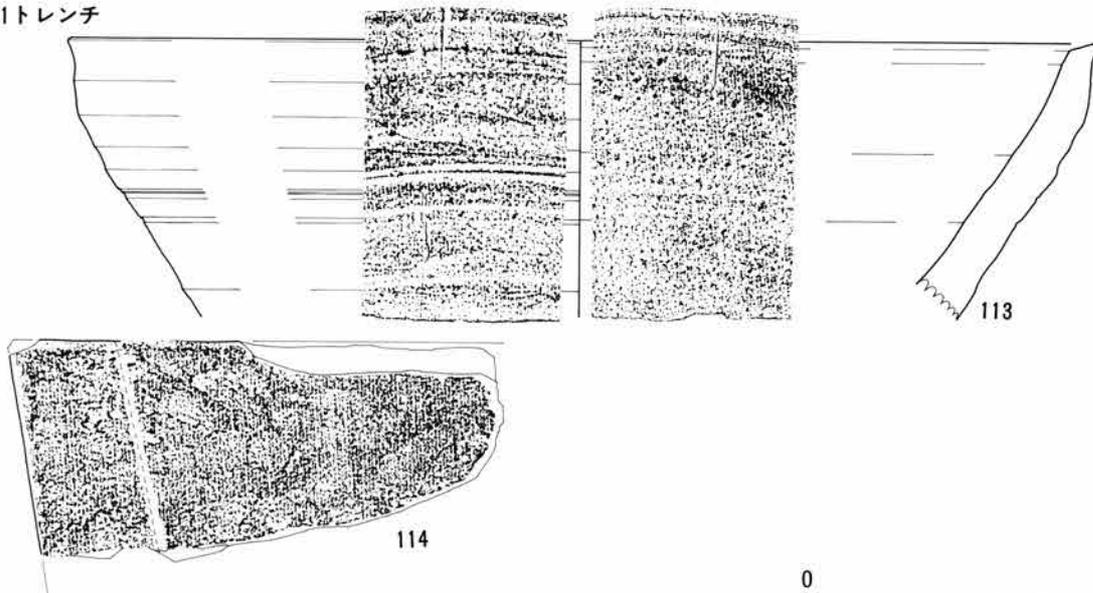
SD207



SB203

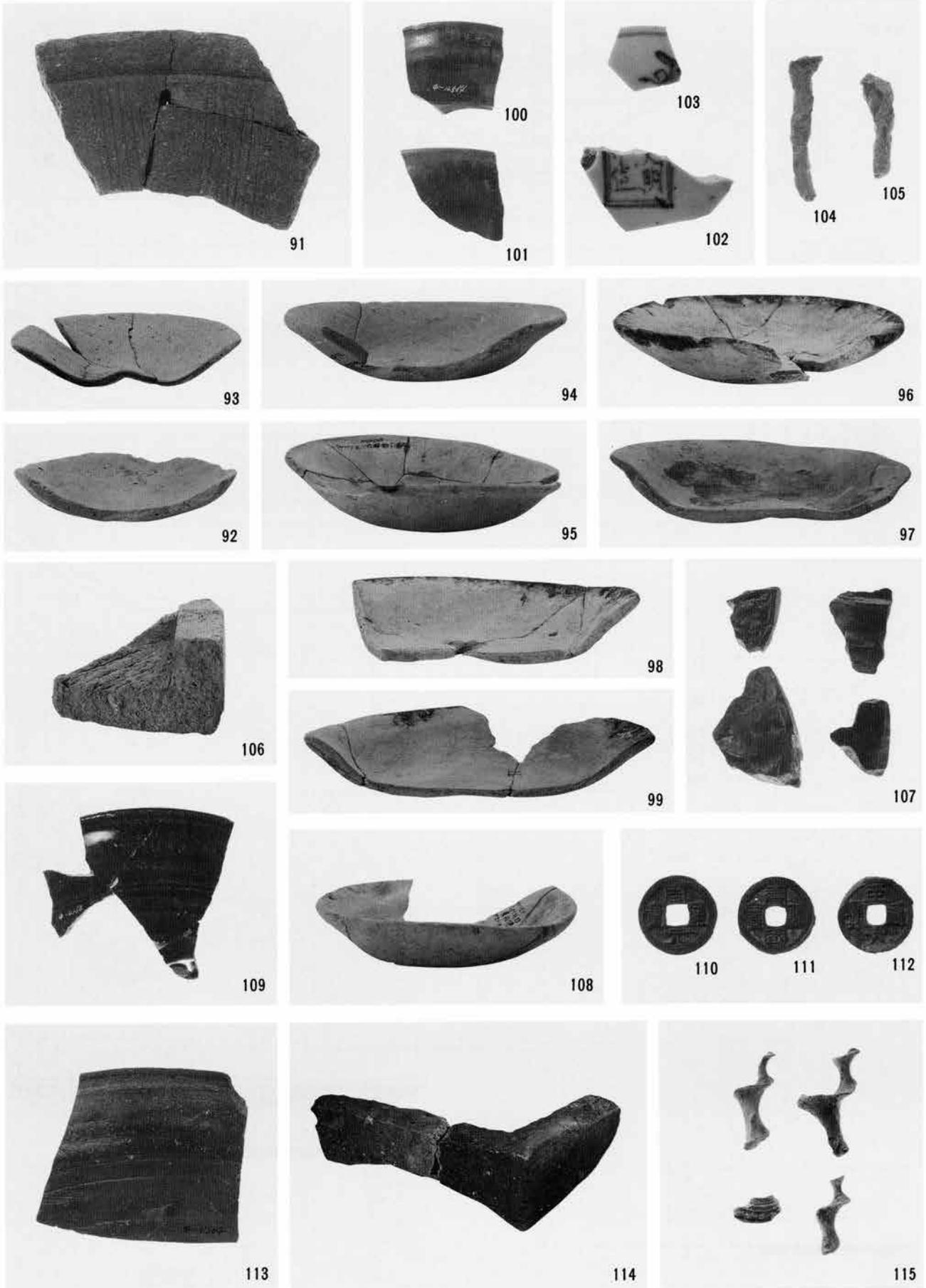


SA201トレンチ



0 10cm

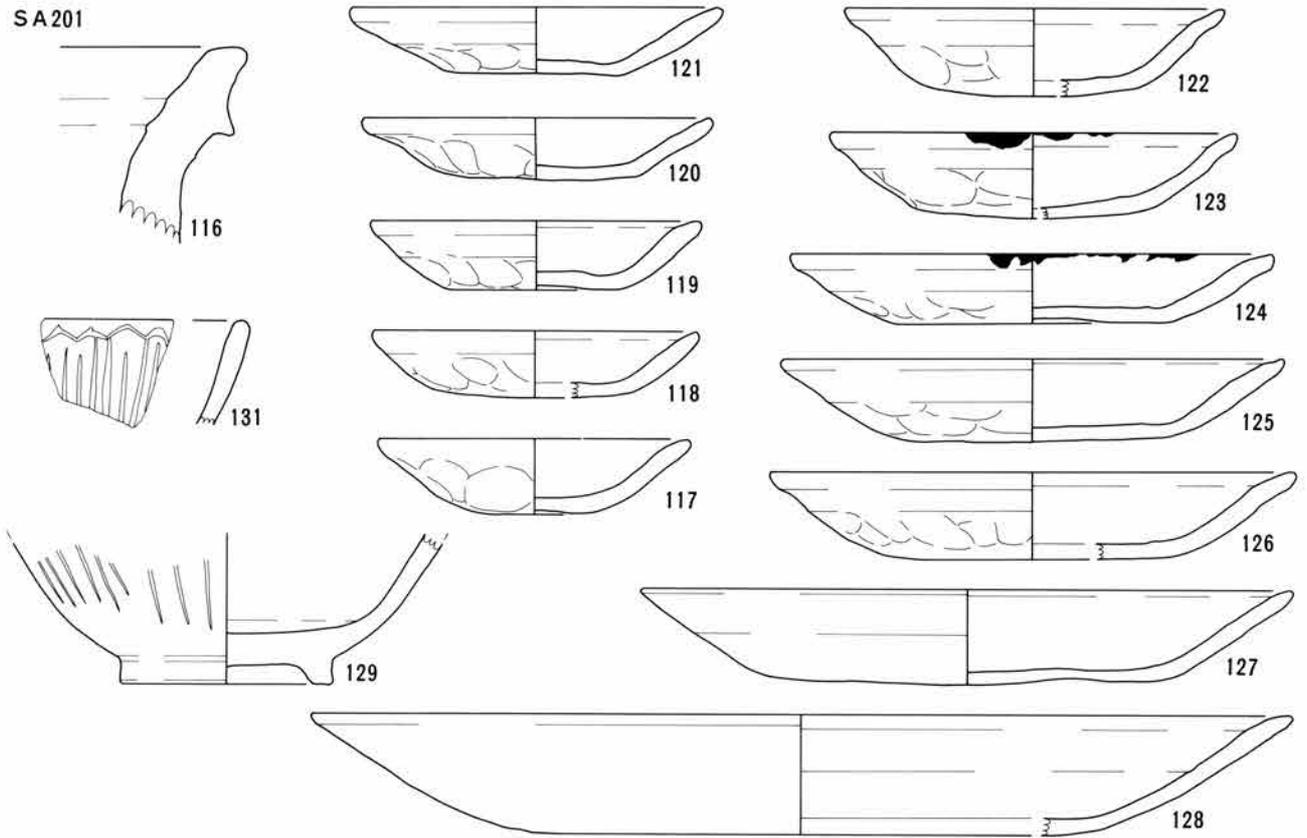
越前焼播鉢91 土師質92~99 鉄釉碗100 金属釘104 石製品バンドコ(身)106 土師質皿108
鉄釉碗109 金属銅銭110~112 越前焼鉢113 石製品炉壇石114



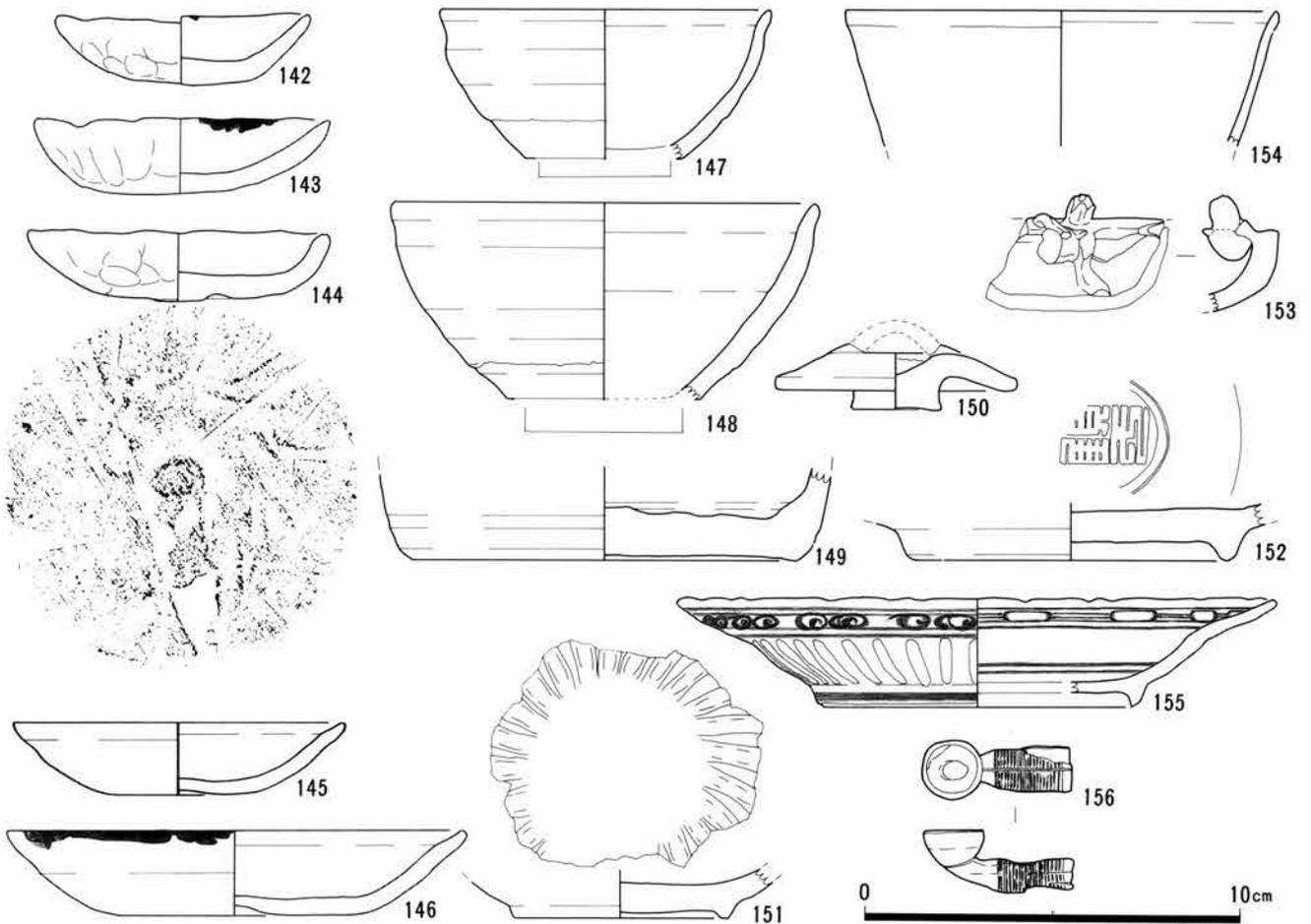
SD206 越前焼播鉢91 土師質皿92~99 鉄釉碗100・101 白磁皿102 染付杯103 金属釘104・105 石製品バンドコ(身)106 炭化木107
 SD207 土師質皿108 鉄釉碗109 SB203 金属銅銭110~112 SA201トレンチ 越前焼鉢113 石製品炉壇石114 その他具片115

第24図 第4・13次調査遺物(7)

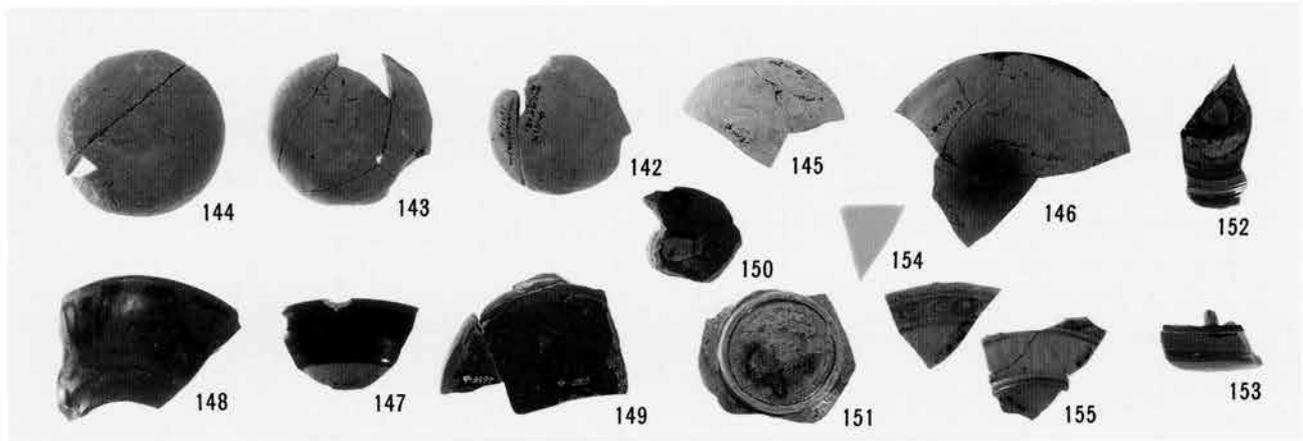
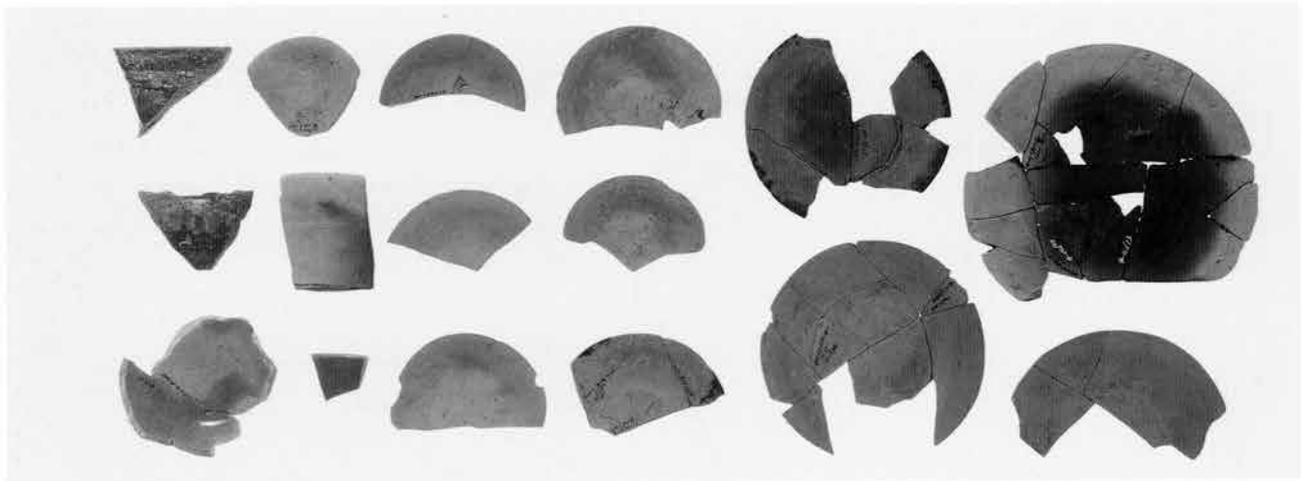
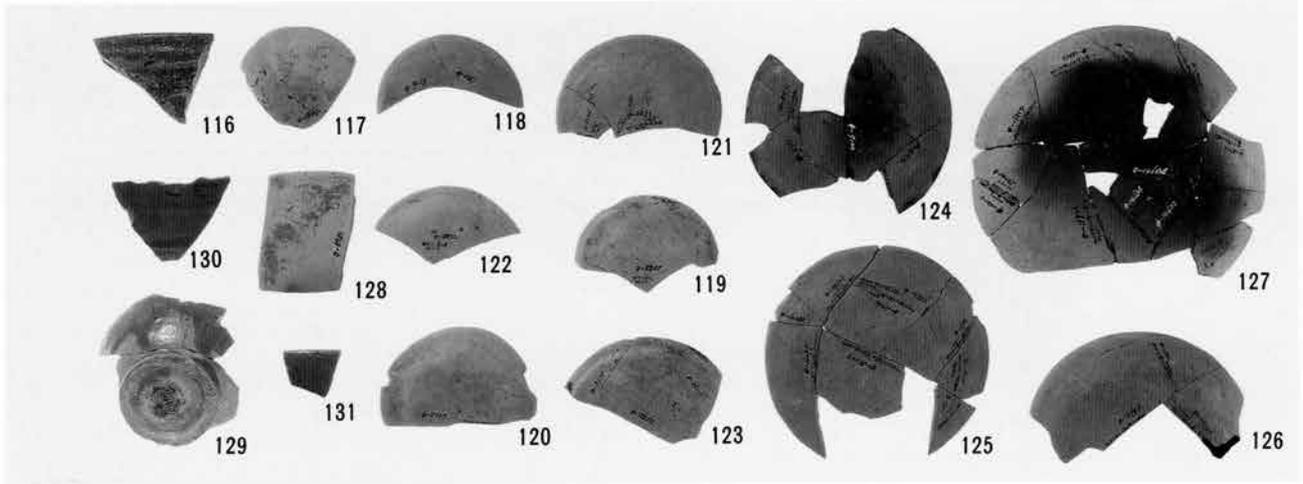
SA201



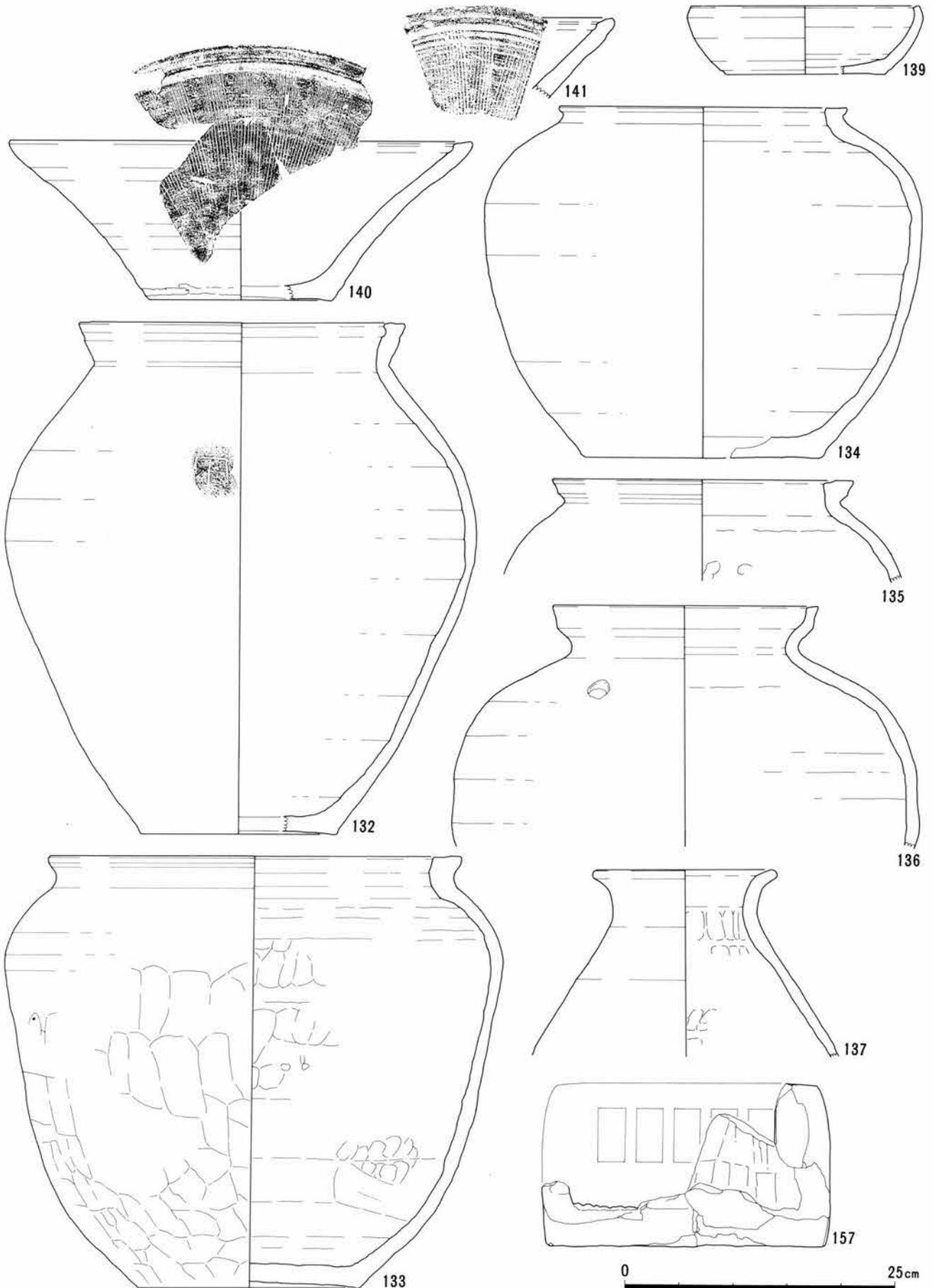
SA201崩土



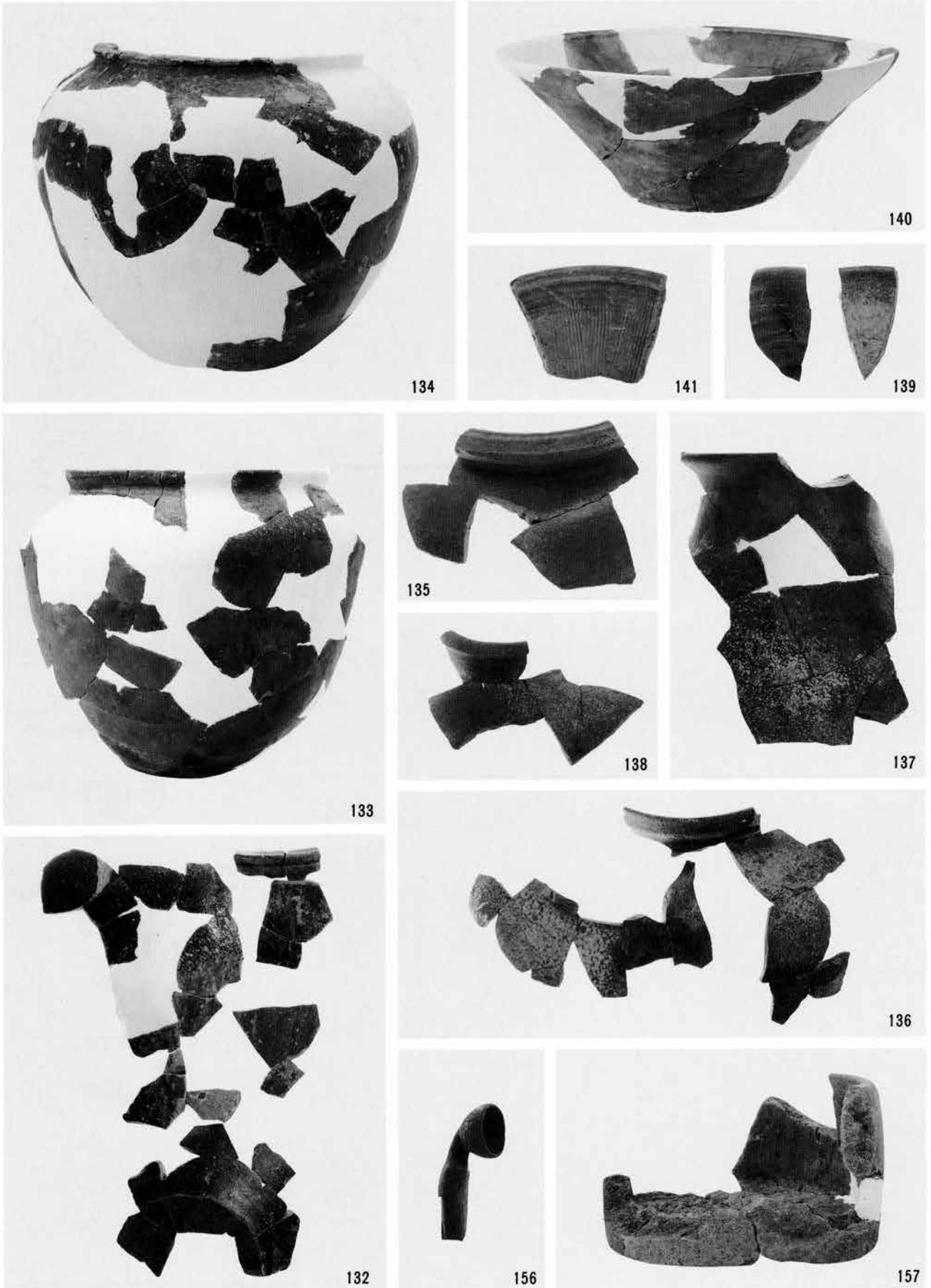
越前焼 116 土師質皿 117~128 灰釉碗 129 青磁碗 131 土師質皿 142~146 鉄釉碗 147・148
 壺 149 蓋 150 灰釉皿 151 青磁皿 152 合子 153 白磁碗 154 染付皿 155 金属キセル 156



SA201 越前焼甕116 土師質皿117~128 灰釉碗129 瀬戸壺130 青磁碗131 SA201崩土 土師質皿142~146
鉄釉碗147・148 壺149 蓋150 灰釉皿151 青磁皿152 合子153 白磁碗154 染付皿155



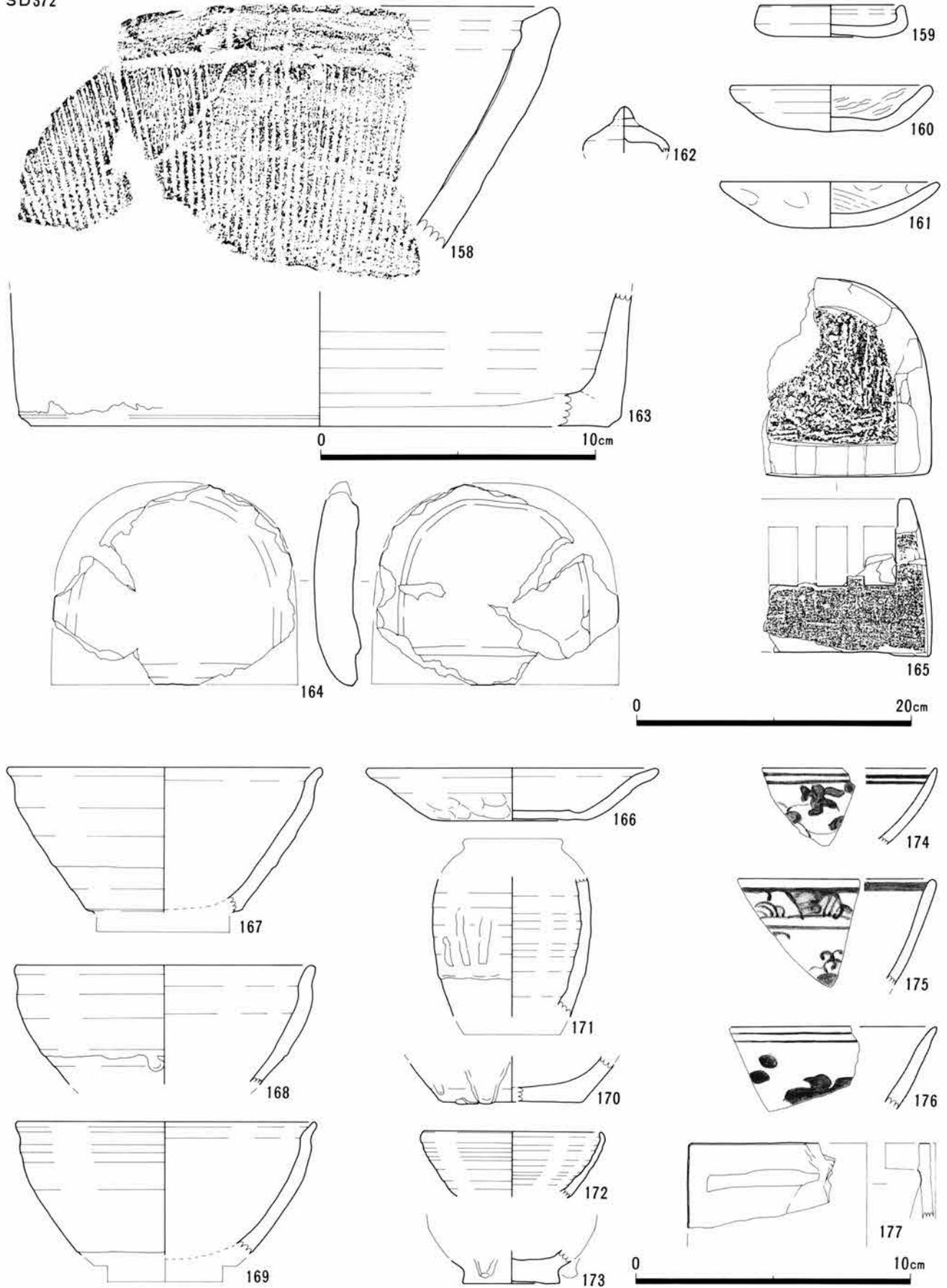
越前焼甕132~135 壺136・137 鉢139 播鉢140・141 石製品バンドコ(身)157



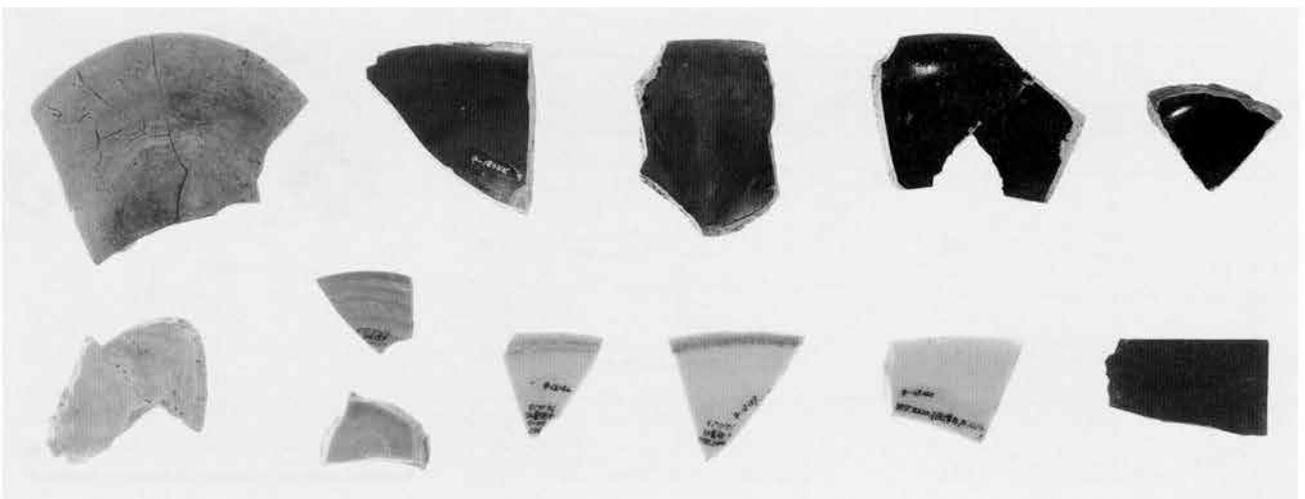
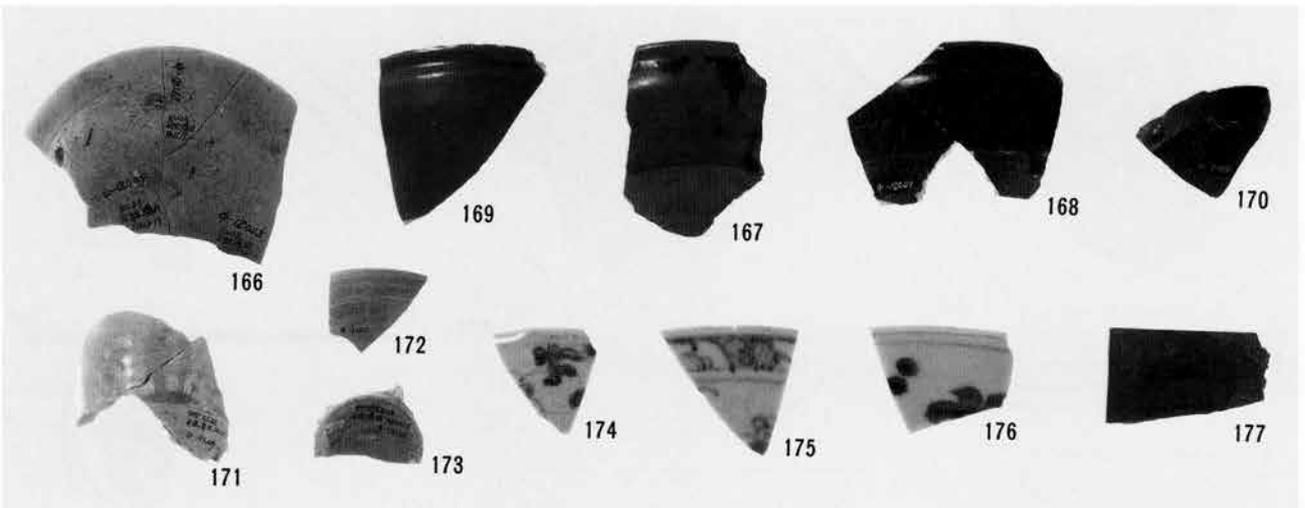
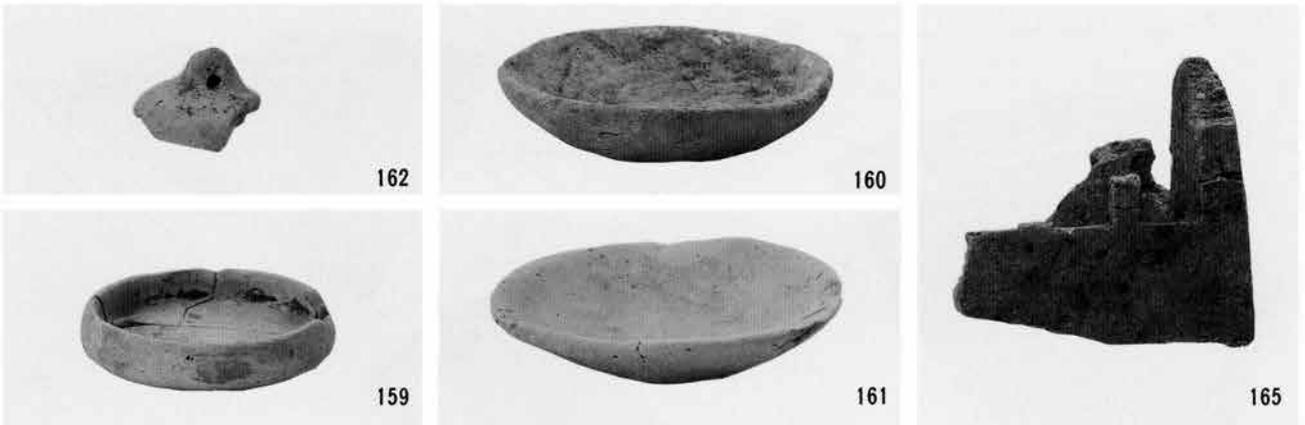
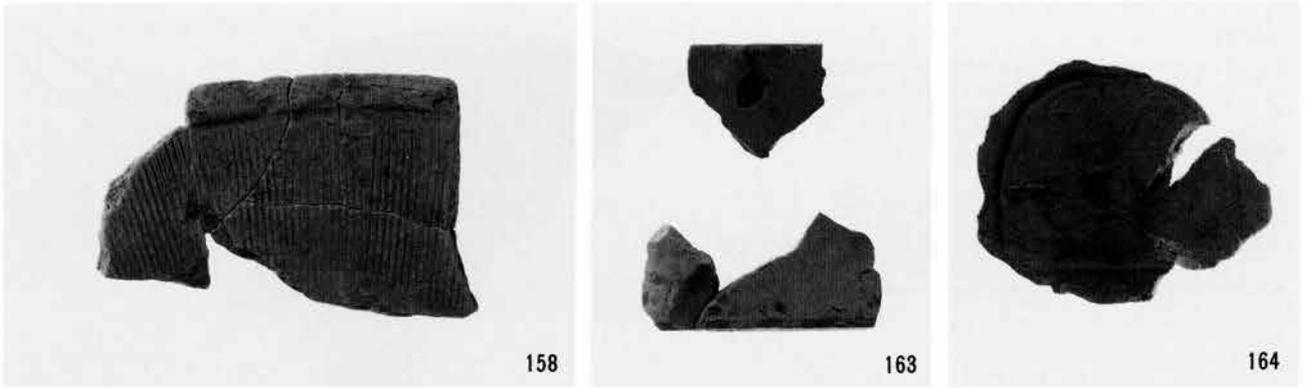
SA201崩土 越前焼甕132~135 壺136~138 鉢139 播鉢140・141
金属キセル156 石製品バンドコ(身)157

第26図 第4・13次調査遺物(9)

SD372



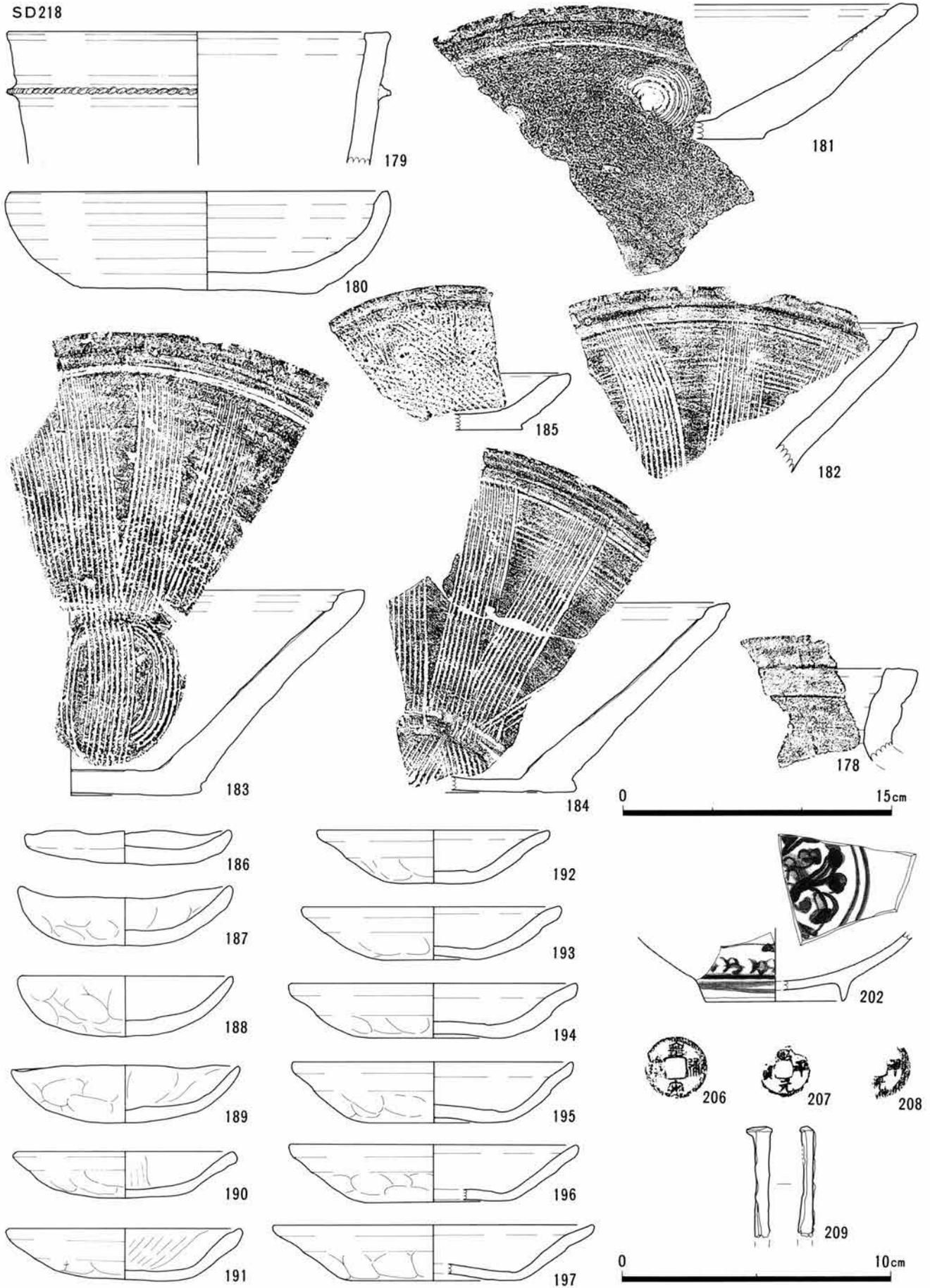
越前焼播鉢158 土師質皿159~161 土鈴162 鉄軸鉢163 石製品バンドコ(蓋)164 同(身)165 土師質皿166
鉄軸碗167~169 壺170 灰釉茶入171 須恵質陶器172 青磁香炉173 染付碗174~176 石製品硯177



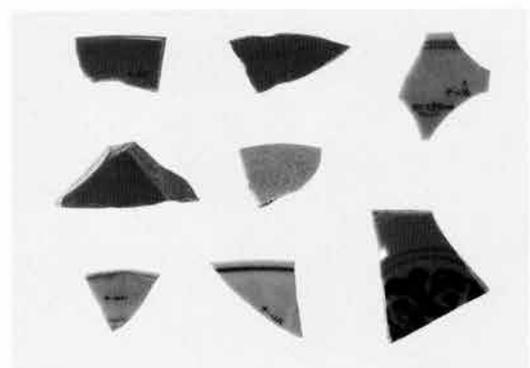
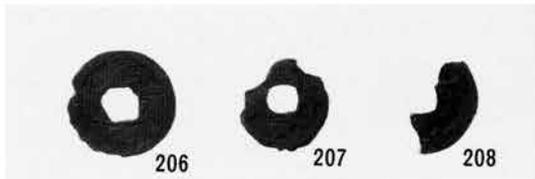
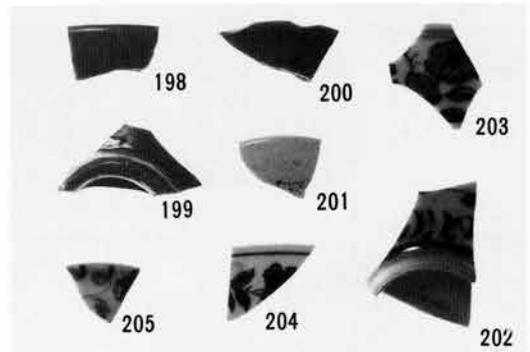
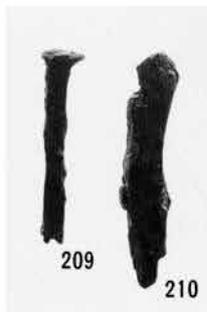
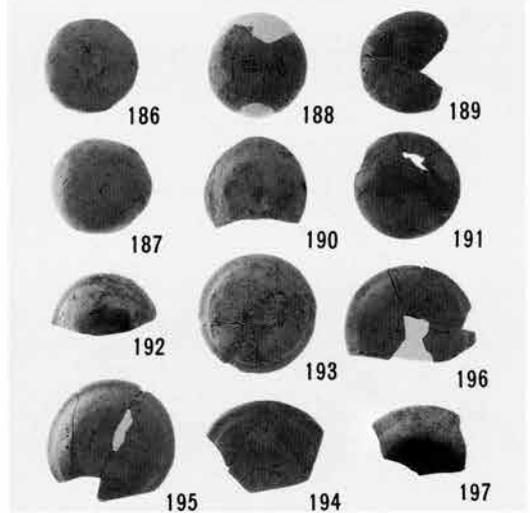
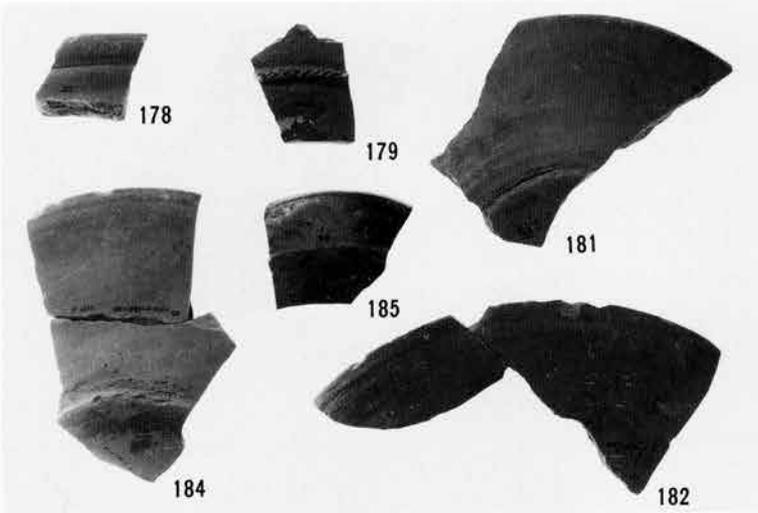
SD372 越前焼播鉢158 土師質皿159~161 土鈴162 鉄釉鉢163 石製品バンドコ(蓋)164 同(身)165 SD375 土師質皿166 鉄釉碗167~169 壺170 灰釉茶入171 須恵質陶器172 青磁香炉173 染付碗174~176 石製品硯177

第27図 第4・13次調査遺物(10)

SD218

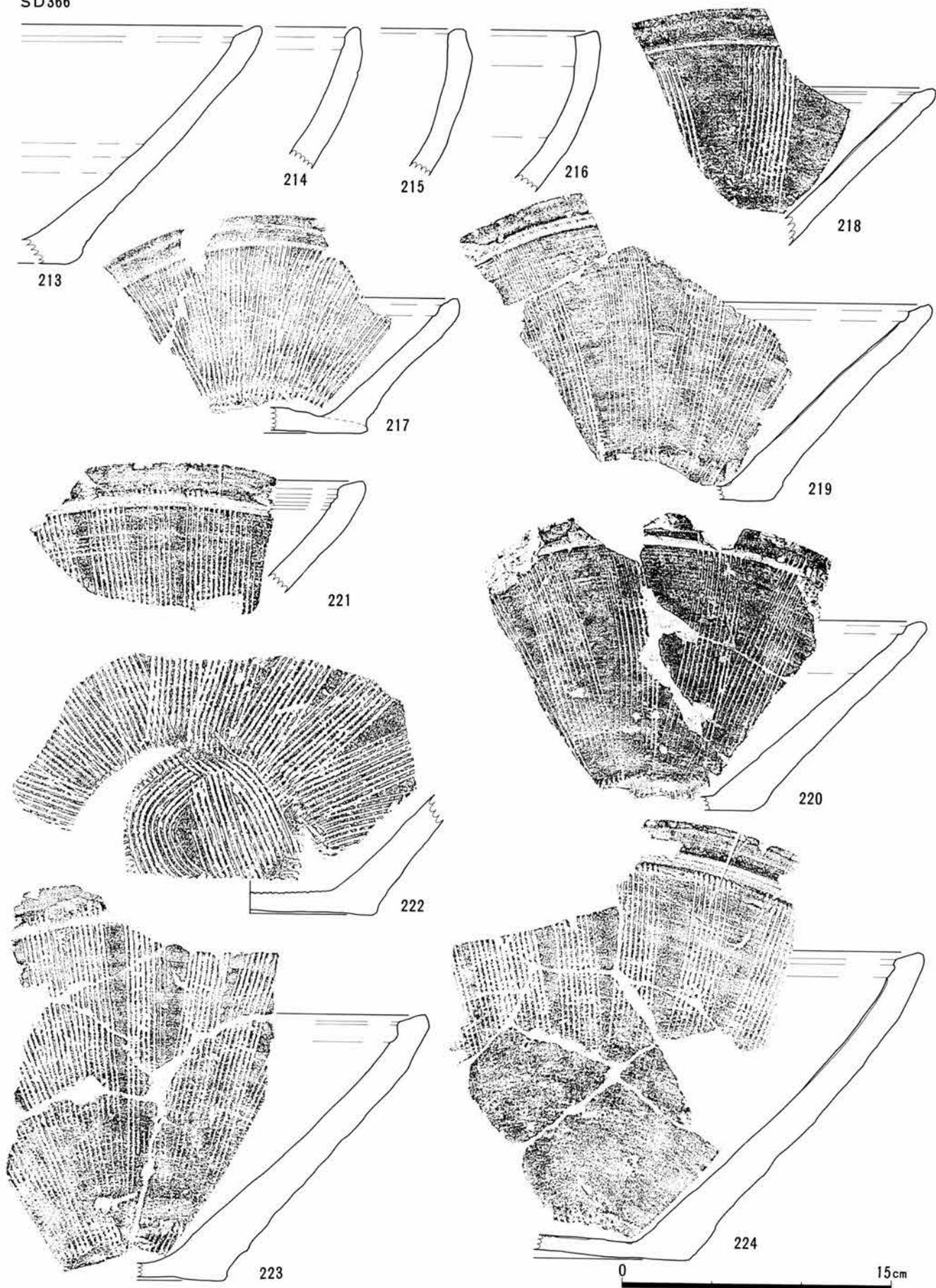


越前焼 甕 178 火桶 179 鉢 180・181 播鉢 182~185 土師質 皿 186~197 染付碗 202
 金属銅銭 206~208 釘 209

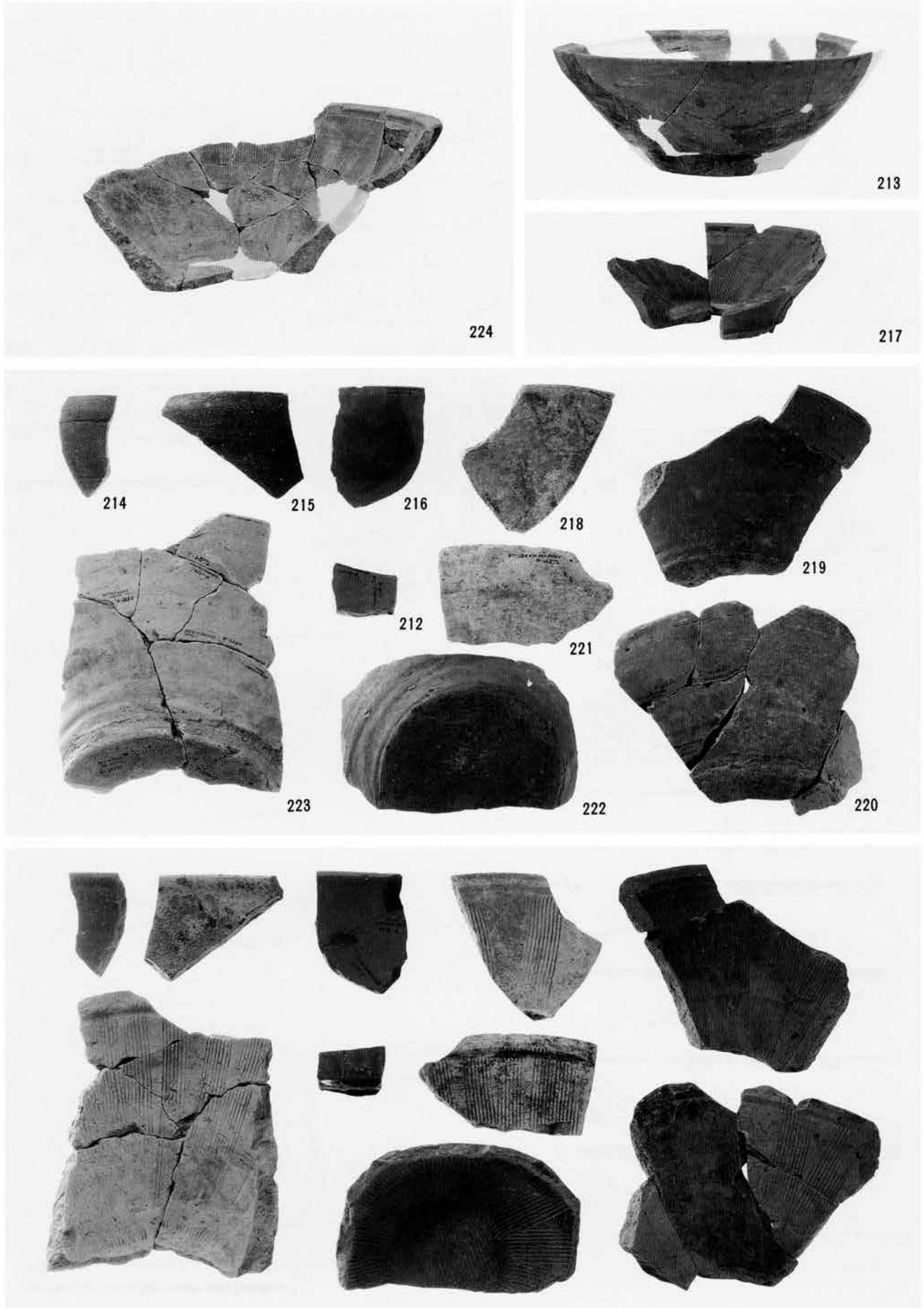


SD218 越前焼 178 火桶 179 鉢 180・181 播鉢 182~185 土師質 皿 186~197 青磁碗 198・199 皿 200 白磁 皿 201 染付碗 202~204 皿 205 金属 銅銭 206~208 釘 209・210 鋌 211

SD366

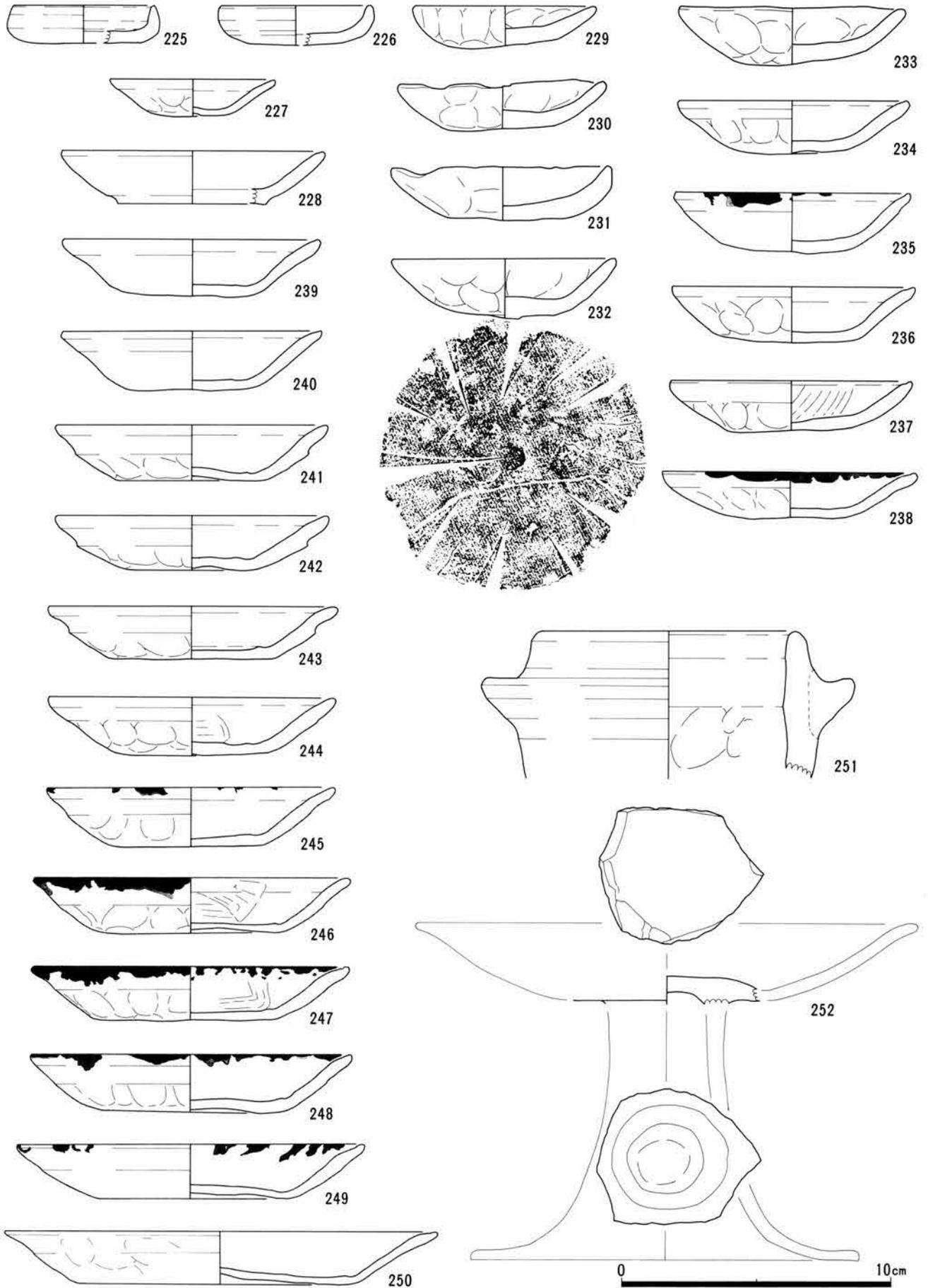


越前焼鉢213～216 播鉢217～224

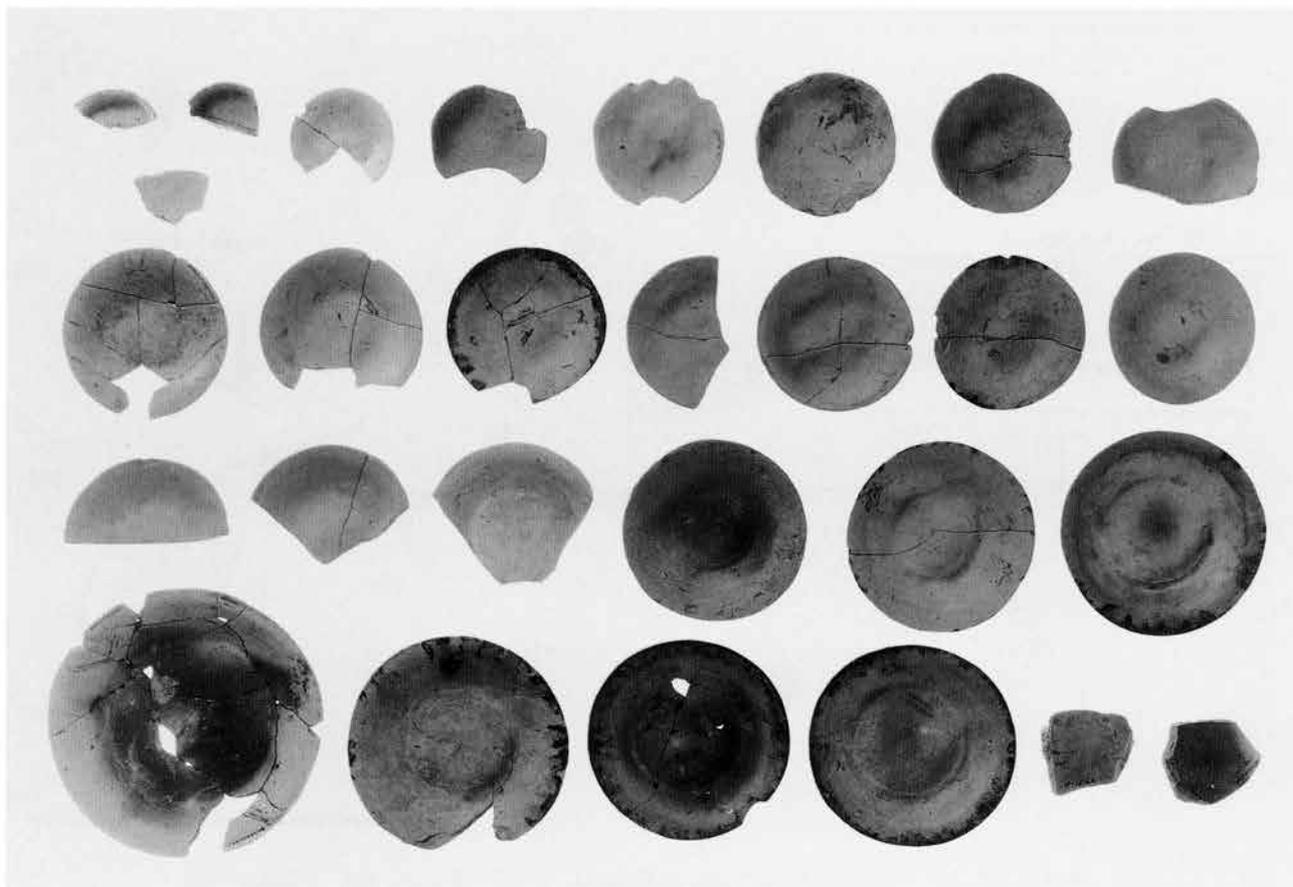
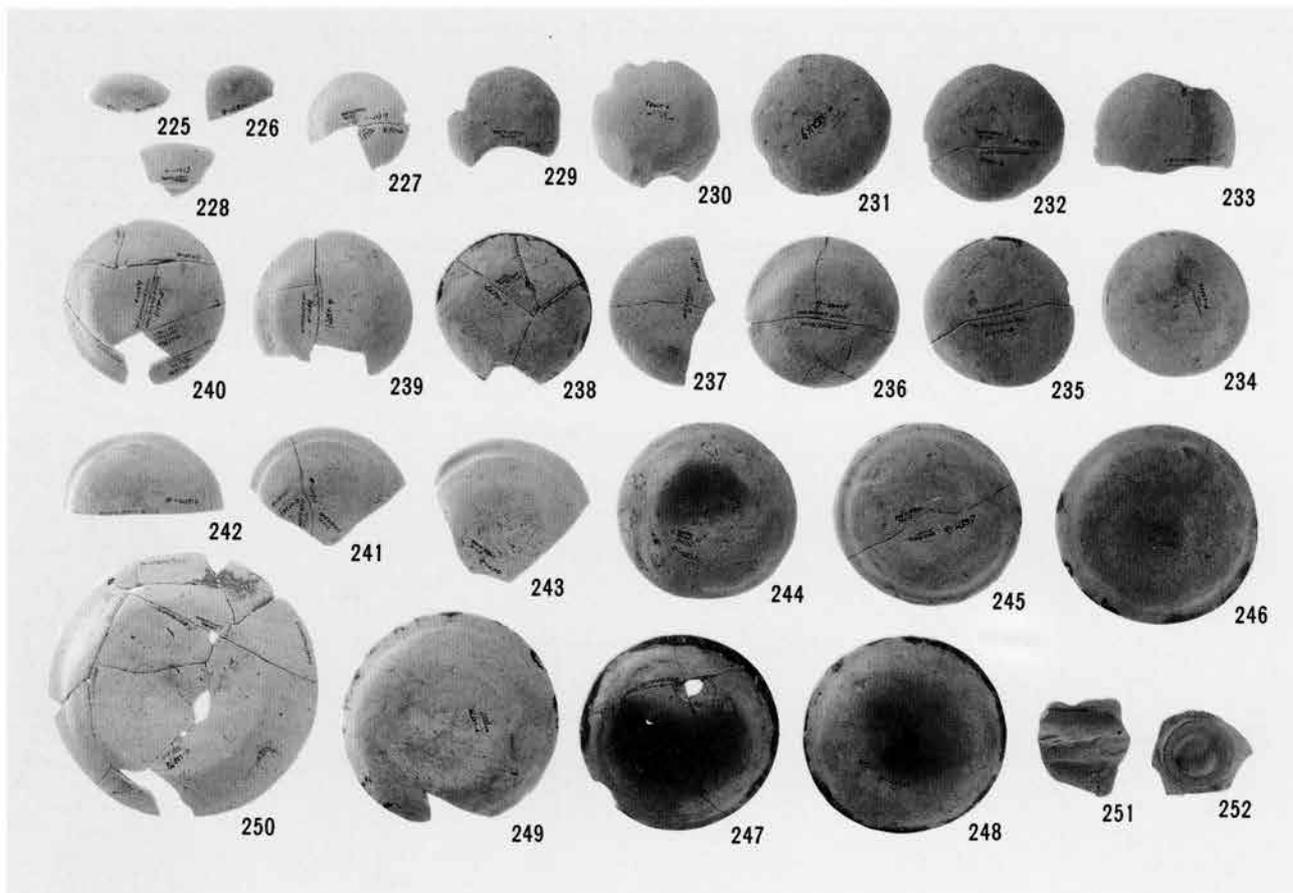


SD366 越前焼壺212 鉢213~216 播鉢217~224

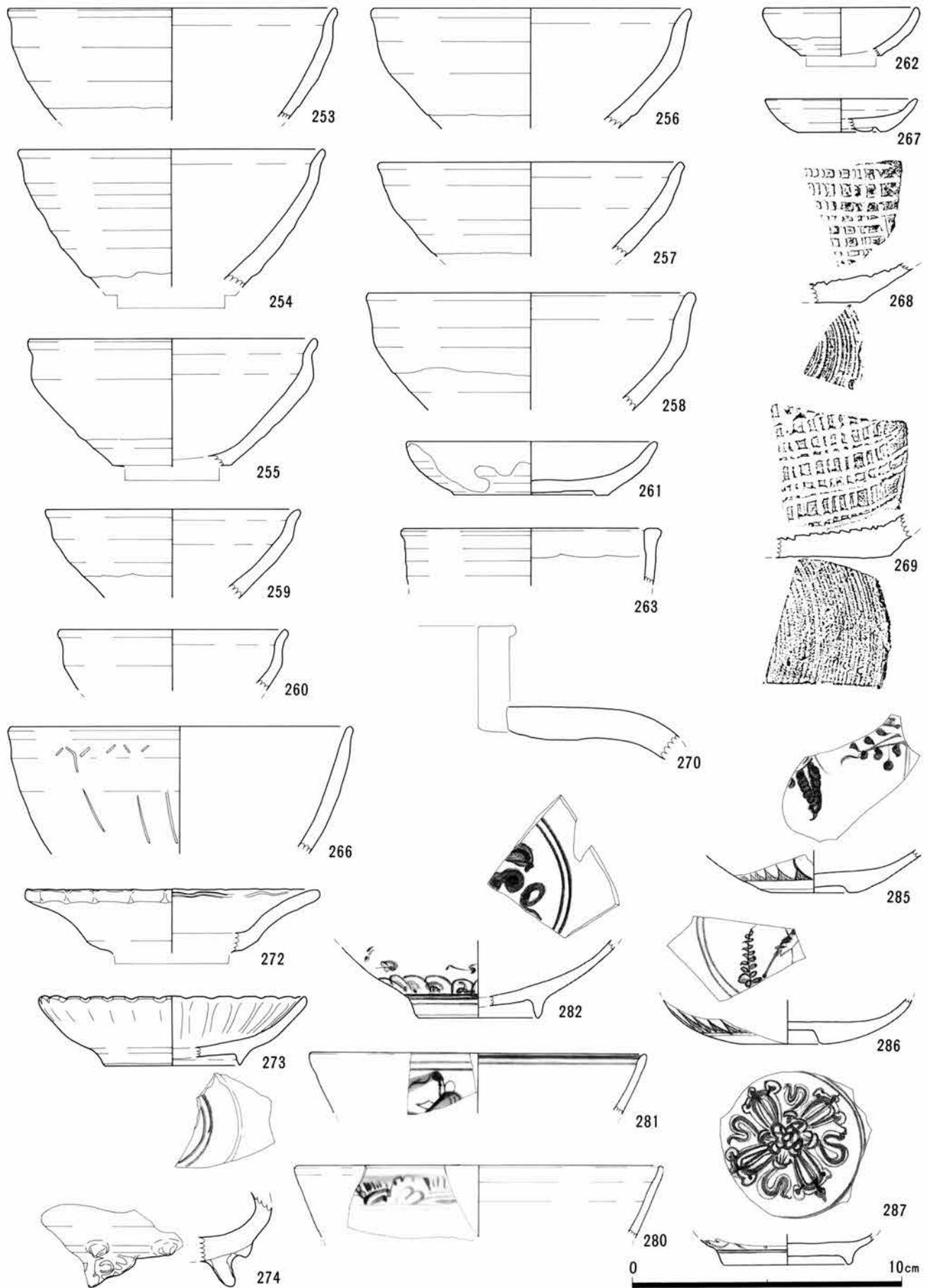
第29図 第4・13次調査遺物(12)



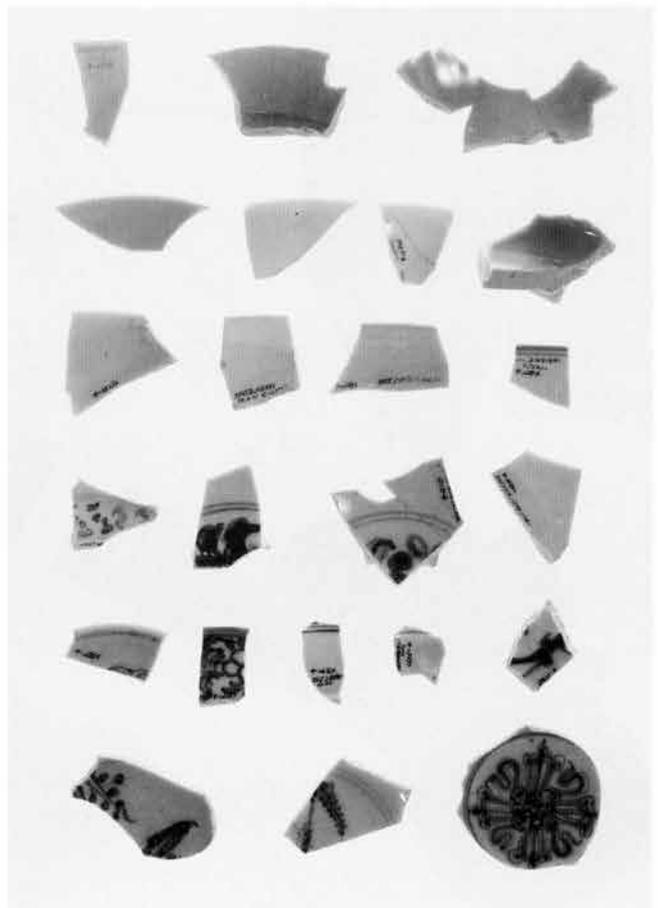
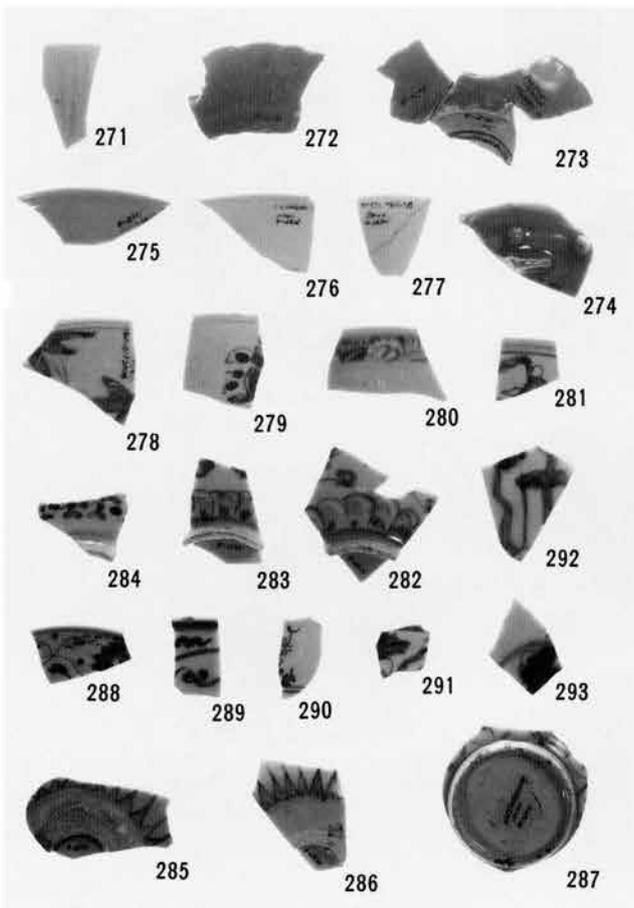
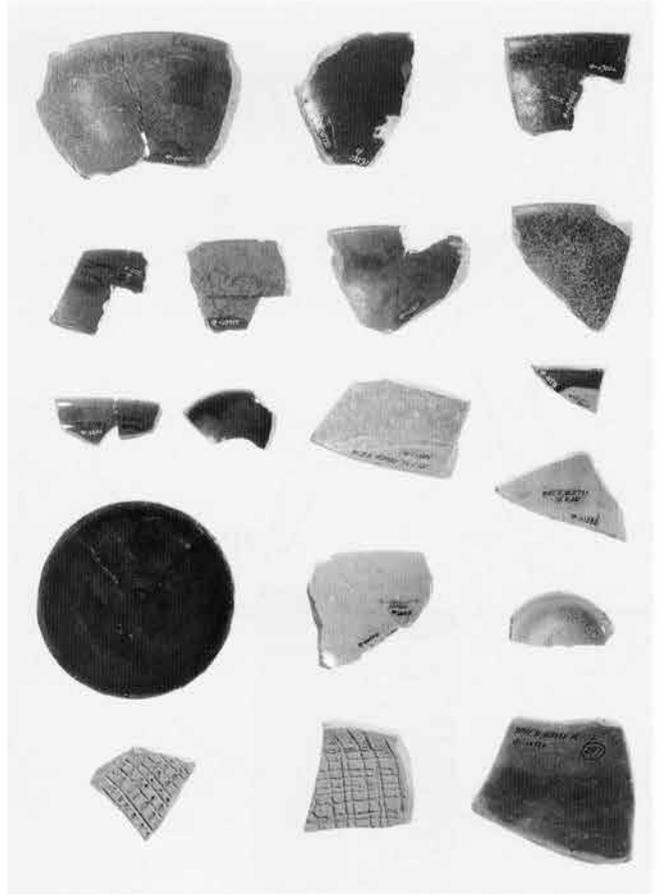
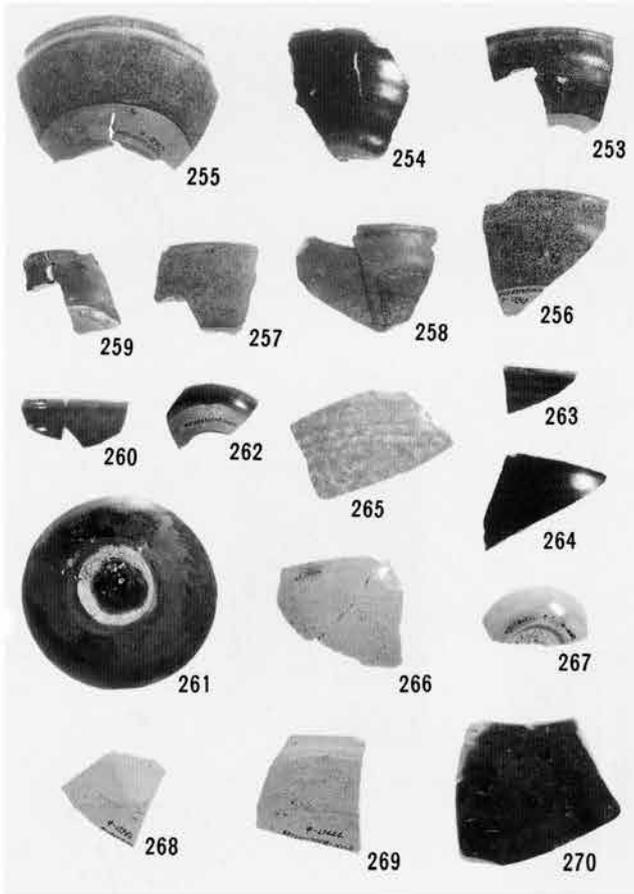
土師質皿225~250 土釜251 高坏252



第30図 第4・13次調査遺物(13)

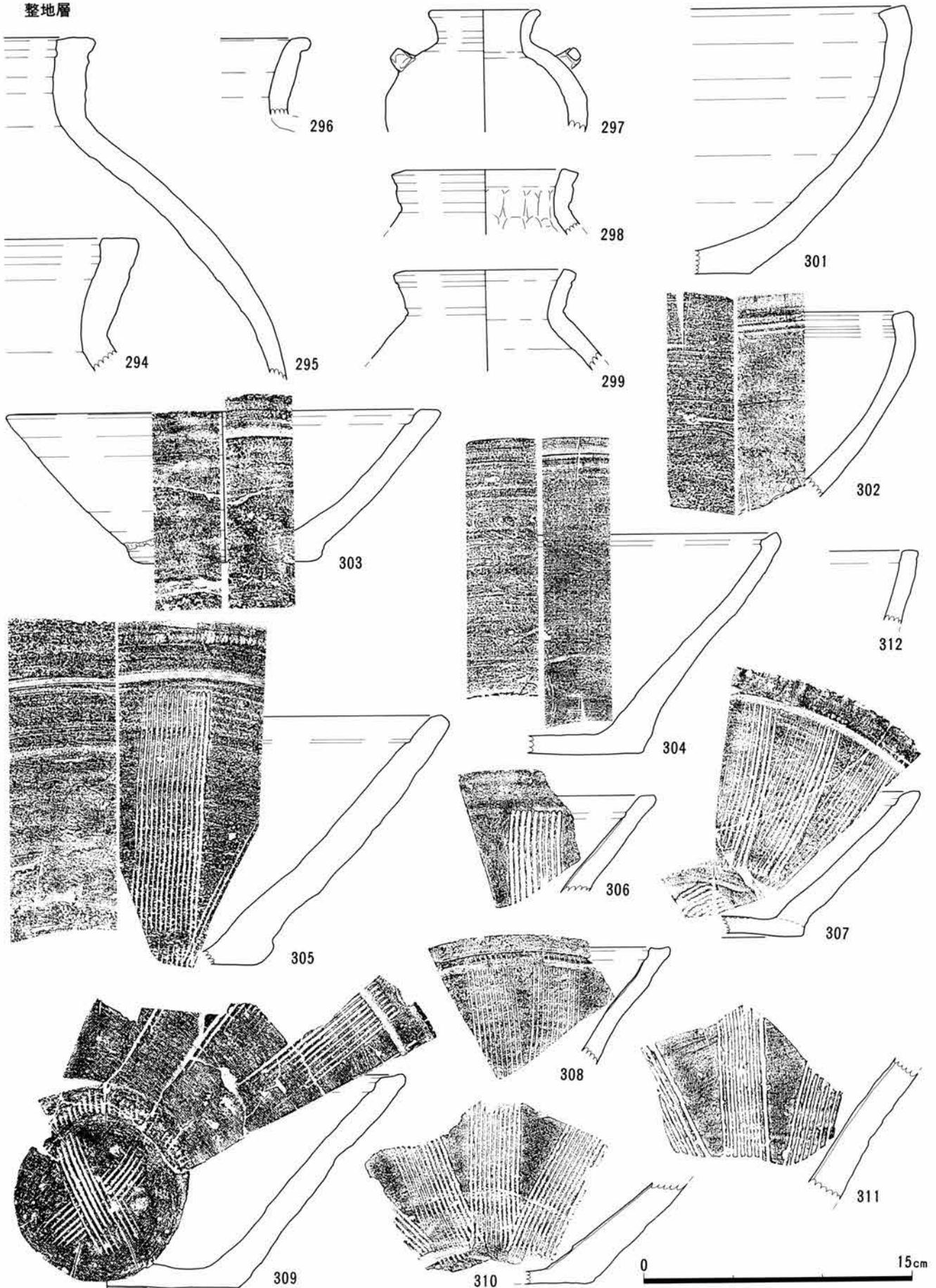


鉄釉碗253~260 皿261・262 香炉263 灰釉碗266 皿267 鈿皿268・269 瓦質風灯270
 青磁皿272・273 盤274 染付碗280~282 皿285~287

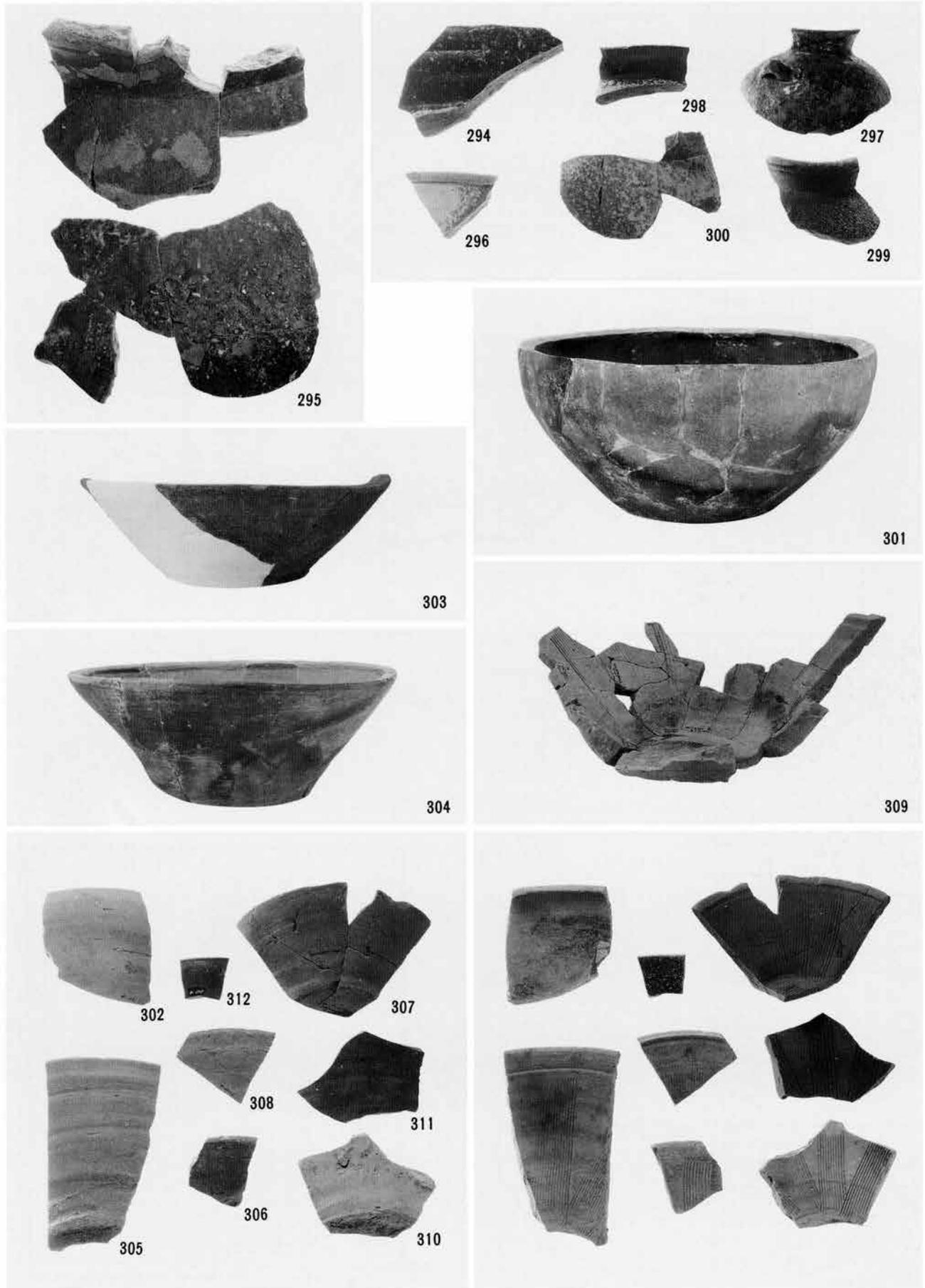


SD366 鉄釉碗253~260 皿261・262 香炉263 壺264 黄瀬戸鉢265 灰釉碗266 卸皿268・269 瓦質風炉270
 青磁碗271 皿272・273 盤274 白磁皿275・276 坏277 染付碗278~284 皿285~289 坏290・291 鉢292・293

整地層

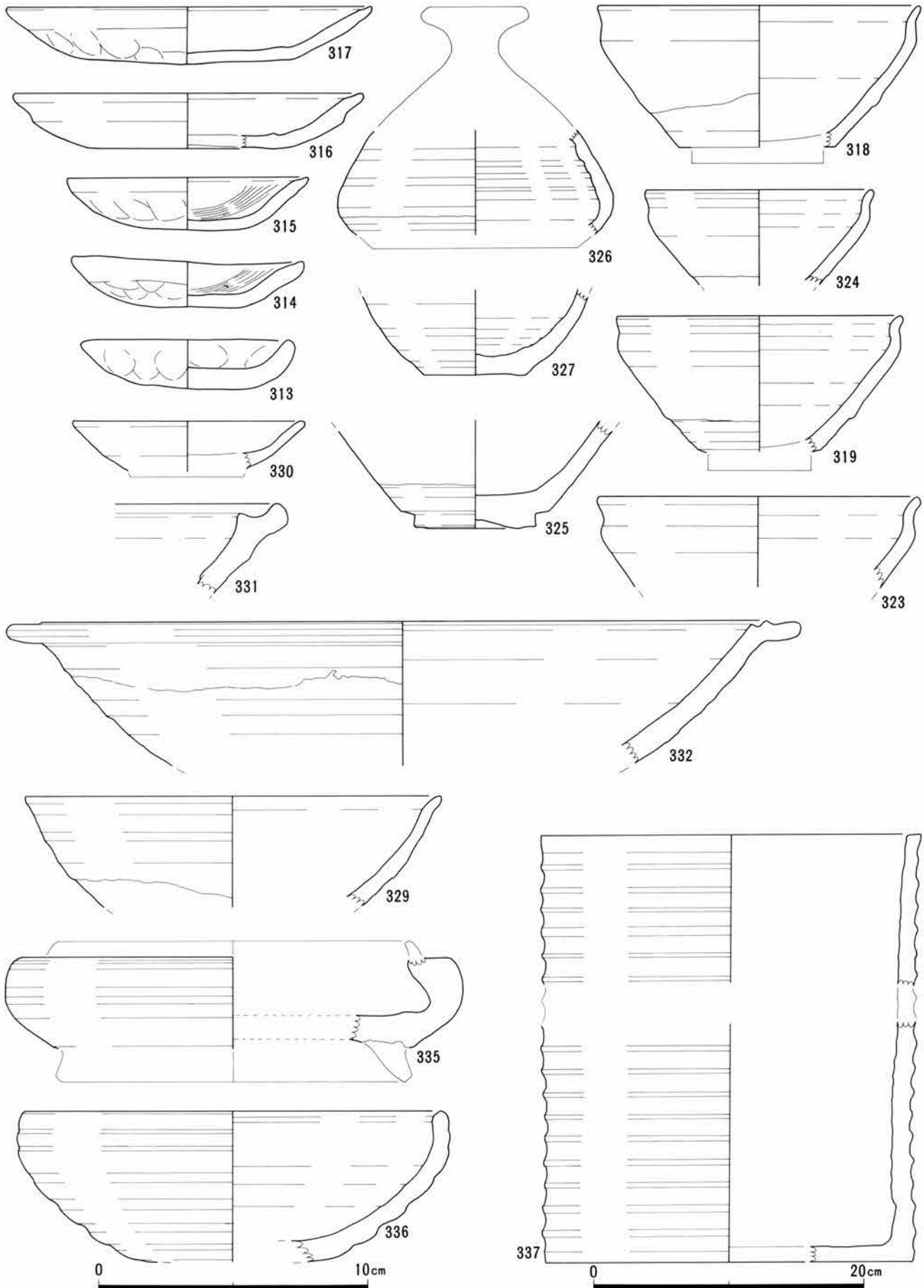


越前焼表294・295 壺296～299 鉢301～304 摺鉢305～311 火桶312

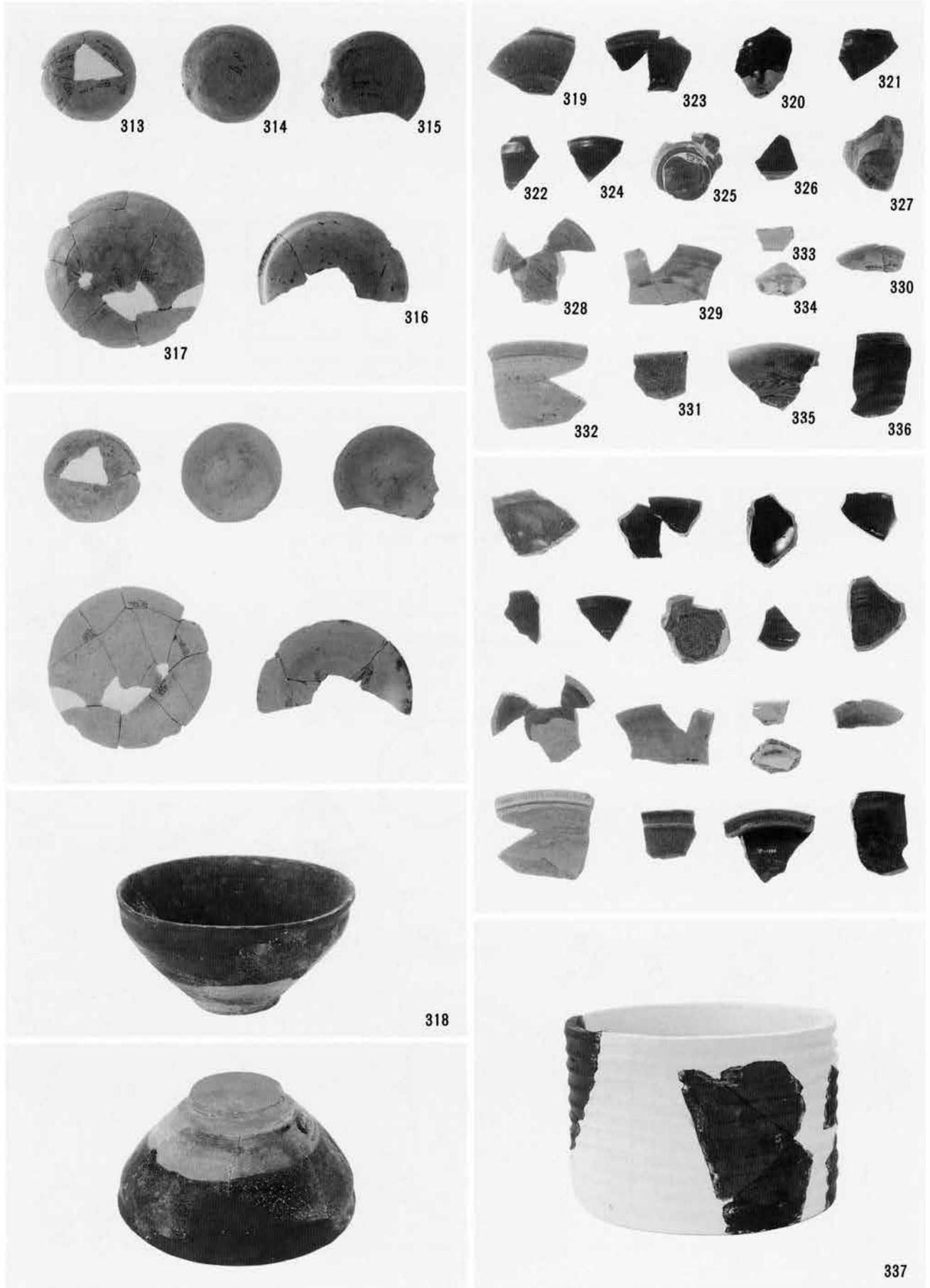


整地層 越前焼 294・295 壺 296～300 鉢 301～304 播鉢 305～311
火桶 312

第32図 第4・13次調査遺物(15)

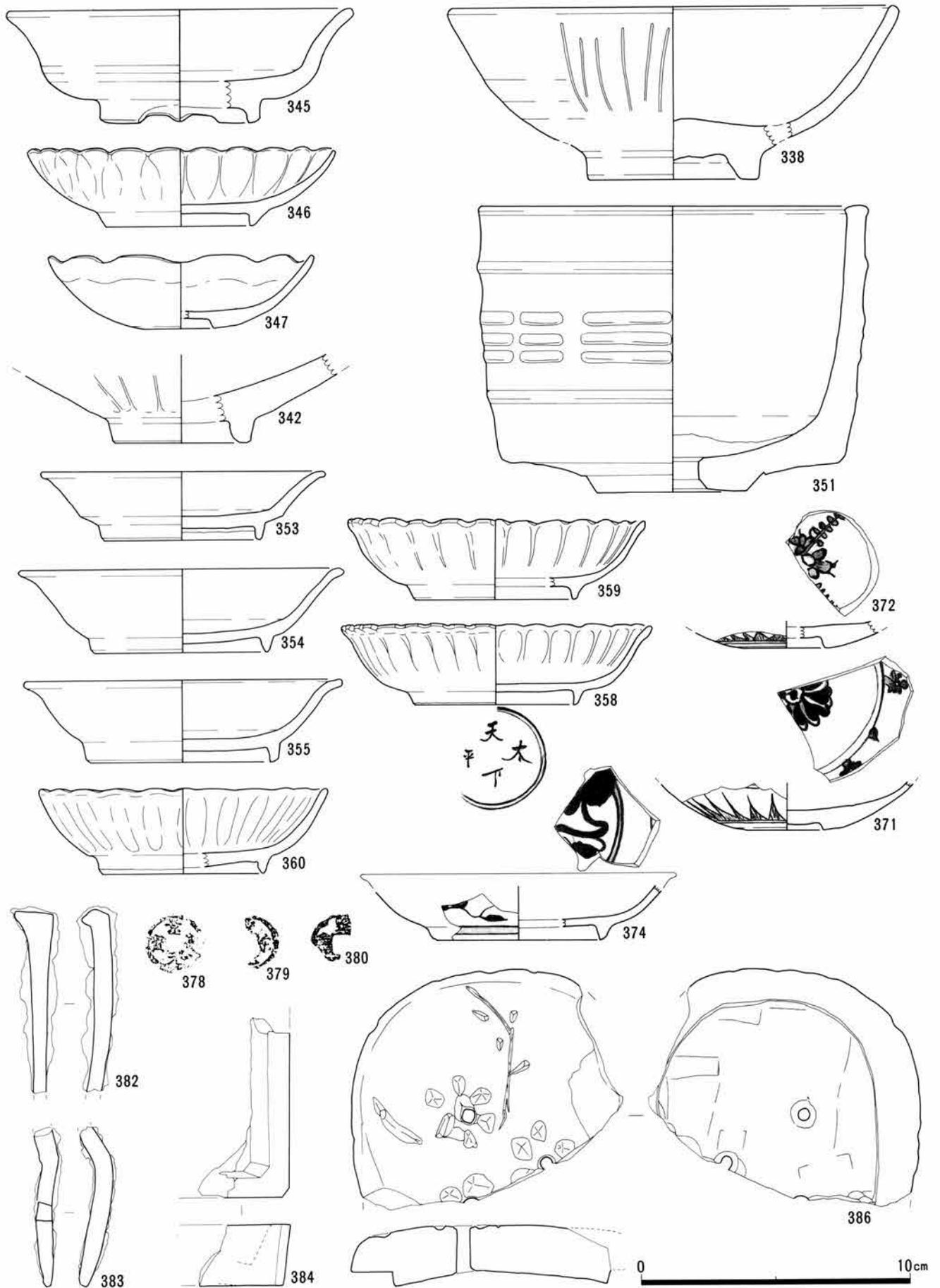


土師質皿313~317 鉄釉碗318・319・323~325 壺326・327 灰釉碗329 皿330 鉢331・332
瓦質瓦燈335 備前(?)鉢336 水指337

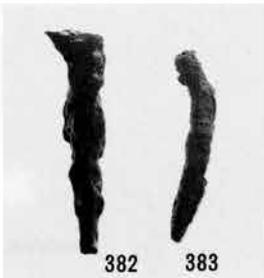
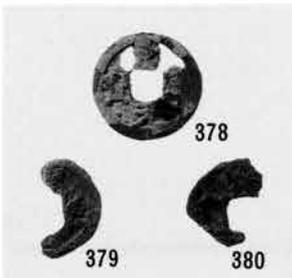
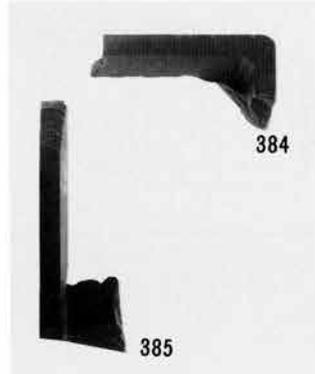
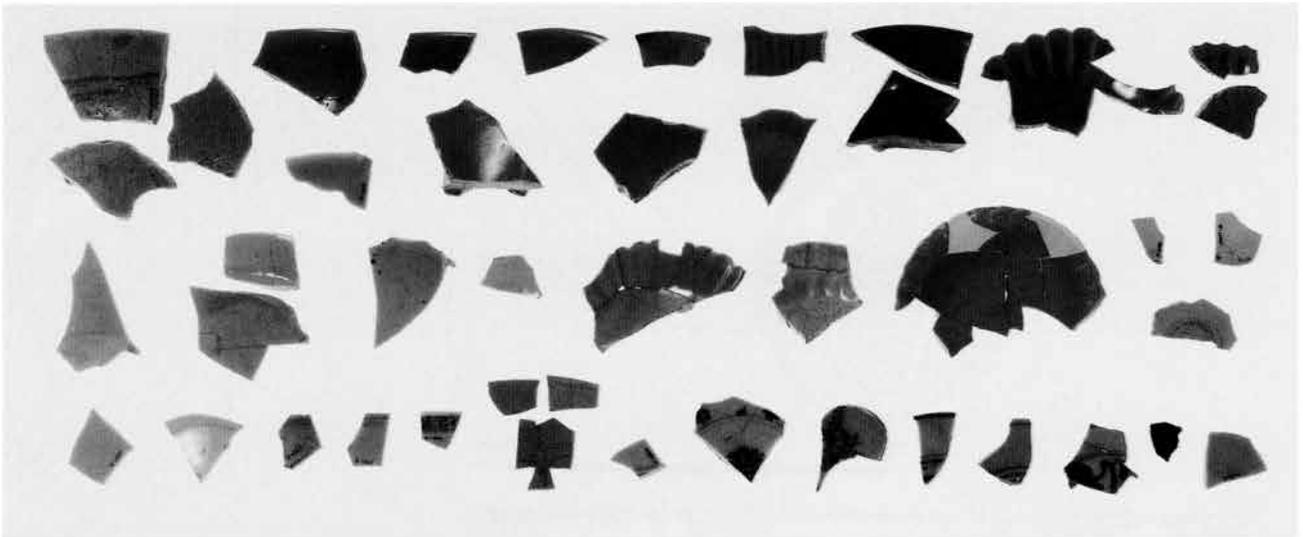
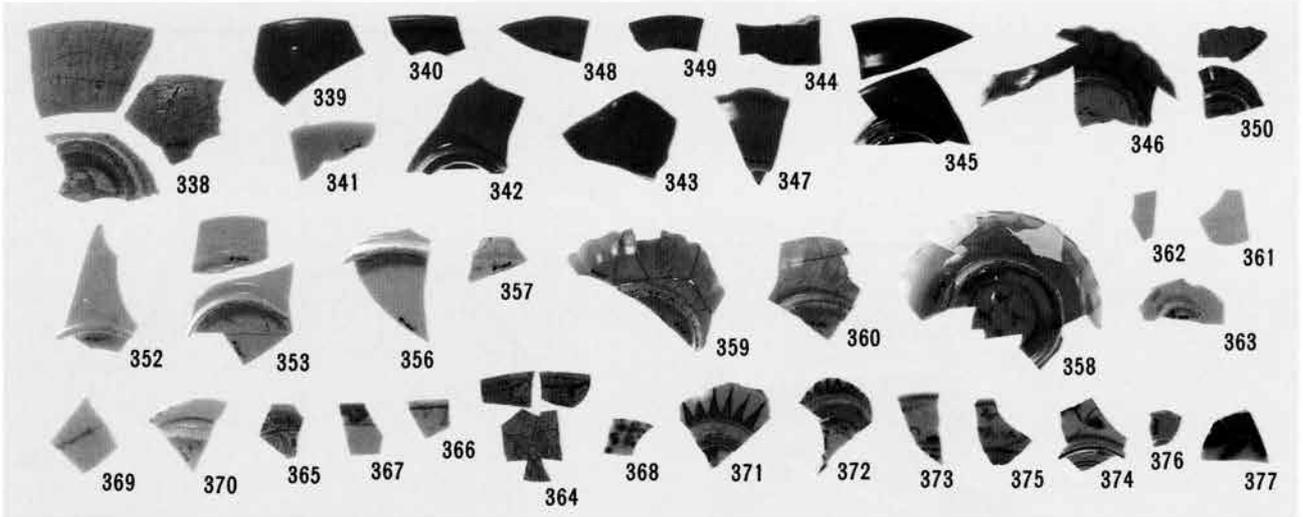


整地層 土師質皿313~317 鉄釉碗318~325 壺326~328 灰釉碗329
 皿330 鉢331・332 香炉333・334 瓦質瓦燈335 備前(?)鉢336 水指337

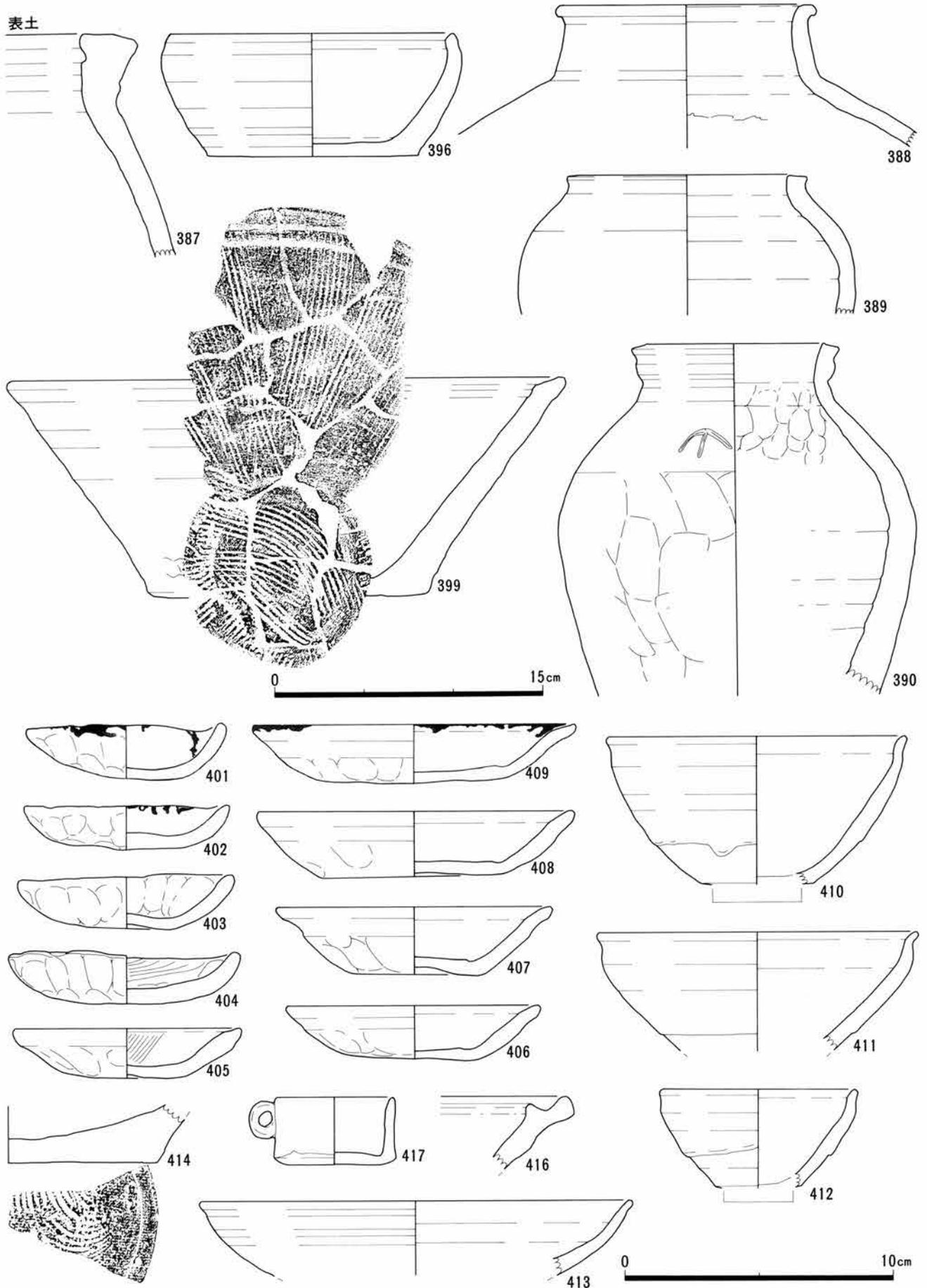
第33図 第4・13次調査遺物(16)



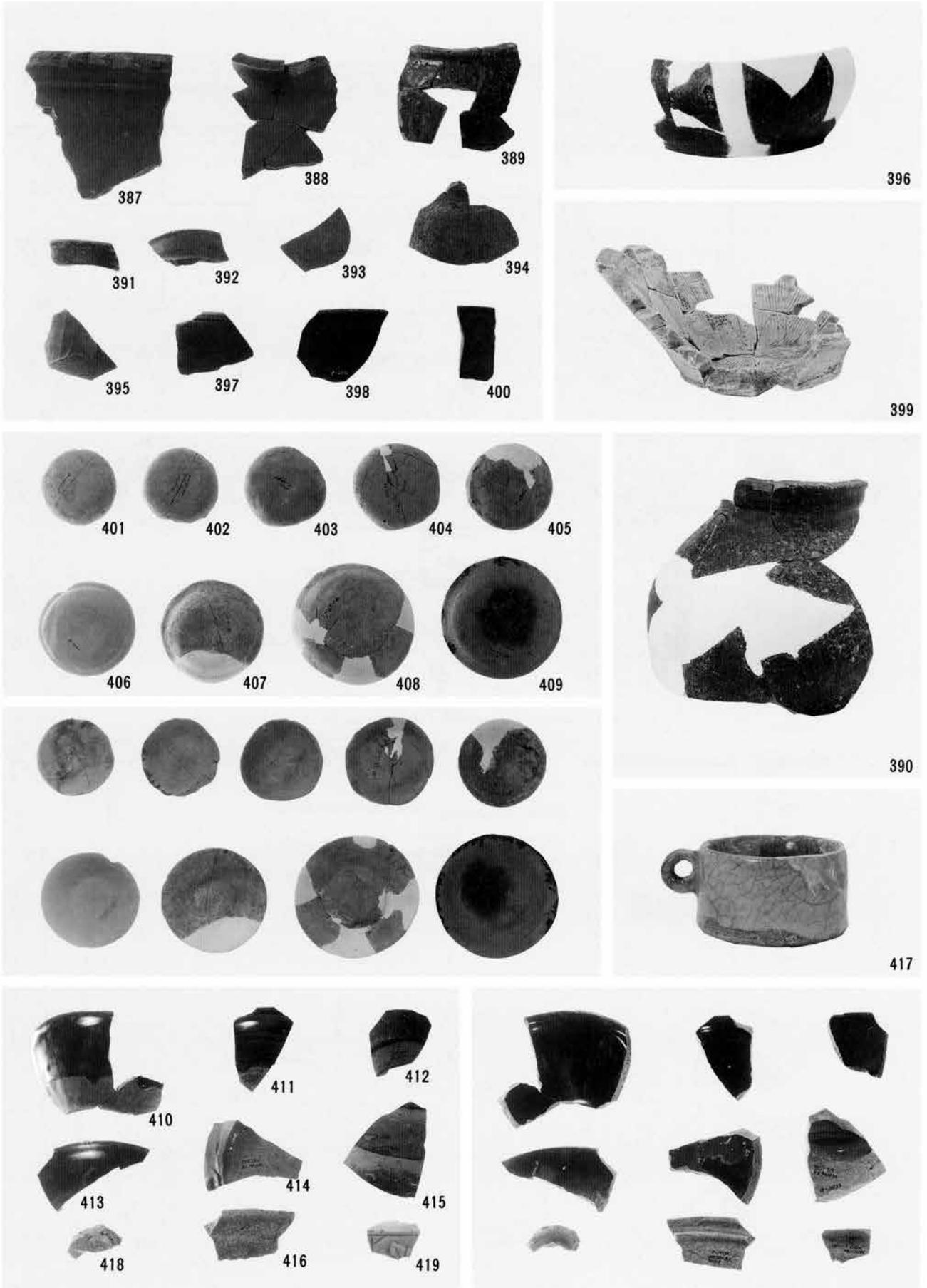
青磁碗338 鉢342 皿345~347 植木鉢351 白磁皿353~355・358~360 染付皿371・372・374
 金属銅銭378~380 釘382・383 石製品硯384 バンドコ(蓋)386



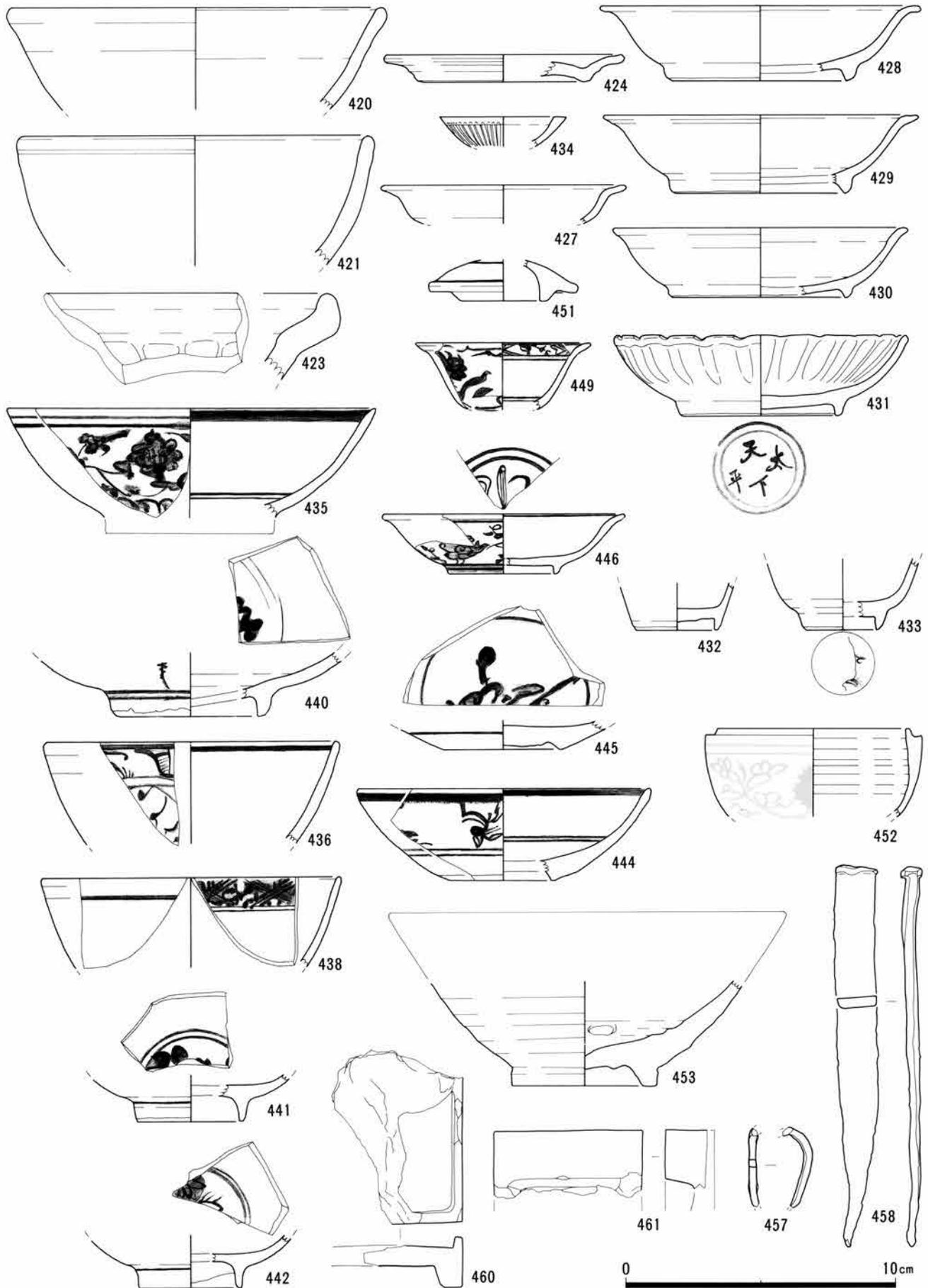
整地層 青磁碗338~341 鉢342・343 盤344 皿345~350 植木鉢351 白磁皿352~360 環361~363 染付碗364~370 皿371~376 鉢377 金属銅銭378~380 鉛玉381 釘382・383 石製品硯384・385 バンドコ(蓋)386



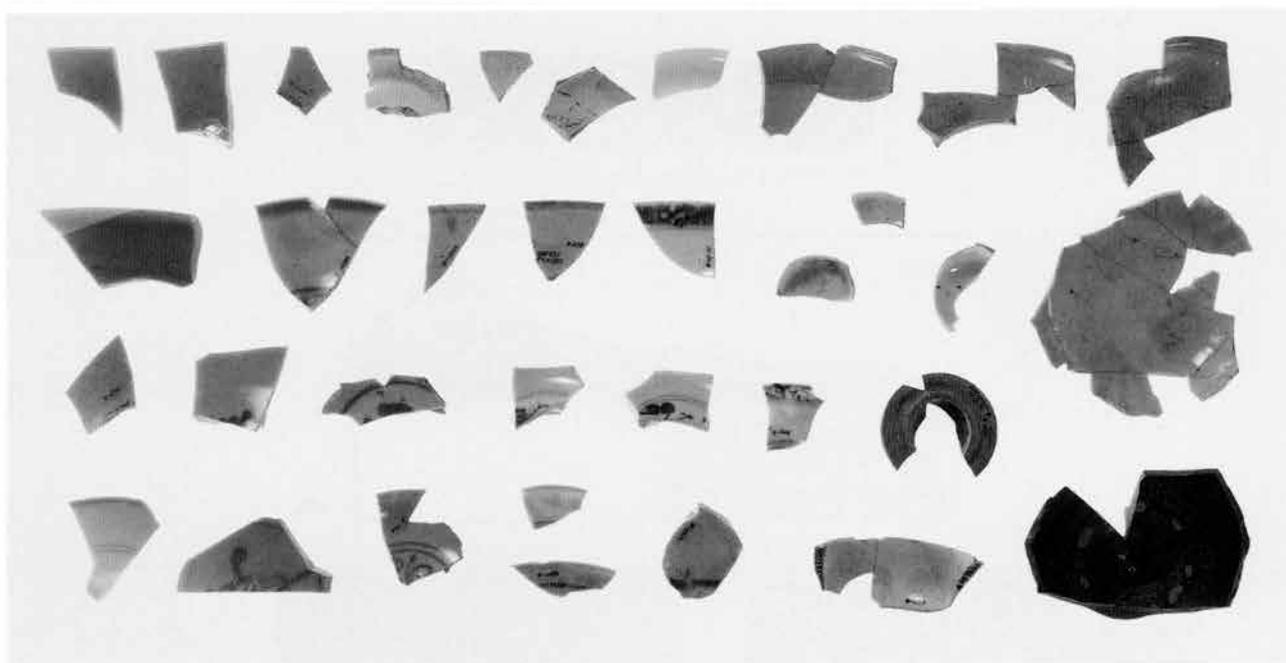
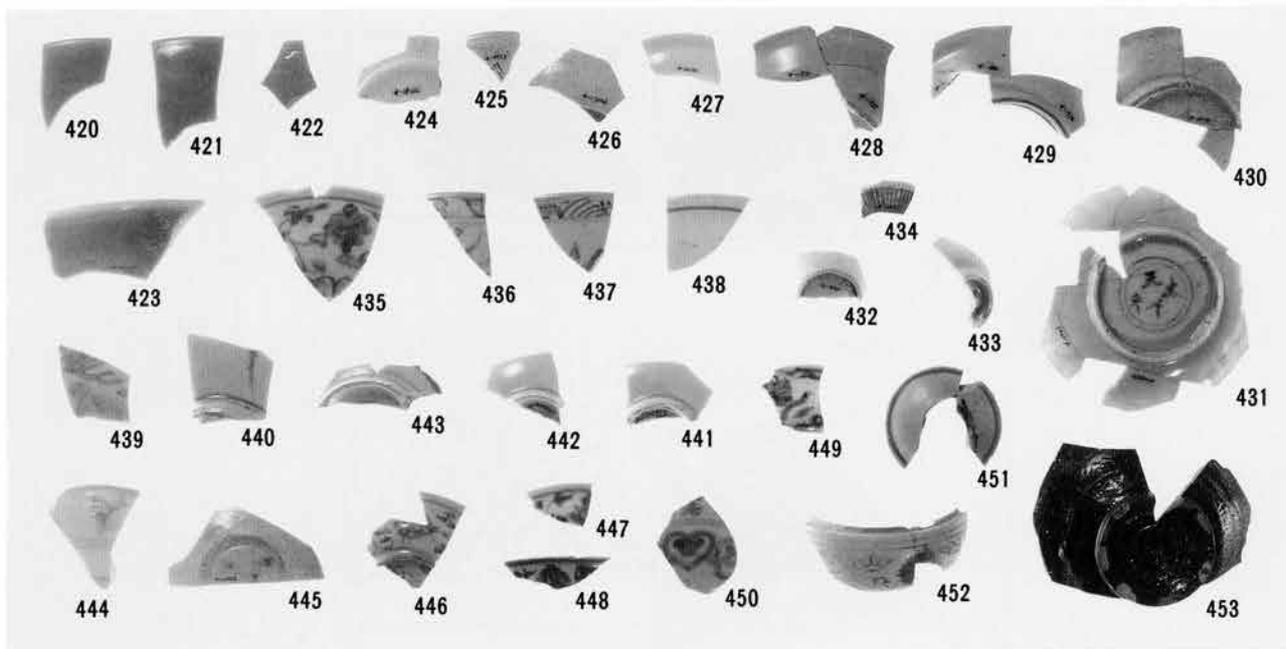
越前焼甕387 壺388~390 鉢396 播鉢399 土師質皿401~409 鉄釉碗410~412
鉢413 壺414 灰釉鉢416 鳥餌皿417



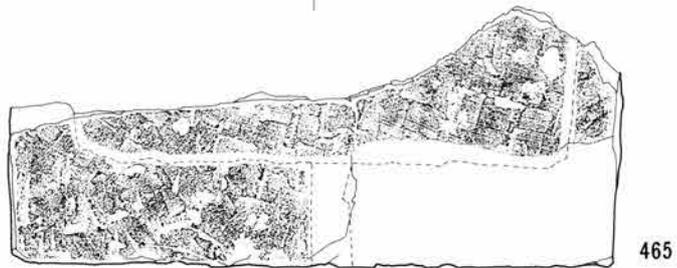
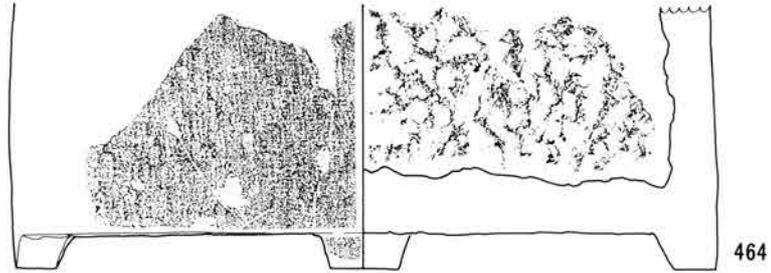
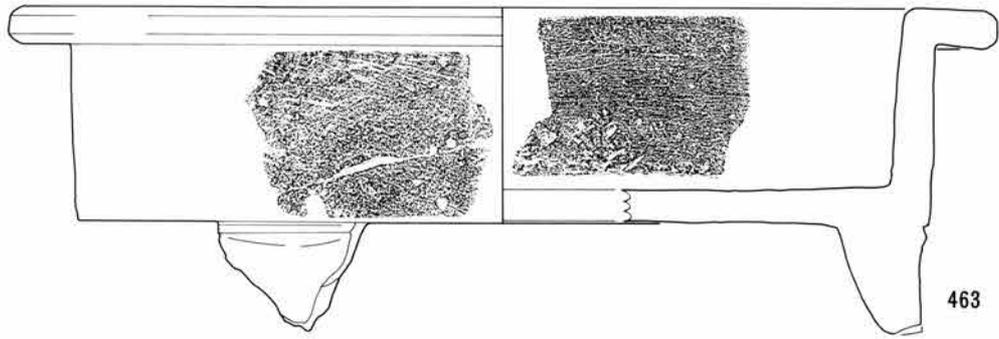
表土 越前焼 壺387 壺388~395 鉢396~398 播鉢399・400 土師質皿401~409
 鉄釉碗410~412 鉢413 壺414・415 灰釉鉢416 鳥餌皿417 茶入418 水滴419



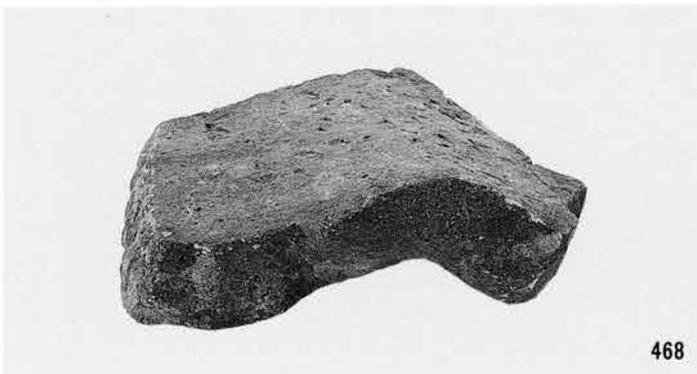
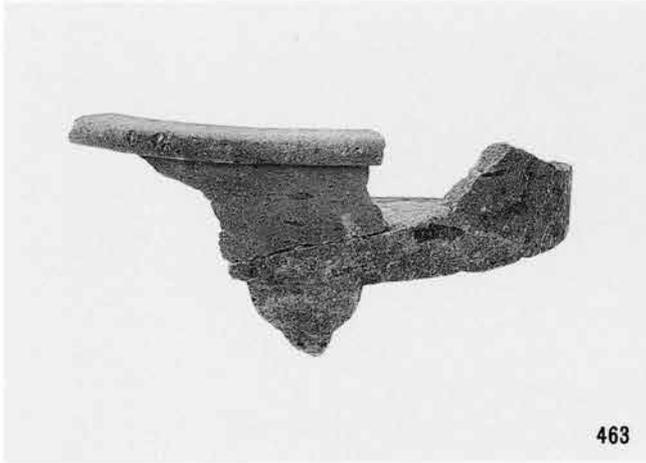
青磁碗420・421 盤423 白磁皿424・427～431 坏432・433 小皿434 染付碗435・436・438・440～442 皿444～446
 坏449 蓋451 赤絵合子452 朝鮮碗453 金属釘457 不明鉄製品458 石製品硯460・461



表土 青磁碗420~422 盤423 白磁皿424~431 坏432・433 小皿434 染付碗435~443 皿444~448 坏449 鉢450 蓋451 赤絵合子452 朝鮮碗453 金属銅銭454~456 釘457 不明鉄製品458 鉄鍋459 石製品硯460~462



石製品 盤463~465 水桶467



III、第 20 次 調 査

III、第20次調査

1、調査概要

第20次調査地区は、城戸ノ内の北の入口である下城戸から約50m南に入ったところにあり、一乗谷川の東岸の一段高いところに位置する。下城戸に近いところから軍事上重要な地区と考えられ、春日神社所蔵の「一乗谷古絵図」には「魚住出雲守」のほか、「朝倉斎兵衛」、「佐々生光林坊」等有力武将の名前が記され、伝承では朝倉次郎左衛門の名も伝わる。調査地区の裏の谷のことを出雲谷というところから、ここが魚住出雲守の屋敷跡であった可能性が高い。

今回の調査は、家臣団の屋敷、寺院、町屋と想定される所を発掘調査して城戸ノ内全体の様相を把握する目的の第2次5ヵ年計画の最終年度に当たる。第2次5ヵ年計画は初年度で館跡の調査を終了し、戦国大名の館跡を具体的な形で再現することができた。2年次の武家屋敷跡通称「新馬場」の調査では屋敷内部こそ削平されていて建物の配置など不明な点が多かったが、屋敷の前に幅4.5mの砂利敷の道路が走っていることが明かとなり町割追求の端緒となった。3年次は「新馬場」の西半分と「中の御殿」の北半分の調査を行った。4年次は、町割を追求するため計画を一部変更して「新馬場」の東の屋敷を調査することとなった。この屋敷は内部の残存状況が非常に良く、主屋を中心に茶室、蔵、使用人小屋、井戸、便所等が配置され、朝倉館建物配置を統合縮小した形になっていることが分かった。この屋敷跡については後に立体復元を行った。また「サイゴ寺」と伝えられた寺院跡の調査では三間堂と鐘楼かとも推定される建物等が発掘され、城下町内の小寺院を明らかにすることができた。最終年度の前半の調査は商業地区だったと伝えられる瓢町の調査を行った。この地区は東2/3が削平されていたが、西端では道路に面して間口6m前後の小区画の町屋が並んでいることが明らかになった。窯体の一部や非常に大量の土師質皿が出土し、またその中に商品にはならない歪んだ皿が含まれていたことからここで灯明皿が焼かれ、一乗谷の灯明皿のある部分はここから供給されたことが判明した。

こうした調査の成果を踏まえて、第20次調査は、朝倉館跡の調査や民家改築による事前調査以外には調査されることがない一乗谷川東岸のこの地区を調査地区に選定した。なお、この地区は「朝倉氏史跡公園基本構想」では、遺構の遺存状態が良好であればそれに基づいて立体的に復元整備を行う立体復元地区として位置づけられていた。

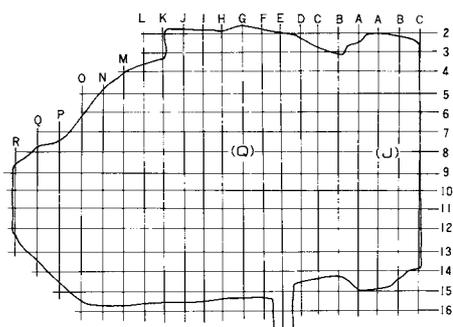
第20次調査地区は、福井市城戸ノ内町字出雲谷2～4番である。調査地区の設定は、上記の主旨から、畦畔から判断して最も広い屋敷が想定できるこの地を選んだ。調査面積は、東西約40m、南北約60mの面積2,200㎡で、調査期間は昭和51年8月11日～昭和51年12月20日の約4ヵ月間である。

発掘調査前は水田（買収後は草地）で、東に山を背負い、全体的な地形としては南東部から北西部方向に傾斜していたが、一部山裾の、後にS B 751・S B 750が見つかった所が周囲の水田面より0.5m程高くなっていた。西と北は2m～3mの段差がある。

調査は排土の都合上南北に分けて、北半分の耕土を排土したあと南半分の耕土を排土し、次に北半分の遺構面の検出、南半分の遺構面の検出といった方法で進めていった。遺構の残りが悪く耕土と床土を除去した段階の第1回目の遺構検出では、わずかの石列や溝S D 759、S D 757を除いては何も発見でき

調査日誌抄

第20次調査 (1976年8月11日～12月20日)



挿図20 グリッド設定図

- 8・11 発掘調査開始。調査地区の草刈。
- 8・13 発掘機材搬入。
- 8・18 下段のトレンチ設定。
- 8・20 耕土除去。
- 9・1 北半部を東から西に向かって遺構検出にかかる。
- 9・3 石敷 SX 782を検出した以外ほとんど遺構なし。
- 9・6 折り返して下層の遺構検出にかかる。
- 9・8 SD 761・SD 762を検出。
- 9・9 SD 762を検出
- 9・10 石積施設 SF 770・SX 790を検出。
- 9・13 南半分の遺構検出にかかる。
- 9・16 礎石 SX 792を検出するが、建物としてまもらない。
- 9・20 礎石 SX 793を検出をするが、建物としてまもらない。
- 9・24 石列 SX 807・SX 803・SD 759を検出。
- 9・27 南半分折り返して下層検出にかかる。
- 9・29 SD 757を検出。下層ではないが見落とししていた掘立柱建物 SB 750を検出。
- 9・30 礎石建物 SB 751・石組溝 SD 754・SX 778を検出。
- 10・1 SD 754を追う。SK 775を検出。
- 10・4 南半分の下層遺構検出を終わる。
- 10・6 掘立柱建物 SB 750の柱穴を発掘。SB 751の礎石あとを検出。
- 10・7 SK 775など遺構内を発掘する。
- 10・8 下層遺構面の確認調査を行う。SX 778・SX 795等を検出。
- 10・12 さらに下層のSB 752を検出。その過程でSD 757がSB 752と同時期であることが分かる。
- 10・12 下層確認のためトレンチを入れる。SB 753を検出。
- 10・14 SF 769・SD 765を検出。
- 10・15 下段のトレンチを調査。
- 10・18 SD 766・SD 767・SV 776を検出。
- 10・22 トレンチの西半分はもと河川敷であったことを確認。
- 10・25 写真撮影のための清掃。
- 10・28 写真撮影。
- 11・1 遺構実測図作成のための遺方を組む。
- 11・5 実測
- 11・17 土層図作成。
- 11・20 土層観察用の畦を除去。
- 11・25 写真撮影のため清掃
- 11・26 写真撮影。
- 12・1 柱根掘り上げる。
- 12・5 補足調査。
- 12・10 調査終了。機材撤収。

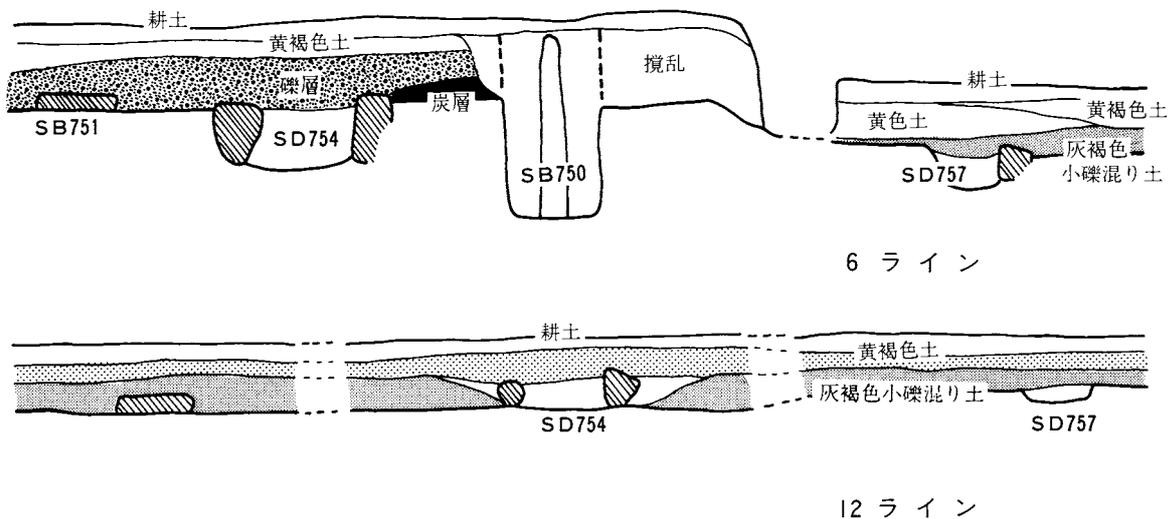
2、遺 構（第37図～第45図，P L. 32～P L. 40）

検出した主な遺構は，礎石建物2，掘立柱建物1，溝7，石積遺構3，土壌1である。他に礎石と考えてまちがいないものもあったが，建物としてはまとまらなかった。これらの遺構は大きく3時期に分けられ，下層から順にⅠ期，Ⅱ期，Ⅲ期と呼ぶこととする。屋敷の範囲は，東は山で西と北は段に限られ屋敷の境界がはっきりしているが，南は地形的な境界はない。溝 SD 757 を隣屋敷との境界とすることもできるが，溝の規模や山裾で南に曲がっていること，溝の時期についてもⅠ期に限られること等から決め手に欠ける。

遺構の記述は，層序，Ⅰ期，Ⅱ期，Ⅲ期と古い順に述べる。使用する方位はこれまでの例に従い谷の入口を北とするが，この付近ではほぼ磁北どおりである。なお，遺構平面図等の外に記した数値は第Ⅵ系座標に基づくものである。

a、層 序

山裾の一部を除いて各時期の整地層が薄く遺構のレベルが近接していることと，後世の削平が著しく上層の整地層がすっかり削られて石積施設の底の一石だけが残っている場合などがあって，遺構の時期決定が難しい面もあった。しかし，幸い発掘区のほぼ全面にわたって青褐色土と茶褐色土の整地層があり，これに東西方向の SD 754 と SD 758 の溝を組み合わせることで基本的な3時期の遺構面をほぼ確定することが出来た。調査区の西半分では基本的に耕土，青褐色土，茶褐色土，暗褐色土の順に堆積している。土層と遺構との関係は，耕土の直下にある青褐色土をベースにした遺構はなく，その下位にある茶褐色土をベースとする遺構は SD 754 がある。SD 754 は，SB 751 を取り巻いているので，SB 751 と SD 754 は同時期と見なしてよく，これらの遺構面をⅡ期とした。一方溝 SD 758 はさらに下位にある暗褐色土を掘り込んで造られており，最も下層にある。同じく石積施設 SF 769・礎石建物 SB 753 も暗褐色土をベースに造られており，これらの遺構面をⅠ期とした。掘立柱建物 SB 750 がある一段高い所は耕土，黄褐色土，炭層，炭混灰褐色土層，炭層，青灰色土層の順に，礎石建物 SB 751



挿図21 土層概略図

があるところは耕土、黄褐色土層、山土礫層、小礫混山土層の順に堆積している。これらの土層は西半分の土層と共通しない。II期とした SB 751は小礫混山土層の上に建てられており、掘立柱建物 SB 750はこれを覆う山土礫層の上位にある黄褐色土をベースに建てられているので、これをIII期とした。

b、I期の遺構

I期の遺構は非常に少ない。一度地均しした上にII期の遺構を造成したと考えられ、石積施設 SF 769の側石が2～3段しかないことに、それが窺われる。

遺 構		摘 要
種 別	遺構番号	
礎石建物	SB752	数石残るのみ
"	SB753	現状では1間×2間
石積施設	SF769	
石組溝	SD765	
"	SD757	発掘区を東西の横断
"	SD758	SD757に合流
	SX785	
	SX787	

表4 I期の遺構一覧

SD757 発掘区の南端近くを東から西に貫いて流れる石組の溝で、東端近くで南に折れ曲がる。溝が残っているのは、東端から15m分だけで、それより西は削平されてわずかに窪んでいるだけである。長さは約55m、幅は残存状態のよい東端で0.45m、深さは0.4mである。溝の幅や深さだけでなく使用されている溝石も屋敷内の他のそれよりも大きいところから、あるいは屋敷の境界になる溝かも知れない。なお、SD757に南から流れてきた石組溝SD758が取り付く。

SB752 発掘区の南西部に位置する礎石建物である。残存状態が非常に悪く、礎石は4～5石のみ確認できた。建物の方向は東西方向と考えられ、現存する限りでは東西7.2m×南北5.7mを計るが、規模その他についてはほとんど不明である。すぐ南にある東西溝SD757とは2°程ずれる。

SB753 発掘区の中央やや西寄りで検出された礎石建物である。検出した礎石は1.7m×3.6m分で非常に小規模である。下層確認のため下げたトレンチで見つかったのも南と西に延びる可能性があるが、この建物の礎石が小振りだったことから、あまり大きい建物にはならないと考えられる。

SF769 発掘区の北西部で、トレンチを入れて下層の確認調査をしたとき検出した。規模は3m×3mとほぼ正方形で深さは0.4mを計る。削平されたらしく西側の石積はなく、他の面も2段しか残っていない。内部は焼土や灰で埋まっていた。

SD765 石積施設SF769の西側に隣接する南北方向の石組の溝である。残存状態が悪く4m分しか残っていない。溝の東側の石が大きく、北端で溝の方向が変わるところから付け替えがあったようである。

SX786 SB751の西に設けたトレンチで検出した南北方向の石列である。東側に面があるが、4石だけなので性格は不明。

SX787 石列SX786の南に位置する柵列である。1辺15cm程の角材を4本4.3m分検出した。西側3本の間隔は1.2mと等間隔であるが、東の1本がやや北に振れ間隔も1mと狭い。

c、II期の遺構

SB751 発掘区の東よりに位置する礎石建物である。礎石はほとんどが抜かれて5個しか残っていなかった。幸い礎石の抜取り跡がいくつか確認できたので、それによって規模を復元すると南北7.5m(4間)×東西4.7m(2.5間)である。柱間寸法は1間1.88m(6尺2寸)と推定される。この礎石建物SB751があったところは周囲より一段高くなっていたらしく、北側に石垣SX778がつき、西側も段になっ

ている。また東と南は石組溝 S D 754 が巡る。ただ S D 754 は東側で礎石建物 S B 751 と平行にはならず、 10° 程ずれる。

S D 754 礎石建物 S B 751 の東と南を取り巻く石組の溝である。東側は S B 751 から 0.5 ~ 1 m 離れるが、南は 0.3 m しかはなれていない。東側は溝石が割合残っていたが、南側はほとんど残っていない。使用されている石は小振りでかなり乱雑に積んでいる。幅は 0.3 m、深さは 0.25 m を計る。東側は 7.5 m あり、南側は 24 m まで延びているが、それより西は削平されて消失している。先述したように東側は礎石建物 S B 751 と平行ではなく、約 10° 東に振れているが、南側は平行である。東側では溝の中に礎石建物 S B 751 に使用されていたとも考えられる屋根材（柿板）が多数出土した。この溝に S D 756 が取り付く。この溝とすぐ南に位置する石敷遺構 S X 799 との関係は不明である。

S X 777 礎石建物 S B 751 の北に位置する東西方向の石段である。自然石を 2 ~ 3 段積み上げたもので S B 751 と方向が一致する。石段の高さは約 0.2 m である。この段によって礎石建物 S B 751 は周囲のレベルより少し高くなっている。S X 777 の西端近くで駒頭を検出した。石の間に半ば埋まっているような状態で出土したが、元の位置を保っているかどうか不明である。

S D 761・762 発掘区の北半に位置する東西方向の石組溝である。これらの溝は間が離れている上に方向も少しずれているが、元は一本の溝だったと考えられる。S D 762 は溝石の大部分が残っているが、S D 761 は溝石がほとんど失われている。使用されている溝石は小児頭大で余り大きくなく溝幅も 0.2 m と狭い。

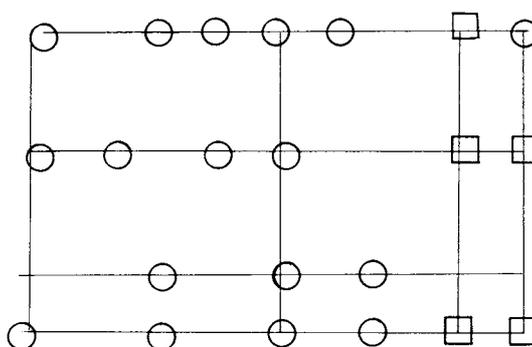
S F 770 発掘区の北西部で検出した石積施設である。残存状態はあまり良くない。側石は、面の整った自然石を 2 段積んでいるが、西側の石のすべてと北側の大部分とが失われている。規模は $3.5\text{m} \times 2\text{m}$ 、深さは 0.4 m である。中は黄褐色の山土で埋められており、土師質の皿が少量出土した。

S F 771 発掘区の西端で検出した石積施設である。残存状態が悪く、側石は 1 石分しか残っていない。規模は $2\text{m} \times 1.2\text{m}$ 、深さは 0.3 m を計る。S F 771 の方位は今回の調査で検出したどの遺構とも異なっており、 $N 40^{\circ} E$ 振れている。中は拳大の石で埋められており、出土遺物はほとんどない。上端部が押さえられなかったうえに他の遺構とはなれているので II 期の遺構とする積極的根拠はない。

S X 790 発掘区の西端近くで検出した石列である。東側に面を描いてあり、すぐ側に自然石が 2 石立

遺 構		摘 要
種 別	遺構番号	
礎石建物	SB751	溝に囲まれ礎石の大部分が抜き取られている。
石組溝	SD754	発掘区の中央を東西に貫流。
"	SD761	地山に直接掘り込まれている。
"	SD762	SD761の続きか。
土 壙	SK775	灰や炭が混じった土で埋まっていた。
石 垣	SX777	礎石建物SB751に関連する石垣。
礎石群	SX789	
"	SX793	
土壙群	SX795	
"	SX788	浅い pit 群で、灰や炭が詰まっていた。
石 列	SX790	
石積施設	SF771	方向が他の遺構と異なる。
"	SF770	2段のみ石が残る。
	SX800	水に関係する遺構か。

表5 II期の遺構一覧



挿図22 SB751模式図

った状態で存在する。庭園の可能性も考えられる。

S K 775 発掘区のほぼ中央で検出した東西方向の土壌である。規模は長さ15m×幅1.3m×深さ0.4mを計るが、土壌が不整形で両端が浅くなっていたので曖昧な点も残る。土壌は焼土や灰が混じった土で埋められており、土師質皿が多数出土した。

S X 792 発掘区中央やや南よりに検出した礎石群である。レベルはほとんど同じで、礎石の大きさも割合大きいですが、それぞれがかなり離れているので、一つの建物とは限らない。

S X 788 礎石建物S B 751の西側の一段低い位置にある。この付近は薄い粘土質の土がなん枚も重なっており、その間に薄い炭化層が存在する。そのため粘土の遺構面を少し削ると下の炭化層が表れるが、S X 788はその炭化層群内のピット状遺構である。こうした粘土層と炭化層の互層は、一乗谷内の他の調査では建物内の土間⁽¹⁾だった例がある。

S X 789 発掘区のほぼ中央部、S D 754の北に位置する礎石群である。3石検出されているが、建物の規模等については全く不明である。

S X 800 発掘区の東、S D 754に隣接するように位置する石敷の遺構である。規模は1.7m×1mで、側石にやや偏平な河原石を立て中に小砂利を敷き詰めている。このS X 800は他の遺構と全く異なった方位を示す。溝の側にあるところから水を使用するなんらかの施設であろうか。なお、17次調査（サイゴ寺）でも、中に敷き詰められている石が少し大きいがよく似た遺構（S X 536）が検出されている。

S D 763 発掘区の北東部で検出した石組の溝である。非常に残存状態が悪く2.3m分しか残っていない。側石も北の端に2石とどめるだけである。なおこの付近は耕土と床土を除去するとすぐ地山の岩盤が現れ、かなり削平されて断片的な溝石が岩盤に直接乗ったような状態で検出された。

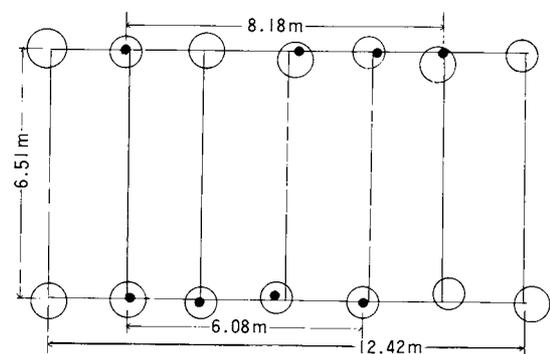
S X 799 S B 750の下層から検出された石敷遺構である。狭いトレンチ内での検出だったので規模や性格は不明である。厚さ0.03~0.04mの炭層で覆われていた。

S X 796 S B 750の下層から検出された木製の樋である。S B 750の西側の柱列は上層が後世の石垣を積む際に削平されていたので、石垣を除去する際に見つかった。木はかなり朽ちていて側板らしきものが1.2m分と両側の2本の杭が残っただけだった。2本の杭の間隔は0.3mである。

S D 764 S D 764は東側の側石を失っており、溝の凹みもほとんどなかったが、S D 763と月方向が同じことから、この二本の溝はつながっていたと推定される。

d、III期の遺構

S B 750 発掘区の東端近くで検出した掘立柱建物である。建物の方向は南北方向で、規模は南北12.4m（6間）×東西6.5m（1間）を計る。東西方向の柱間は6.7mもあるのに1間しかない。柱根は8本残っている。梁行き方向の柱間寸法は6.48m~6.52mと割合一定している。しかし、桁行き方向の柱間寸法は2.7mから3.25mまでばらつきがあり一定しないので、東側の柱列と西側の柱列とを順番に対応させると各々が平行にはならない。残っている8本



挿図23 S B 750模式図

の柱根は直径は20cm前後の丸柱である。木材は広葉樹と推定されるが、材質の同定は行っていない。柱穴の大きさは、直径0.8～0.9m、深さ0.8～0.9mである。柱穴の掘り方内は焼土や灰で埋められていた。特に南端の2つの柱穴からは銅製の飾金具や溶けた銅片が多数出土しているが、この建物の性格となんらかの関係が推定される。

遺 構		摘 要
種 別	遺構番号	
掘立柱建物	SB750	柱根が8本残る。
土 壇	SK759	有機質土で埋まる。
石 列	SX803	
"	SX807	SB750内にあるL字状の石列。
	SX782	

表6 III期の遺構一覧

SK 759 発掘区の東端で検出した東西方向の石組の土壇である。長さは4.5m、幅0.7m、深さ0.4m

を計る。南側は側石が2～3段残っていたが、北側はすべて失われていた。溝内は灰の混じった土で埋まっていた。溝とも考えられるが、内部に水が流れた跡がないことや、幅が広く深いのに流れて行く先がないことから土壇とした。

SX 803 SK 759のすぐ西に位置する石列である。8石ほど並び北に面を揃えているが、性格は不明である。

SX 807 SB 750の中に位置するL字形の石列である。この石列SX 807と掘立柱建物SB 750との関係については一応同時平行とするが微妙なものがある。それはSX 807のレベルが少し高いこと、すなわち、耕土と床土を除去して遺構検出作業の中でSX 807を検出したが、その時SB 750は確認していなかった。さらに0.05ないし0.1m掘り下げた段階でSB 750を検出した。こうした点からSB 750が破棄された段階でSX 807が造られたとの見解も成り立つ。しかし、土層からは削平されていることもあって、確認できなかった。

SX 782 発掘区の北よりで検出した7石からなる石敷である。この付近でIII期の遺構はこれだけである。

e、トレンチの遺構

西側の一段低い水田のどこまで遺構があるか確認するため、幅3mのトレンチを一乗谷川まで入れた。この付近の一乗谷川は、戦後に川幅分を西に寄せて付け替えており、元の川の位置を確認する意味もあった。

SV 776 魚住出雲守と推定される屋敷跡の石垣で、ほとんど破壊されていて下の2、3段しか残っていなかった。人頭大よりやや大きい石を使用している。

SD 766 石垣から3m西にある南北方向の石組溝である。2m分しか残存していなかった。

SD 767 SD 766に直交する石組溝である。一乗谷川の方へ流れ、5m残存していたが、東半分はかなり壊れていた。

SX 804 SD 767がある水田よりもう一段下がった水田で検出した砂利敷の道路状遺構である。幅は1.2mで南北方向に延びる。ただ砂利敷も薄く道路と断定はできない。

SX 804より西は砂利層になっており、明治初年の地籍図どおり一乗谷川の河川敷だったことを確認した。

注(1)「特別史跡、一乗谷朝倉氏遺跡XV I」SB 2975内のSX 3006が炭化層と粘土層が重なっていた。

3、遺物 (第46図～第65図, PL. 41～PL. 55)

第20次調査区(字出雲谷地区)出土の遺物について報告する。この地区は、既に前項において述べられたように、遺構の保存状態があまり良好とは言えず、他の調査区に比べて遺物の出土量も豊富ではない。位置的には、一乗谷川河畔より一段高い河岸段丘上にあり、一乗谷の各調査区でしばしば見受けられるように、河川の護岸工事のための土取りや耕作のための客土で削平・攪乱を受けていることが予想される地区である。そこで、柱穴・ピット、石積施設あるいは石組溝などの、帰属が明らかな出土遺物については、一乗谷廃絶後の開田時期における、削平・埋め戻しによる遺物の混入の疑いが残るものではあるが、その問題を一旦、棚上げして、なるべくそれらの遺構に沿って遺物をまとめ、報告することにした。それ以外の遺物については層位を重視し、土層毎にとり上げられた遺物を整理する中から、層位的な特徴あるいは分布の状況を追及することに主眼を置いた。

遺構の遺物としてとり上げたものに柱穴を含むピット群の遺構がある。掘立柱建物 SB 750 の柱穴や西側段下では、炭・焼土層がかなりの範囲に亘って確認されており、ここから良好な遺物が得られた。あるいは又、東西方向に走る溝でも、割合にまとまった遺物の出土を見ている。

文中の越前焼の分類については、朝倉氏遺跡資料館編1983『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』の小野正敏による分類を踏襲し、その分類に従った。又、中国製陶磁器についても青磁・染付等々の分類は小野正敏1982「15, 16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No. 2』に従った。その他についての土器の編年観は福井県教育委員会1979『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書I 朝倉館跡の調査』および1989年度までの発掘調査・整備事業概要報告書(年度報告)に拠っている。詳細については、それらを参照されたい。

遺物の器種構成と出土状況

本調査区において出土した遺物は破片総数12,121である。内訳は表7に示した通りである。割合からみれば、越前焼と土師質土器の合計が90%以上となり、圧倒的多数を占める。これは朝倉館の調査をはじめと

器種	破片数	%	器種	破片数	%
甕	1,943		碗	185	
壺	758		皿	86	
鉢	159		環	7	
播火鉢	658		鉢	3	
他	3		盤	1	
	2		他	3	
越前焼計	3,523	29.1	染付計	285	2.4
皿	7,340		中国製陶磁器計	685	5.7
耳丸土	4		碗	1	
土鉢	2		壺	6	
土釜	21		他	2	
土釜	73		朝鮮製陶磁器計	9	0.1
土鍋	1		銅	32	
壺	5		釘	8	
芯押さえ	1		鉄鍋	1	
他	1		飾金具	14	
土師質計	7,448	61.4	切羽	1	
碗	109		靴	1	
皿	4		和火鏡	1	
壺	15		火火箸	3	
茶入	1		包提子	1	
環	1		銅板	1	
他	1		銅輪	9	
鉄釉計	131	1.1	銅	1	
碗	4		棒	1	
皿	14		盤	1	
鉢	5		銅製品・他	7	
環	1		鉄製品・他	6	
火鉢	1		金属製品計	88	0.7
香炉	1		バンドコ	71	
灰釉計	26	0.2	硯	7	
瀬戸・美濃計	157	1.3	砥石	5	
香炉	1		盤	6	
壺	6		火鉢	7	
火鉢	1		壇石	1	
他	2		水壺	2	
瓦質計	10	0.1	他	1	
皿	1		石製品計	114	0.9
他	1		漆碗	14	
須恵質計	2	0.02	漆皿	2	
信楽水指	1	0.01	蓋	2	
国産その他	40	0.3	鉢	3	
日本製陶磁器計	11,181	92.2	箱	2	
碗	73		桶	1	
皿	31		木片他	4	
鉢	29		木製品計	28	0.2
盤	6		種	15	
香炉	11		皮	1	
壺	3		その他計	16	0.1
他	1				
青磁計	154	1.3	合	12,121	100.0
碗	3				
皿	211				
環	25				
鉢	5				
他	2				
白磁計	246	2.0			

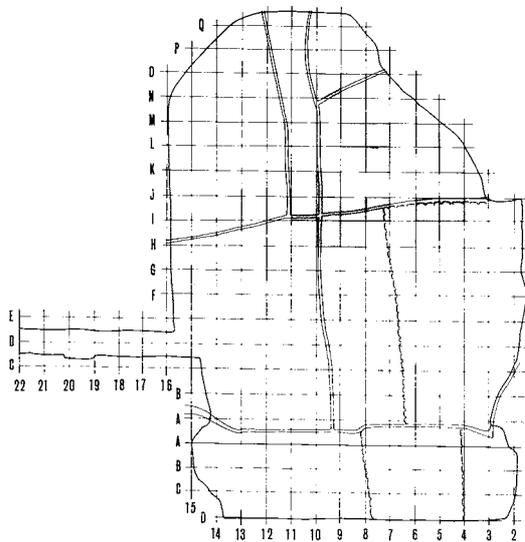
表7 第20次調査区出土遺物一覧

する武家屋敷や寺院跡・町屋跡の出土遺物の器種構成と比較した場合、国産陶磁器の偏りが共通して指摘でき、それに対して寺院・町屋が90%を割って80%内外の数量を示すことと対照的である。

瀬戸・美濃の鉄釉や灰釉製品については合計が1.3%と非常に少ない。鉄釉では、破片の殆んどはいわゆる天目茶碗によって占められている。灰釉は皿破片が多数を占めており、碗・皿の補完関係を有している。中国製陶磁器は5.7%となっており、他の武家屋敷の調査区と比較して、平均的数値を示す。青磁では碗・皿の合計が104点、白磁では皿が圧倒的に多く211点という数値を示す。これに染付の碗破片数185点とを比較すると、青磁と染付が碗、白磁が皿の需要が多いという傾向、即ち一乗谷の平均的な在り方であるが、そうした状況をよく示していると言える。

金属製品や石製品、木製品はいずれもその数値は1%以下を示す。全体の数量から見れば極めて少ないのであるが、多種・多様な生活用具の一部であり、それ自体が直接、用途や機能を語る。ただ、土器ほどに普遍的な遺存の状況を示さず、出土する地点や層位にもバラツキがある。バラレルな比較の資料

となり得ない所以である。石製品には表中からは脱落したが、石仏や石塔が混じっていることが注目される。後述の遺物説明では図版とともに触れている。



挿図24 青色礫混り土層遺物分布図

青色礫混り土層出土遺物(PL.41, 第46図)

この土層は概ね調査区の北東部、H列・10ラインに囲まれた範囲に広がる。山側からの雨水の浸み出しにより、湿気を帯び、土色が還元化されて青みを帯びているものと判断される。遺構は殆ど検出されず、概ね削平によってとばされているものと考えられる。

出土した遺物には、越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃焼、瓦質陶器、中国製陶磁器等々がある。

越前焼 (501)は口縁部が肥厚した形態をもつ大甕

の破片である。(502)は中甕の口縁部破片である。同一個体と見られる破片が他にも見られる。

(503・505~511)にはスタンプ文及びへら記号を有する破片を示した。(505)のへら描き文を有する肩部破片は(502)の中甕と同一個体の破片と見られるものである。更に(509)は(501)と同一個体と見られる。この土層中に見られる甕の「本」と格子目のスタンプ文はいずれも文字が凹んでいることでは一致しているが、(508・509)と(503)ではその形態に明らかな違いが見られる。(504)は壺の底部破片と見られる資料である。裏面には成型段階の板目痕跡が見られる。(523)は口縁部が受け口状に薄くつまみ上げられて内湾する小鉢である。胎土は暗い灰色を呈し、堅く焼き締まる。(501)の大甕破片は小野分類に言う「IV群」に相当しよう。

(512~522)は播鉢の破片である。(514・518)以外はいずれも口縁部に太い沈線を有する播鉢で、断面は三角形を呈して、尖り気味である。胎土はいずれも赤味を帯びて、脆い。小野分類「IV群」に相当しよう。(517)は比較的小型の播鉢で口縁部は復元口径約23.2cmである。胎土は灰色を呈し、焼き締まる。(513)は復元口径約42.8cm、器高約16.8cmを計る。(518)の資料は横走りの楕目を有する播鉢で、口縁部の形状は矩形を呈する。小型のグループに属する。

瀬戸・美濃焼 (524)は鉄釉碗である。露胎部には鬼板が施される。口縁部はくの字に強く外反する天目茶碗である。釉調は良好で、光沢はないが遺存度は大変良い。

瓦質陶器 (525)は瓦質陶器で、瓦燈の破片と見られる。内面には煤が付着している。本体、いわゆる灯明具の受け台部は伴出せず、不明である。

中国製陶磁器 (526)は青磁碗の高台部破片で、線描き蓮弁文を有する。釉調は黒ずんだ緑色を呈し、高台部分まで釉がけされる。高台内部に輪トチンが見られる。(527)は白磁の小環で高台裏に「角福」銘が見られる。(528~532・536)は染付の破片である。(533)の芭蕉文皿以外は高台部分まで釉が施されるもので、皿には宝相華唐草文が描かれる。(532・536)は内面見込みに折れ菊文を有する碗である。このうち(532)の資料は高台裏の銘が「天下□平」であり、(536)の資料は「長命富貴」である。碗形態としては見込みか盛り上がる、いわゆる「マントーシン」タイプに属する。口縁部は直立して立ち上がるものである。

その他 (535)は鉄釉碗の高台部を2次活用した「陶製円盤」である。かなり使いこまれたものと見え、周辺が摩耗している。胎土は明るい灰色を呈し、焼成は良好である。高台は「鬼板」の鉄錆は施されず、輪高台の形態を呈しているところからも瀬戸製の鉄釉と見られる。

褐色土層出土遺物 (PL.42・43, 第47~49図)

この土層は調査区のほぼ全体をカバーしており、特に東半部に多く見られる。土層の広がりに応じて、当然のことながら、遺物の包含する量も他の土層に比べて多いものとなっている。この土層は表土を掘り下げた直下の土層で、調査区全体を覆う上層の整地土と考えられる。

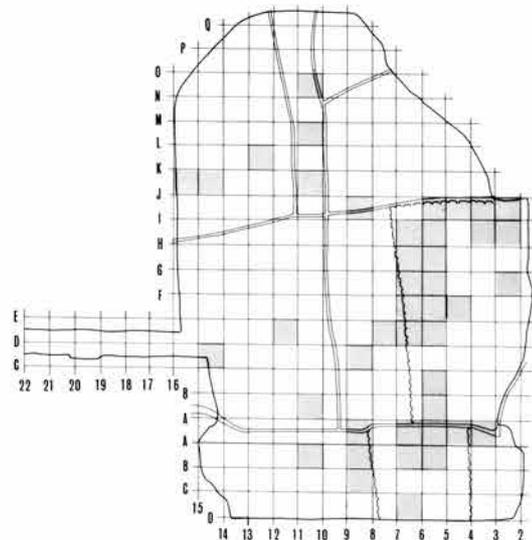
出土した遺物は越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃製品、中国製陶磁器、石製品等々がある。

越前焼 (538~544)はいずれも大甕の破片である。

(543)以外は小野分類「IV群」に属するもので、一乗谷の末期のグループに位置する。(543)は「III群c」

のグループに属しよう。いわゆる最盛期段階から、やや時期的に下るものが多数を占めている。(545・551・556・561・572)は中甕の口縁部破片である。(545)は復元径約50.5cmを計る。胴部以下は殆ど失われており、接合状態も良くない。(572)は前述した遺物の接合状況でも紹介した越前焼中甕である。復元径約39.8cm、器高約76.1cm、最大胴部径約61.0cmを計る。胎土は灰色を呈し焼成は良好である。恐らく2次火熱によると思われる火ハジで、肩から胴部にかけてクレーター状の凹凸が見られる。(562・563)はむしろ壺器型に相当するもので、量的には少ない。(552~555・557~560)はスタンプ文、へら描き文を有する甕破片である。(559)のスタンプ文は青色礫混じり土層で見られた(503)の資料と極めて近いスタイルを持っている。(564・565・567)は甕の底部破片である。板目もしくはムシロ状の圧痕が見られる。

(568~570・577~584)は播鉢の破片である。(569・570・577)などに典型的に見られるように、胎土は明るい肌色を呈し、焼成が甘くて脆い。トロトロした感じがあり、遺存度は不良である。一乗谷の最盛期に見られる播鉢にはこの手の焼成によるものが多い。窯詰め段階における位置的な条件が左右しているものと判断される。(571・573~575・585~587)は鉢である。そのうち(574・575・587)



挿図25 褐色土層遺物分布図

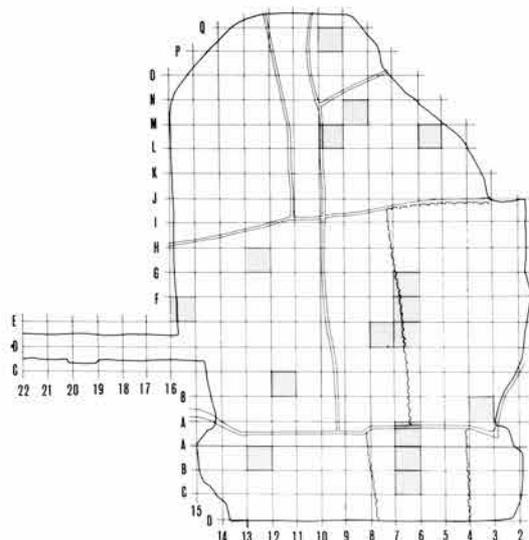
は口縁部が内湾する小鉢の器型を呈するものである。いずれも焼成は良好で、硬く焼き締まる。(585)は口縁部のみの破片であるが、こね鉢として使用された大鉢のグループに属するものである。

瀬戸・美濃焼 (588~593)は鉄釉碗である。復元口径は概ね12cm前後で収束している。そのうち(588)はいわゆる鉛釉が施され、釉調も良く、光沢がある。(591)は同じ釉調の碗であるが、2次火熱を受けたものと見られる。器面は光沢も失われ、ヒビ割れが全面に走っている。(593)は復元口径約9.1cmを計る小天目碗である。(610~612)は鉄釉碗の高台部破片である。上述のいずれとも接合はしなかった。(610・612)には鉄錆(いわゆる鬼板)が施される。

中国製陶磁器 (594)は青磁の線描き蓮弁文碗である。復元口径約13.8cm, 器高約8.2cmを計る。釉調は明るい緑色を呈し、透明感がある。小野分類に従えば青磁蓮弁文碗C群の典型的なタイプと言えよう15cc後半~16cc前半に主として位置付けられよう。これに対して(595)の碗は高台部のみの破片であるが、釉調が褐色がかった緑色で、無文碗である。高台も低いタイプに属する。(596)の鉢は復元口径約24.8cm, 器高約9.3cmを計る白磁製品である。失透性の釉薬が用いられ、いわゆる長石釉と見られる。細かな貫入が目られる。これに対して(596・597)は透明感のある白磁釉が施された皿の破片である。高台は割り高台、輪高台である。古手のグループに属するものである。(602~606)は染付の碗・皿である。(602)は内面見込みに文字をモチーフとした文様を描く。碁笥底の皿である。口径約10.0cm, 器高約3.0cmを計る。外面にはやはり文字をモチーフとした文様が4ないしは5単位描かれる。コバルトの発色は黒ずんでおり、上げけされた釉も胎土のせい、黄色味を帯びている。細かい貫入が走る。(603)は芭蕉文の碗、(604)は口縁部に雷文帯を描く碗である。

陶磁器その他 (608・609)は近世以降の所産と見られる碗、皿の破片である。(609)は外面の底部が露胎となっており、中央部が欠如しているが、つまみの有する落とし蓋であろう。

石製品 (613)はバンドコの蓋破片である。色調は褐色を帯びる。煤は付着していない。いわゆるD字型のバンドコに属する。(614)は窓部分が欠如しており、断定はできないがD字型のバンドコに属するものと見られる。(615)はO型のバンドコで器高約14.0cmを計る。



挿図26 茶褐色土層遺物分布図

茶褐色土層出土遺物(PL.44, 第50・51図)

この土層は調査区全体から見て、大きな広がりは見られない。掘立柱建物SB 750の部分と、J区の6ラインに集中する以外は、全体的に分散した状態で遺物が見られた程度である。

出土した遺物には越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器、金属製品等々がある。

越前焼 (616~624)は大甕破片で、(618)以外は小野分類IV群の資料である。(625)は壺の口縁部である。(645)は短頸壺である。胴部最大径約14.8cmを計る。胎土は明るい褐色を呈す。底部を欠く。釉は2次火熱によるものか、かせている。

(626~630・632)は播鉢である。(629)は復元径約36.3cm, 器高約12.0cmを計る。焼成は良好で硬く焼き締まり、色調もやや赤褐色味を帯びている。これに対して、(632)はひとまわり小振りの器型で復元径約32.0cm, 器高約11.1cmを計る播鉢であるが、焼成は甘く、トロトロしている。(627)の資料は口縁

部の沈線がないグループに属するもので、描目が密に施されている。焼成は甘い。(641)は播鉢の破片の周辺を丁寧に打ち欠き、陶製円盤としたものである。外面には成形段階のナデ痕跡が明瞭に残る。

(644)はほぼ完型に復元し得た鉢である。釉調は良好で、自然釉が口縁部から胴部にかけて見られる。胴部最大径約20.6cm、器高約19.2cmを計る。(631)は復元径約29.6cmを計る鉢である。焼成は播鉢のⅣ群に見られるように、生焼けの状態を呈して、甘い。前述した褐色土層中の遺物のうちの鉢(573)はこの土層からも破片が出土しており、接合を見ている。器型はⅣ群の播鉢、即ち断面三角形を呈し、太い沈線が巡るものと酷似する。

瀬戸・美濃焼 (635)は鉄釉碗である。表面に水アカが付着している。(642)も鉄釉の碗高台部である。周辺が丁寧に打ち欠かれているが、陶製円盤として使用されたかどうかは不明である。

中国製陶磁器 (637)は青磁の稜花皿である。釉調はかせているのか、光沢が失われており、ザラザラした感がある。(638・639)は白磁皿である。(640)は口縁部がゆるやかに開く、見込みの浅い染付碗である。外面に渦巻き状の文様が描かれる。

金属製品 (643)は切羽である。

石製品 (646)は圭頭形の五輪塔板碑である。下半部を欠失する。幅約37.2cmを計る。2基の五輪塔が線彫りされている。それぞれに「妙法蓮□□」が薬研彫りされている。供養年月日は不詳である。(647)は笠塔婆の笠部である。器高約12.2cm、幅約21.6cmを計る。棟の反りはゆるやかで、先端部は折損している。塔身部は出土していないので、供養年月日、被供養者等々については不明である。(648)は組み合わせ五輪塔の空風輪である。「妙法」が薬研彫りされている。径約17.2cm、器高約25.4cmを計る。火輪以下の塔身部を欠失している。(649)は覆屋のある板塔婆の一種で、五輪塔が2基彫り込まれているものと見られる。「妙法蓮華□」が薬研彫りされる。(650)は石龕の屋根部分の破片である。内側には壁板をはめ込むホゾが彫り込まれている。

以上、石製品として石塔類を見てきたが、いずれも種子が「妙法蓮華・・・」で共通しているという特徴がある。水田の石垣に転用されていたものも混じるが、これらの石塔が「原位置」からはそう遠く外れたものとは考えにくく、この調査区の付近に寺跡(墓地)が存在した可能性があり、その場合は宗派も概ね限定できるものと推察される。

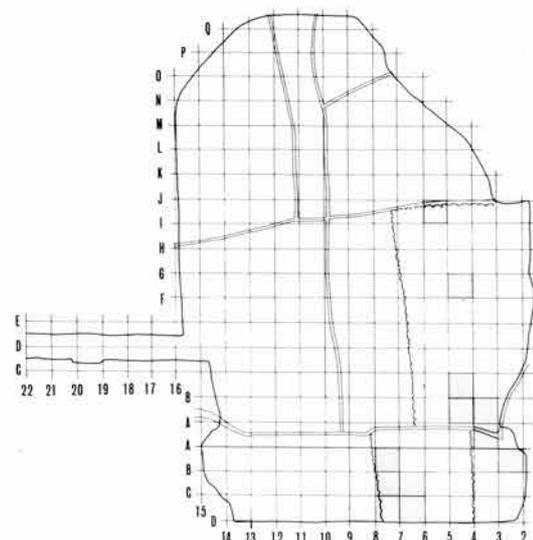
黄色土層出土遺物(PL.45, 第52図)

この土層は分布範囲が限られており、調査区東側の石垣より上段にのみ広がる。

出土した遺物は越前焼がその大半を占めており、土師質土器、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器、石製品が少量混じる程度である。

越前焼 (654)は大甕の口縁部である。(651~653・655)は中甕の破片である。(651)は復元径約55.1cmを計る。この中甕の資料は他にも同一個体と見られる破片があり、比較的まとまって出土した資料であ

る。(656)は肩に突帯が巡る短頸壺である。復元径約20cm、現存高約16.7cmを計る。同一個体の底部が出土している。接合はみえていない。焼成が甘いのか、胎土は明るい肌色を呈し、脆い。この手の壺が他



挿図27 黄色土層遺物分布図

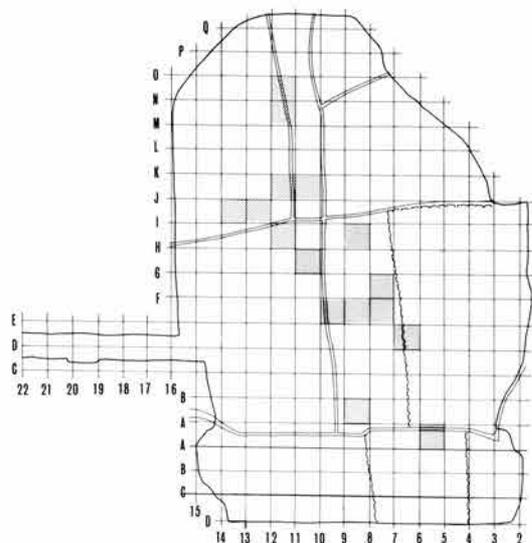
にはほぼ完型に近い状態で、灰層より出土している。肩部にへら描き文が見られ、三角形の形状を呈している。灰層(840)の壺は「甲」であり、明らかにその形態に違いが見られる。(655)は甕の底部破片を打ち欠いて、2次活用としたもので、割れ面の部分はかなり擦り減っている。

(659~664)は播鉢である。いずれもⅣ群のグループに属するものと見られる。そのうち(659)は復元口径約31.0cm、器高約12.6cmを計る。ただ、(662)は外面にも「播目」が施された特異なものである。一乗谷では他に、外面に播目と同じ櫛歯状工具で「×」ないしは「+」の記号を描く例がごく稀にあり、そのような記号の1種かとも考えられる。類例を待って更に検討を加えたい。(665)は中甕及び壺の底部破片である。底部には明らかな板目の圧痕が残る。内面には輪状にタール痕がある。

瀬戸・美濃焼 (669)は灰釉小坏である。全面に釉が施される、いわゆる総掛けの製品である。高台裏に輪トチンが残る。

中国製陶磁器 (666)は碁笥底の染付皿で、外面に芭蕉文が巡る。コバルトは黒ずんでいる。内面見込みに文字をモチーフとした文様が描かれる。

石製品 (667)は盤の破片である。復元口径約45.2cm、器高約16.7cmを計る。



挿図28 青色土・赤褐色土層遺物分布図

青色土層出土遺物 (PL.45, 第52・53図)

挿図28の濃いアミで示したグリッドの部分が概ね青色土の広がる範囲で、遺物が出土している。石垣段下に集中する傾向が見られる。

出土した遺物には越前焼、土師質土器、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器、石製品等々がある。

越前焼 (671)はⅣ群の大甕口縁部である。(672)はⅢ群cに属しよう。(674)にはへら描き文があり、あたかも「大」の字形を呈する。(673)はいわゆるなで肩の形態を有する壺破片である。

(675~678)は播鉢である。(676)はⅣ群、(675・677)はⅢ群aのグループに属しよう。そして、(675・

677)は整理の段階では別個体としていたが、同一個体であることが判明し、接合を見た。(678)は口縁部がやや内湾気味に開く器型を呈し、播目は内面の中段あたりで止められている。焼成は良好で、硬く焼き締まる。色調は褐色を帯びている。

瀬戸・美濃焼 (679)は鉄釉碗である。高台部を欠失する。腰部以下の露胎部には鉄錆が施される。

中国製陶磁器 (680~682)は青磁碗、皿である。(680)は口縁部に雷文帯を有し、胴部は片へら彫りの鎬蓮弁文を有する碗破片である。高台部を欠失する。(681)は外面が無文の碗、(682)はへら彫りの草花文を有する稜花皿である。これも高台部を欠失する。これらの青磁製品はいずれも胎土、焼成共に安定しており、釉調も極めて良好である。

黄褐色土層出土遺物 (PL.45, 第54図)

その他に黄褐色土層から和鏡(670)が出土している。J区の東側、山裾のグリッドより出土している。径約5.7cmの小型鏡で、背面中央つまみ部分の鈕座には亀、その上位には双雀、そして背面一杯に秋草

文の菊、桔梗、薄等が鋳出されている。遺存度は不良で、腐食が進んでおり不安定である。一乗谷内ではこれまでに5面の銅鏡が出土しているが、他の4面はいずれも圏線を有するもので、口径も本資料よりひと回り大きい。

赤褐色土層出土遺物 (PL.46, 第53図)

この土層は挿図28の粗いアミで示した部分に広がる土層で、調査区の北西部分に集中する傾向がある。全体として出土数は少ないが、遺物には越前焼、瀬戸・美濃焼、土師質土器、中国製陶磁器、石製品がある。

越前焼 (683・685)は大甕、(686)は中甕、(684・687)は壺である。(683)はIV群aに、(685)はIII群に属する。(688~698)は播鉢である。色調は多少焼き生った感じがあるが、いずれも口縁部の形状から見てIII群bに属し、甕の編年観と一致するようである。

土師質土器 (699)は見込みの指押さえが弱く、口縁部と体部を一気にナデ上げるタイプで、いわゆるC類に属する。灯芯油痕が口縁部全体に見られる。

瀬戸・美濃焼 (700)は鉄釉碗である。高台部分を欠損する。復元口径約12.0cmを計る。口縁部の外反部分は屈曲度も弱く、肩に稜線を呈するほどにはハッキリした形態は示さない。器面の光沢は鈍く、ザラツとした感じがあるが、釉調は安定している。露胎部の鉄錆は施されない。

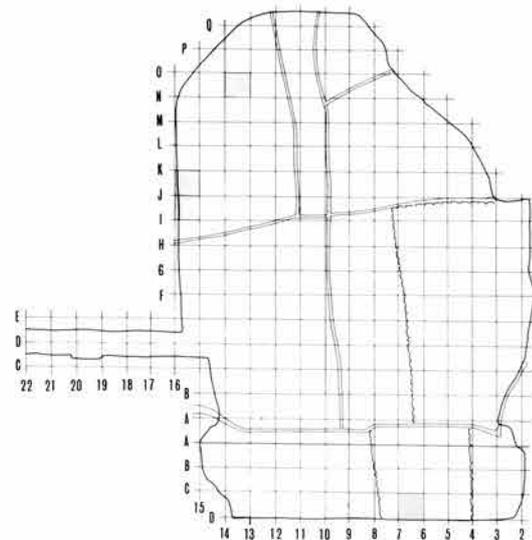
中国製陶磁器 (701)は青磁稜花皿、(702)は白磁小坏である。

石製品 (703)はバンドコの底部である。いわゆるO型に分類される。後述する流土部分の出土破片と接合を見たもので、身部も恐らく段丘崖の石垣下に散逸している可能性がある。

灰褐色土層出土遺物 (PL.45・46, 第50・52・54図)

挿図29に灰褐色土層と暗褐色土層の広がりを図示したが、いずれも範囲は狭く、出土した遺物の量も少ない。濃いアミが灰褐色土層、粗いアミが暗褐色土層の範囲である。

灰褐色土層からは越前焼、土師質土器、石製品等が出土している。(704)は播鉢である。復元口径約41.9cm、器高約16.2cmを計る。播目は密に施されており、その間隔は狭い。櫛目は8本で、口縁部の沈線部で止められている。焼成はそれほど甘くはなく、色調は明るい褐色を呈す。(705~707)も播鉢の破片



挿図29 灰褐色土・暗褐色土層遺物分布図

である。(707)はいわゆる「陶製円盤」として2次活用されているものと見られる。

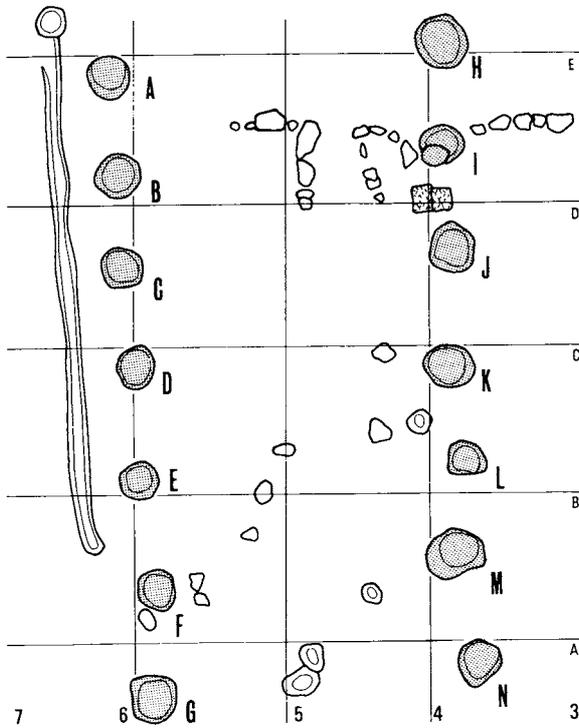
(708)はシャクダニのバンドコ体部破片である。D字型に属するもので、通気窓は4~5箇所と考えられる。(710)は組み合わせ五輪塔の火輪(笠部)である。「蓮」の種子が線彫りされており、かつこれには金箔が施されたものとみえ、接着剤に使用された黒漆が線彫り部分に遺存している。笠部分の反りはやや鋭角的に延びており、復元幅は上辺で約24.6cm、下辺で約18.6cmである。

(709)はGN-13グリッド出土の圭頭板碑である。下半部を欠失する。幅約28.4cmを計る。中央部分に「妙法□・・」が薬研彫りされている。茶褐色土層の(646)の場合は線彫りによる五輪塔が2基彫り出

される型式であったが、この資料は直接「種子」が彫り込まれる形態をとる。表採資料である。

一乗谷の石仏・石塔については、既にその概要に関する報告がある(朝倉氏遺跡調査研究所1975『一乗谷石造遺物調査報告書 I 銘文集成』)。そして、およそ3,000体の資料のうち半数が一石五輪塔であり、組み合わせ五輪塔はわずか5%ほどに過ぎないことが指摘されている。こうした現象は一乗谷の繁栄時期には一石五輪塔が石塔の主流を占めていることを示すものであるし、畿内を中心に西日本一帯が室町時代後期には、既にこうした状況を呈していたことと軌を一にしているものである。本調査区では一石五輪塔が殆ど見当たらない。もともとないのか、どこかに散逸したのか真相については今後の追跡調査に待つほかない。

暗褐色土層からは(668)の播鉢が出土している。ほぼ1個体分の破片がまとめて出土している。この資料はその形態からみて、一乗谷の越前焼編年資料としては古い段階のものとして、既に「概報」等々で紹介しているものであり、小野分類でもII群に位置付けられている。J区D-6グリッドの出土である。胎土、焼成には他のIII~IV群の資料とは明らかな違いが明瞭に認められ、その識別は困難ではない。胎土は白い砂粒を含むもので、ザラザラした感がある。硬く焼き締められており、色調は暗い褐色を帯びる。播目は12本1単位で、6~7cm間隔で施される。



柱根ピット及び柱穴出土遺物(PL.47, 第55・58図)

この柱穴及び柱根ピットはSB750の掘立柱建物で、ここで検出された柱穴群の出土遺物をさす。挿図30にその柱穴の分布を模式的に示した。北側から記号を付して、A~Nとした。図版に示した遺物は柱穴E, F, H, I, L, Nでそれぞれ出土している。内訳を以下に記す。

- 柱穴E……………越前焼壺(714・715), 鉢(716・725), 黄銅製飾り金具(722)
- 柱穴F……………越前焼鉢(711), お歯黒壺(713)
- 柱穴H……………白磁小環(718), 染付皿(720)
- 柱穴I……………染付碗(719)
- 柱穴L……………越前焼壺(717), 火桶(726)
- 柱穴N……………" (727), 銅製隅金具(721), 同目貫(723), 金箔押し飾り金具(724)

挿図30 柱根ピット及び柱穴遺物分布図

これらの遺物の中には接合破片として、柱穴以外の地点で出土した破片を含む。例えば壺(715)はJA03, 05グリッドの破片と接合を見ているし、鉢(712)はJA05, GA06の破片と接合する。更に鉢(716)はGB05, GE05の破片と接合する。遺物がまとめて出土した柱穴がSB750の南半部分と北東側に偏る傾向が認められることに加え、前述の3者の接合関係はグリッド方位を基準に、北西方向のグリッドの遺物と接合する傾向を示し、遺物の移動がこれの方向に行われていることを示唆するものと思われる。この点については小結の項でも触れる。遺物の説明に移る。

越前焼 (711・712)は同一個体と見られる小鉢である。焼成は極めて良好で、釉調も厚く、タツプリと

内面に施される。(725)も同サイズの鉢である。こちらは口縁部のつくりに受け口を作り出している。

(713)はお歯黒壺である。口縁部を欠く。復元による最大胴部径は約11.2cmを計る。(714・715)は徳利型の壺で、同一個体と見られる。最大胴部径約19.2cmを計る。(727)も同サイズの壺である。(717)は2次火熱によるハジが目立ち、内外面はクレーター状の凹凸が認められる。口縁部を欠く。

(726)は火桶である。焼成段階での焼き歪みが見られ、口径は楕円形を示す。GD06のセクションより出土した(976)の火桶と同サイズのもので、出土位置も大きくは外れない。SB750と関連して所有の在り方(=セット関係)に問題を提示するものとなろう。(716)は復元口径約40.7cmを計るこね鉢である。底部を欠く。同一個体と見られる破片が他にも見られたが、いずれも接合には至らなかった。使用痕が見られ、内面下半部はよく擦り減っていた。

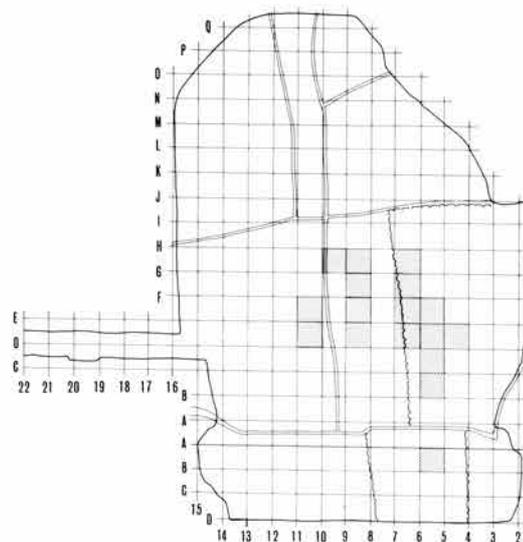
中国製陶磁器 (718)は白磁で、菊花形の鉢である。復元口径約7.2cmを計る。(719)は染付碗である。炭層(795)の染付碗と同一個体と見られる。蔓草文が器面一杯に描かれる。内外面共にかせており、光沢はないが、コバルトは安定しており遺存度も良好である。(720)は皿である。復元口径約9.2cmを計る。

金属製品 (721)は隅金具(縁金物)である。一部に2次火熱による「溶け出し」が認められる。(722)は留め金具の1種かと思われる製品である。角状の突起が見られる。(723)は目貫である。毛彫りによる菱文が認められる。遺存度は良好である。(724)は金箔を押した飾り金具である。2次火熱を受けたものと見え、一部は欠損し、歪みがある。推定復元図を付しておいたが、「片喰」をあしらったものに魚子(ななこ)彫りを丁寧に施している。中央にピンが作り出されていた形跡があり、その部分が特に欠落している。

炭層、及び炭層ピット・炭層遺構面出土遺物

(PL.48~50, 第57~59図)

挿図31に濃いアミで示したものが、調査区中央部分、石垣段上の掘立柱建物SB750と段下の部分に広がる炭層及び炭層ピットである。図中で石垣下の列状の空白は南北溝が走る部分であり、ここでも炭層が確認されているが、溝の遺物として取り扱ったために除外してある。粗いアミは灰層及び灰層ピットを示したもので、炭層が周辺部分に広がっており、レベルとしては殆ど同一面の灰層として遺物採集を行った。炭層の最下面を炭層遺構面とした。北側部分への広がりにはG I列の石垣あたりまでである。



挿図31 炭層及び灰層遺物分布図

出土した遺物は土師質土器が大半を占めており、

これに越前焼、瀬戸・美濃焼、中国製陶磁器、金属製品、石製品が混じる。

土師質土器 いわゆる灯明皿である(730~739・806~811他)。一乗谷分類にいうB・C・D類がその殆どであり、口縁部に灯芯油痕(タール痕)を遺すものが圧倒的多数を占めている。未使用の皿は非常に少なく、これらの出土傾向から、本調査区の灯明皿は、不要になったもの、欠けたものを廃棄した結果との推定が可能である。溝や石積施設に多数見られる灯明皿の一括出土も同様な見かたが可能である。他の調査区では、ピットに灯明皿が多数投げ込まれたように一括で出土する、いわゆる「土器溜まり」が検

出される場合がある。中世の古い時期の遺跡でも「瓦溜まり」や「土器溜まり」が検出されることは、ままある。石積施設や溝に、多数の灯明皿が他の残滓と共に出土することは、一乗谷の場合、通有の在り方と見てよい。

越前焼 (746)は大甕の口縁部破片である。(770~773)は大甕の胴部破片で、ヘラ記号を有するものを集めた。(747・748・765)はいずれも中甕の口縁部破片である。(765)は復元口径約44.0cmを計る。胎土、焼成共に良好で、同一個体と見られる破片が多数出土しているが、いずれも接合せず、器型復元には至っていない。(766~769)も中甕である。(766)は復元口径約43.8cmを計る。(765)とほぼ同一の規格の中甕である。

(755)は復元口径約21.3cmを測る壺である。底部を欠損する。口縁部の形態からすれば、そのまま中甕を小さくした形態であり、中甕の相似形とも考えられ、問題を有する。「甕」か「壺」かは器型の問題もさることながら、最終的には機能に帰属する問題である。当時の「甕」、「壺」の用途について更に追及する必要がある。色調は全体に褐色味を帯び、焼成は堅緻である。肩に「十」のヘラ記号が刻まれる。甕の相似形については他にも同様な資料が見受けられ、後述する(840)の壺にも言える。

(749・750・774~778)は搗鉢である。Ⅲ~Ⅳ類に属するものである。(751)は扇形の搗目を有するこね鉢である。(775)は復元口径約34.8cmを計る。(777)は復元口径約46.0cmである。

瀬戸・美濃焼 (741~743・759・780~786)は鉄釉碗である。(741)は口径約11.5cmを計る。底部を欠損する。釉調は安定しており、遺存度も良好である。露胎部には鉄錆は見られない。(742)は口径約12.2cmを計る。器高は約6.4cmを計る。ほぼ完型である。胎土、釉調共に良好で露胎部には鉄錆が施されている。高台部は畳付きを浅く削るもので、一見、「付け高台」風を呈する。かつて岐阜県「江馬館址」で出土した中国製天目茶碗(神岡町教育委員会1979『江馬氏城館跡 発掘調査概報』)などの高台のつくりと酷似する。いわゆる中国製品の「写し」と見てよい。この手のタイプの瀬戸天目碗は一乗谷ではかなりの数見受けられる。(743)はやはり(741)と同様、露胎部に鉄錆を施さず、生地のままとした例である。口径も(741)に近く、約11.8cmである。光沢は鈍く、いくぶんかせている。

(782・785)以外の碗(780・781・783・784)は口径が概ね11.6~12.3cm内外に収束するもので、規格性を有する。(782)は約10.3cmと、ひとまわり小振りである。(785)は小天目に属する。露胎部に鉄錆を施すものは(781・784・786)で、自然の吹き出しと見られるものもある。露胎のままのものも相半ばしており、どちらかに偏向するというものではない。

この傾向は、瀬戸・美濃製天目碗には、必ず鉄錆、いわゆる「鬼板」を施すという決まりがあるというのではないことを暗示している。中国建窯の製品ではないが、吉州窯の「玳瑁釉」天目にはこの鉄錆を施す例がある⁽¹⁾。一般に「磁胎」を隠すために鉄錆を施すという解釈があるが、鉄錆を施すという所作は本来別の目的に沿うものであると考えられる。

(787)は鉄釉壺の口縁部である。復元口径約9.8cmを計り、口縁部内面に片口を作り出すヘラの刻みが見られる。(756・788)は灰釉皿である。(756)は復元口径約10.0cm、器高約2.2cmを計る。(788)の作は本来別の目的に沿うものであると考えられる。

土師質土器 (757)は土鈴で、玉が同伴している。(758)は灯明皿の灯芯押さえである。

中国製陶磁器 (789)は線描き蓮弁文の青磁碗である。復元口径約12.0cmを測る。(760)は青磁碗高台部破片で、周辺には明らかな打ち欠きが見られるが、摩耗痕はない。底部内面(高台内)は露胎で、口径は約5.8cmを計る。高台の作りは外側に踏ん張った開き気味のもので、無文で見込みが浅いタイプの青

磁碗にこの手のタイプが多い。釉調も透明感があり、生地が透けて見える。

(761・762・790～793)は白磁皿である。このうち(793)は碁笥底風の底部を有する菊花皿で、内面は蛇ノ目の釉の掻きとりが見られる。(805)は高台部が露胎となる小坏で、復元口径約7.8cm、器高約3.1cmを計る。釉調は青味がかかった白色を呈す。いわゆる「影青」風の釉調で、内面見込み部に重ね焼きの目跡が見られる。

(740・763・764・794～799)は染付の碗、皿である。(740)は「マントーシン」タイプの碗で、口径約12.5cm、器高約6.3cmを計る。内外面に山水人物文が描かれる。高台内面の銘は「萬福收同」である。釉調も安定している。(764)も「マントーシン」の碗で、見込みに「振り花」が描かれる。(794)は口縁部が斜方向に開く碗で見込みは浅い。アラベスク風の文様が4段に亘って描かれる。底部を欠損する。(795～797)は口径が約12cm内外に収束する碗で、直立気味に立ち上がる。(799)は復元底部径13.6cm、口縁部は口径およそ約23.0cmに達する段皿で、口縁部に菊花様の線彫りが見られる。

朝鮮製陶磁器 (800)は碗の口縁部、(801)は壺の底部破片である。

石製品 (802～804)はいずれもバンドコの蓋破片である。(802・804)はいわゆるD型のバンドコで、(803)は楕円形のものである。

灰層出土遺物(PL.51, 第60図)

越前焼 (812・813)は大甕の破片である。Ⅲ群c～Ⅳ群aのグループに属する。(814)は壺の口縁部である。(840)は肩部に突帯を有する短頸壺である。復元口径約19.0cm、肩部最大径26.0cm、器高約25.0cmを計る。焼成はあまく、トロトロしており色調は肌色を呈す。このタイプの壺は口縁部が広口で、肩は、概ねナデ肩を呈する。口縁部のつくりは断面逆三角形で、一乗谷の小甕のタイプに似る。第59次調査区の井戸SE3577出土の資料は本資料よりひとまわり大型の同型壺で、口径22.8cmを計る。しかしながら第59次の資料は焼成が良好で、硬く焼き締まり、釉調も良い。分類としては大甕に対比した場合、Ⅳ群cに含められよう。(815・816)は播鉢である。Ⅲ群b～Ⅳ群に属する。

(815)は重ね焼きによるものであろうか、内面下半部は赤く、上半部は灰褐色を呈しており、上下に明らかな焼成の違いが認められる。(816)には内面に煤のような黒ずんだ汚れが認められる。第51次調査区のSB3060の西側で検出されたSX3031にも灰が充満した播鉢が据えられていた。囲炉裏、もしくはカマドでの灰溜めとして2次活用されたのかも知れない。

土師質土器 (825)は耳皿である。(832～839)は灯明皿である。(832・833)はいわゆるB類、以下はC・D類である。いずれも灯芯油痕を遺している。他の破片類にも未使用品は少なく、酒杯として使用され、一括で廃棄された可能性は薄い。

瓦質陶器 (817)は風炉である。復元による肩の径は約29.3cmを計る。口縁部下に透かし孔が認められる。一乗谷では風炉は石製品と瓦質陶器との2者があり補完関係にある。本資料は瓦質製品であるが、焼成は著しく不良で、トロトロしている。

瀬戸・美濃焼 (818～821)は鉄釉碗である。(822)は鉄釉茶入れの底部である。(823)は底部に糸切り痕をのこす灰釉の鉢ないしは碗である。胎土は灰色を呈し、堅く焼き締まる。(824)は口径約11.6cmを計る灰釉皿である。釉調は器面全体に施されるズブ掛けの製品である。口縁部から胴部一杯に釉流れが見られる。高台裏に輪トチンが残る。口縁部のつくりは通常見られる内湾のタイプとは異なり、口唇部下で一旦、弱い段を作り出して外反している。

中国製陶磁器 (826)は青磁碗の口縁部である。器壁は薄く仕上げられ、釉調は青味がかかった、いわゆる「砧手」の青磁釉がタツプリと施されている。(827・828)は白磁皿である。

石製品 (829)は炉壇石の端部である。(831)はバンドコの蓋部分である。いずれもシャクダニの製品である。

溝出土遺物(PL.52・53, 第61・62図)

第20次調査で確認された溝は東西溝SD754・757・759・762, 南北溝SD754・755・765などである。このうち、南北溝SD765が古い段階の溝(I期)と考えられる他は、概ね新しい段階(II期)に位置付けられる。比較的広い範囲に亘って連続して延びる溝として検出されたSD754・755や757では、灯明皿の大量出土が見られた。

出土した遺物には土師質土器の他にも越前焼, 瀬戸・美濃焼, 中国製陶磁器, 石製品, 金属製品等々がある。

SD750 越前焼 (845)は小壺の口縁部破片である。復元口径約10.0cmを計る。

瀬戸・美濃焼 (841・842・860)は鉄釉碗である。(841)は復元口径約12.0cmを計る。高台部を欠損する。(860)は復元口径約11.7cmを計る。釉調は安定しており、厚く施釉される。(842)は鉄釉碗ないしは平鉢の器型を有するもので、直線的に開く。復元口径約16.1cmを計る。(843・844)は灰釉皿である。全体的にこの灰釉の製品は本調査区では出土数が少ない。(843)の皿は復元口径約10.8cmを計る。内面見込みに印花文を有する。全体に釉掛けされる、いわゆる絵掛けの製品である。胎土はボソボソしており脆い。高台裏に輪トチンを遺す。(844)は高台の厚みから推定して、碗の器型と考えられる製品である。割れ面の全体に摩耗痕が顕著に認められる。胎土、釉調は前者の(843)と酷似する。2次活用されており、陶製円盤もしくは磨石としての2次活用が考えられる。

中国製陶磁器 (846・847)は青磁で前者は碗、後者は香炉である。(848~850)は白磁皿である。(850)は復元口径約12.1cm, 器高約3.5cmを計る。底部、高台に厚みもち見込みは少し深い。高台畳付きに目跡がのこる。釉調はややくすんだ白色を呈す。(851~853)は染付碗である。

金属製品 (857・858)はいずれも鉄製火箸である。全長はそれぞれ約32.0cm, 34.2cmを計る。規格、形態ともに良く似ており、対(つい)の可能性が有る。(859)は鞘である。

石製品 (855)は硯の陸部破片である。良く使いこまれたものか、全体に摩耗が進んでいる。内側に墨が少量付着している。(856)はD型のバンドコ蓋である。周辺に欠損が目立ち、荒れている。奥行き約16.0cm, 復元幅約19.0cmを計る。

SD765 (900)は鉄釉碗である。復元口径約12.0cm, 器高約6.0cmを計る。釉調は茶褐色を呈し、露胎部には鉄錆が施される。(854)は越前焼の底部破片である。甕か壺かは断定しにくい。内面にまで釉がタツプリと見られる。(886)は越前焼大甕の破片である。

SD759 (875)は染付碗である。高台部径約4.5cmを計る。いわゆる「マントーシン」タイプの碗である。(876)は播鉢である。口縁部を欠損する。内面は摩耗が著しく、見込み付近では播目がつぶれている。底部径約16.5cmを計る。焼成は甘く、いわゆる生焼けの状態である。

SD757 (880)は越前焼中甕の口縁部である。(881)は大甕の破片でスタンプ文を有する。胎土は黒ずんだ灰色を呈し、極めて堅緻である。(882)はこね鉢の口縁部である。(883)は大きく外に開く、徳利型の鉄釉壺口縁部である。口縁部径は約11.5cmを計る。

SD755 (877)は青磁香炉, (878)は白磁小坏である。(878)は全体にかけており, 光沢は失われている。
SD761 (879)は越前焼大甕の破片である。

石積施設出土遺物 (PL.53, 第62図)

石積施設は合計3基検出されており, SF769と770でまとまった遺物の出土を見た。

SF769 (893)は越前焼小鉢の口縁部である。復元口径約18.4cmを計る。全体に灰色味を帯びた褐色を呈す。焼成はあまい。(894)は甕の破片である。(903~906)は土師質土器である。

(895)は鉄釉碗である。いわゆる飴釉が施される。肩の張りは弱く, ズングリした器型である。復元口径約12.7cmを計る。(896・897)はいずれも白磁の皿である。口径は12cm前後ではほぼ同じ規格を有する。前者は腰の張りがなく, 口縁部まで直線的に外反するタイプの皿である。(902)は銅製の銚子(提子)である。油さしか若しくは化粧用具であろうか。一乗谷では数少ない器種のひとつである。完型である。

(899)は硯の陸部破片である。外面の摩耗はあまり見られず, 遺存度も良好である。

SF770 (887)は中甕の口縁部である。(889)は播鉢である。口縁部内面の沈線はなく, 多少内湾気味に立ち上がる器型である。播目は口縁部一杯まで施される。(891・892)は染付の碗, 皿である。(890)は朝鮮製の焼き締め陶器で, 舟德利型の壺の底部である。

その他の遺物 (PL.54・55, 第63・64図)

これまで述べてきたように遺物の包含層中(各々の整地土層)のものや, 遺構としてまとまった出土遺物以外にも, 種々遺物が採集されている。それらは一括して, その他の遺物として扱った。排土表採のものやセクション・ベルトの遺物も含めて取り扱い, 各々図版に示した。

流土 調査区西限のトレンチ内の遺物で, 段下に流れ落ちた土に含まれるものを一括した。

越前焼 (924~927)は甕である。(927)の破片には「大」と格子目のスタンプ文下半部分が見える。(928~930・955・956)は播鉢である。(931)は鉢で内面に厚く釉が見られ, 焼成も堅緻である。(956)も鉢で口径約26.2cm, 器高約8.5cmを計る。

土師質土器 (932~934)は土釜である。(932)は復元口径約9.2cmである。(933)は復元口径約10.1cmである。(934)は突帯部分のみの破片で, 復元径は約19.0cmとなり, 前者に比べ大型のグループに属す。

瀬戸・美濃焼 (935)は鉄釉壺の底部である。胎土は明るい褐色を呈し, ボソボソしている。内面は露胎である。外面の露胎部は鉄錆が施されている。底部径は約10.2cmを計る。

中国製陶磁器 (936・937)は青磁碗である。(936)は透明度の高い青磁釉で生地が透けて見える。高台内面は露胎である。(937)は胎土が黒ずんだ灰色を呈し, 堅く焼き締まっている。この資料も高台内面は露胎である。周辺は明らかに打ち欠いた痕跡が認められる。(938・939)は白磁皿, 小坏である。(940~943)は染付碗である。特に(940)は高台部から直線的に立ち上がるタイプの碗で類例は第46・56次調査出土遺物に認められる。(941・942)は唐草文の碗で同一個体と見られる。(943)は芭蕉文碗である。

石製品 (949・950)は火鉢の破片でそれぞれ同一個体と見られる。(950)には透かし孔の一部が認められる。(951・958)はバンドコの身部である。(958)は石膏により器型復元されたものである。いわゆるD字型のバンドコである。(957)は砥石である。凝灰岩質の石材を用いているものと見られる。少し青味を帯びる。仕上げ砥と考えられるもので, 全長約23.4cm, 最大幅9.6cmを計る。ちなみに第44次調査区出土の未使用と見られる砥石は全長約28.6cm, 最大幅約12.7cmであった。概ね未使用品の規格を, こ

れを基準に考えるとひとまわり小さい。短側面以外の面にはすべて使用痕がある。

盛土 掘立柱建物 SB 750 南西側で見られた土層である。越前焼中甕の資料が比較的まとまって出土している。(975)の鉢,(964)の硯も盛土の出土である。コーナー部分が遺存しており、上面に文様の彫刻が施されている。中国製硯かとも考えられる。

排土 発掘調査時に排土から採集されたものである。

(965)は鉄釉小壺の口縁部である。口唇部に輪トチンが残る。釉調は黄色味の強い褐色がかかった釉である。(966)は鉄釉碗の高台部である。露胎部は鉄錆は施されない。胎土は明るい灰色を呈して、緻密である。(967)は越前焼の搦皿(卸し皿)である。底部外面には成形段階のいわゆるゲタの痕跡がある。堅く焼き締まり、焼成は良好である。(968・969)は青磁碗・盤である。(970・971)は白磁皿,(973)はいわゆる割り高台の白磁皿である。(974)はバンドコ身部である。

SK 775 炭・粘土混じりの土塚である。SB 750 の段下西側で検出されている。(977)は青磁鉢である。2次火熱を受けたものと見え、全体がくすんでいる。復元口径約21.0cm, 器高約10.6cmを計る。(976)はGD06セクションの出土である。位置的には SB 750 にかかる場所にあたることから、SB 750 に帰

属する遺物の可能性もある。

No.	銭貨名	出土層位(遺構)	初鑄年	No.	銭貨名	出土層位(遺構)	初鑄年
1	開通元宝	青色礫混じり土	621 唐	17	?	柱 穴	
2	祥符元宝	"	1008 宋	18	熙寧元宝	灰層ビット	1068 宋
3	" 通宝	"	" "	19	元豐通宝	"	1078 "
4	聖宋元宝	青色土	1101 "	20	皇宋通宝	"	1039 "
5	皇宋通宝	青色礫混じり土	1039 "	21	開通元宝	炭層ビット	621 唐
6	天盛元宝	"	1158西夏	22	熙寧元宝	青色礫混じり土	1068 宋
7	熙寧元宝	炭 層	1068 宋	23	景□□宝	炭 層	
8	元祐通宝	青色礫混じり土	1086 "	24	天□元宝	"	
9	皇宋元宝	"	1253南宋	25	至和元宝	溝	1054~5宋
10	洪武通宝	"	1368 明	26	元豐通宝	"	1078 宋
11	"	"	" "	27	"	"	" "
12	永樂通宝	"	1408 "	28	元符通宝	溝内炭層	1098 "
13	(12ウラ融着) ? "	"		29	開通元宝	石積施設	621 唐
14	?	"		30	大觀通□	"	1107 宋
15	元豐通宝	褐色土	1078 宋	31	宣德通宝	排 土	1426~33明
16	景祐元宝	柱 穴	1034 "	32	洪武通宝	"	1368 明

表 8 第20次調査区出土銅銭一覧

銅銭 (第65図) 本調査区から出土した銅銭は合計32枚である。その内訳は表 8 に示したとおりである。No.12と13はそれぞれ融着している。初鑄年代としては「開通元宝」が最も古く、「宣德通宝」が最も新しい。銭種は開通元宝(3), 祥符元宝(1), 祥符通宝(1), 景祐元宝(1), 皇宋通宝(2), 至和元宝(1), 熙寧元宝(3), 元豐通宝(4), 元祐通宝(1), 元符通宝(1), 聖宋元宝(1), 大觀通宝(1), 天盛元宝(1), 皇宋元宝(1), 洪武通宝(3), 永樂通宝(1), 宣德通宝(1),

の17種である。不明の銭が5枚ある。

木製品 (挿図33) 本調査区の木製品は銅銭同様、極めて少ない。表7に示すように合計28点であった。以下に、その内容について報告する。

青色土層より黒漆椀, 朱漆椀, 黒漆鉢(1020)の他にへぎ板の破片が出土している。黒漆椀(1021)は内面朱, 外面黒の椀タイプで、外面に朱漆による文様が施されている。膜面の剝離が激しいために断言は避けたいが、鶴丸文かと推定される。黒漆鉢(1020)は重ね塗りが行われており、膜面の遺存状態は極めて良好で、光沢もあり安定している。口縁部のみの破片であり、器型復元は困難である。

茶褐色土層からは前述の黒漆鉢と同一個体と見られる鉢が出土している。(1022)の鉢がそれで、器壁は約1.0cmを計る。遺存度は極めて良好で、木質も安定している。広葉樹が用いられている。又、既に

1972年の概報にも報告されている黒漆塗りの蓋が出土している(1023)。蒔絵によるものと見られる図柄が見られる。極めて薄いつくりで、膜面や、木質も安定している。

黄褐色土層からは黒漆椀(1024・1025)が出土している。(1024)は内外面ともに黒漆塗りで、内外面に朱の輪違い文が描かれる。(1025)は高台部みの破片で、見込みに円文が3単位描かれる。

溝 SD 754 黒漆椀(1026・1027)や箱形木製品(1028)、鍋蓋(?) (1029)の他にも桶側板や椀破片が出土している。黒漆椀はいずれも高台部の破片で、内外面ともに黒漆である。箱形木製品は幅約1.7cm、厚さ約0.5cmを計る。内外面に朱漆が塗布されている。底は黒漆が塗布されていたものと見られる。側板部分の破片のために、全体の寸法は不明である。箱物の蓋かも知れない。鍋蓋状の板(1029)には釘穴が数箇所見られる。釘は残存していない。

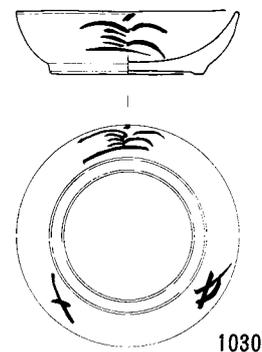
溝 SD760 黒漆椀(1030)は既に概報でも紹介されている資料で、外面に朱色の漆による草花文が3単位描かれているが、3つがすべて同じ図柄ではなく、少しずつ違うようである。ひとつはカタカナの「メ」に似たものであるし、ひとつは「亀」の図柄のように受け取れる。トータルとしてこの椀に描かれた外面の文様は蓬萊文がデフォルメされたものである、と考えられる。他に内面朱塗りの黒漆椀がちょうど1個体部分出土しているが小破片のために図示し得なかった。

溝 SD765 (1031)は黒漆椀(?)破片である。外面黒、内面朱色の漆塗りで外面には朱描きによる漆絵が見られる。松、楓葉などが描かれる。この資料に見られる漆絵のタッチは、全体に細い線で描かれており、これまでに一乗谷で見られた黒漆椀のタッチ、即ち蓬萊文や松扇文・開扇文、あるいは木瓜文などに見られた描法とは、基本的に異なるものであると思われる。更に上塗りがなされているらしく、膜面の遺存度は極めて良好で、光沢も失われていない。遺構の前後関係からすれば、この溝は他の溝に比べても古く、I期のものである。I期がどの時期までさか上るのは俄かに推し量れないが、少なくとも通常、一乗谷に見られる黒漆塗りの椀の漆絵とは「古い」様相を有する椀であることは言えよう。

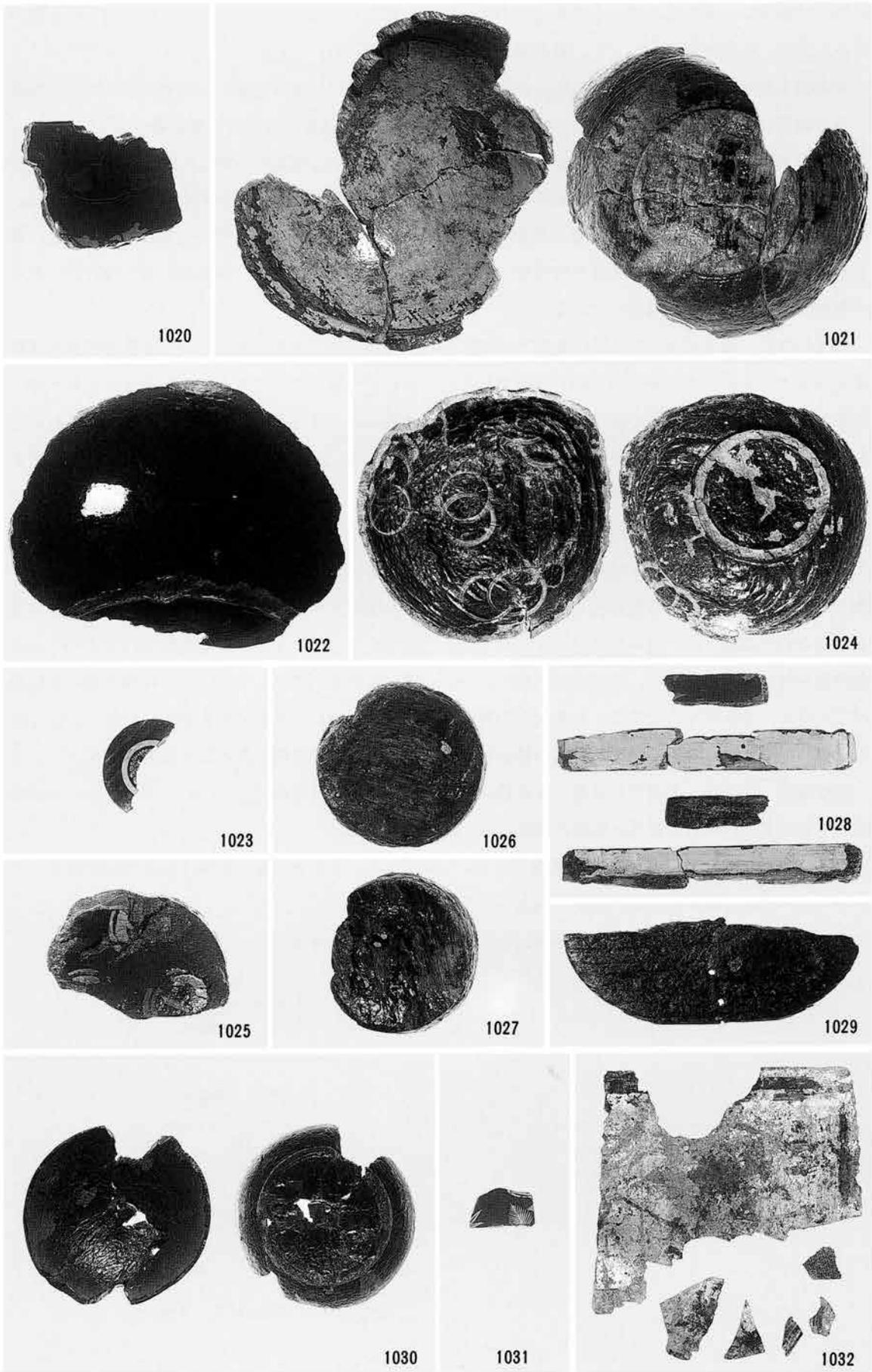
石積施設 SF769 金箔押しと見られる箱形木製品の破片(1032)が出土している。ニカワもしくは漆によって貼り付けられており、金箔の部分のみが残存している。

他に溝 SD 754 の炭層と、掘立柱建物 SB 750 の炭層から、朱漆椀破片と松扇文の黒漆椀が出土しているが、いずれも細片のために図示し得なかった。

注(1) 鎌倉考古学研究所手塚直樹氏のご教示による。1990年に実見の機会を得た。



挿図32 第20次調査区出土木製品(1) S=1/3



挿図33 第20次調査区出土木製品(2)

4、小 結

a、遺 構

先述したように、第20次調査地区は、一乗谷川右岸の高台に位置する。下城戸に近く軍事上重要な地区である。後世の削平が著しかったが、発掘調査から発掘区全体を一つの屋敷とする、武家屋敷であることが判明した。「一乗谷古絵図」や伝承によれば、この地は「魚住出雲守」の屋敷跡と伝えられ、屋敷の背後にある谷を出雲谷という。

この調査地区は、これまでの既調査地区（1989年度まで）とは離れていること、道路等の町割に関する遺構も発見されなかったので、町割に関しては全く不明というより他ない。ただ、この屋敷跡と一乗谷川の旧河川敷との距離が15mしかなく、この間に武家屋敷を想定することは困難である。断定はできなかったが、砂利敷 S X 804 が屋敷の下を通る道路と推定され、これに面して「一乗谷古絵図」にある「光林坊跡」、「朝倉斎兵衛跡」の他1～2の屋敷が並んでいたことが想定できる。

年代

この屋敷の下限については、はっきりしている。則ち朝倉氏が滅びた天正元年（1573）である。ただ念のため付け加えておけば、天正元年8月、朝倉氏が織田信長に滅ぼされ一乗谷も同時に焼討ちにされた後、朝倉義景を裏切った前波吉継が越前守護に補せられ名も前波長俊と改めて一乗谷に居を構えた。一乗谷も一時復興の兆しも見えたが、天正2年1月、朝倉氏の旧家臣の争いに向一揆も加わり、前波長俊は富田長繁に滅ぼされると同時に、一乗谷も灰燼に帰し二度と復興することはなかった。従って正確には一乗谷が滅びたのは天正2年である。一乗谷の上限については、これまで「朝倉始末記」の記述によって、朝倉英林孝景が黒丸城から一乗谷に本拠地を移した文明3年（1471）とされてきたが、文献上からは15世紀初頭に朝倉氏は一乗谷に本拠地を移していたと解釈できる記録もあり、1450年代には確実に移ってきていたようである。⁽¹⁾この屋敷の上限についてははっきりしないが、一乗谷が城下町としての形を整えつつあった15世紀後葉過ぎから16世紀初頭にかけての間と考えておく。この屋敷からの出土遺物群がセット関係を整えるのがこの時期と考えられる点からも矛盾しない。

構成

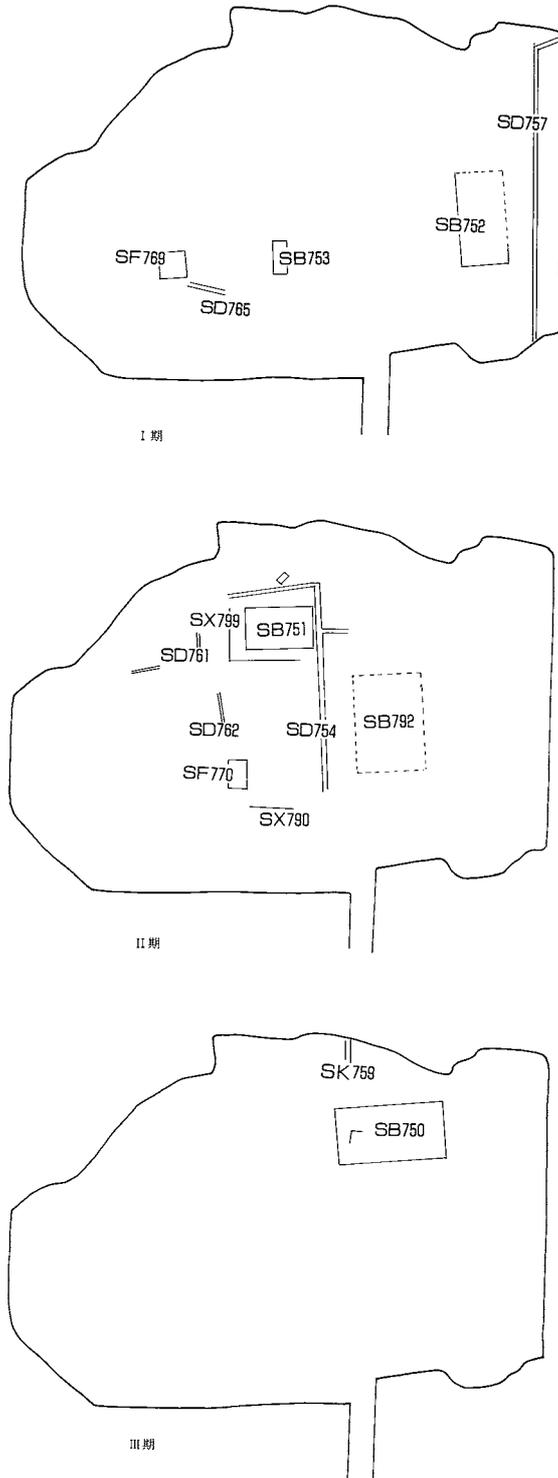
この屋敷は東は山、北と西は2mないし3m低い段で区画されるが、南についてははっきりしない。一応 S D 757 が、隣屋敷との境界と考えると、面積は約 2,200㎡になる。屋敷内部の構成については、後世の削平が著しく遺構の残存状態が悪いため不明な点が多いが、およそ3時期にわたって屋敷が営まれていることが判明した。

I期は東西溝 S D 757、礎石建物 S B 752 を中心とする遺構群で、石積施設 S F 769 もこの時期の遺構であるが、確認された遺構が少ないので具体的な屋敷の構成については全く分からない。

II期は、石組溝 S D 754、礎石建物 S B 751、石積施設 S F 770、礎石群 S X 789、S X 793、土壇群 S X 788 を中心とする遺構群である。この時期の遺構も大半が削平されており、この屋敷の構成を検討するには残存している遺構が余りにも少ない。しかし、大局的にみると発掘区を東西に貫流する S D 754 より南は、大半の礎石が取払われて建物の正確な規模を知ることはできないが、S X 789、S X 793 の様に残存している礎石がしっかりしているところからある程度の規模の建物が建っていたと想像でき

る。これに対してSD 754より北側は、石積遺構SF 770のほか灰や炭が詰まったピット群が存在することや、礎石建物SB 751も4間×2.5間と比較的小規模で、規模の大きい建物が存在していた形跡がない。このような遺構の性格の違いから、南半分は表向きの空間で、北半分は奥向きの空間であったと考えることができる。なお礎石建物SB 751の性格については、ほぼ半間おきに礎石や束の礎石があることから床を張った建物であったと考えられ、遺構面からは灰や炭等が検出されなかったことから台所ではないようである。

III期は、掘立柱建物SB 750がある一段高い部分だけで他はすべて削平されており、屋敷の構成については全く不明である。この一段高い部分にある遺構は、SB 750の他、L字状の石列SX 807とそのすぐ東にある石列SX 806、土壇SK 759、石列SX 803であるが、まとまりのある遺構群とは言えない。SB 750は、6.8m×4.2mとかなりの規模を有するにもかかわらず掘立柱建物で、さらに柱が両外側の桁行き方向しかないなど、構造上かなり変則的な建物である。使用されている柱は直径が約20cmとしっかりしている。しかし、全てを8本の柱で支えることは無理があり、建物内に礎石があったがそれが削平されたと考えられる。またこの建物の性格については、規模は大きいが掘立柱建物であることや、柱穴から銅が溶けた粒や銅の小片等が出土していることから、工房的な建物か、この屋敷の主屋を建てる際一時的に工房的に使用された建物と推定している。なお、L字状石列SX 807はSB 750の内部にあるにもかかわらず方向が少しずれており、時期的な問題も含めて両者がどのような関係にあるのか判断し難い。



挿図34 遺構変遷略図

掘立柱建物について

先述したように、20次調査では掘立柱建物が検出されたので、これまで一乗谷の発掘調査で検出された掘立柱建物を拾い上げてみると次のようになる。

S B 219 中の御殿

南門よりの庭池の上に位置する。南北2間(3.8m)×東西3間(4.8m)分が検出された。柱の間隔は掘立柱建物としてはよく揃っており、1間1.88m(6尺2寸)を基準としていると考えられる。柱穴の掘り方は直径が約0.7~0.8mと大きく、柱穴は直径が30cmであるが柱根が残っていなかった。

S B 203 中の御殿

南門の主柱で間口は1.9mある。内側に控え柱の柱穴がある。

S B 281 新馬場

門より西へ約26mよった位置にあり、北へ寄って通路S S 335に面している。II期の建物で南北3間(7.9m) 東西2間(3.7m)の南北棟である。柱間は不揃いであるが6尺、7尺を単位とするようである。方位はS B 280と同じく北土塁SA 263に規制される。この東側にも柱穴群と1辺0.3~0.5mの方形の浅い灰穴があり、井戸S E 291とつながっている。柱根は残っておらず、柱の形状は不明である。

S B 409 15次調査

第I期に造られた掘立柱建物で、東西2間(3.85m) 南北2間半(4.8m)である。

S B 842 24次調査

発掘区のはほぼ中央に位置するI期の掘立柱建物である。規模は東西1間(3.7m) 南北2間(3.7m)である。

S B 1023 29次調査

町屋敷の掘立柱建物で、規模は東西4間(6.6m) 南北2間(4.3m)を計る。

S B 1345 35次調査

井戸S E 1353と関係があると考えられる掘立柱建物で、1間四方(2m×1.4m)の建物である。

S B 1895 42次調査

発掘区中央西よりで検出された掘立柱建物である。掘立柱跡と見られる9個の柱穴からなり、一部に柱根を残している。規模は東西2間(8.4m) 南北2間(5.2m)を計る。東西方向の柱間寸法は約4m、4.4mであり、東西方向のそれは約2.6mである。東西方向の柱間寸法がかなり大きいことから、この9本の柱を基本柱として、その中間には礎石を据えて柱を立てた、掘立柱と礎石を併用する建物だったのかも知れない。

S B 2044 36次調査

区画36-3に見られる。規模は2間(3.7m)×3間(7.8m)である。内部に土壇S K 2113をもつ。

S B 2039 36次調査

区画36-9に見られる。規模は2間(4.5m)×2間(6m)と見られる。

S B 2170 36次調査

区画36-14に見られる。規模は2間(6.7m)×2間と見られる。

S B 2314 43次調査

L地区に位置する。規模は不明、2間(4m)×4間(8.8m)分が検出された。

S B 2315 43次調査

L地区に位置する。規模は2間(3.8m)×1間一分が検出された。

S B 2316 43次調査

L地区に位置する。規模は2間(4m)×2間(3.6m)と考えられる。この建物を取り囲むように存在する溝S D 2309, 649, 2310とは時期的にずれると考えられる。

S B 2350 43次調査

K地区に位置する。規模は不明。現存では2.5m×2.8mを計る。

S B 2351 43次調査

K地区に位置する。規模は不明。現存では1.8m×2mを計る。

S B 2831 46次調査

小区画群であるA地区に位置する。規模は東西2間(5m)×南北2間(4.5m)を計る。柱根が残っており、直径は18cm程度、材質は雑木類とみられる。区画いっぱい建てられている。

一乗谷における掘立柱建物は17例あるが、500を越す礎石建物からみれば極少ない。これらの掘立柱建物は、広い武家屋敷の一角に建てられたものと、町屋と考えている小区画群に建てられたものに分けられる。前者の例はこの20次調査で検出されたS B 750、新馬場のS B 281、中の御殿のS B 219、15次調査のS B 409等が挙げられる。S B 750は先述したように工房的な性格が想定され、また、梁行き方向が6.7mもあるのに間に柱穴が全くないのは構造的に無理があり、ここに礎石があったと想定でき、掘立柱と礎石の両方を用いた構造の建物と考えられる。S B 219、S B 281は規模がやや小さく、屋敷内の位置も偏っていること、S B 409は規模が小さいことからいずれも主屋とは考えられず、物置的な床を張らない建物と考えるのが妥当であろう。ただ奥向きの小規模な建物であるからといって掘立柱建物とは限らない。むしろ一乗谷では礎石建物であることの方が多い。

町屋に建つ掘立柱建物の場合は、敷地の規模が限定されていることから間口2～3間(4～6m前後)×奥行き3～4間(7m前後)の建物が多いようである。これらは町屋の礎石建物規模とほとんど変わらず、敷地の広い町屋が礎石建物で敷地の狭い町屋が掘立柱建物とは限らない。42次調査で検出されたS B 1895は先述したように掘立柱と礎石の両方で建てられた建物と考えられるが、間口2間程度の規模の小さい建物でも礎石建物の場合中央に礎石が並ぶこともあるので、建物の中央に掘立柱の柱穴がない場合にはここに礎石が並び掘立柱と礎石併用の建物であると考えられる。また町屋の建物の場合でも掘立柱建物より礎石建物の方が多い。

注(1)「朝倉氏と戦国村一乗谷」松原信之

b、遺物

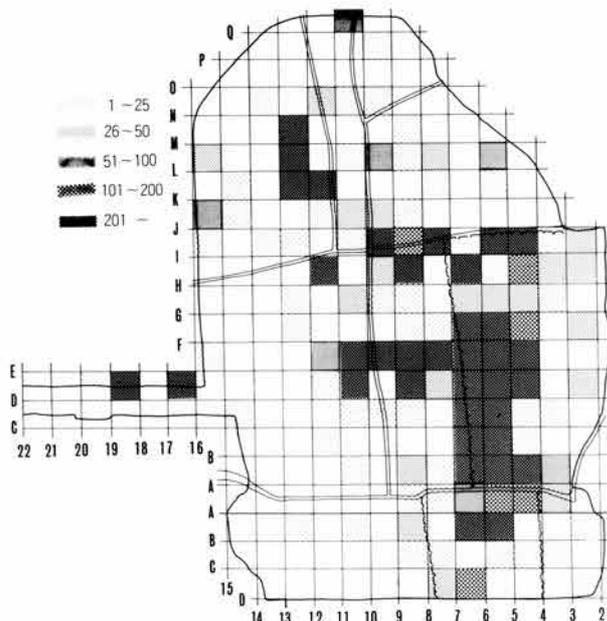
遺物については、本文中である程度触れてきたので、まとめの内容は尽きている。ただ、発掘調査で採集された遺物の分布状況や、整理の段階で気付いたことが2・3あり、この点についてここで触れていくこととする。

出土遺物の分布状況

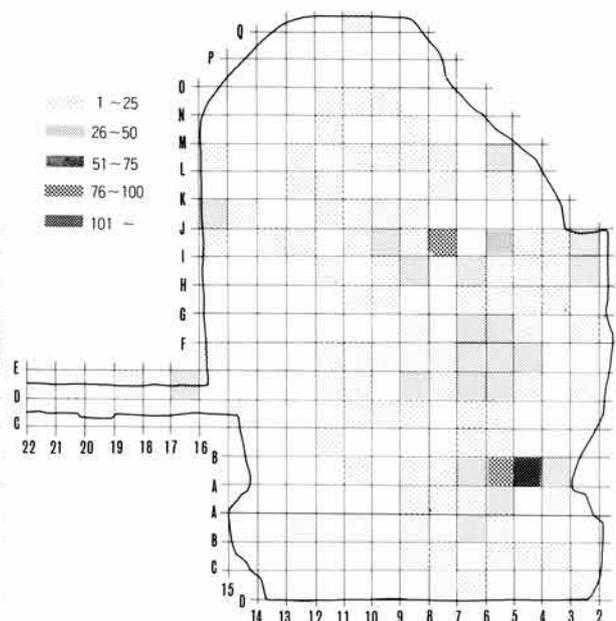
調査区全体での遺物の出土状況を挿図35に示した。各グリッドでの出土状況を、アミの粗さで5段階に区分した。殆ど遺物が出土していないグリッドが目立つ。調査区の西側半分にそれが多く見られる。段丘崖に位置し、すぐ下には河川敷の石垣が見られることから、削平が相当部分に及んでいることが予想される。又、当然のことながら遺構を検出したグリッド、即ち東西溝 SD 757・754や石積施設SF 769・770、柱穴・ピット等々では集中的に遺物が採集されており、密集度が高くなっている。そうした状態に加えて、掘立柱建物 SB 750、礎石建物 SB 751の検出された6・7ラインの石垣では遺物の出土量が多くなっていることが指摘できる。或いは調査区西端の16・17ラインの部分では河岸段丘崖となり、トレンチ断面からも土砂の崩落が認められる。河川の護岸工事に際して、上段の土を削り落としたことが推察される。そのことを反映してか遺物の集中的な出土が見られた。

挿図36～38には個別の器種の中から、比較的出土量の豊富な器種を意図的に選び出した。越前焼甕・摺鉢、土師質土器(皿)のそれぞれについて、各グリッドでの出土状況を段階的に示した。全体の出土分布図と同じように5段階に区分した。しかしながら、越前焼甕と摺鉢、土師質土器ではそれぞれに出土数の絶体量にバラツキがあり、等区分では分布状況が平等に反映されないと考え、それぞれに区分方法を変えてみた。

当面の問題として溝や石積施設が検出された各グリッド、即ちGF～J 4ラインやGE 4～11列などで土師質皿が集中していることがわかる。その集中度は、東西溝 SD 754 では1グリッドあたり700～800点に達しており、文字通り、「土器溜まり」の様相を呈している。又、この土師質皿の分布はすべてのグリッドに広がるものではなく、全く出土しないグリッドもある。



挿図35 全体遺物分布図



挿図36 越前焼甕分布図

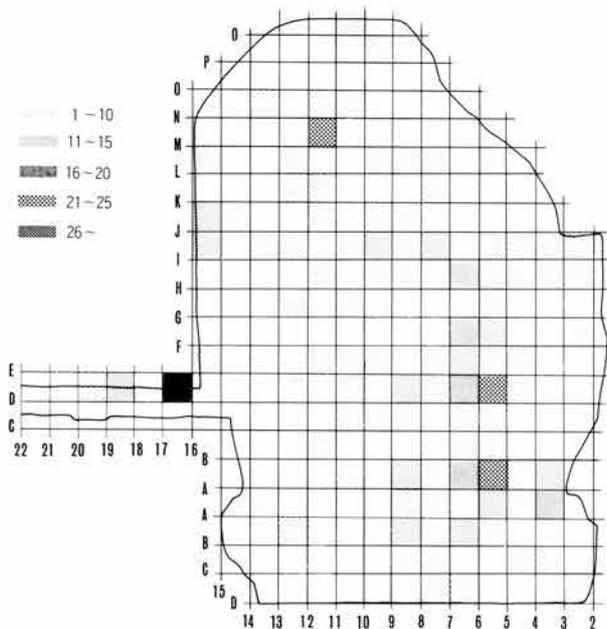
これに対して、越前焼甕・播鉢の出土分布は、概ね重なり合うことが指摘できる。甕の場合は25点以下、播鉢の場合は20点以下の出土をみるグリッドの広がり、遺物全体の出土の広がりとはほぼ一致しているようである。甕の分布で特に集中しているグリッドはG A 04・05で、ちょうど掘立柱建物 S B 750 に位置し、その南端にあたる。100～130点の出土量をみた。播鉢もこの掘立柱建物の南端付近で遺物の集中をみる。播鉢の集中するグリッドには他にG D 16がある。これは前述しているように、河岸段丘の部分であり、削平による掻き寄せ、の結果と考えられる。

遺物の接合状況

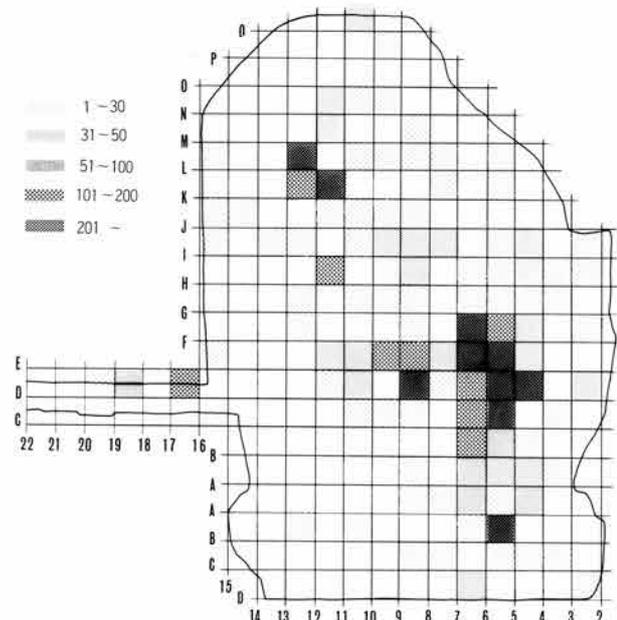
ここで、出土遺物の接合状況について見ていくこととする。全体的には遺物の接合状況ははかばかしくはなかった。特に越前焼の各器種についてそれが指摘され、どのような器種が見られるか、器種形態についての追及には条件不足の感は否めない。又、瀬戸・美濃製品や中国製陶磁器にも同じようなことが言える。

それでも2・3の遺物については接合資料が得られているので、それらを中心にして、各グリッドでの接合資料の分布状況を見てみる。取り上げる資料は5点以上が接合したものを原則的に採用することにし、それ以下の接合資料については繁雑になることを避けるために省略することとする。

まず、越前焼について見ていく。接合資料はA～Gの7個体がある。Aの甕はJ B 05・07及びG A 02・03に分布が見られ、更にG F 05でも採集されている。東西方向に破片が散らばっている状況に加え、南北方向にも破片の広がりがあるものと判断される。Bの資料もAと同じような状況が指摘でき、G A 02と04、G D 05にそれぞれ破片の広がりが確認できる。ところがC・DとFの資料については破片の広がりに偏りがあり、ちょうど掘立柱建物 S B 750 が検出された場所、即ち5～6ラインの石垣列の段上に分布する傾向があることが指摘できる。この3つの甕のうち、Dの甕は図版に示した(572)の、中甕の資料である。土層の面からは褐色土の遺物として扱っているもので、後でも詳述するが、全面に火ハジによる荒れが見られ、「クレーター状」の凹凸が肩から胴部にかけて目立つ。大部分の破片がこの石垣の段上の場所で出土している事実から、「原位置」がこの場所である可能性は極めて高い。Fの資料は石垣段上で、南北方向に分布する。特に S B 750 にのみ広がる傾向が見られる。Gはひとつのグリッド内



挿図37 播鉢分布図



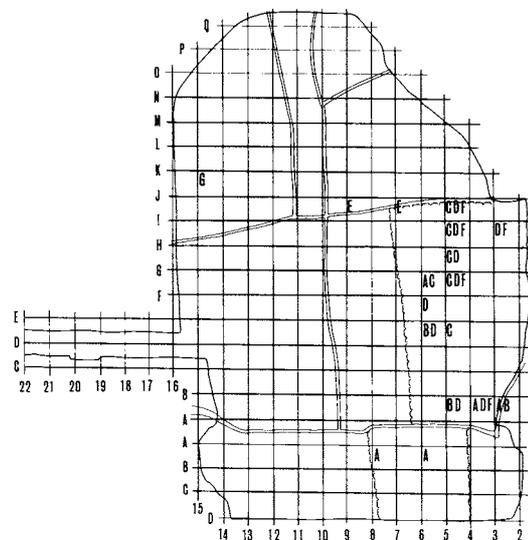
挿図38 土師質土器(灯明皿)分布図

で接合しており、グリッドとしての広がりは見られない。

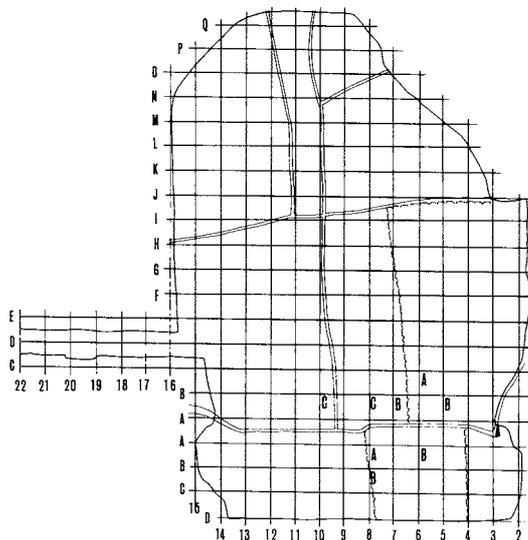
次に播鉢について見てみよう。A～Cの3個体がある。AはG B05とJ B07とで接合を見ている。Bは4つのグリッドで接合を見ており、CはG A列で7と9のグリッドで接合を見ている。接合資料が全体に少ないのであまり参考とはならないが、いずれも狭い範囲内で接合するという傾向があるように見受けられる。前述の甕の場合のように大きな移動がなく、当然のことながら、器型が小型であることからの理由から、バラバラに散逸することがあまりない、ということに裏付けているようである。

次に土師質土器であるが、この場合は土釜や土鈴を除いた、大部分の土器、即ち灯明皿の接合について見てみた。A～Kまで11個体が5点以上の接合を見ている(完型資料もこの場合は除いてある)。こちらは播鉢よりももっと接合の範囲は小さくなる。まとめて出土した遺構が、溝や石積施設などに限定されている、ということが左右していることが上げられるが、いずれも1グリッドにのみ集中しているのである。器型が播鉢などより更に小さく、廃棄された後も大きな移動がなく、それほど散逸していないことを裏付けている。ただ、接合をみない、断片の灯明皿については逐一広がりをおさええることをしていないので、それについてはこの限りではない。全体の遺物の60%以上を占める土師質土器(灯明皿)の大半がこうした資料であることを考えると、接合関係を追跡することには限界があるが、溝や石積施設という、限定された遺構に遺存するものについてはある程度の接合関係をとらえ得るであろう。

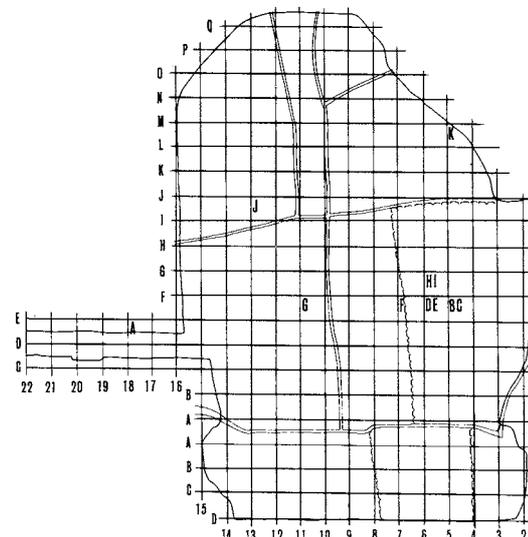
以上、3器種に限定して、その接合関係についてグリッドの広がりを見てみた。遺物整理上の基礎的な方法として、一旦遺構との関連性を除外して、このような接合関係のみに限定して、遺物採集の最小単位であるグリッドに還元して、面的な把握を試みたのであるが、本調査区に限り、甕、播鉢、土師質土器がそれぞれ分布する範囲が異なり、それぞれ異なる接合状況を示している傾向を指摘できるのではないか。これまでも朝倉館の出土遺物や、第36次調査区J区の出土遺物、ある



挿図39 越前焼甕接合分布図



挿図40 播鉢接合分布図



挿図41 灯明皿接合分布図

した遺物の接合状態について分布状況の把握を試みる作業が行われている。そうして、そのような作業の中から得られる結果には、様々な要因が働いており、一様な分布状況を示してはいないことが理解されてきた。朝倉氏時代の、自然災害や建物の建て替え、道路普請などに伴う整地作業によって遺物が拡散・移動することが考えられるし、滅亡の前後に伴う略奪や火事場整理があったであろうし、近世以降には畑や水田への転換による攪乱・削平により遺物が散逸・移動していることがあるであろう。遺物の「遺構への帰属」の問題は、こうした「フィルター」を通して後に、条件が整えられていくものである。特に遺構が滅亡時期に近いものほど、この条件が厳しいものになる。

最後に本調査区出土の遺物について、これまで朝倉館跡、ショーゲドン、新馬場跡などで報告してきた武家屋敷跡の遺物の構成との簡単な比較を試み、違いや特質について見てみたい。

出土の傾向については、小野正敏(1984)「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究No.4』において、上記の調査区を含めた陶磁器組成についての比較分析があるので、それによりたい。ここでは個々の遺物について見てみたい。

絶対量の問題としては、調査面積や遺構の遺存度に比例するものであろうか、金属製品、木製品の出土が少ない。これはショーゲドン、新馬場においても共通の傾向であった。通常、木製品は出土する条件が他の遺物、とりわけ陶磁器類と比較して極端に限られている。井戸、溝、石積施設等々の遺構や湿気を帯びた部分での出土が大半である。今回の第20次調査区でも、溝や山際の湿気を帯びた場所での出土が目立った。

遺物の内容としては古手のグループとして越前焼の甕や播鉢、あるいは瀬戸系、中国製陶磁器の製品が2・3見られたが、いずれも少量の出土で、土層あるいは遺構的にまとまったものではないために、年代的に上限を捉え得るほどの資料にはならない。全体として見れば、小野分類でII群とした、暗褐色土層の播鉢(668)やIII群の播鉢類は甕破片との比較においてII群に対応する資料を欠いているが、中国製陶磁器における雷文帯青磁碗や、白磁の割り高台皿、あるいは溝SD765の漆椀(1033)などと概ね合致するものと考えられる。新馬場では「I期」として、II群の越前焼よりさらに古い資料が下層より出土している。本調査地ではこの点については対応する資料もなく、比較の限界を越える。下限の問題についても遺構的にはハッキリした内容を示さないが、IV群cの大甕が少量ずつ出土しており、これに対応する播鉢、瀬戸・美濃の鉄釉、灰釉碗・皿類がある。中国製陶磁器においてもE群に分類される、染付の「マントーシン」碗や皿がある。従って本調査区の上限がどの時期かは断定しにくい、II群を少量含み、III・IV群を主体としつつ、下限としてはIV群cまでの遺物を含む構成であると言えよう。

5、魚住出雲守と魚住氏について

第20次発掘調査地の字出雲谷は安波賀春日神社所蔵の「一乗谷絵図」には「魚住出雲守跡」と記され、朝倉氏の家臣魚住出雲守の屋敷跡と伝承される。ここでは簡単に魚住出雲守と魚住氏について叙述する。

まず魚住出雲守については、『朝倉始末記』巻第3朝倉金吾入道宗滴進発加州、附三城没落事の一節に弘治元年（1555）7月21日朝倉氏が朝倉教景（宗滴）を大将として加賀に出兵した際の武将の名のなかに「魚住出雲守」とみえる。⁽¹⁾『朝倉盛衰記』下の朝倉家士座列并素姓之事には「一魚住備後守景固、^{卅四}一同彦三郎、^{卅五}一魚住彦四郎、^{卅六}一魚住出雲守」と一族の名が列記されて、魚住景固父子と同族とみられている。⁽²⁾これらからみると魚住出雲守は義景の代の人物のようであるが、実名・父母などは明らかでない。

魚住氏は朝倉氏の家臣のなかでも重要な地位を占め、関係史料も残っている。まず魚住氏と朝倉氏の歴史的な関係については月舟寿桂の『幻雲文集』所収の魚住景宗画像賛・序に詳しい。⁽³⁾以下主としてこの史料により叙述する。魚住氏はもと播磨国明石郡の魚住庄を名字の地とする神官の家柄で、建武3年（1336）魚住明貞が赤松則村に従って足利尊氏に属し戦功をあげたという。その後魚住氏は播磨守護の赤松氏に仕えるが、嘉吉の乱（1441）後赤松氏から離れて朝倉氏に属し、⁽⁴⁾明貞の曾孫景貞は朝倉孝景（英林）に重く用いられ、朝倉氏の重臣の家としての地位を固めた。魚住景貞の子景宗は朝倉貞景（天沢）・孝景（大岫）二代にわたって近侍し、政務に関与し、評定衆の一員であった。⁽⁵⁾また「八坂神社文書」によれば、魚住景宗から代々魚住氏は祇園宝寿院と朝倉氏の当主との間の祈禱・巻数などの取次やその返礼に当たっている。⁽⁶⁾永正3年（1506）7月の一向一揆の越前侵攻の際魚住景宗は朝倉景職に従い志比庄川際を警固している。⁽⁷⁾また永正14年（1517）6月の丹後出兵、大永5年（1525）5月の近江出兵にも参加し、軍事面でも勲功があった。景宗は大永7年（1527）4月14日卒した。時に60歳という。

景宗の子景栄は父の跡を継いで朝倉孝景の奉行人を勤め、天文12年（1543）頃まで活躍した。⁽⁸⁾

魚住景固は魚住氏の最後の当主で、景栄の跡を継いだらしく、義景の代には年寄衆の一員であった。⁽¹⁰⁾景固は元龜元年（1570）5月の近江北郡出兵や同年9月から11月に至る坂本・堅田の戦いに従っており、織田信長との停戦講和の際には青木・魚住両氏の子が人質として信長方に渡されている。そして堅田の戦いで没した前波景当の跡に景固が奉行人に任じられたらしい。⁽¹¹⁾天正元年（1573）3月朝倉義景が敦賀に出陣したのに伴い、山崎吉家・魚住景固らは同年4月中旬に粟屋勝久の国吉城を攻めている。同年7月義景は最後の出兵を行ない8月6日近江北郡に進発するが、景固はこれには同行せず、近江中河内口の防備を担当した。⁽¹²⁾その後義景が刀祢坂の合戦に敗北して一乗谷に逃げ返り大野に没落すると、魚住景固は嫡男の彦三郎を敦賀に在陣する信長のもとに遣わして府中へ案内し、8月18日信長は府中龍門寺に着陣する。その後景固は信長の犬野攻に参加し、同21日北口の大將を勤めて義景を自殺させた景鏡の拠る亥山（居山）城を攻める。魚住景固は信長方に寝返ったのであるが、この背景にはかつて信長方に人質として遣わされたその子が仲介役をしたものとも思われよう。同年11月景固は信長から丹生郡の知行を与えられている。

翌天正2年（1574）正月19日富田長繁は国中の一揆を糾合して一乗谷に拠る守護代前波長俊を攻め、翌20日長俊は討ち取られる。同月24日長繁は朝飯を振舞うと称して自邸に魚住景固・彦四郎父子を招き、これを謀殺した。翌日鳥羽館に滞在していた魚住彦三郎も殺されて、魚住氏の歴史も終りを告げる。⁽¹³⁾

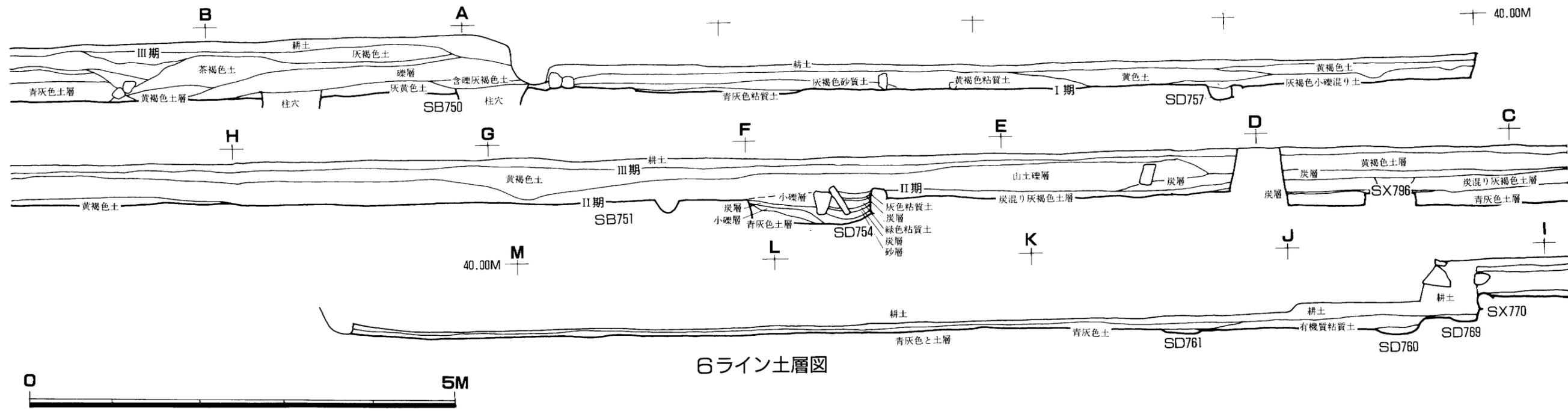
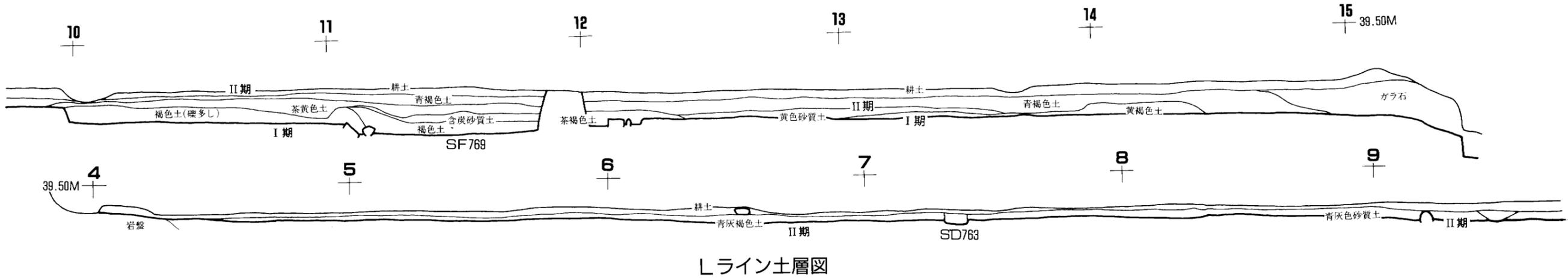
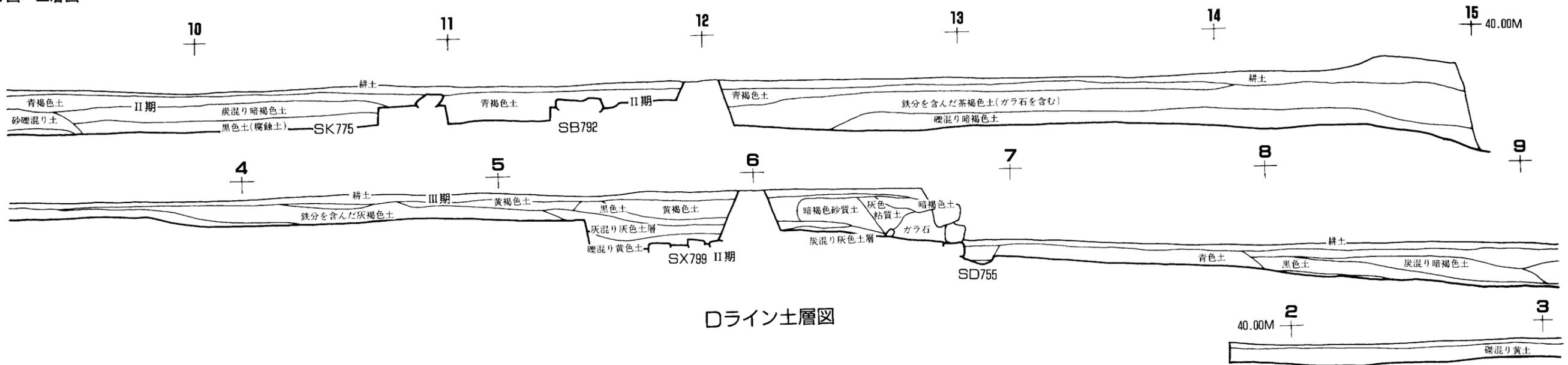
さて一乗谷の魚住氏の屋敷地については永禄11年（1568）足利義昭が義景の屋形に御成したときの辻

固の地点に「魚住前」・「魚住彦四郎前」の2箇所が並んでみえるので、子の彦四郎が景固とは別個に屋敷を構えていたことがわかる。⁽¹⁵⁾そしてこの辻固の地点の配列が「笠間小路」と「河原前」の間にあること、『越前国古城跡并館屋敷蹟』に魚住景固の館跡が上城戸の内の東方禁^{あし}にあったとされることなどから、魚住景固・彦四郎の屋敷は上城戸寄りの地にあったことが知れる。本調査地は下城戸の近くであり、一乗谷に三ヶ所も屋敷地のあったことが確認される魚住氏は朝倉氏の最も重要な家臣のひとつといえよう。

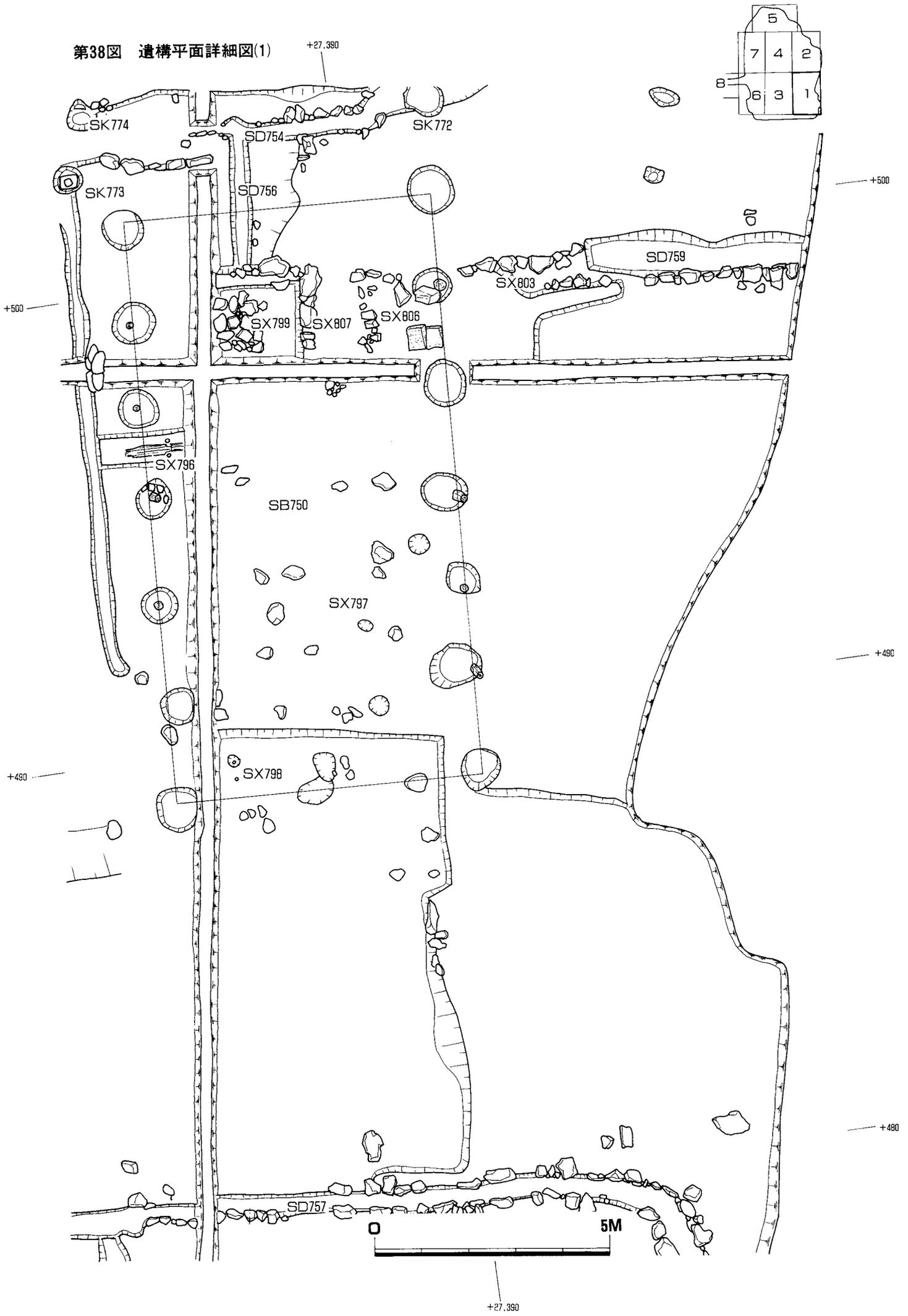
注

- (1) 「朝倉始末記」『福井市史資料編2 古代・中世』 857ページ。また同書巻第4 義景於三里浜見犬追物，附糸崎観音御参詣之事の一節には、永禄4年（1561）4月に催された犬追物に出仕した武将の名として「魚住出雲守」とみえるが、異本は「魚住備後守景固」に作る。同上 872ページ。「朝倉記」『越前若狭一向一揆関係資料集成』 163ページ。
- (2) 『一乗谷史学別冊6号』 17ページ。
- (3) 「幻雲文集」『統群書類従第十三輯上』 378ページ。
- (4) 『建内記』嘉吉元年7月12日条によれば、嘉吉の乱にともない朝倉氏は赤松満祐の被官人某の所縁として侍所の山名持豊から嫌疑をかけられ、朝倉氏はその事実を認めたが、仲介人があって事なきを得たという。朝倉氏と赤松被官との関係が当時から存在したことが実証されるが、恐らくこれが魚住氏に相当するものであろう。
- (5) 『蔭涼軒日録』延徳4年正月3日条には朝倉氏には評定衆が6人あり、魚住氏はその随一であったといわれている。景貞・景宗父子もこの評定衆の一員であったと考えられる。また景宗は永正6年（1509）6月11日付奉行人連署奉書写にその署名がみえ、奉行人であったことが確認される。「慶松勝三家文書」『福井県史資料編3中・近世一』 422ページ。
- (6) 「八坂神社文書」『福井県史資料編2 中世』 437～443ページ。
- (7) 「朝倉始末記」巻第2『福井市史資料編2 古代・中世』 841ページ。
- (8) 初見が享禄元年（1528）11月20日付奉行人連署奉書であるから、父景宗の没後に奉行人となったものと考えられる。「劔神社文書」『福井県史資料編5中・近世三』 757ページ。
- (9) 文書では天文11年11月21日付奉行人連署奉書まで、景栄の名がみえるが、「天文十二年記」5月2日条に朝倉両奉行のひとりとしてみえる「魚隅」は景栄のことを指すと考えられる。『福井県史資料編5中・近世三』 772ページ。『福井市史資料編2 古代・中世』 600ページ。
- (10) 「朝倉義景亭御成記」『福井市史資料編2 古代・中世』 811ページ
- (11) 元亀2年5月26日付の奉行人連署奉書に景固の名が初めて見える。「劔神社文書」『福井県史資料編5中・近世三』 782ページ。
- (12) 「朝倉盛衰記」下朝倉家士住居之事には魚住景固の住居が今庄にあったことがみえる。中河内口の警固はこのことと関係するものかと思われる。『一乗谷史学別冊6号』 10ページ。
- (13) 以上「朝倉始末記」「越州軍記」「信長公記」などに拠る。なお「信長公記」や「越前国相越記」には信長の家臣に「魚住隼人」という人物がみえる。
- (14) 「朝倉始末記」巻第5『福井市史資料編2 古代・中世』 890ページ。
- (15) 「八坂神社文書」年末詳12月17日付朝倉延景（義景）書状によれば彦四郎は早くからの朝倉義景の近習であることがわかる。『福井県史資料編2 中世』 440ページ。

第37図 土層図

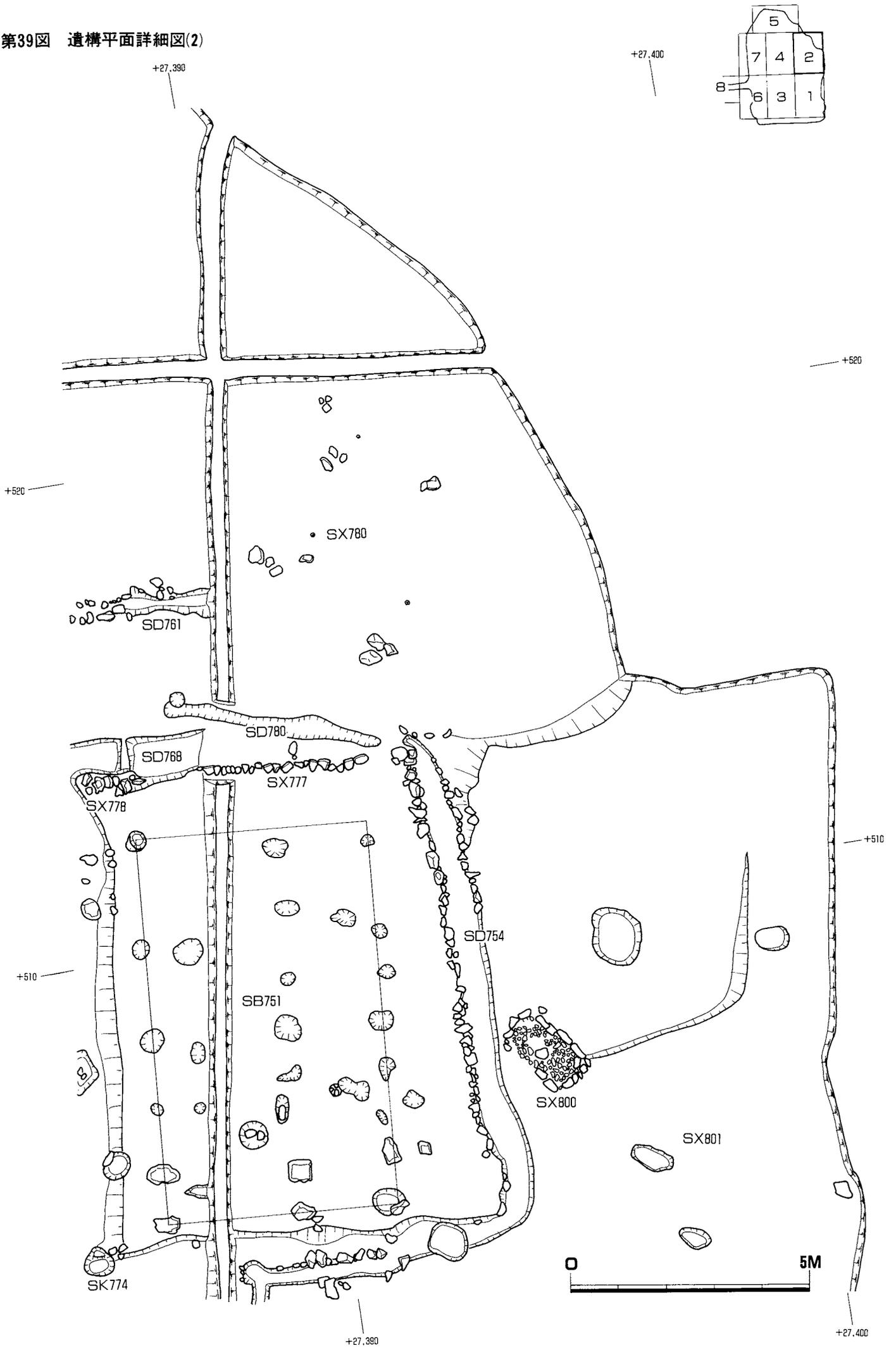


第38図 遺構平面詳細図(1)

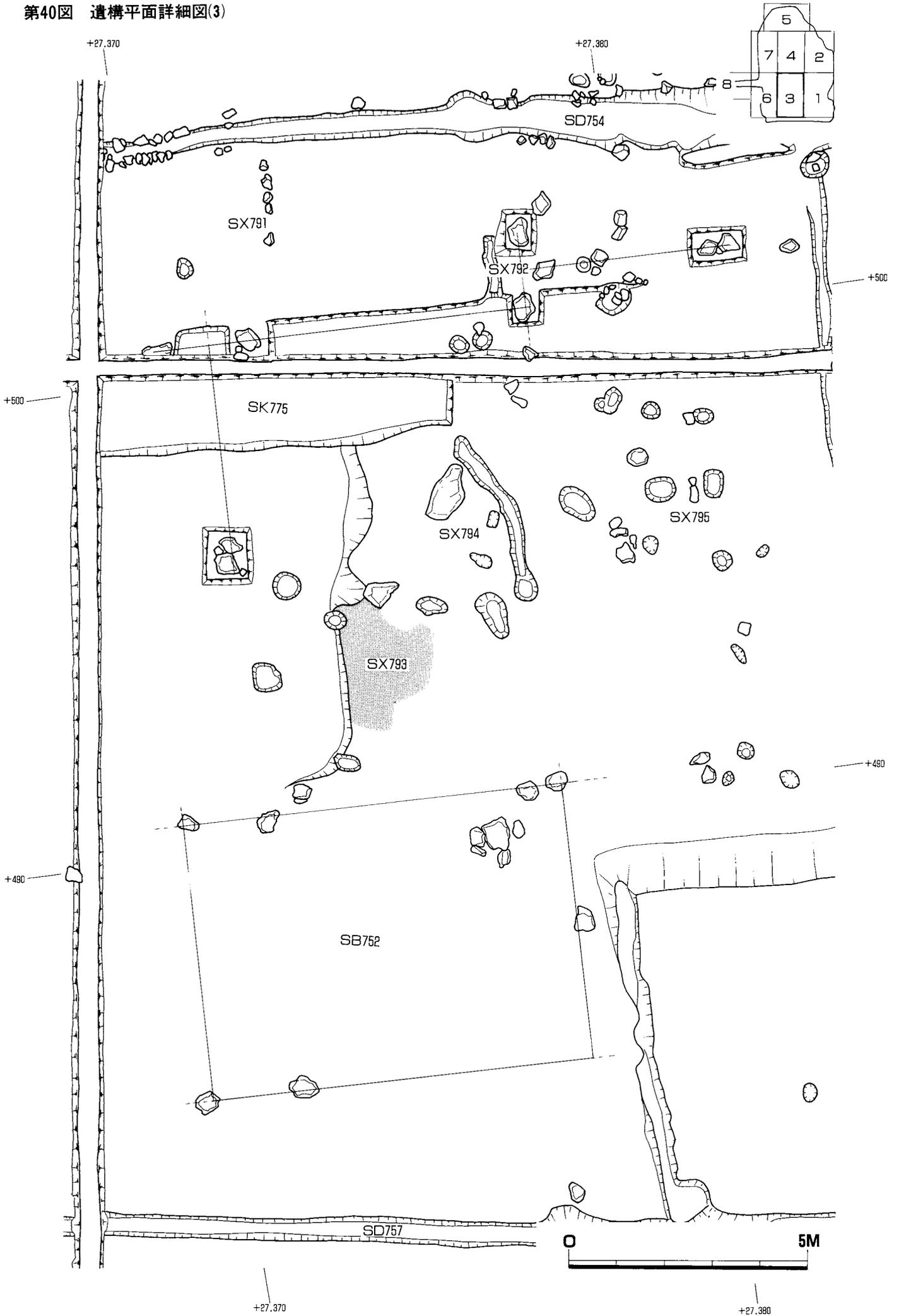


+27.390

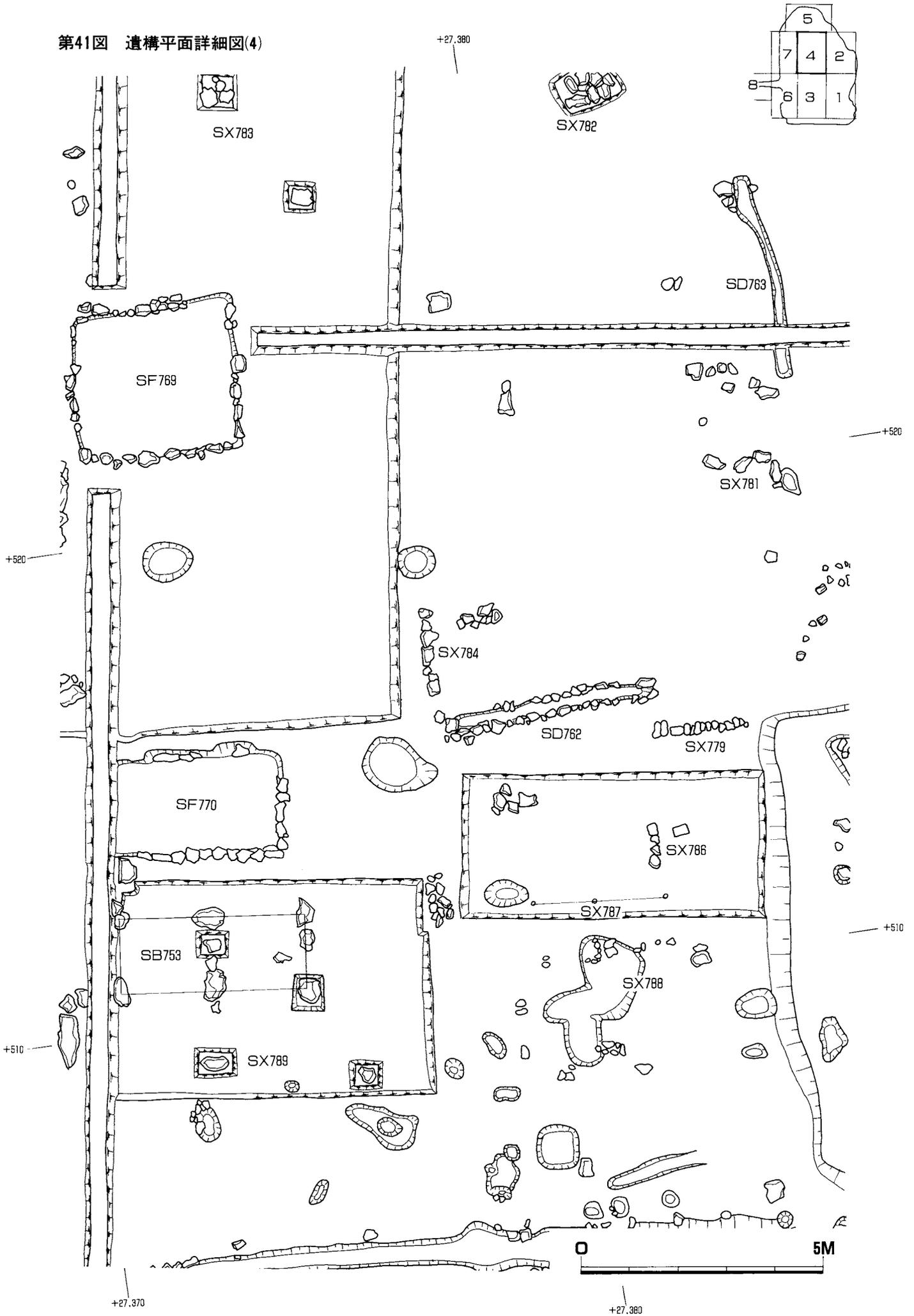
第39図 遺構平面詳細図(2)



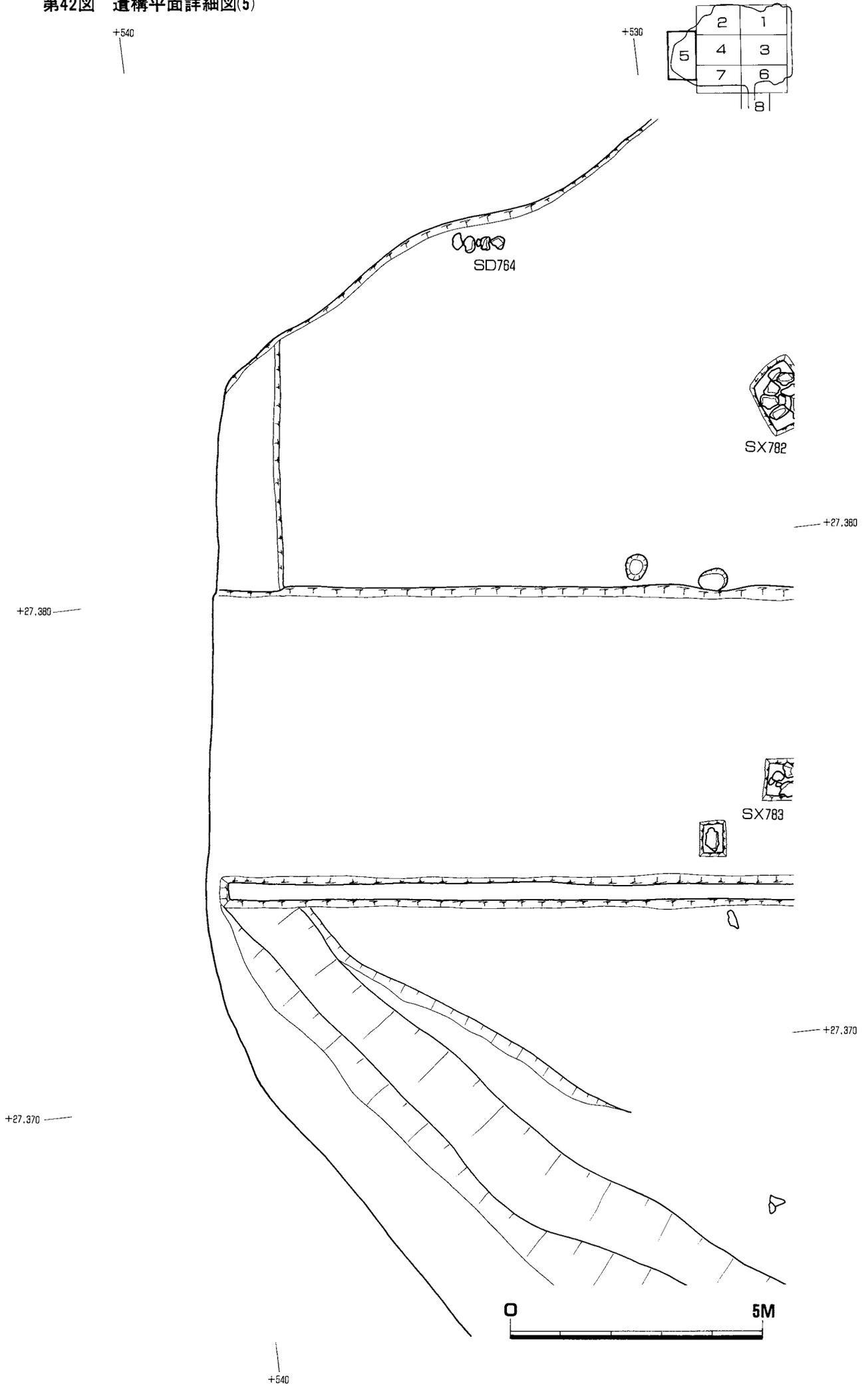
第40図 遺構平面詳細図(3)



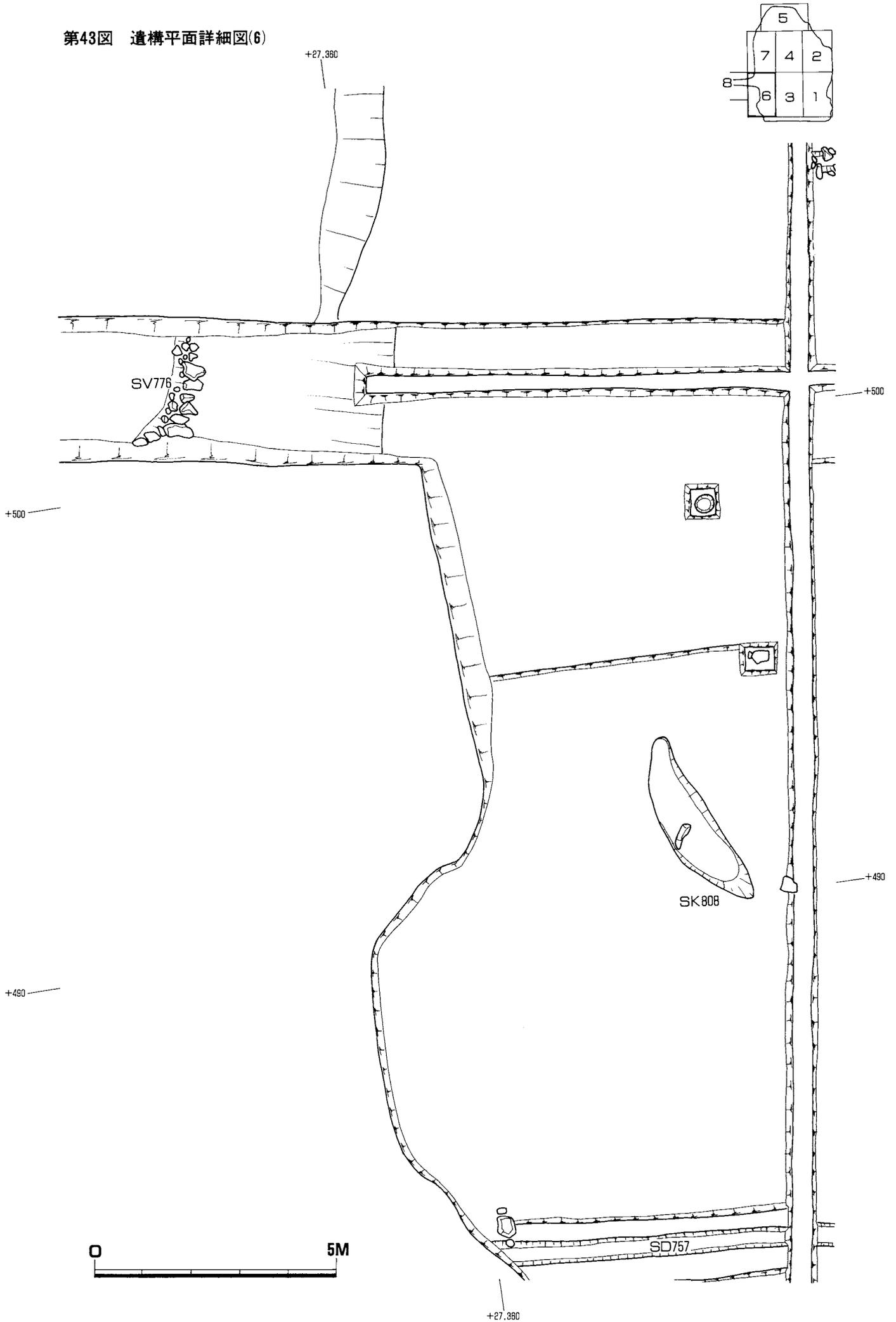
第41図 遺構平面詳細図(4)



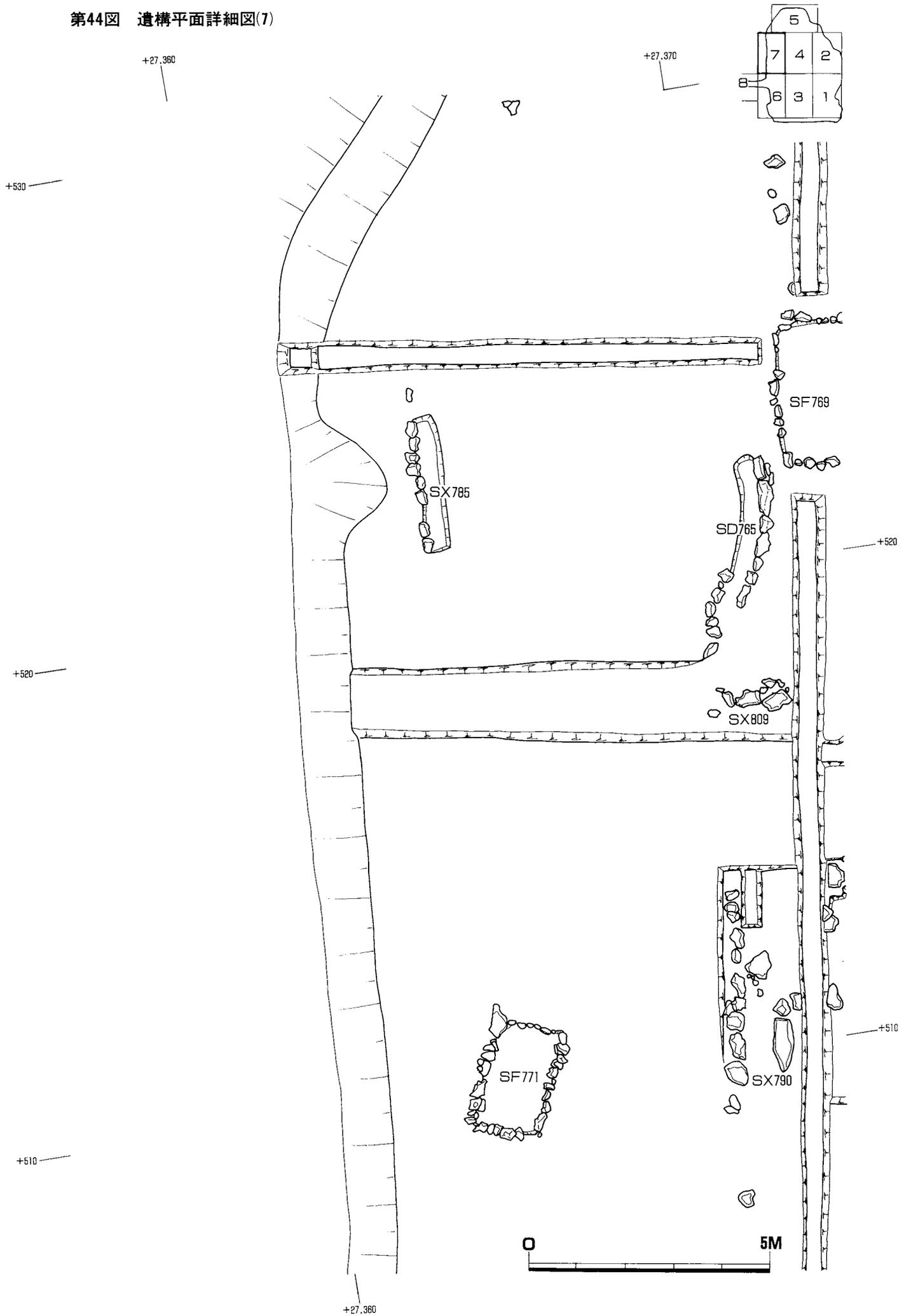
第42図 遺構平面詳細図(5)



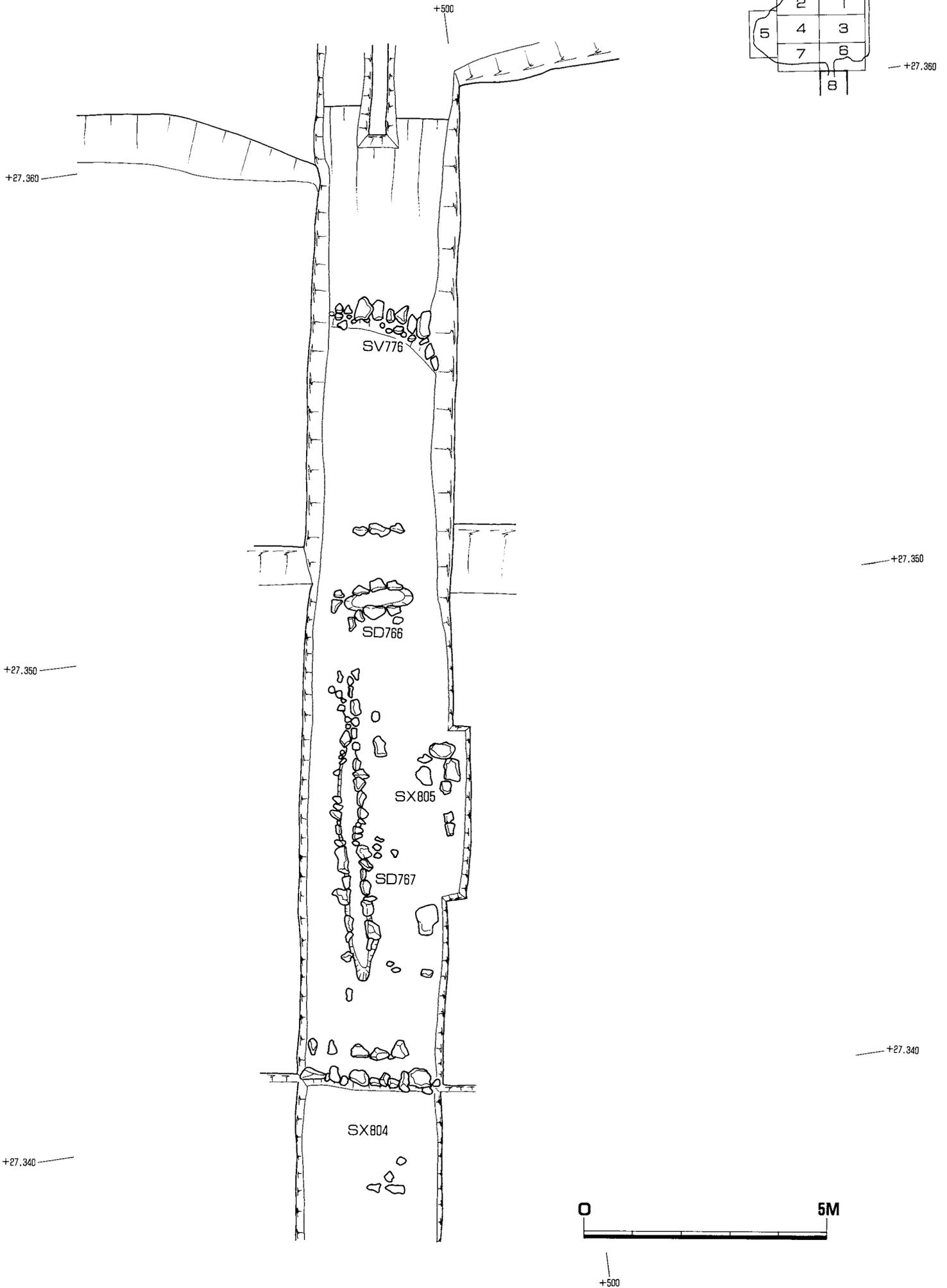
第43図 遺構平面詳細図(6)



第44図 遺構平面詳細図(7)



第45図 遺構平面詳細図(8)





全景(南西から)

調査区全景(2)



(西から)



(南から)



(南から)

調査区中景



東半部
(北から)



西半部
(北から)

掘立柱建物 SB750

SB750
(西から)



SB750
(南から)



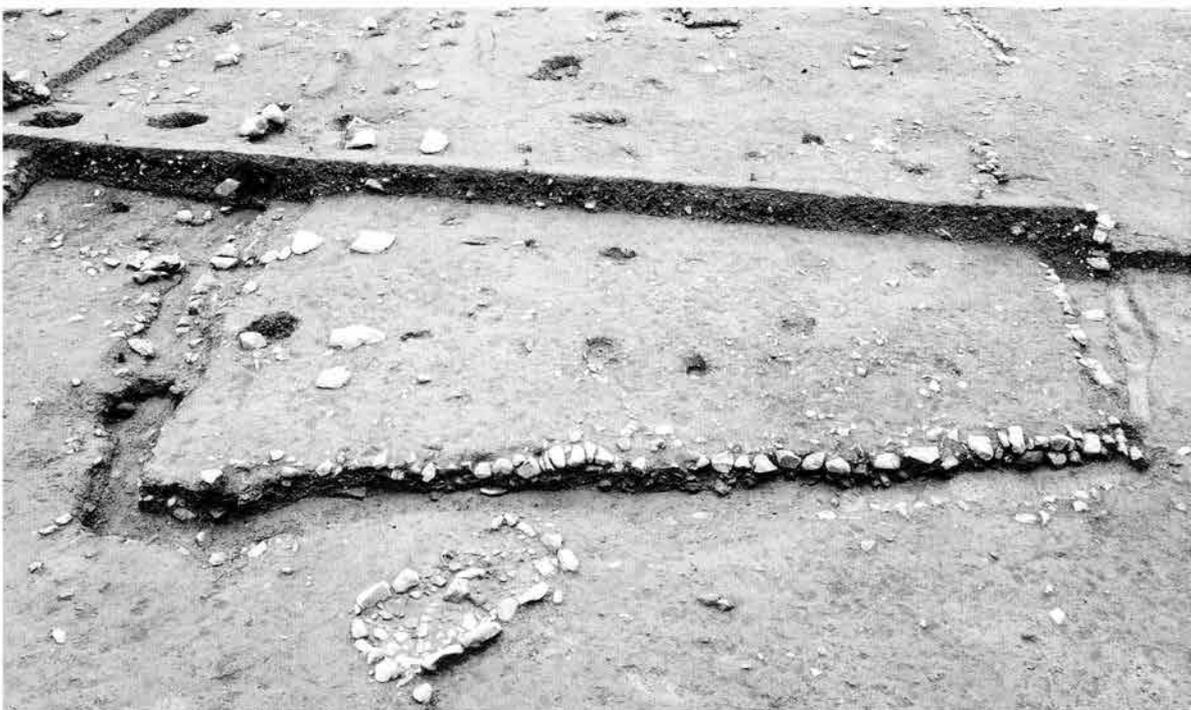
SB750
(北から)



礎石建物



SB751
(西から)



SB751・SD754
SX800
(東から)



SB751・SD754
SD760
(北から)

中央部遺構群



SD754・SB753
SX790(南から)



SB753・SF770
(東から)

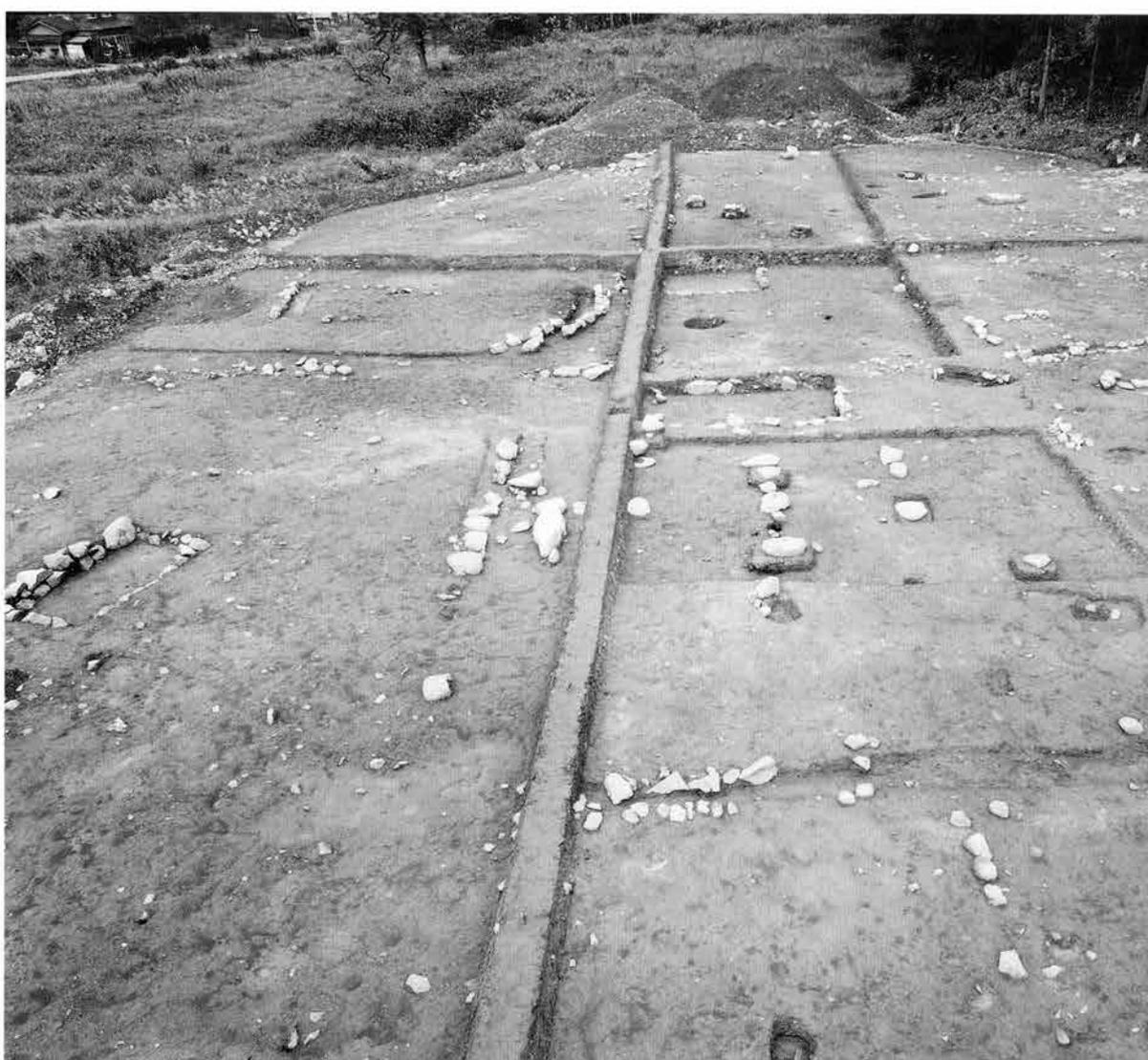


SX790・SB753
SF770
(西から)

屋敷中央部



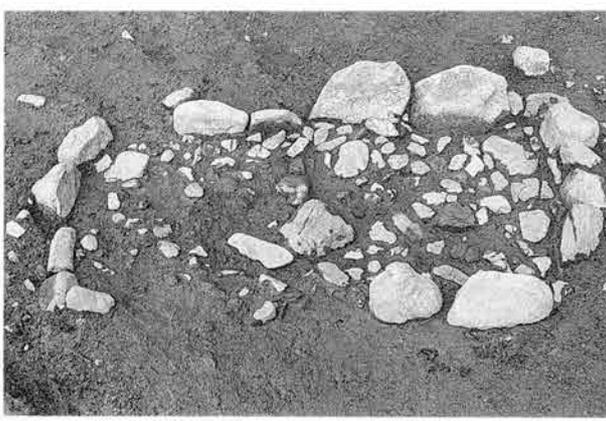
SF771・SX790
SB753・SF770
(西から)



SD754・SX790
SB753
(南から)

石積施設溝

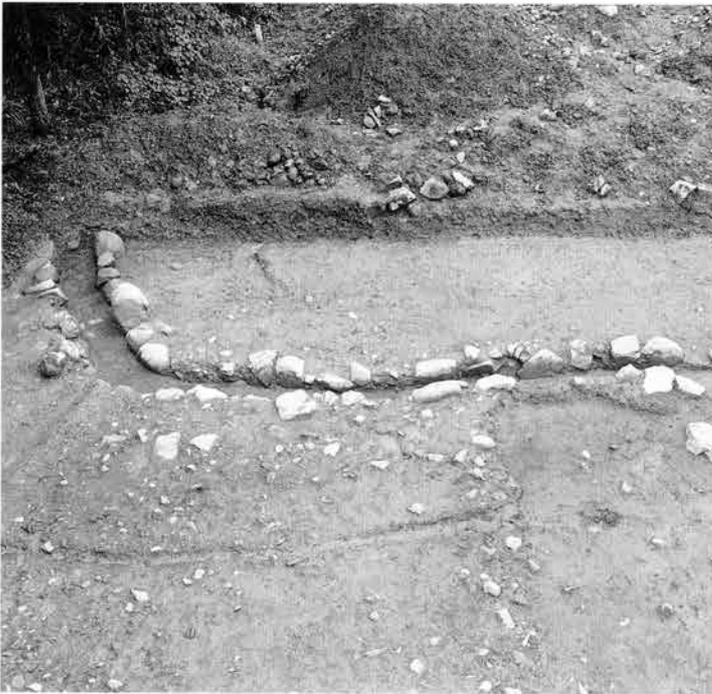
- ◀ SX 800
(西から)
- ▶ SF 770
(西から)



- ◀ SF 769
(西から)
- ▶ SF 771
(東から)



- ◀ SD 757
(北から)
- ▶ SD 757
(西から)

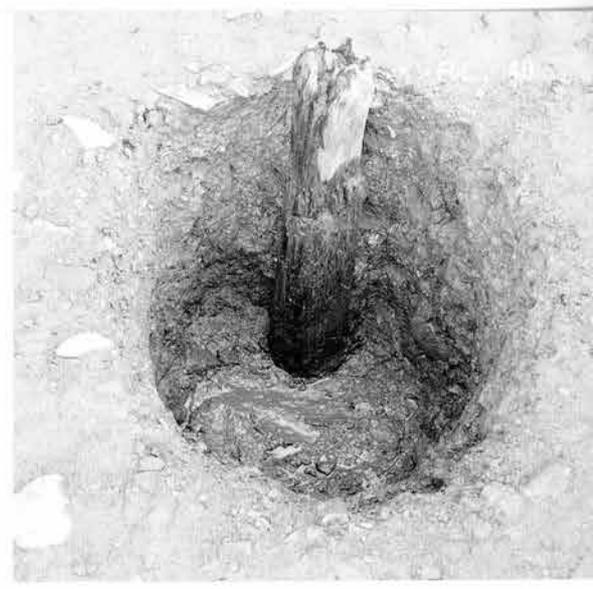


- ◀ SD 765
(南から)
- ▶ SD 754
(西から)



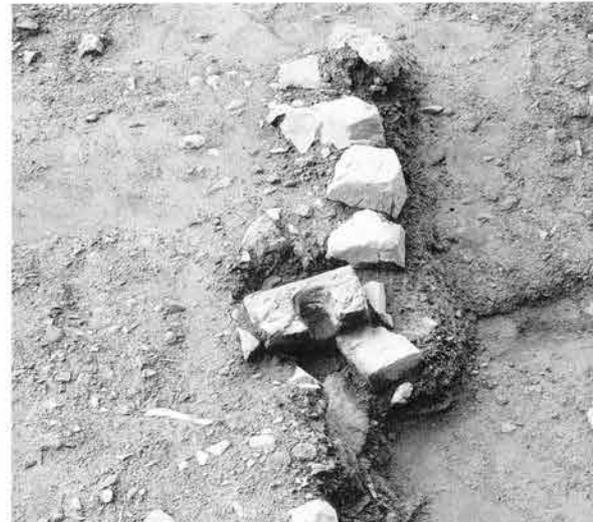
柱根・木樋・駒頭

柱 根

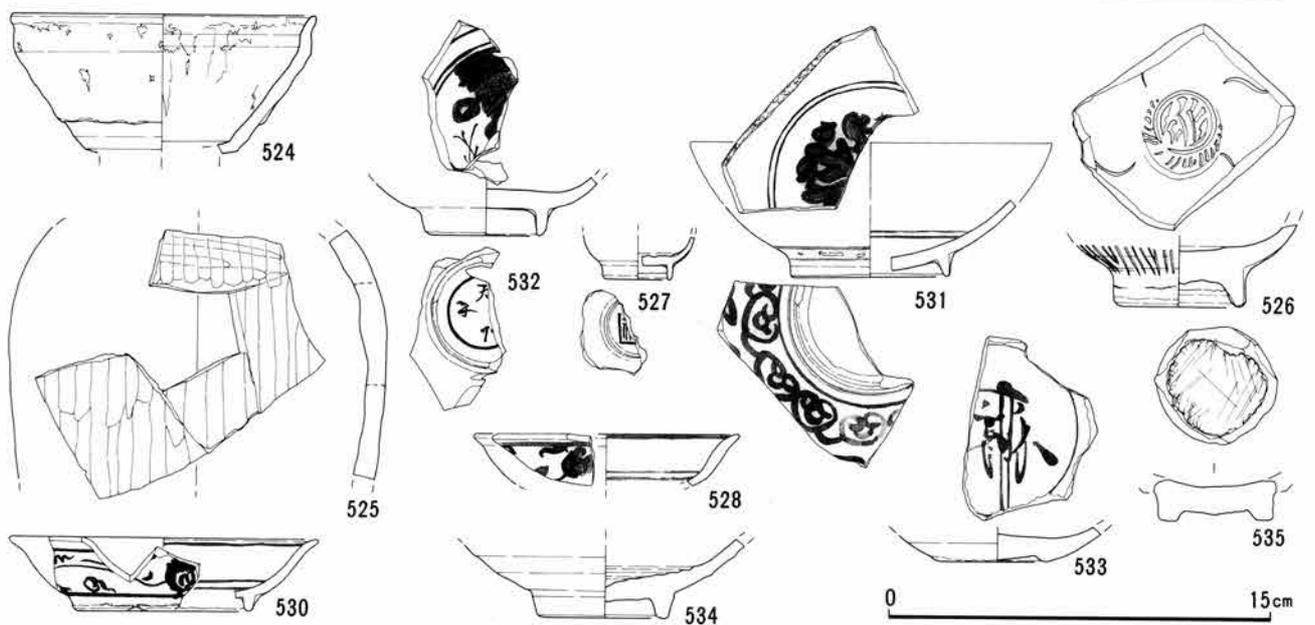
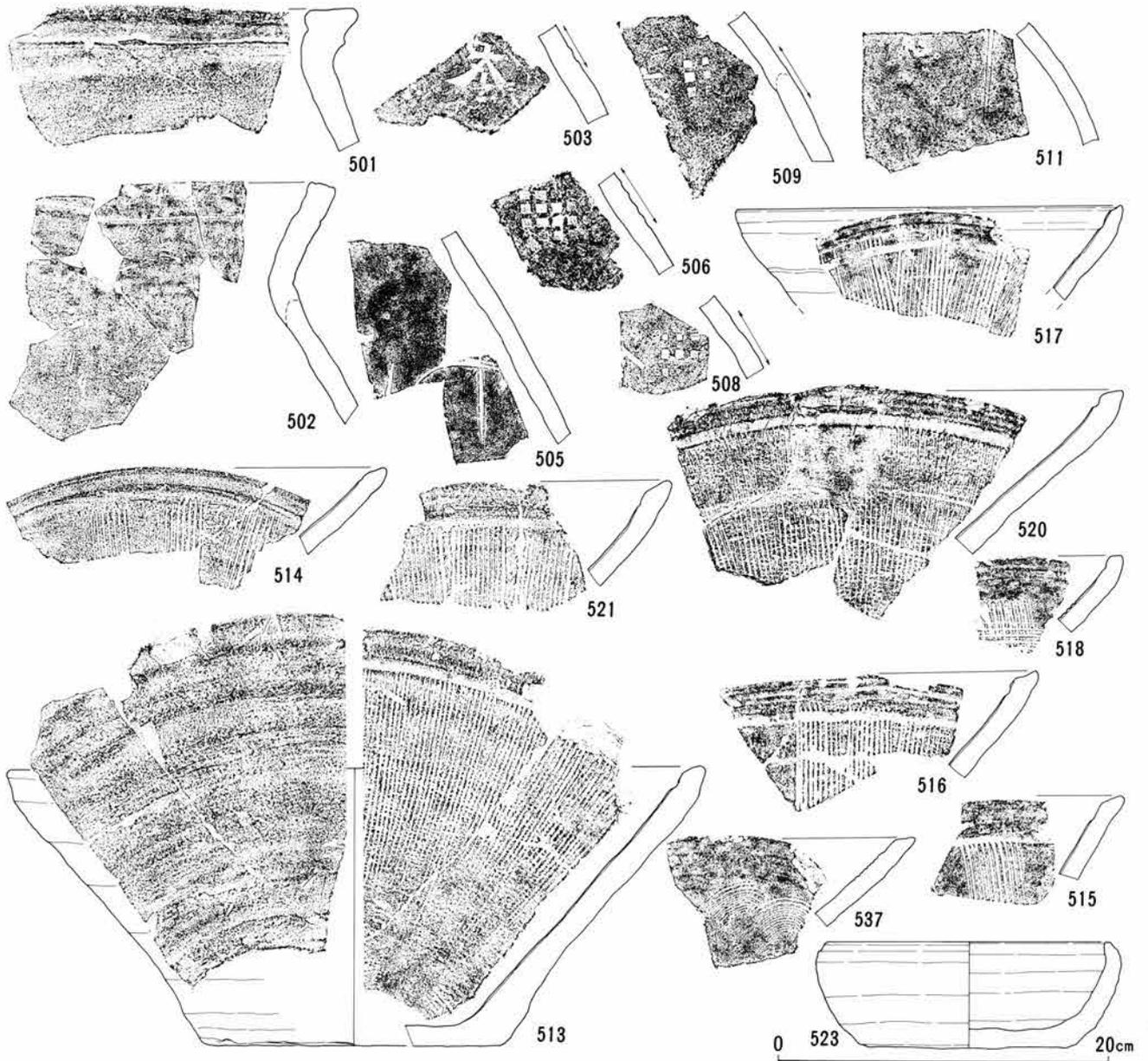


木樋・駒頭

◀ SX796
(西から)
▶ SX778
(西から)

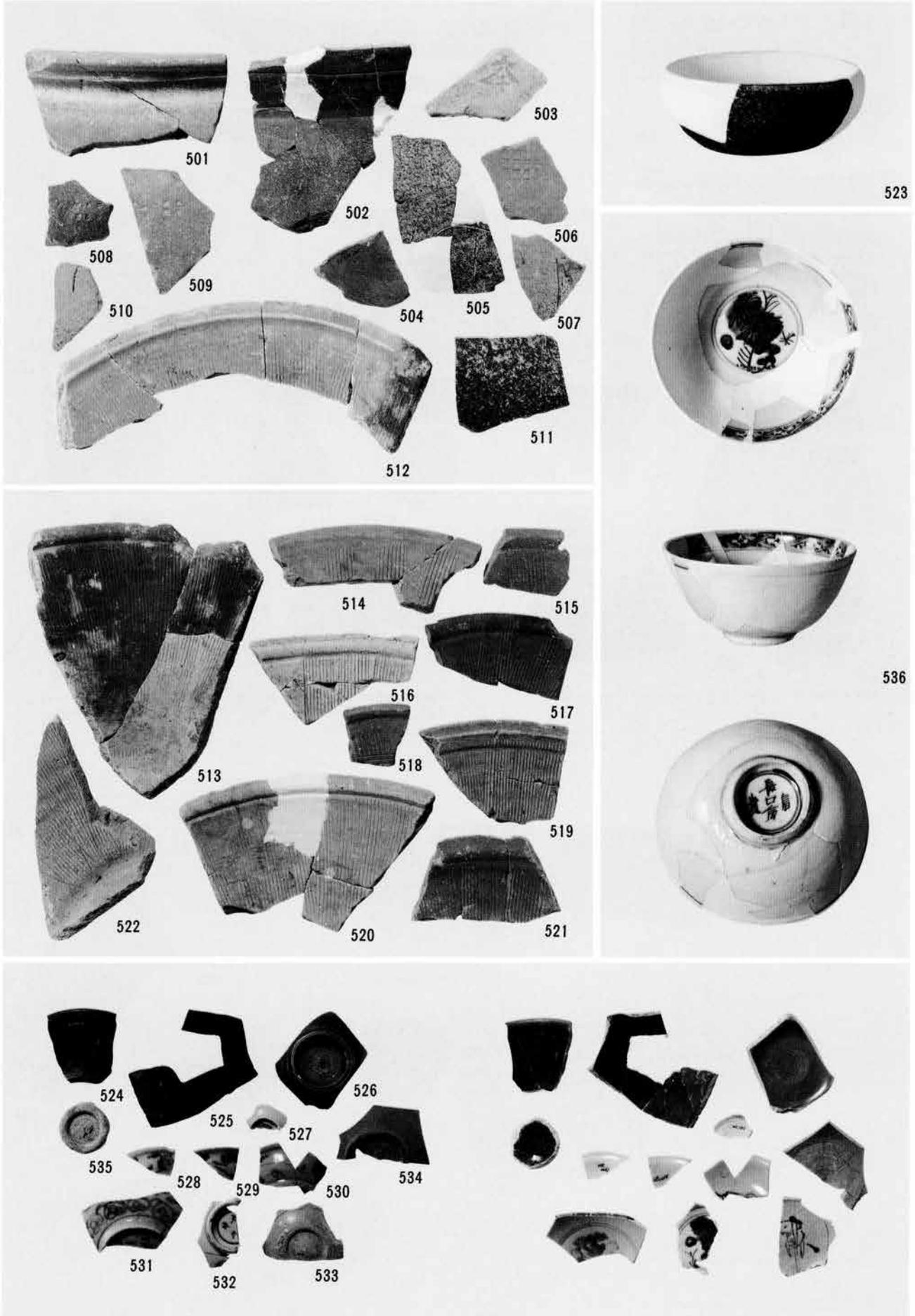


第46図 第20次調査遺物(1)



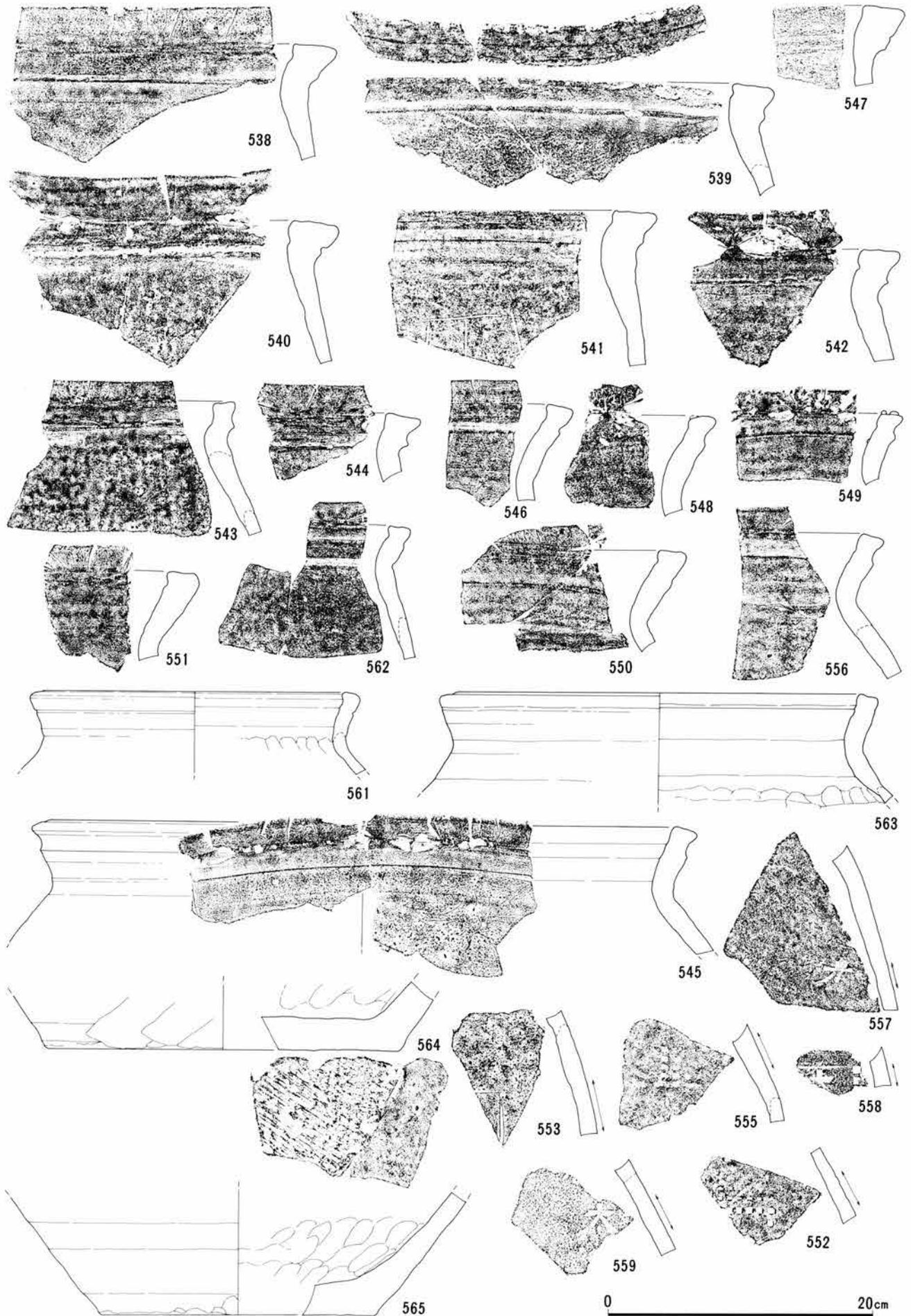
越前焼 501~503・505・506・508・509・511 播鉢 513~518・520・521 鉢 523・537 鉄釉碗 524・535
 瓦質陶器 525 青磁碗 526 白磁杯 527 染付皿 528・530・533 碗 531・532 朝鮮製碗 534

青色礫混り土層出土遺物



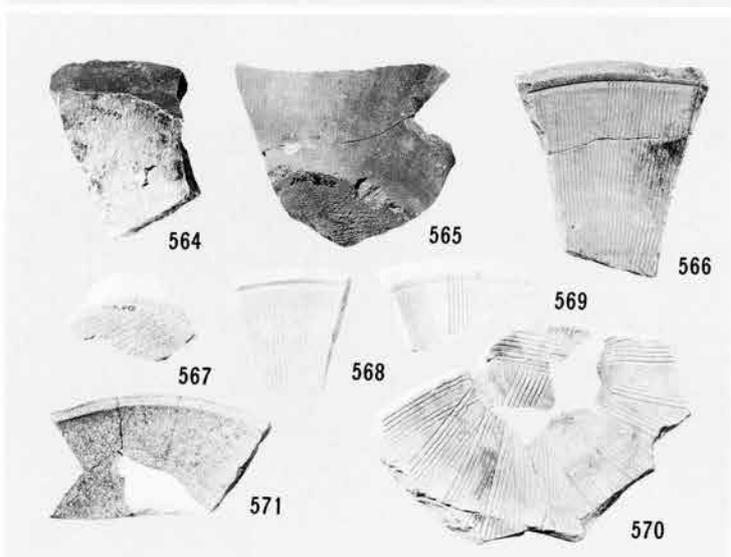
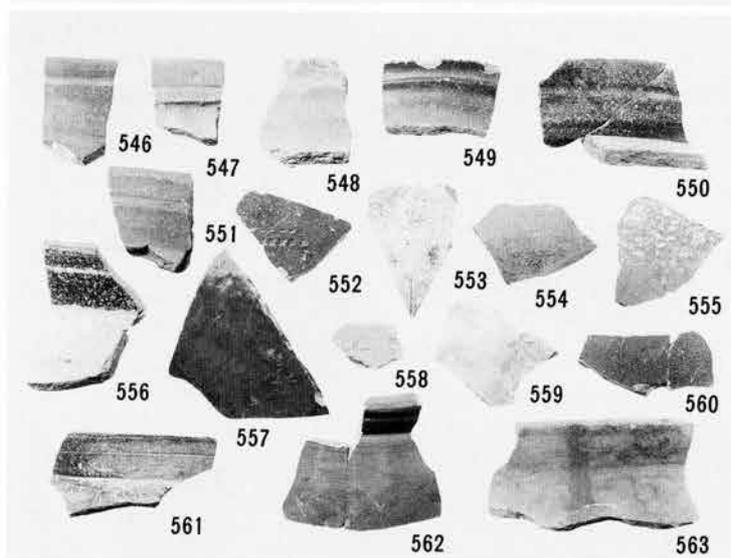
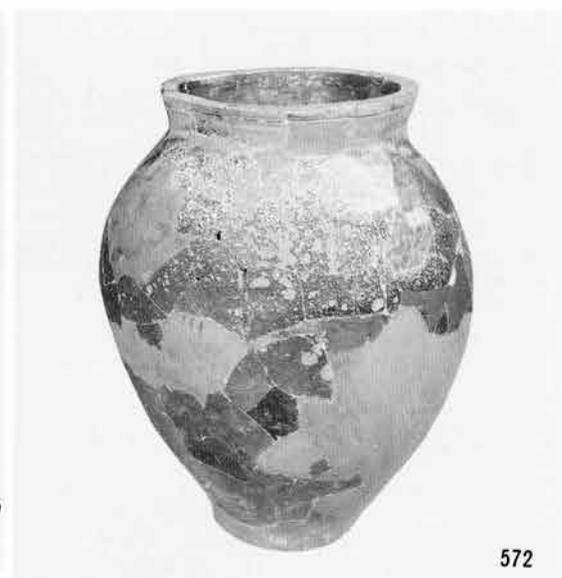
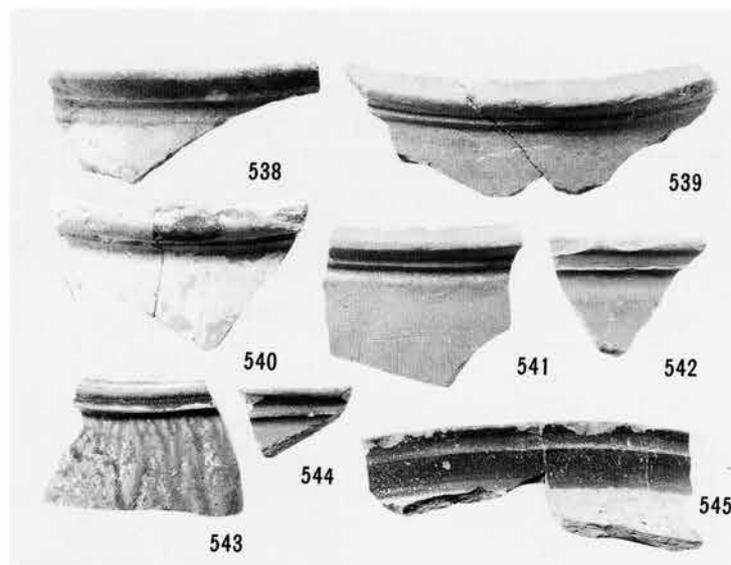
越前焼壺501～511 播鉢512～522 鉢523 鉄釉碗524 瓦質陶器525 青磁碗526
 白磁坏527 染付皿528～530・533 碗531・532・536 朝鮮製碗534

第47図 第20次調査遺物(2)



越前焼 538~553・555~559・561~565

褐色土層出土遺物(1)



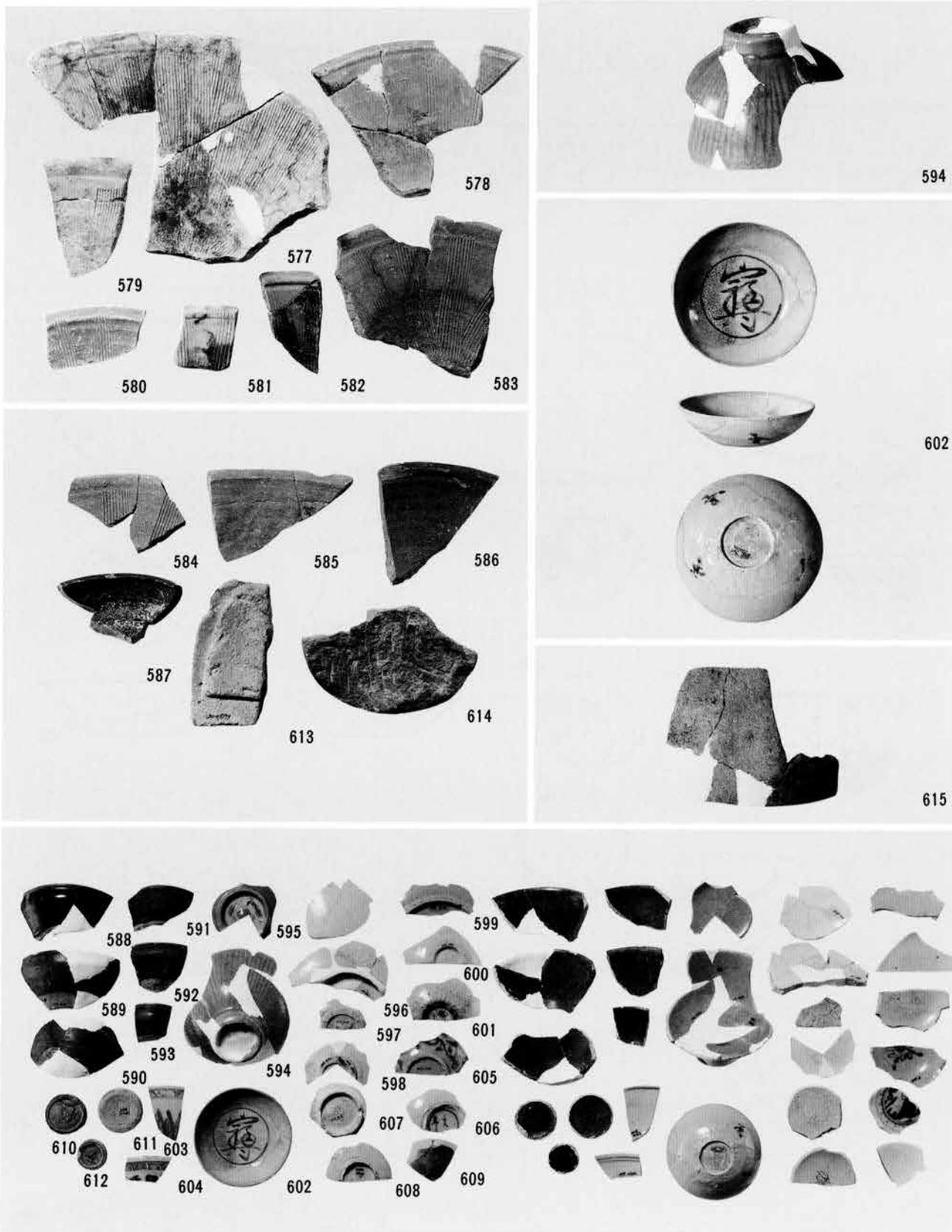
越前焼 538~565・572 播鉢 566~570・573 鉢 571・574・575 火桶 576

第48図 第20次調査遺物(3)



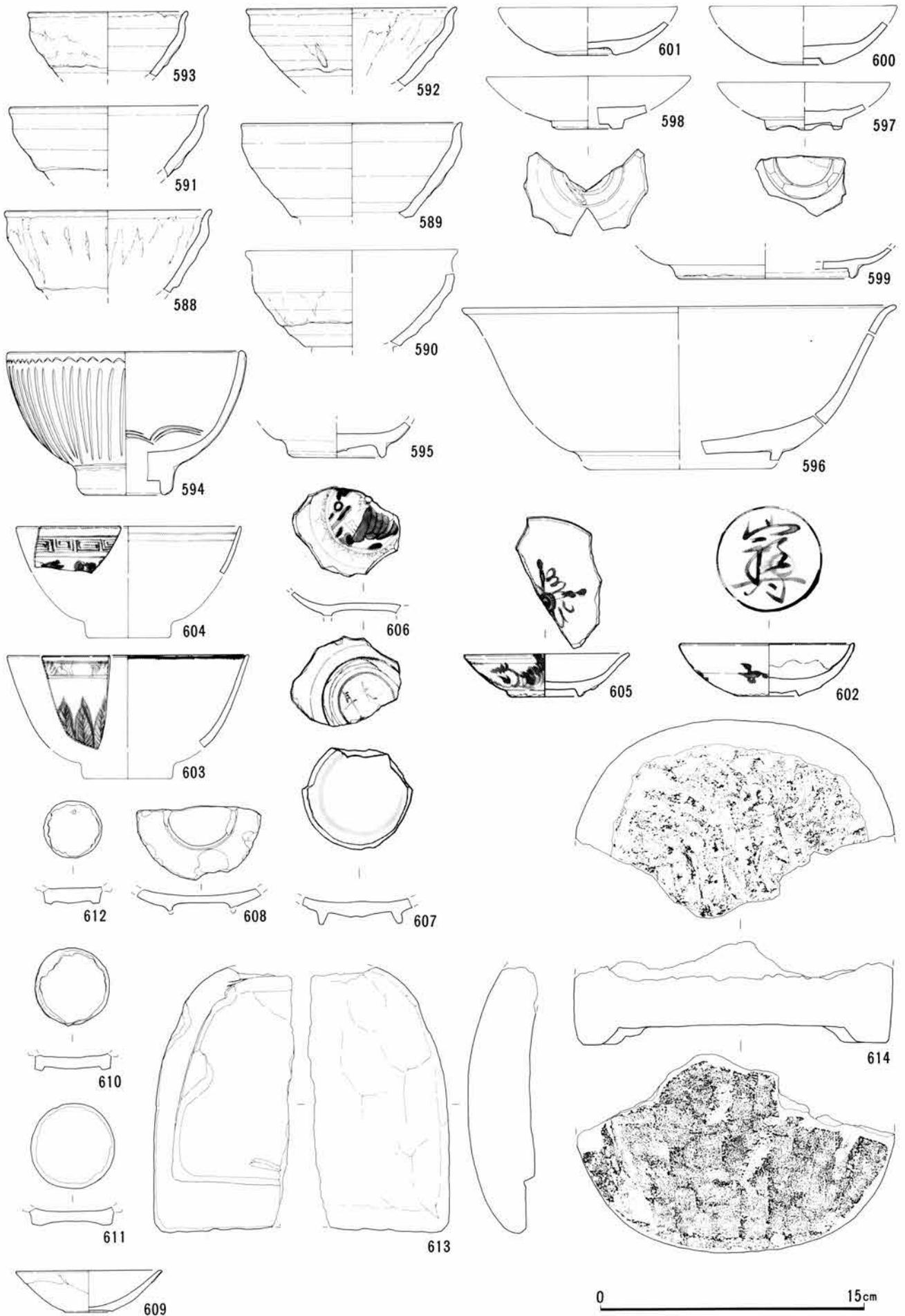
越前焼播鉢566・568・569・577～584 鉢571・574～576・585～587 壺567

褐色土層出土遺物(2)



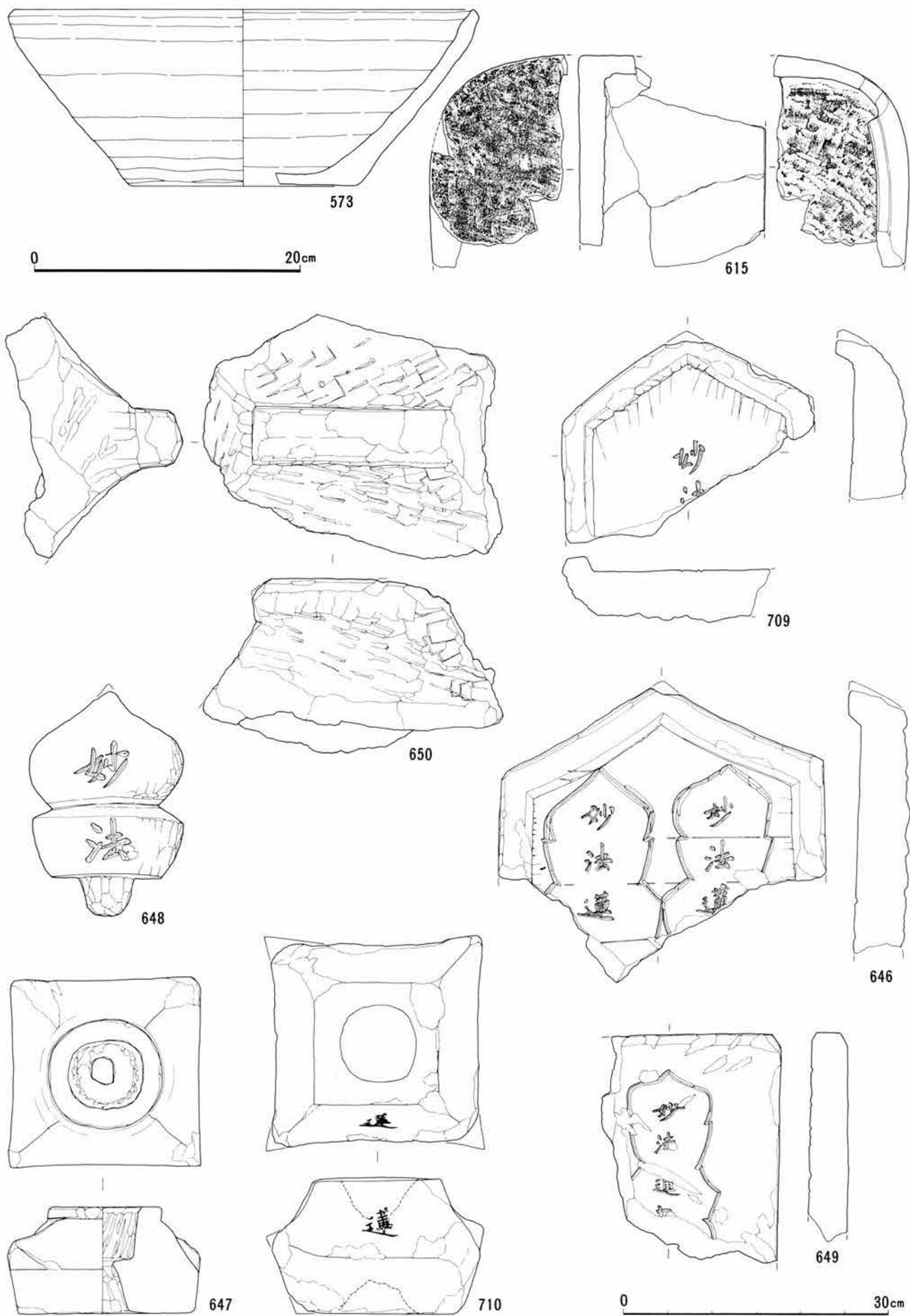
越前焼播鉢577~584 鉢585~587 鉄釉碗588~593・610~612 青磁碗594・595
 白磁碗596 皿597~601 染付皿602・605・607 碗603・604・606 国産陶磁器 608・609 石製品613~615

第49図 第20次調査遺物(4)



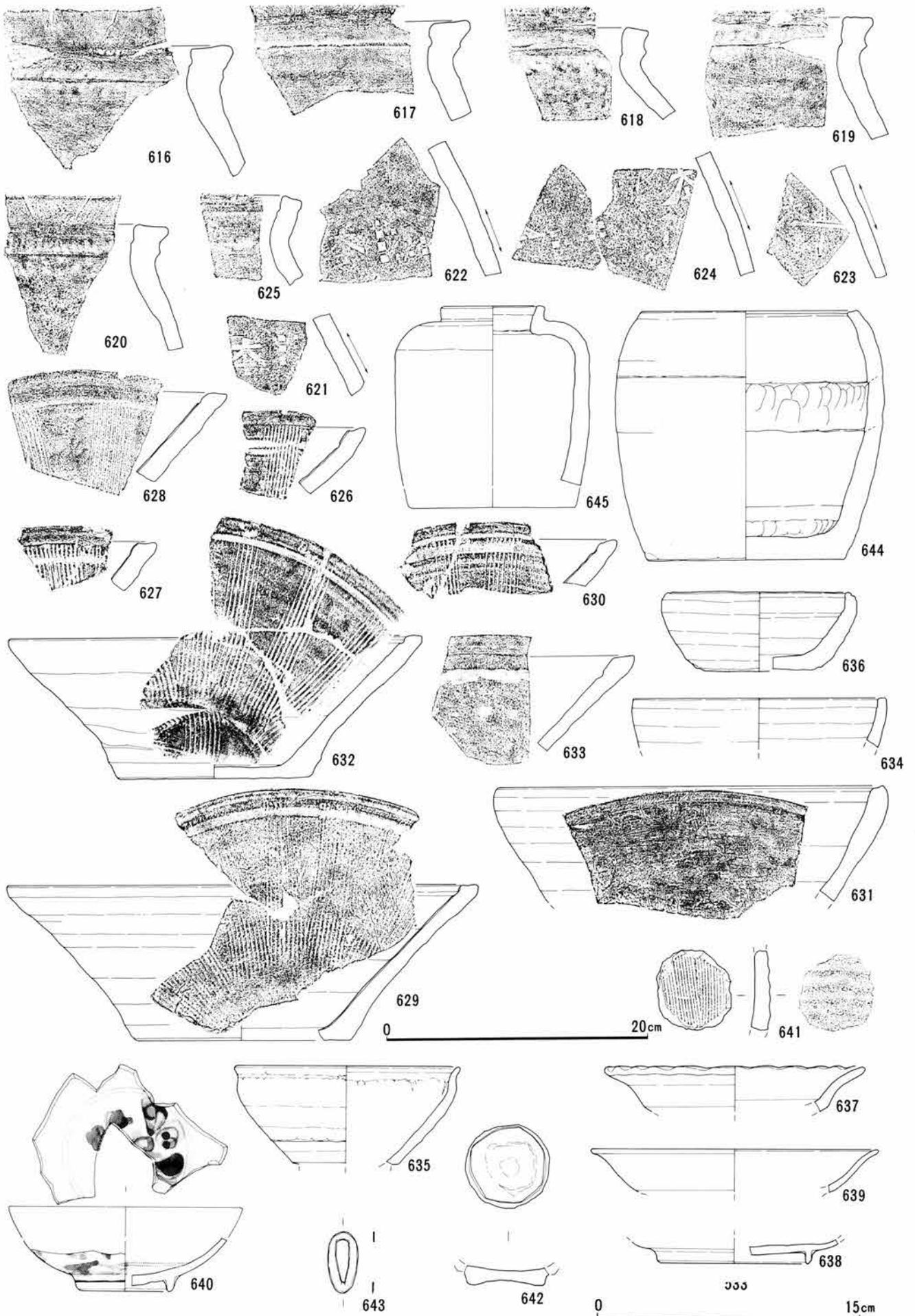
鉄釉碗588~593・610~612 青磁碗594・595 白磁碗596 皿597~601 染付碗603・604・606
 皿602・605・607 国産陶磁器608・609 石製品613・614

第50図 第20次調査遺物(5)



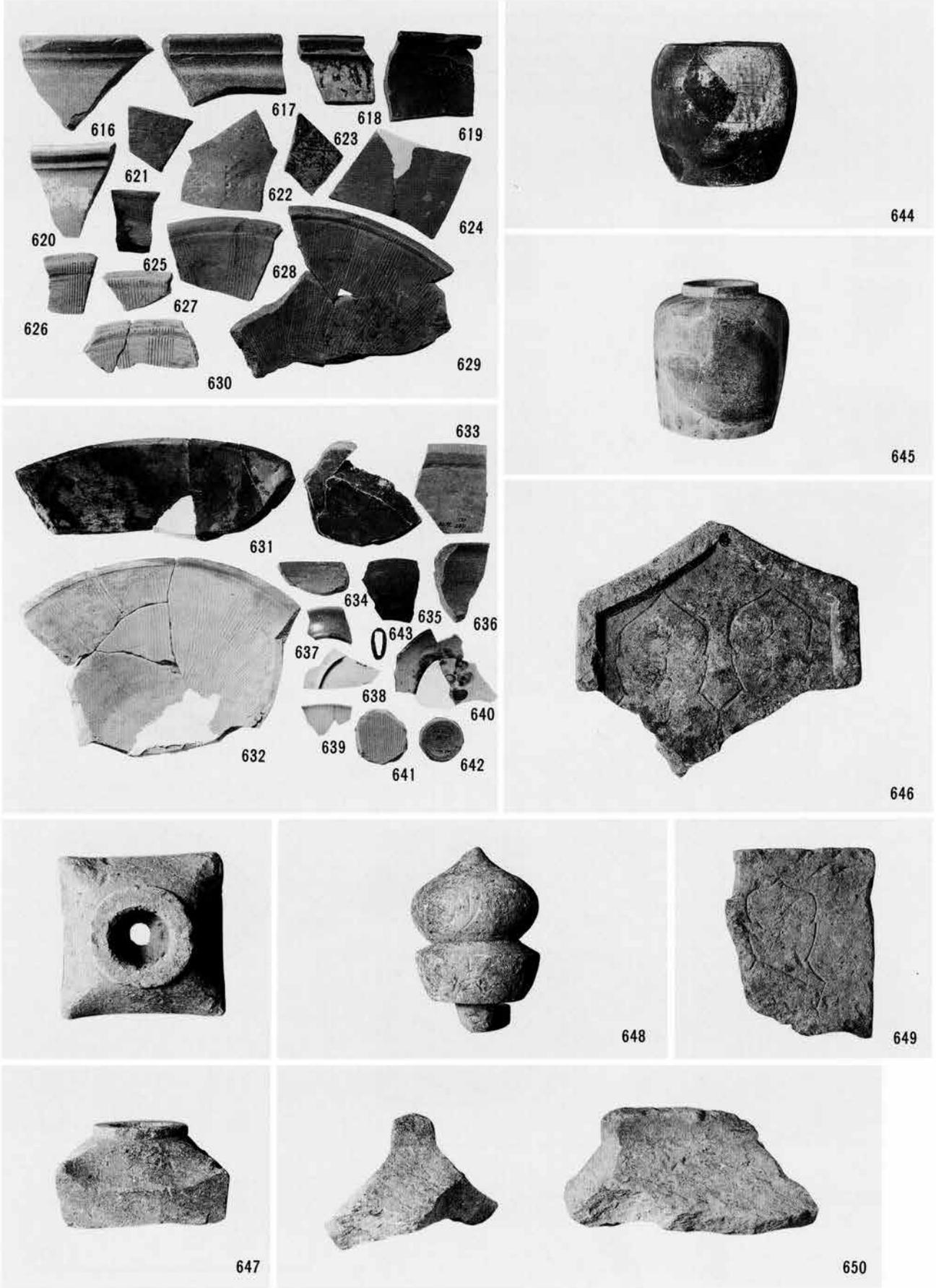
越前焼鉢573 石製品バンドコ615 五輪塔板碑646・649 笠塔婆647
五輪塔648・710 圭頭板碑709 石籠650

第51図 第20次調査遺物(6)



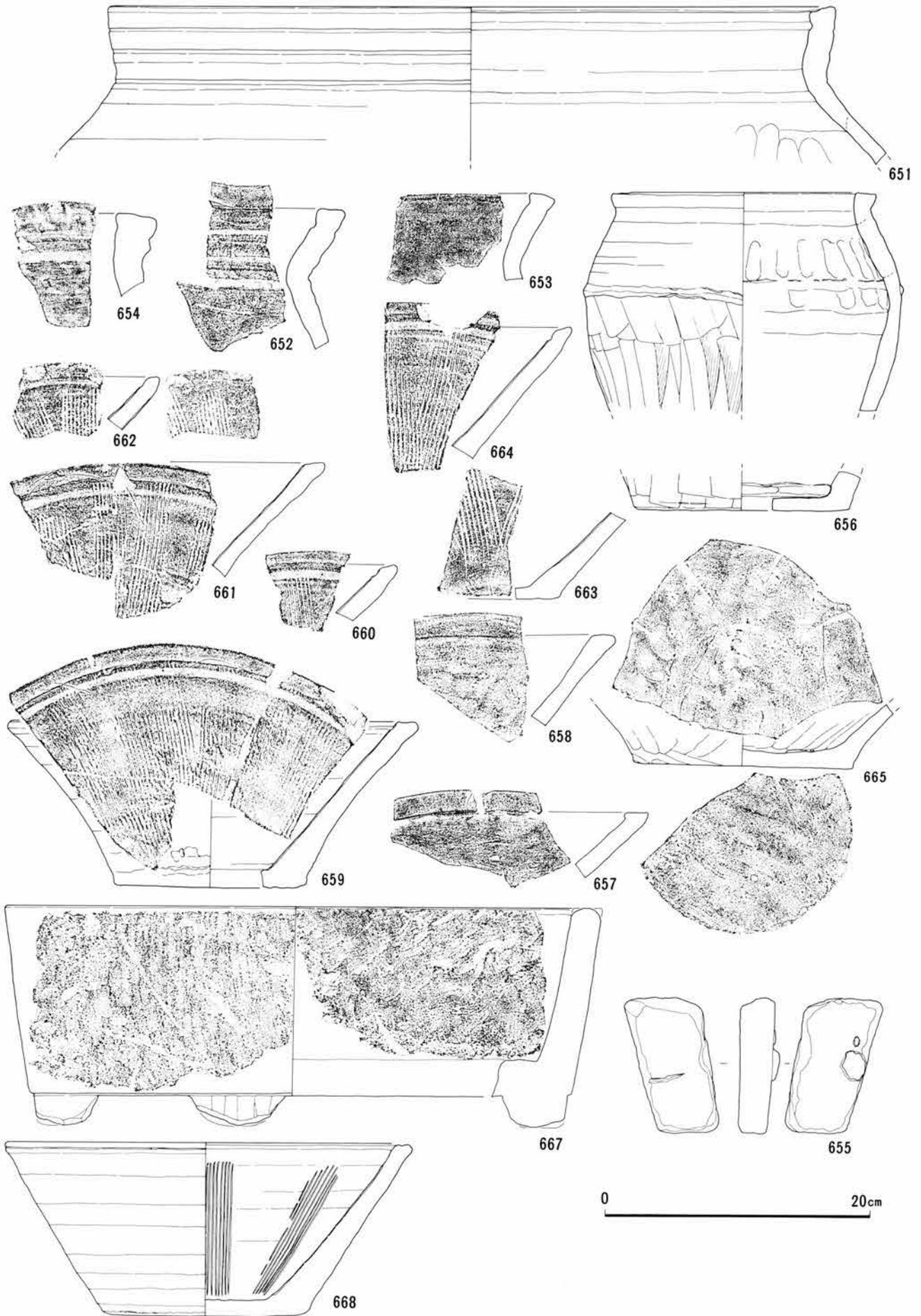
越前焼 616~624 挿鉢 626~630・632 鉢 631・633・634・636・644 壺 625・645 鉄釉碗 635・642
 青磁皿 637 白磁皿 638・639 染付碗 640 陶製円板 641 金属製品 鏝 643

茶褐色土層出土遺物



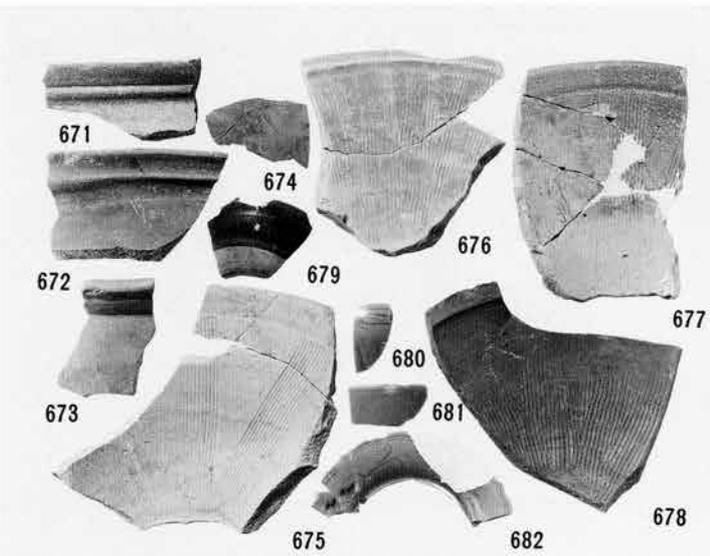
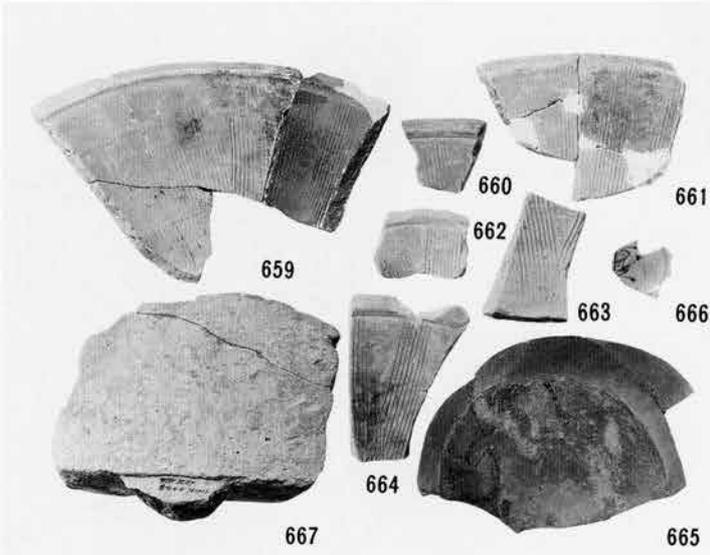
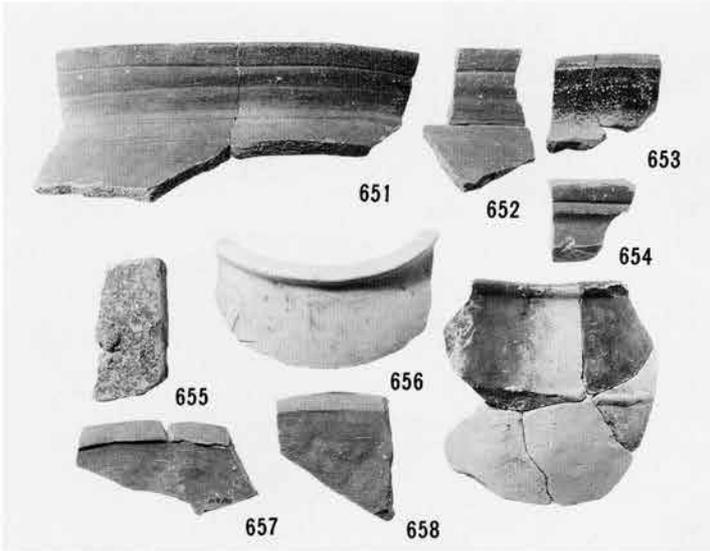
越前焼甕616~624 搦鉢626~630・632 鉢631・633・634・636・644 壺625・645 鉄釉碗635・642
 青磁皿637 白磁皿638・639 染付碗640 陶製円板641 金属製品鈔643 石製品646~650

第52図 第20次調査遺物(7)



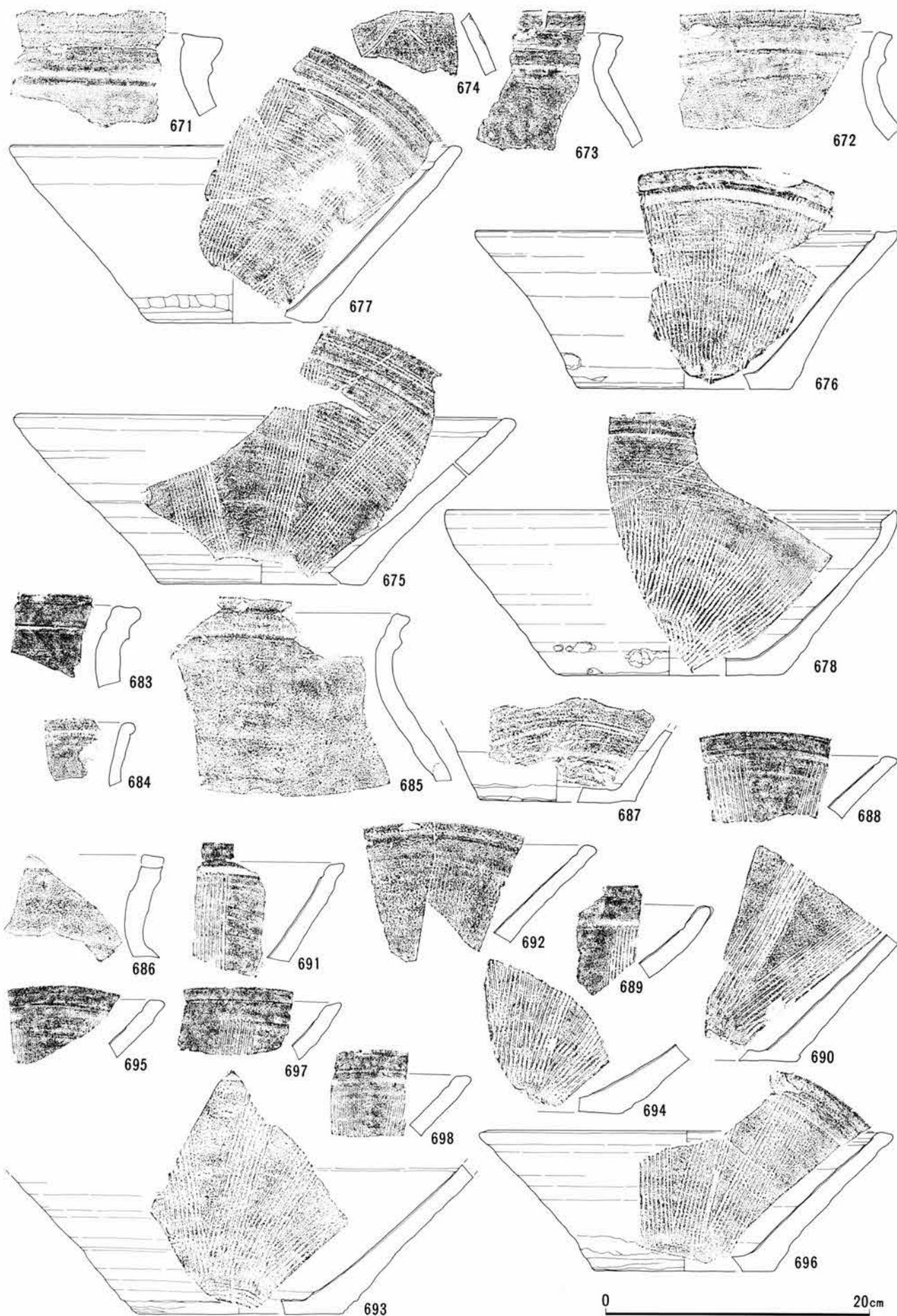
越前焼 甕651~655・665 壺656 鉢657・658 播鉢659~664・668 石製品 盤667

黄色土・青色土層出土遺物



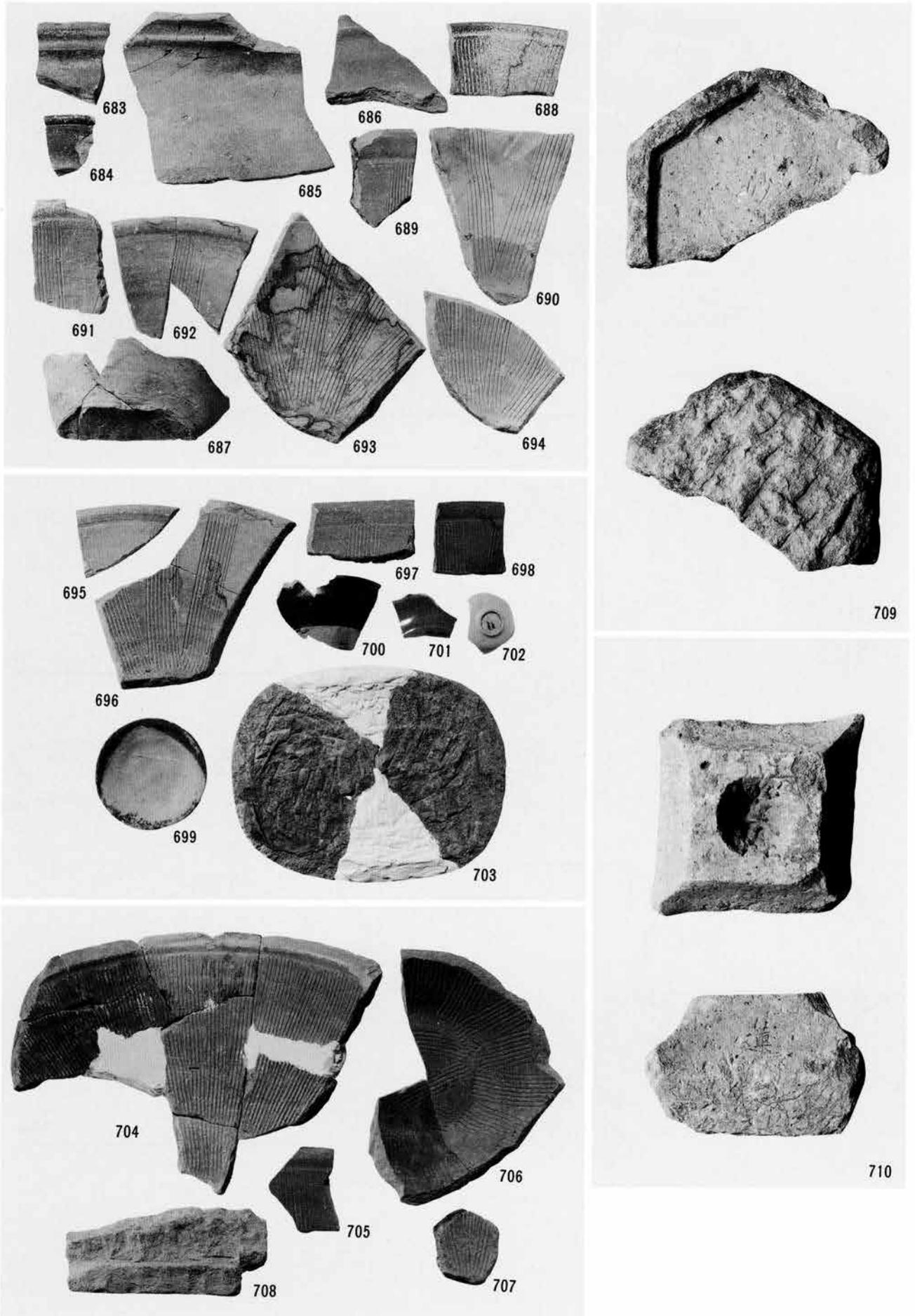
越前焼甕651~655・665 壺656 鉢657・658 播鉢659~664・668 灰釉坏669 金属製品銅鏡670
越前焼甕671・672・674 壺673 播鉢675~678 鉄釉碗679 青磁碗680・681 皿682

第53図 第20次調査遺物(8)



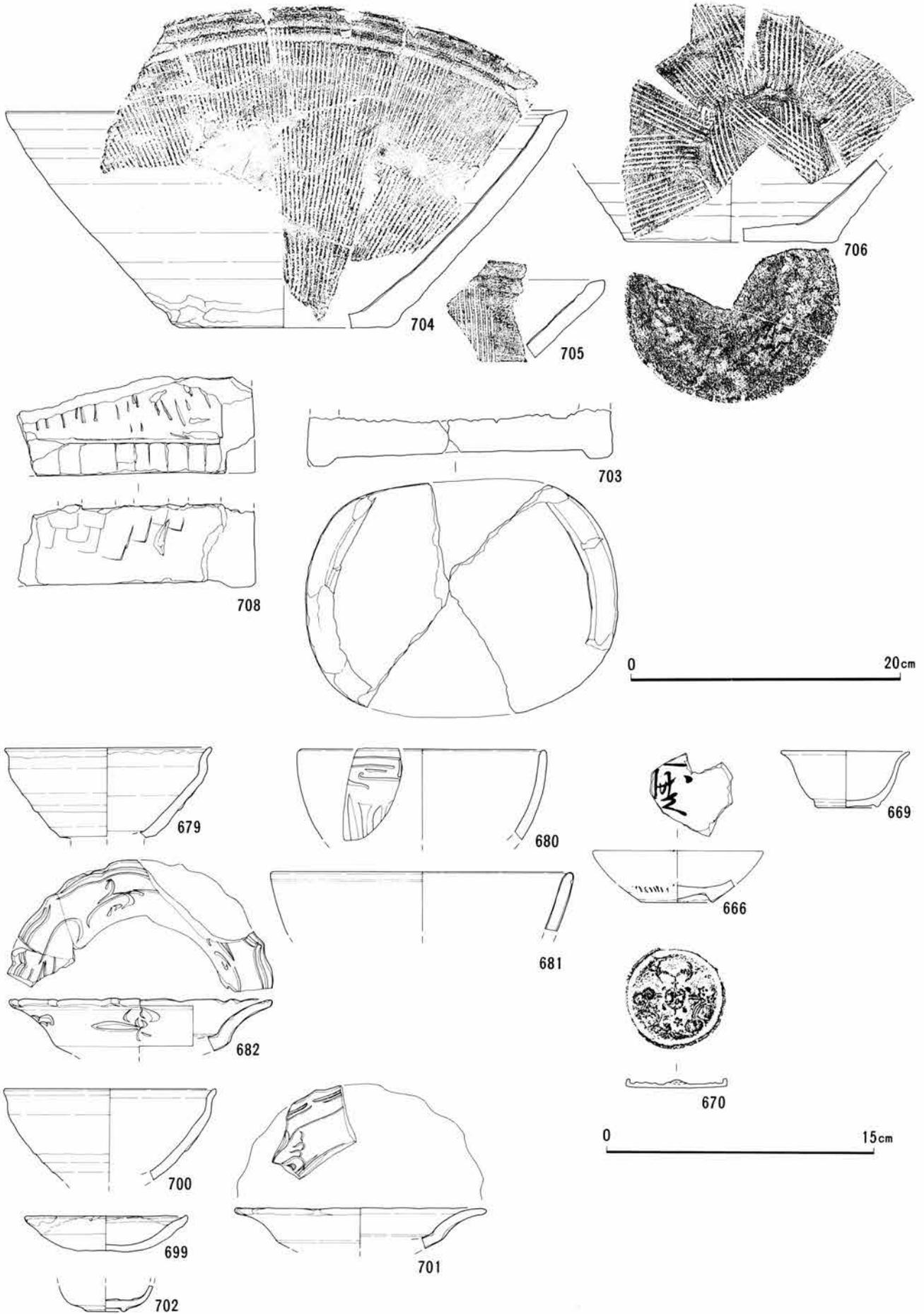
越前焼 671・672・674・683・685・686 壺 673・684・687 播鉢 675～678・688～698

赤褐色土・灰褐色土層出土遺物



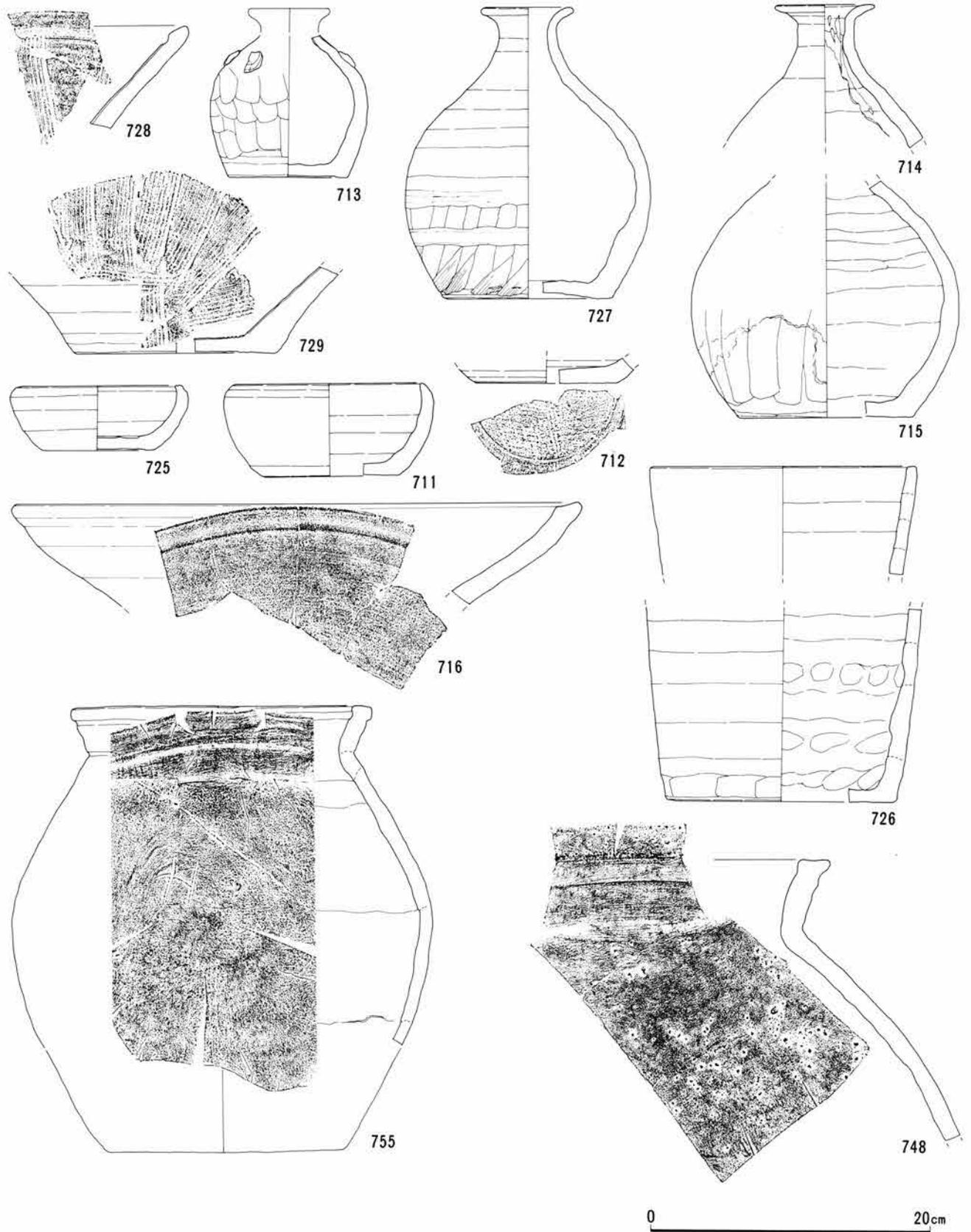
越前焼 甕 683・685・686 壺 684・687 播鉢 688～698・704～707 土師質皿 699 鉄釉碗 700
 青磁皿 701 白磁坏 702 石製品バンドコ 703・708 圭頭板碑 709 五輪塔 710

第54図 第20次調査遺物(9)



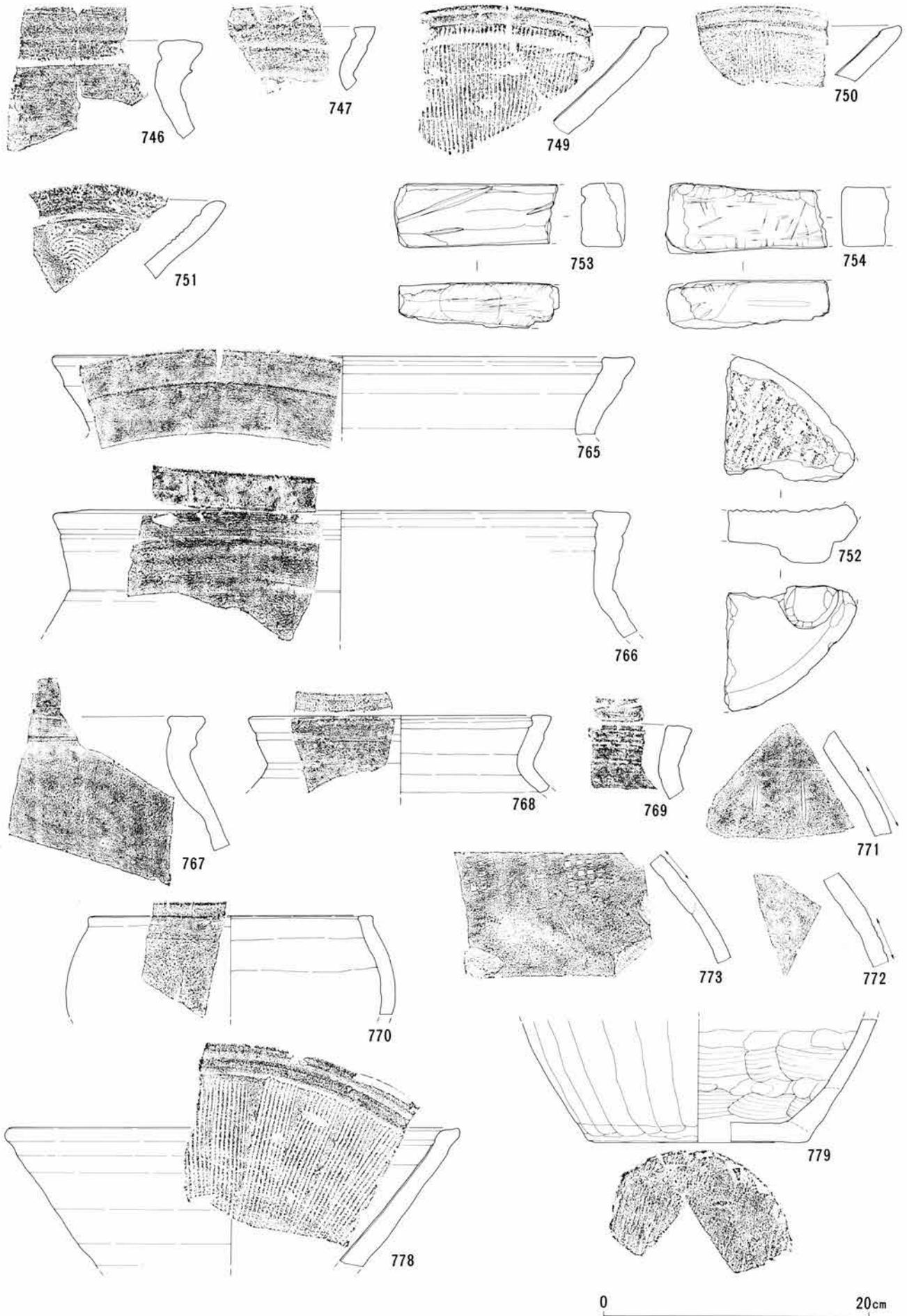
越前焼播鉢704~706 石製品バンドコ703・708 灰釉碗669 鉄釉碗679・700 土師質皿699
 青磁碗680・681 皿682・701 白磁碗702 染付皿666 金属製品銅鏡670

第55図 第20次調査遺物(10)



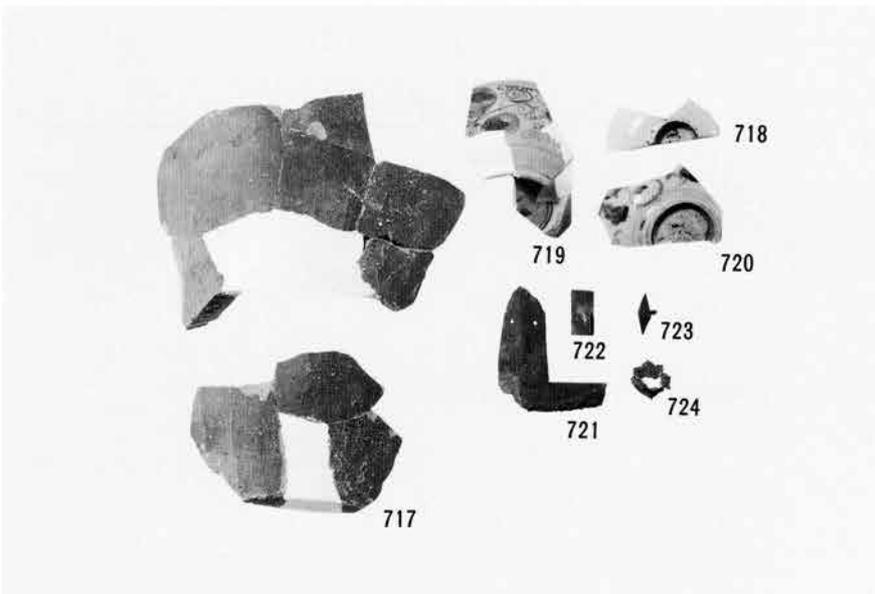
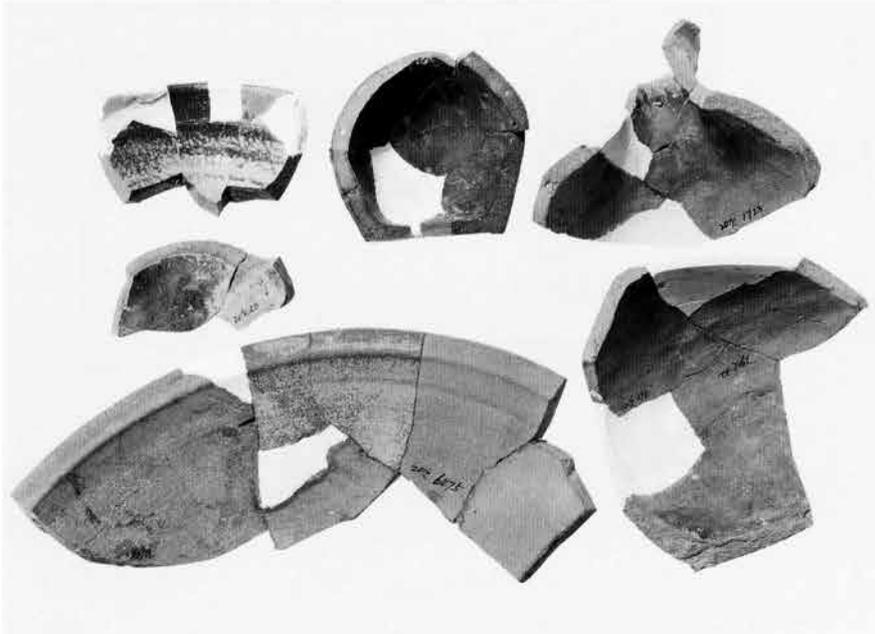
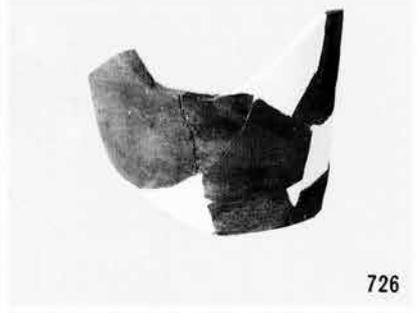
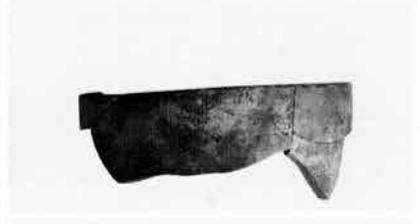
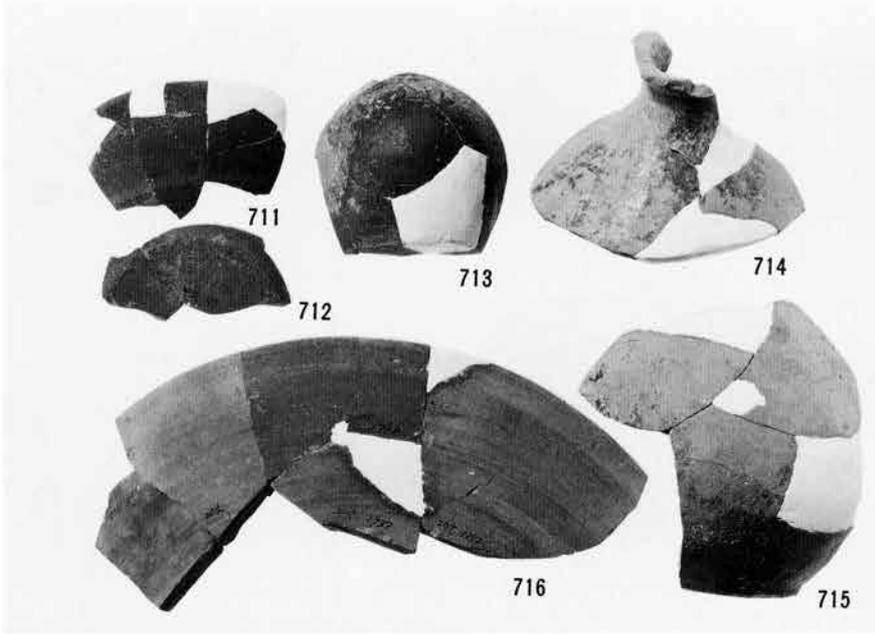
越前焼裏748 壺713~715・727・755 鉢711・712・716・725・726 播鉢728・729

第56図 第20次調査遺物(11)



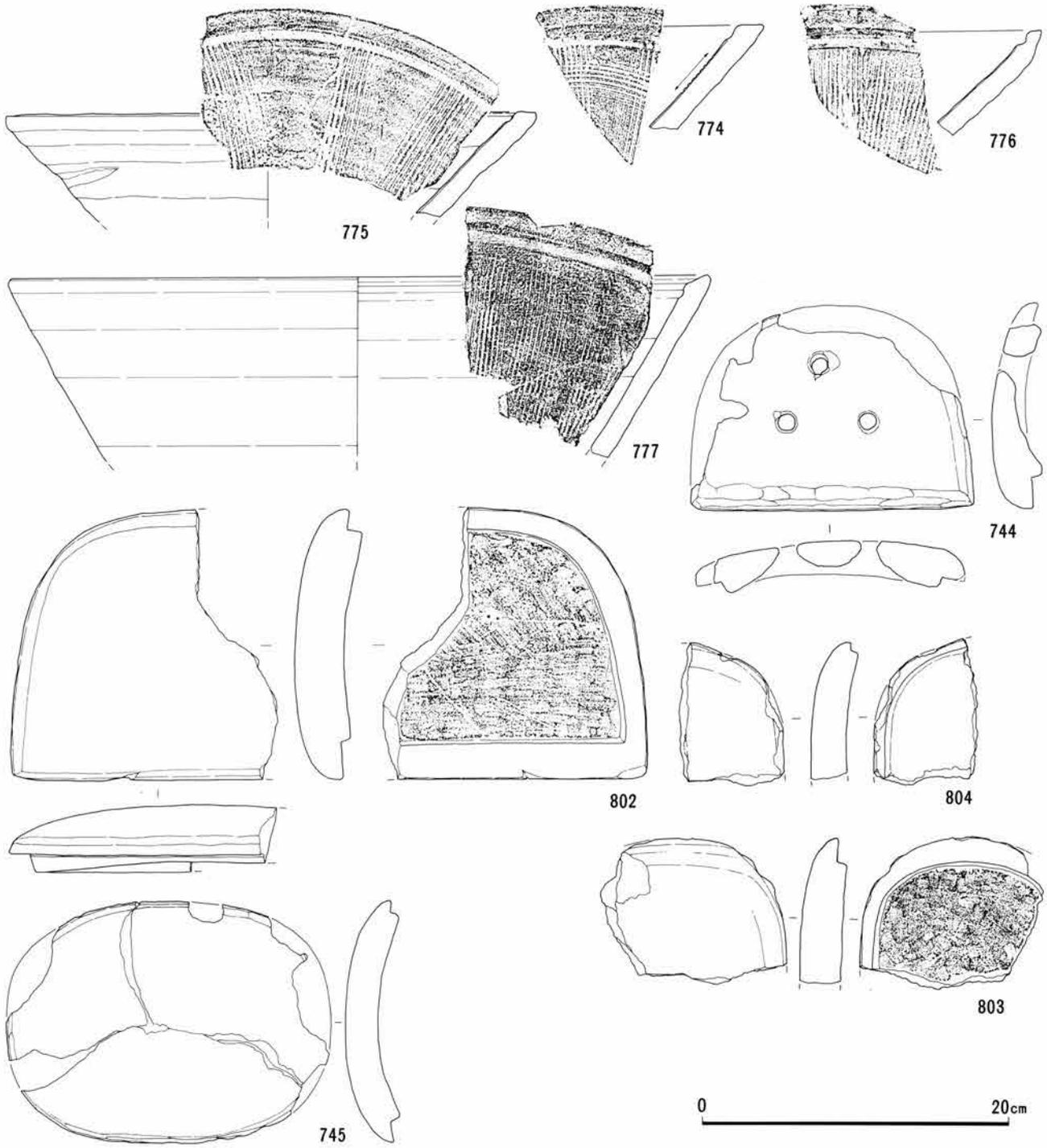
越前焼746・747・765～769・771～773・779 壺770
 播鉢749・750・778 鉢751 石製品砥石753・754 バンドコ752

柱根ピット・柱穴出土遺物



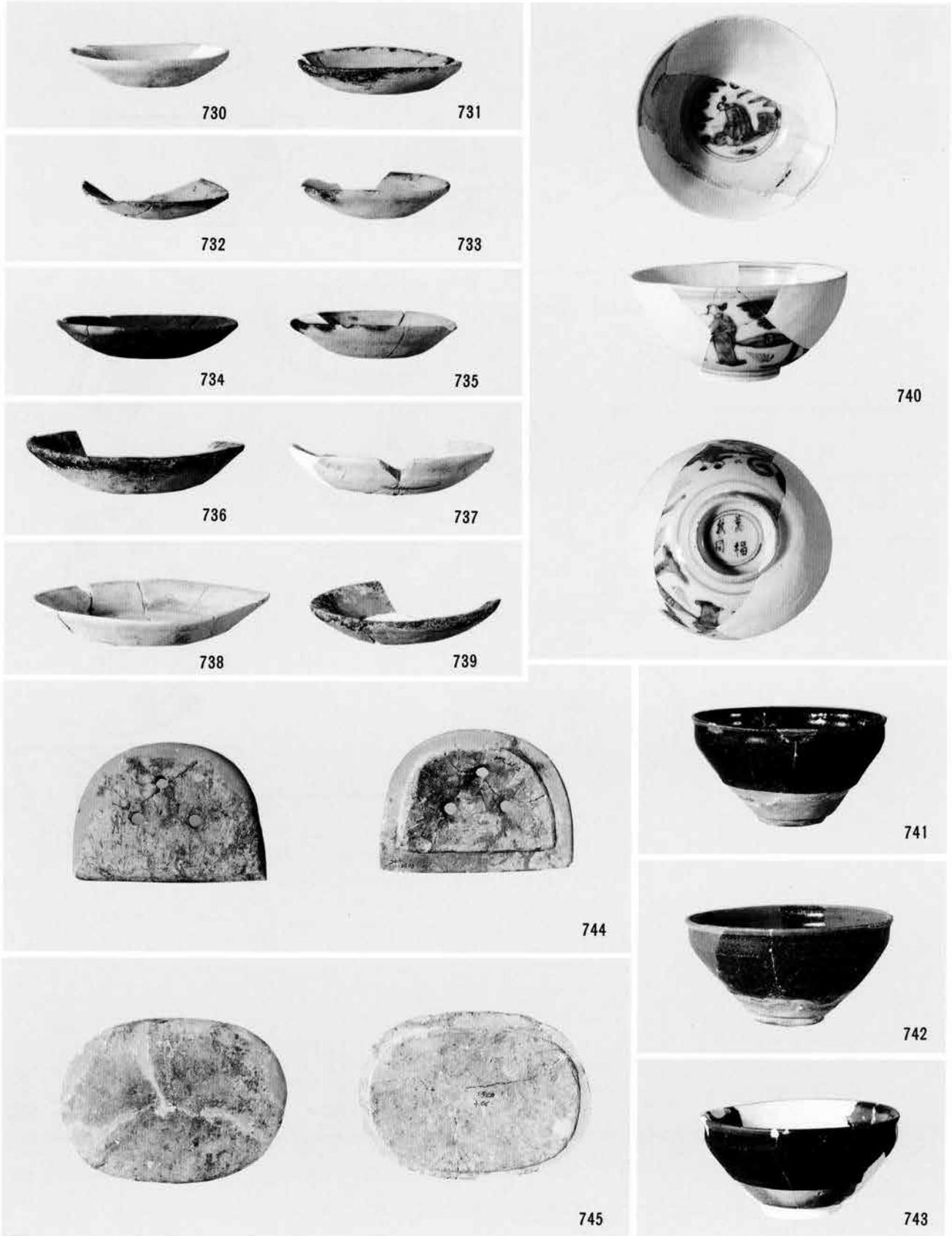
越前焼壺713~715・717・727 鉢711・712・716・725・726 白磁皿718
 染付碗719 皿720 金属製品721~724

第57図 第20次調査遺物(12)



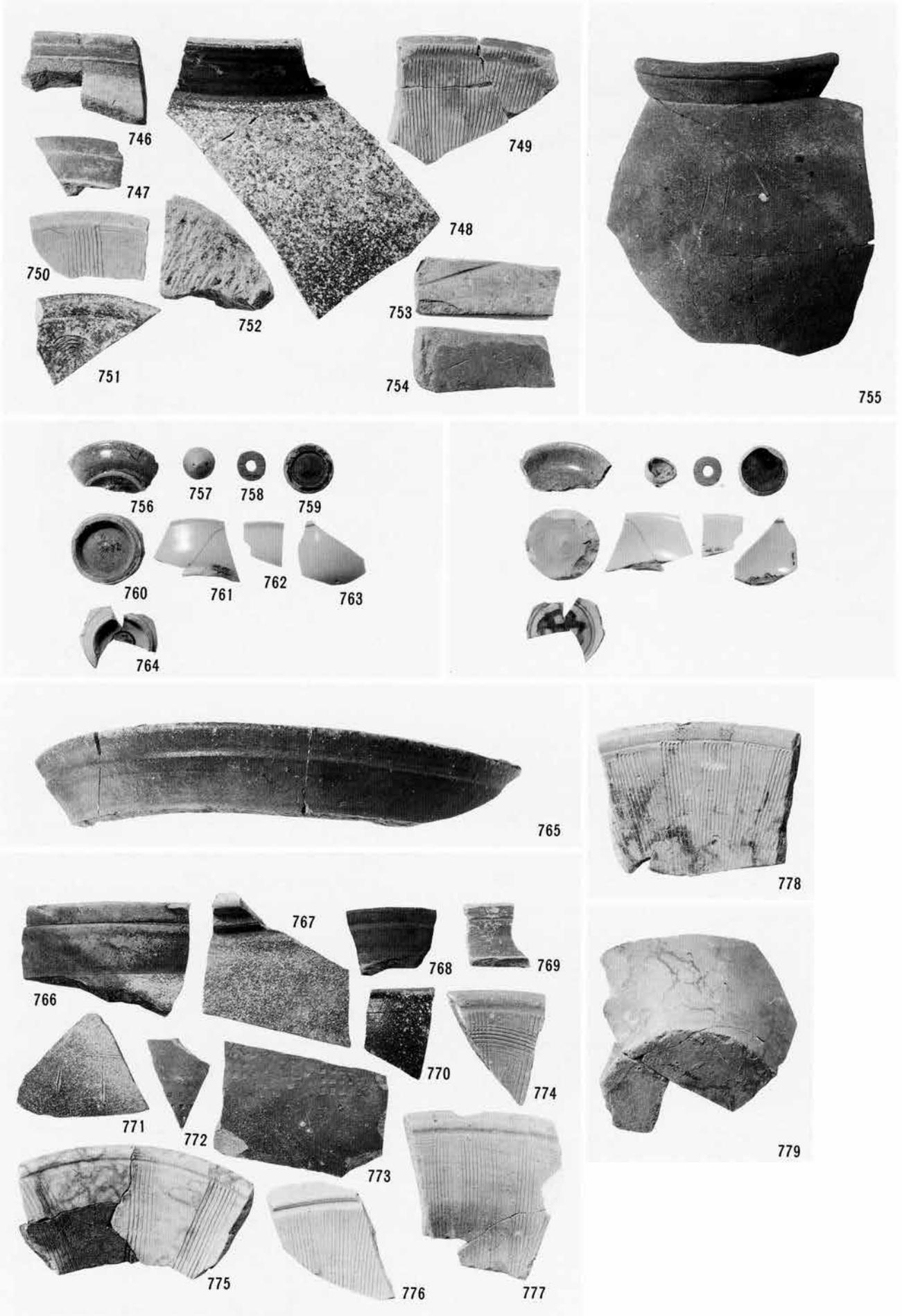
越前焼播鉢774~777 石製品バンドコ744・745・802~804

炭層及び遺構面出土遺物(1)



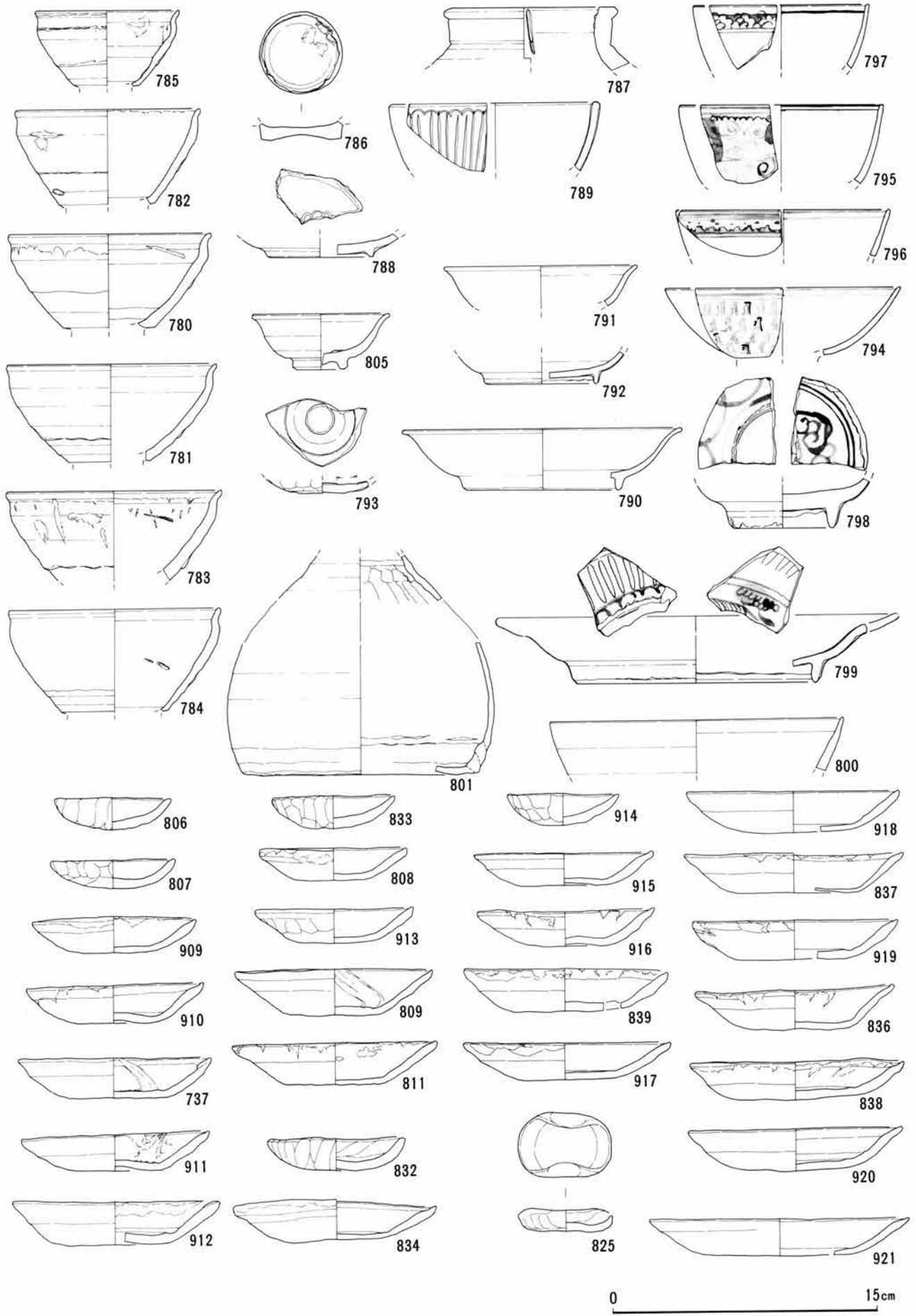
土師質皿730~739 鉄釉碗741~743 染付碗740 石製品バンドコ744・745

炭層及び遺構面出土遺物(2)



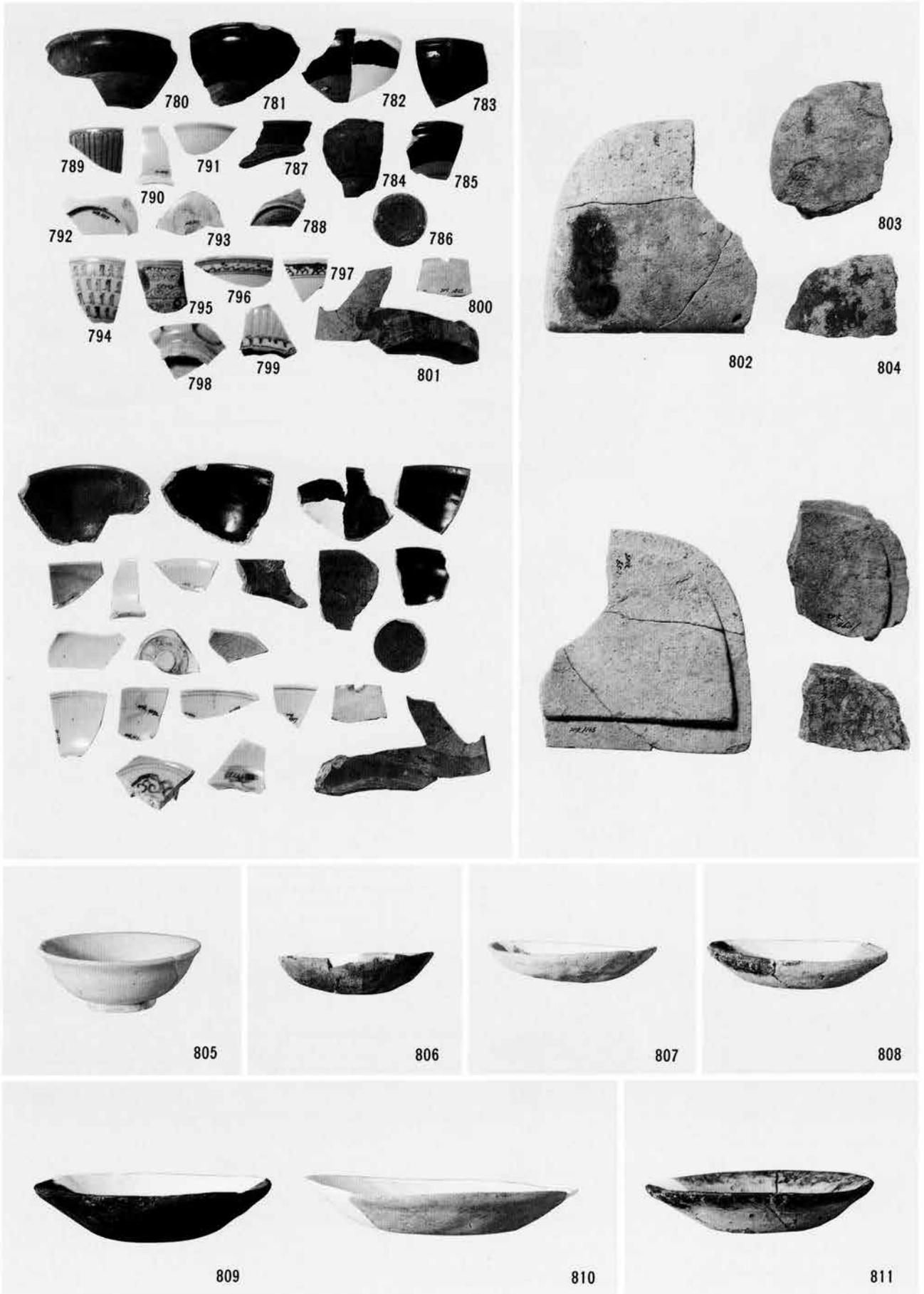
越前焼746~748・765~769・771~773・779 壺755・770 播鉢749・750・774~778 鉢751 鉄釉碗759
 灰釉皿756 土師質灯芯押之758 土鈴757 青磁碗高台760 白磁皿761・762 染付碗763・764

第59図 第20次調査遺物(14)



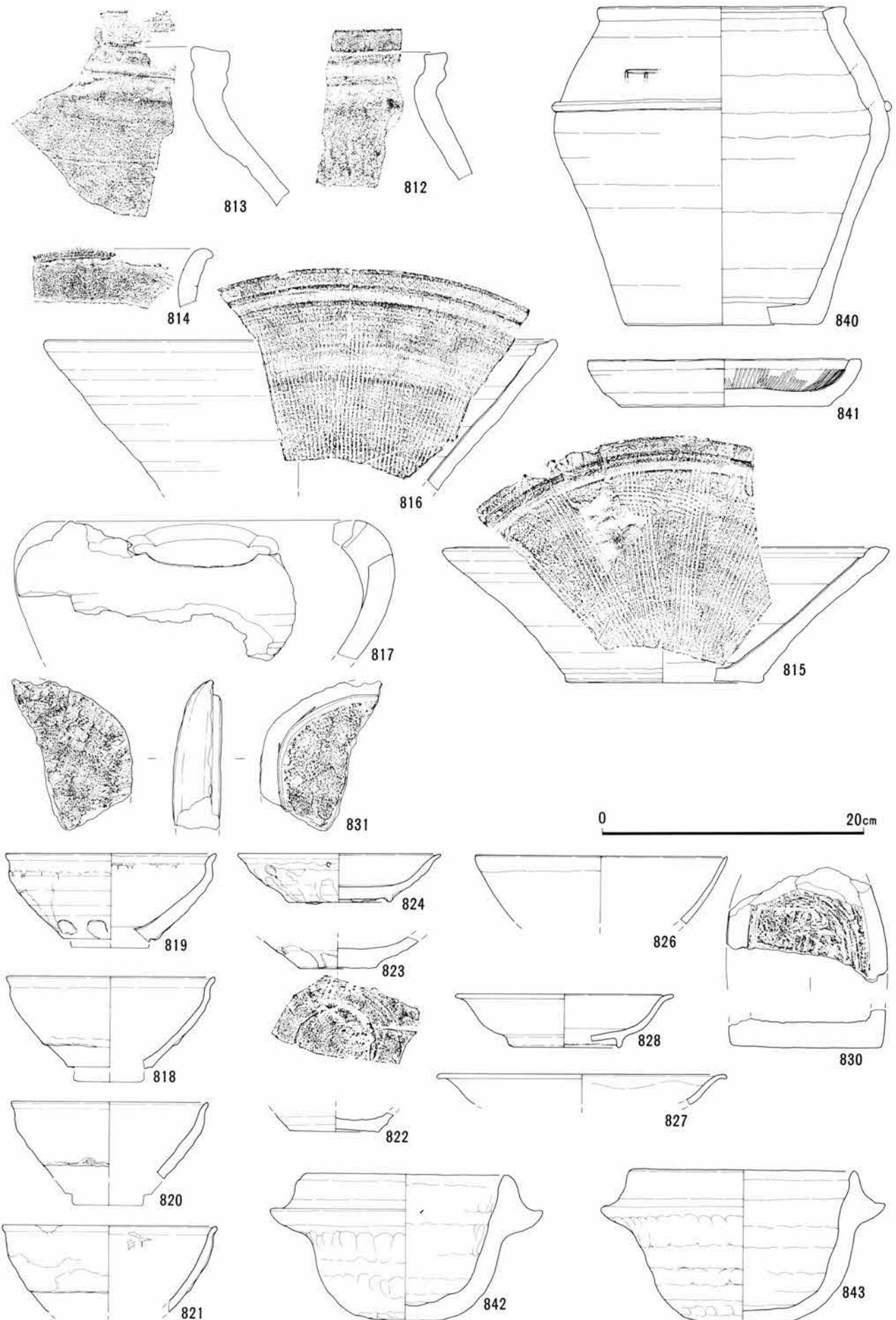
鉄釉碗780~786 壺787 灰釉皿788 土師質皿737・806~809・811・832~834・836~839・909~921 耳皿825
 青碗789 白磁皿790~792・793 坏805 染付碗794~798 皿799 朝鮮製碗800 壺801

炭層及び遺構面出土遺物(3)



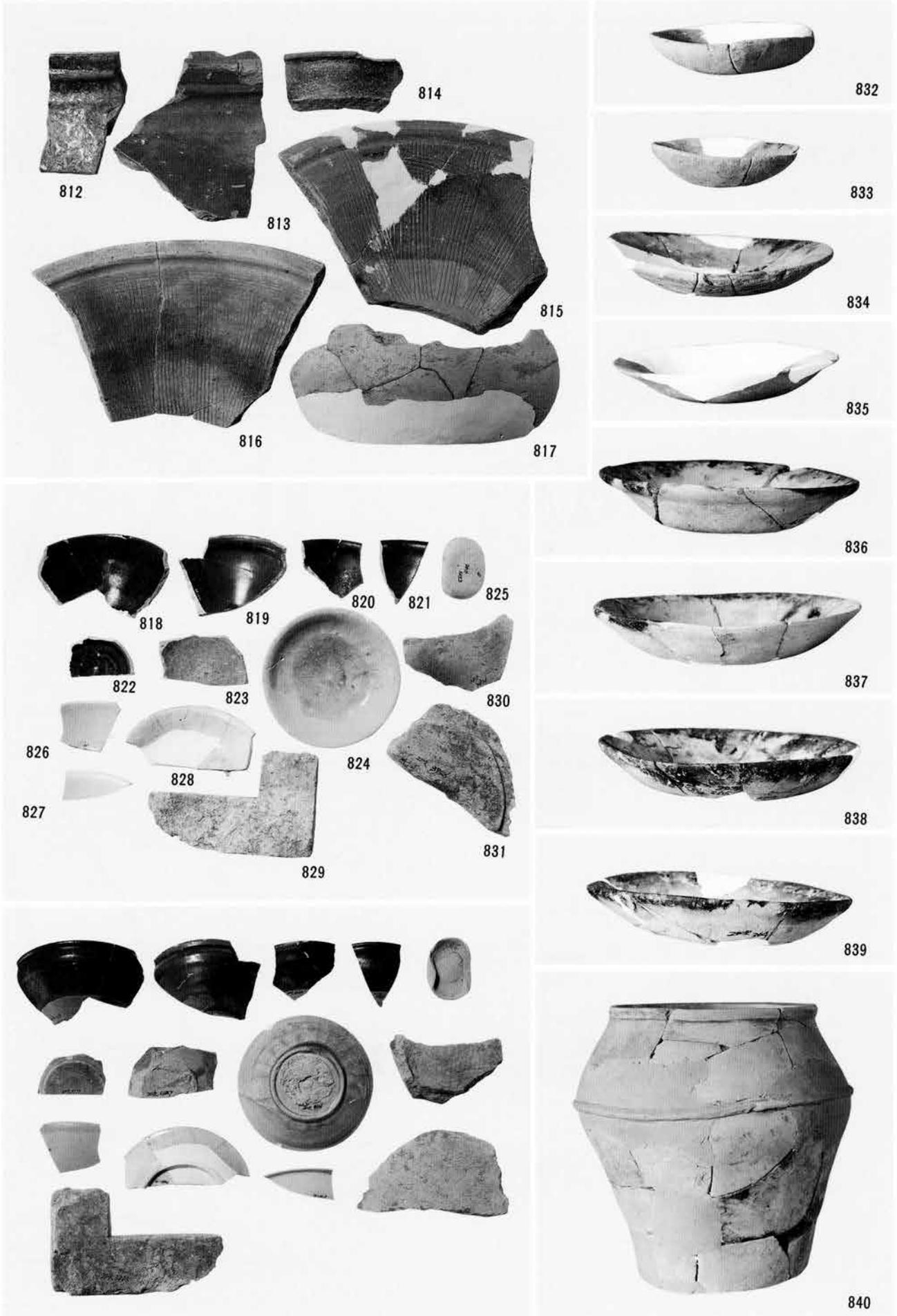
鉄釉碗780~786 壺787 灰釉皿788 土師質皿806 ~811 青磁碗789 白磁皿790~792・793 坏805
 染付碗794~798 皿799 朝鮮製碗800 壺801 石製品バンドコ802~804

第60図 第20次調査遺物(15)



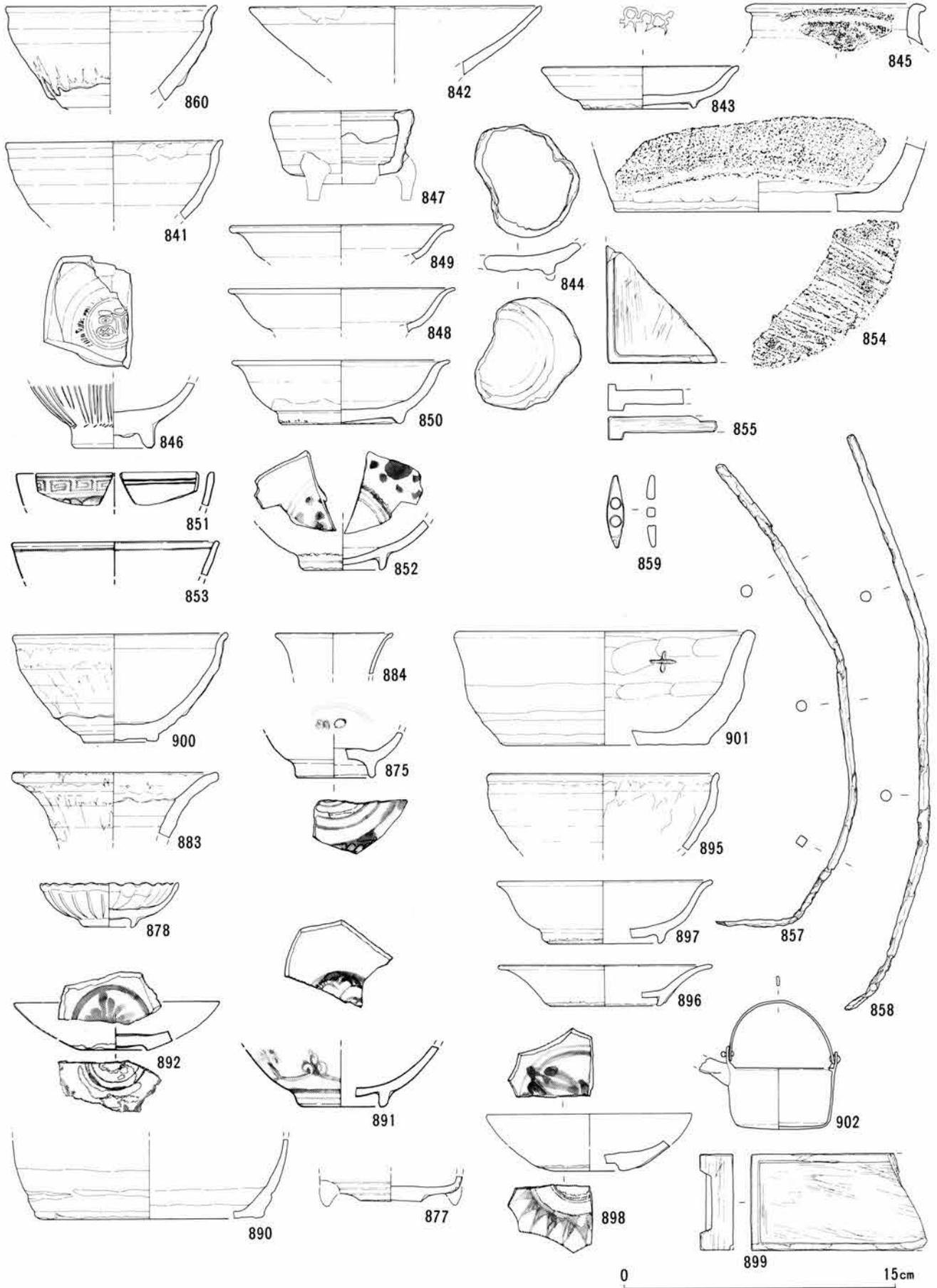
越前焼甕812・813 壺814・840 搦鉢815・816 搦皿841 瓦質火鉢817 土師質土釜842・843
鉄釉碗818~821 壺822 灰釉皿824 鉢823 青磁碗826 白磁皿827・828 石製品830・831

灰層・灰色土層出土遺物



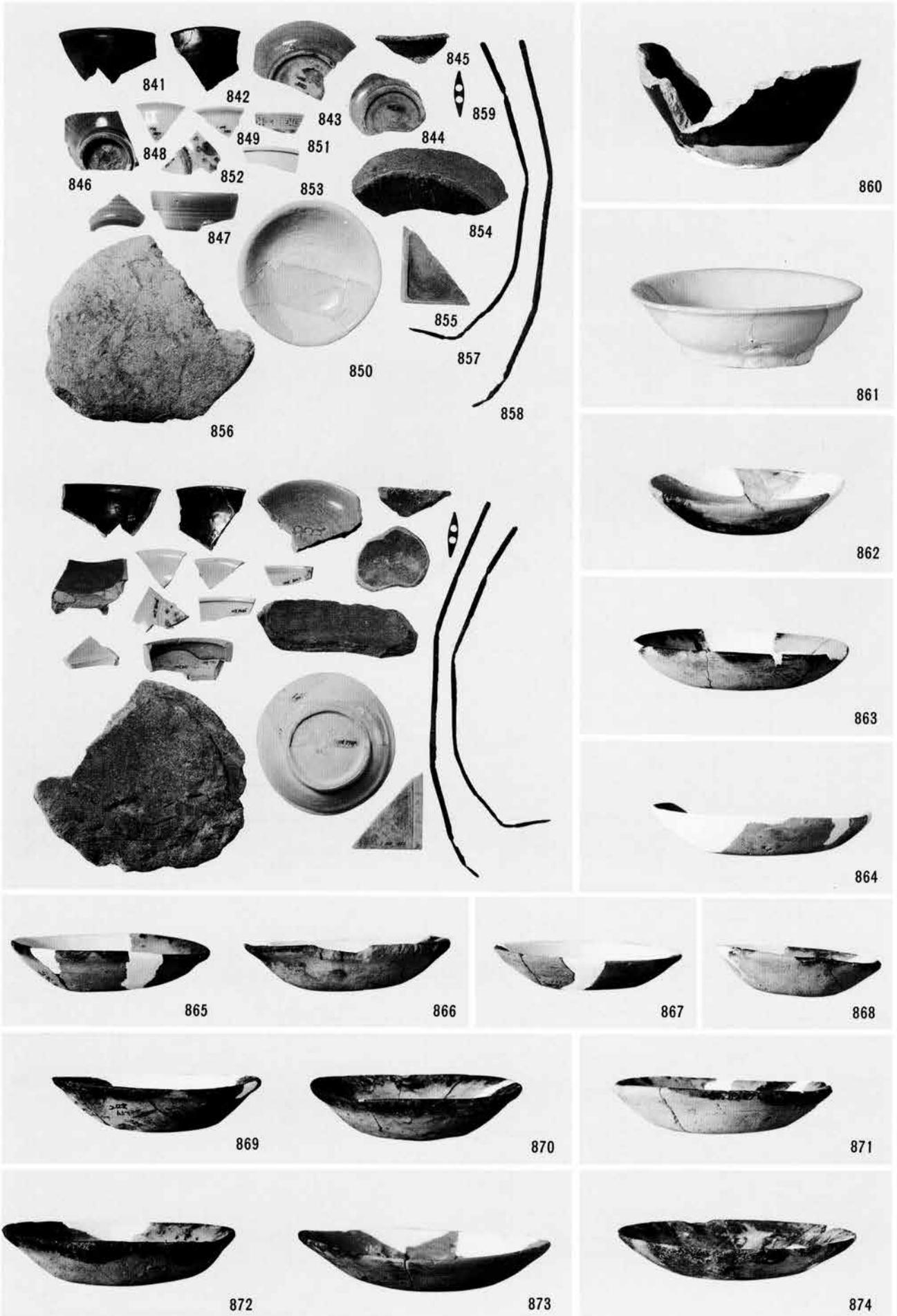
越前焼甕812・813 壺814・840 播鉢815・816 瓦質火鉢817 鉄釉碗818～821 壺822 灰釉皿824
 鉢823 土師質皿832～839 耳皿825 青磁碗826 白磁皿827・828 石製品829～831

第61図 第20次調査遺物(16)



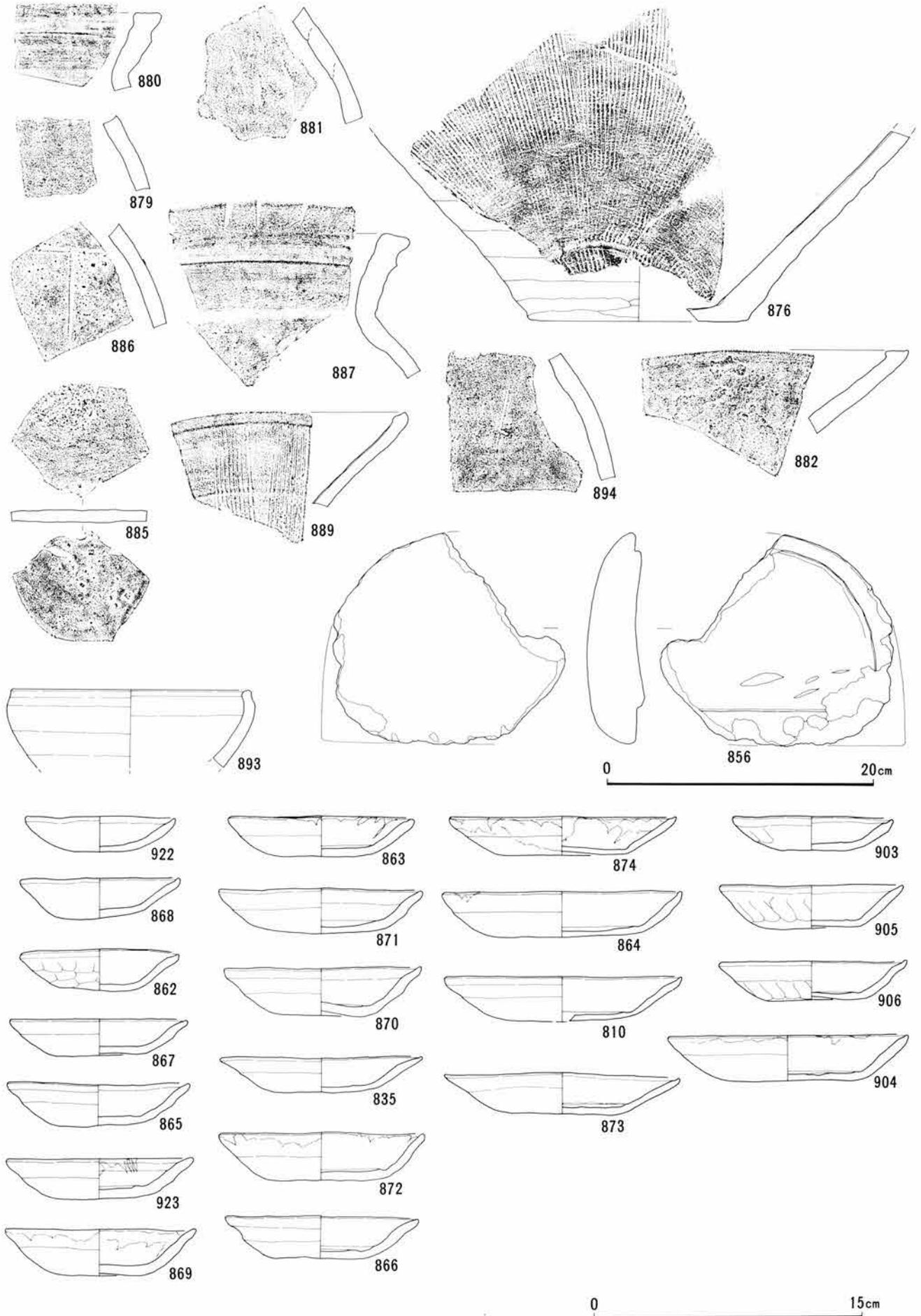
越前焼壺845・854 鉢901 鉄釉碗841・842・860・895・900 壺883 灰釉皿843・844 青磁香炉847・877 碗846 白磁皿848～850・878・896・897 環884 染付碗851～853・875・891 皿892・898 朝鮮製壺890 金属製品857～859・902 石製品硯855・899

SD754 出土遺物



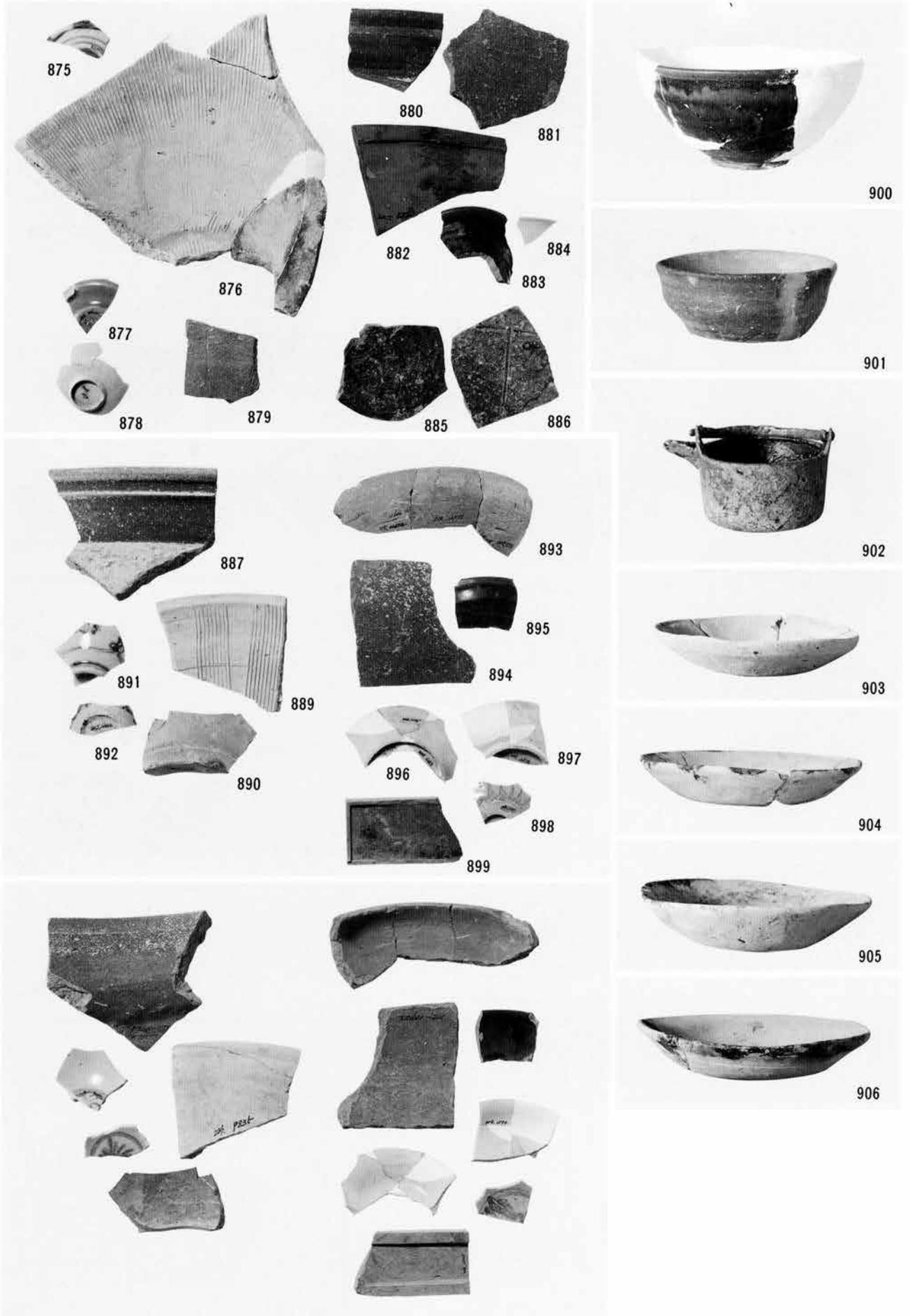
越前焼壺845・854 鉄釉碗841・842・860 灰釉皿843・844 土師質皿862～874 青磁香炉847 碗846
 白磁皿848～850 环861 染付碗851～853 石製品硯855 バンドコ856 金属製品857～859

第62図 第20次調査遺物(17)



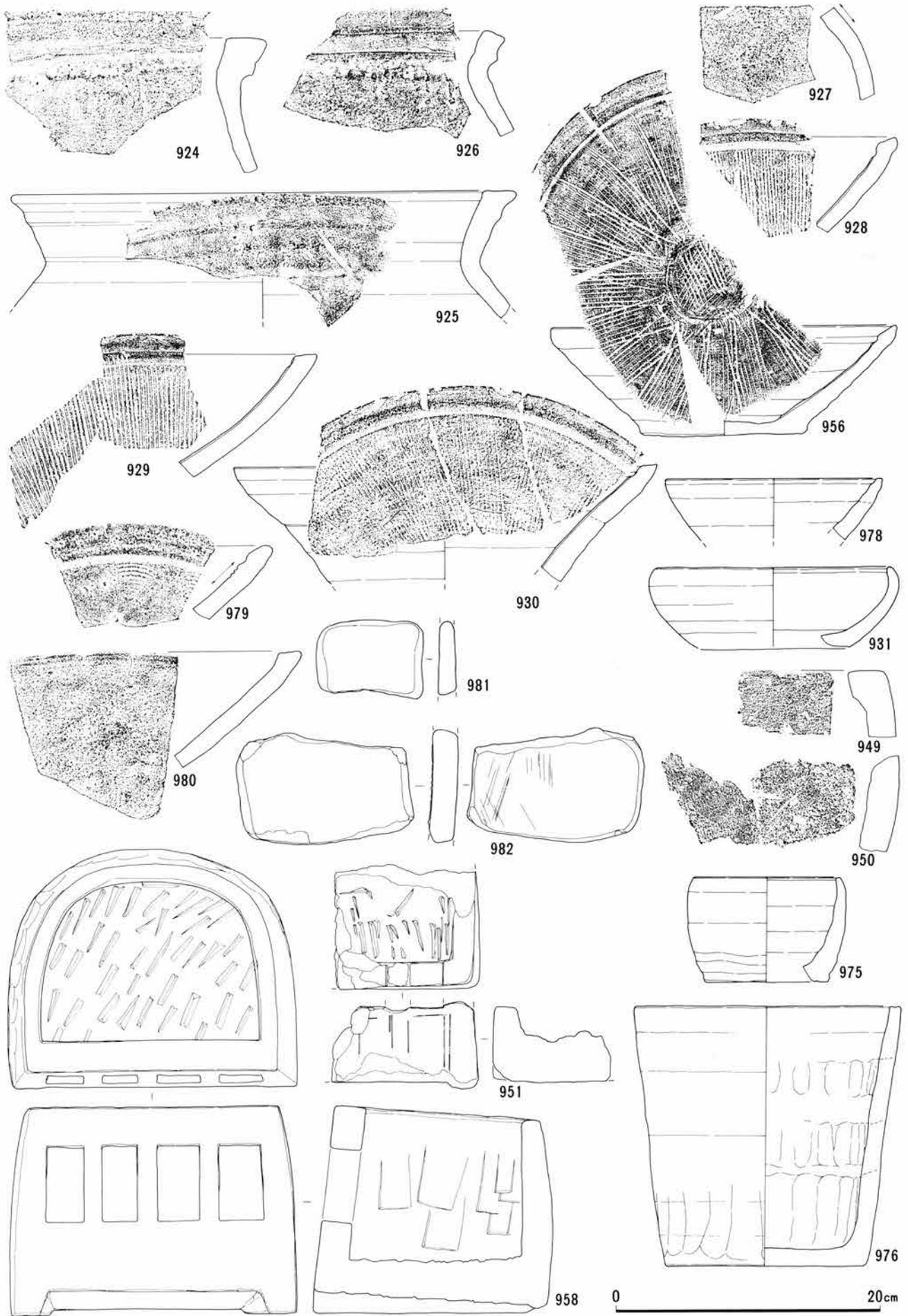
越前焼 879~881・885~887・894 拵鉢 876・889 鉢 893
 土師質 Ⅲ 810・835・862~874・903~906・922・923 石製品 バンドコ 856

SD765, SF770他出土遺物



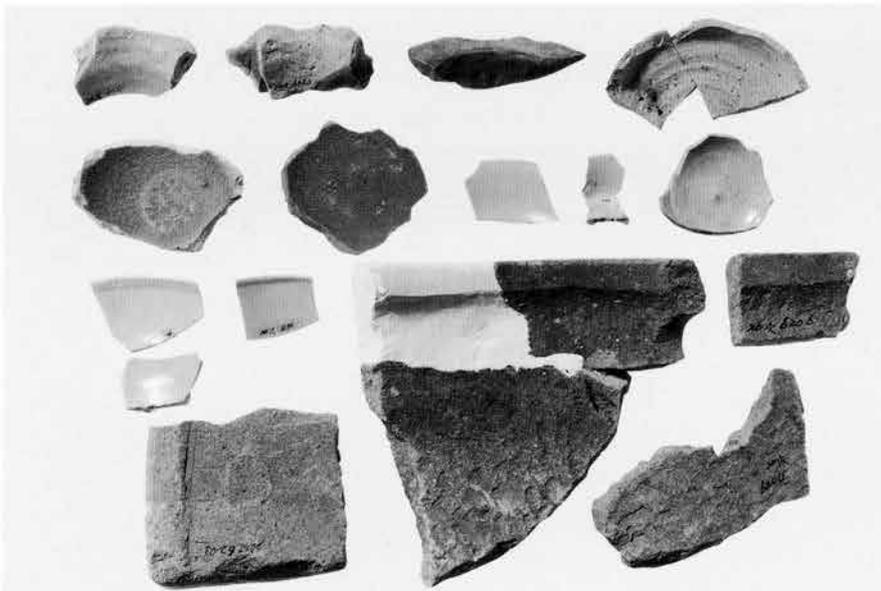
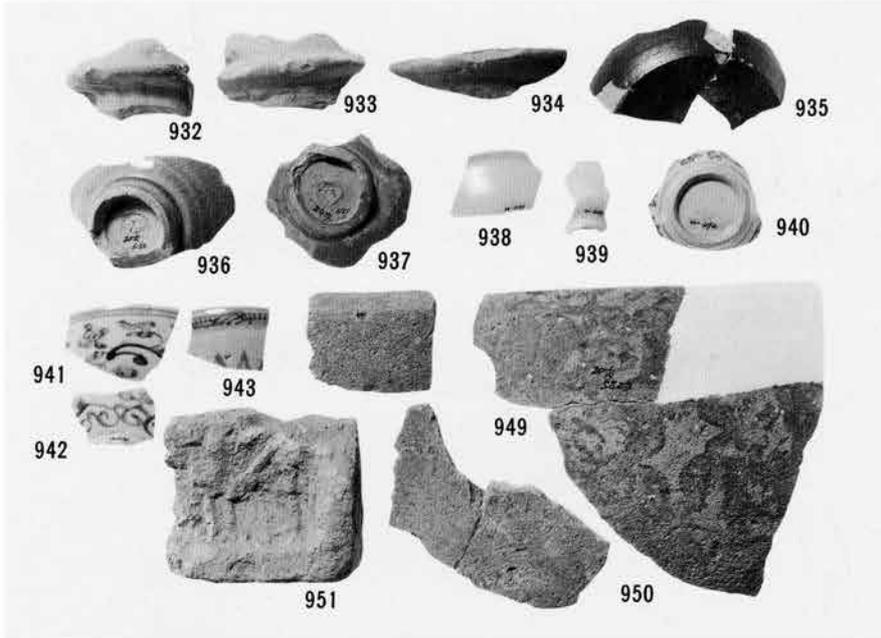
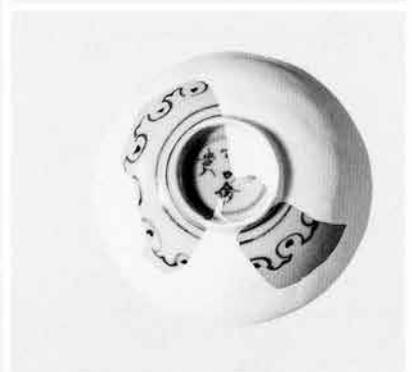
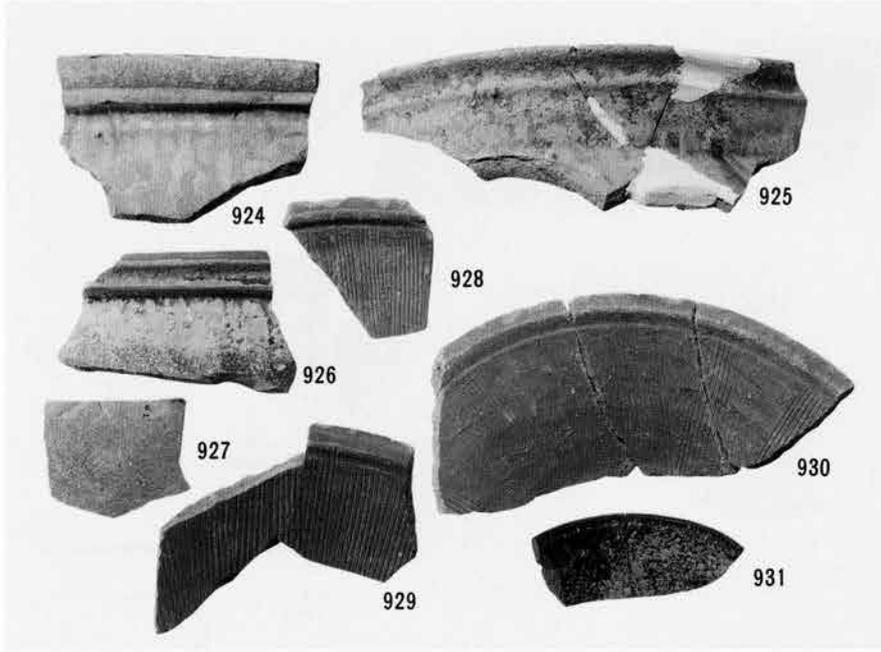
越前焼甕879~881・885~887・894 播鉢876・889 鉢893・901 土師質皿903~906 鉄釉碗895・900 壺883 青磁香炉877
 白磁皿878・896・897 坏884 染付皿892・898 碗891・875 朝鮮製壺890 金属製品提子902 石製品硯899

第63図 第20次調査遺物(18)



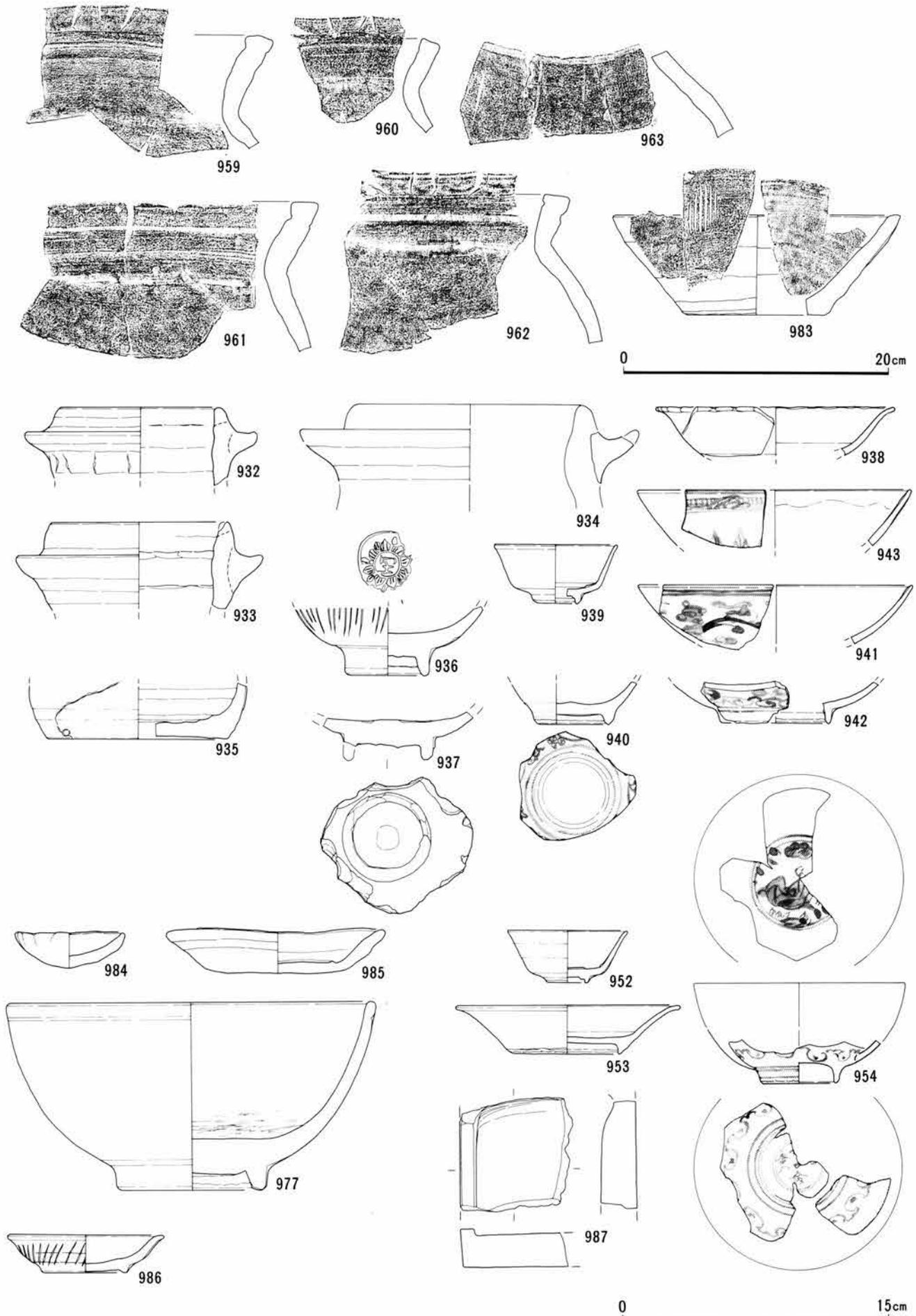
越前焼 甕924~927・981・982 播鉢928~930 鉢931・975・976・978~980
石製品 火鉢949・950 バンドコ951・958

流土他遺物



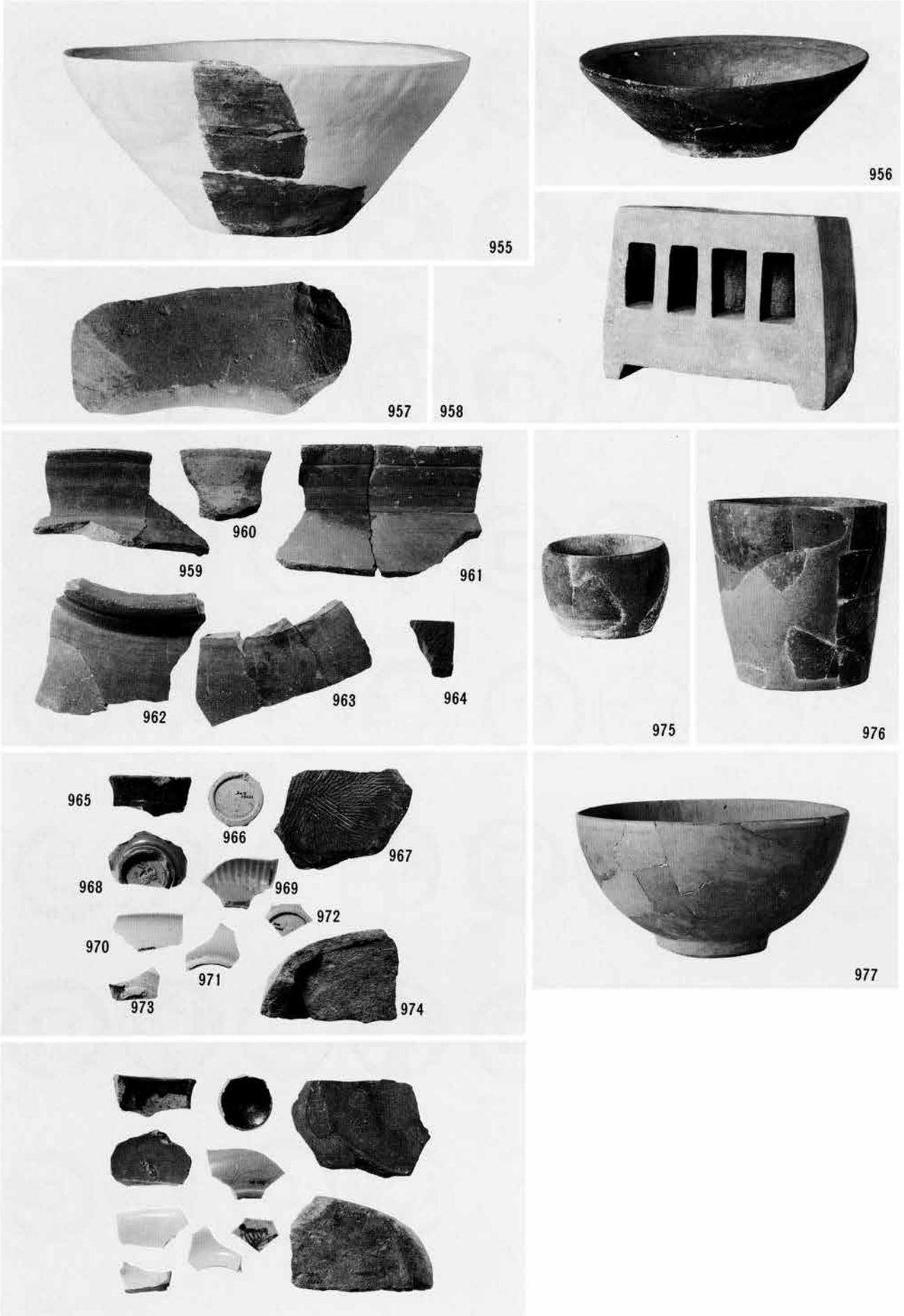
越前焼 甕924~927 播鉢928~930 鉢931 土師質土釜932~934 鉄釉壺935 青磁碗936・937
 白磁皿938・953 坏939・952 染付坏940 碗941~943・954 石製品バンドコ951 火鉢949・950

第64図 第20次調査遺物(19)



越前焼 959~963 鉢 983 土師質皿 984・985 土釜 932~934 鉄釉壺 935 灰釉皿 986 青磁碗 936・937
 鉢 977 白磁皿 938・953 坏 939・952 染付杯 940 碗 941~943・954 石製品 碗 987

盛土，排土中遺物



越前焼甕959～963 播鉢956 鉢955・975・976 播皿967 鉄釉壺965 碗966 青磁碗968
 盤969 鉢977 白磁皿970～973 石製品バンドコ958・974 砥石957

平成2年3月20日 印刷
平成2年3月31日 発行

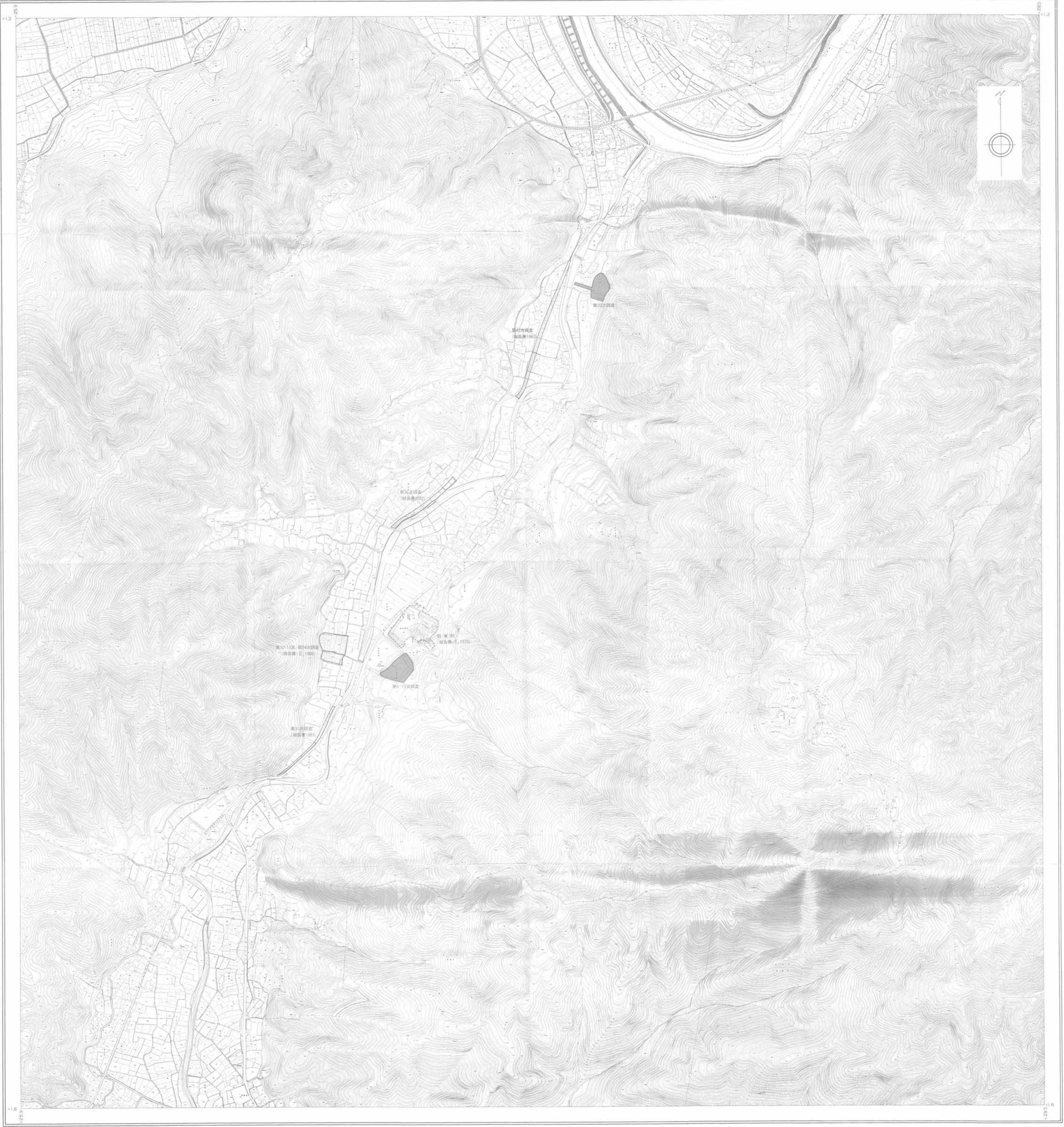
特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲ

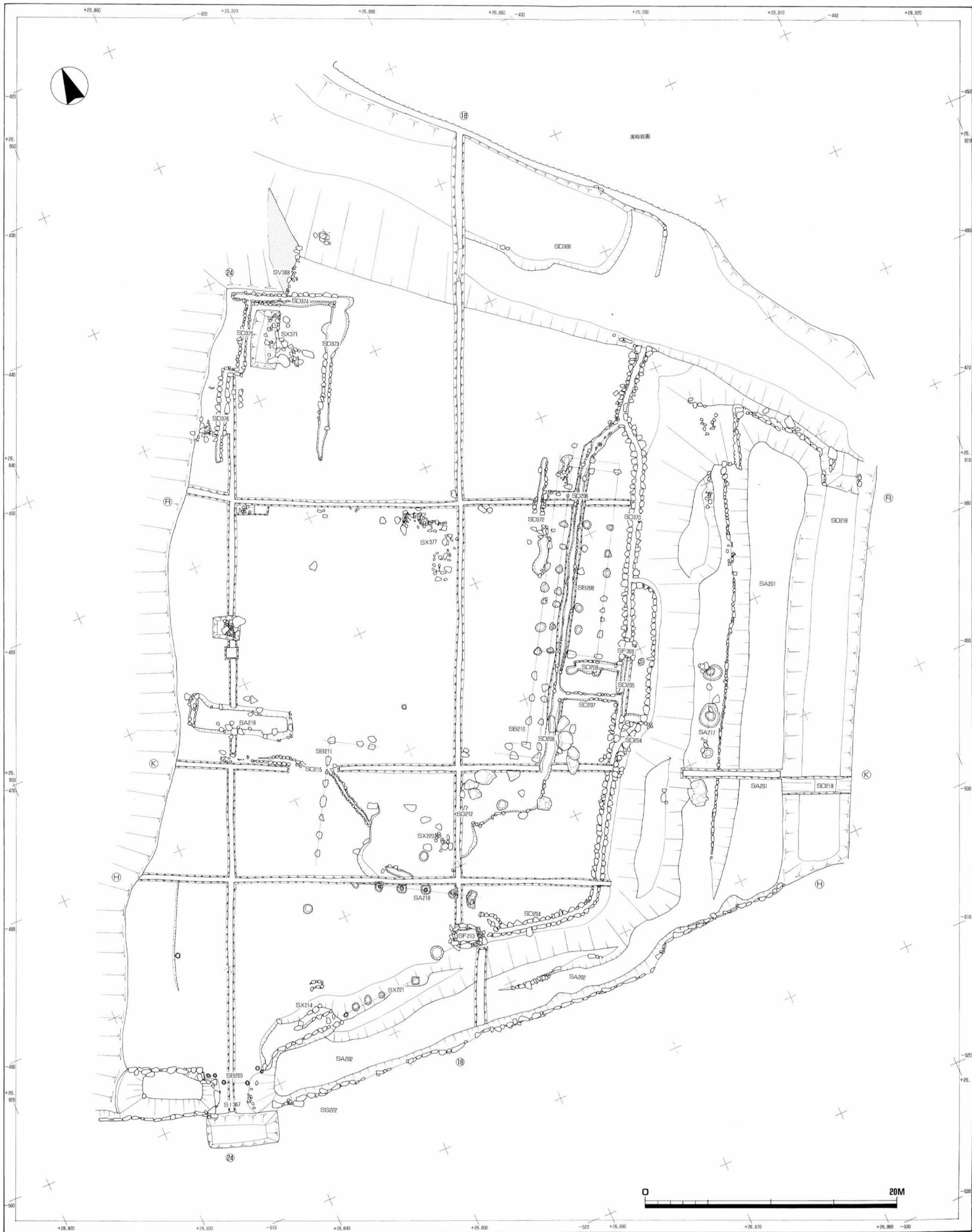
第4・13次、第20次調査

執筆・編集 福井県立朝倉氏遺跡資料館
発行 福井県立朝倉氏遺跡資料館
福井市安波賀町4-10
印刷 有限会社 齋藤印刷所

特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡



付図2 第4・13次調査遺構全測図



付図3 第20次調査遺構全構全測図

